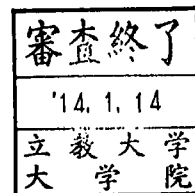


【正誤表】

| (訂正頁) | (訂正内容) |
|-------|---|
| 5p | 誤) 富沢(1993)の「フロベール『旅と作品』」 正) 富沢(1993)の「ギュスターブ・フロベール—作品と旅」 |
| 43p | 誤) 「本当の新しい情報(La nouvelle vrais)」 正) 「本当の新しい情報(La nouvelle vraie)」 |
| 48p | 誤) 表 3-1 「旅行記」の両義性: l'ordre du descriptif と l'ordre du narratif 正) 表 3-1 「旅行記」の両義性: l'ordre du descriptif と l'ordre du narratif |
| 52p | 誤) 『アンコース旅行』 Chapelle et Bachaumont, Voyage a Encausse 正) 『アンコース旅行』 Chapelle et Bachaumont, Voyage à Encausse |
| | 誤) 表 3-2 Samgsue(2001) 正) 表 3-2 Sangsue(2001) |
| 133p | 誤) 1)墳墓教会の記述 正) 1)聖墳墓教会の記述 |
| 174p | 誤) ミラン『南仏県巡り』 Voyages dans les départements du Midi de la France d'Aubin Lous Millin 正) ミラン『南仏県巡り』 Voyages dans les départements du Midi de la France d'Aubin Louis Millin |
| 200p | 誤) ベ＝リル (Belle Ilsle) 正) ベ＝リル (Belle Isle) |
| 202p | 誤) まず, フロベールによる描写を紹介する. 正) まず, フロベールによる描写を紹介する. |
| 246p | 誤) (臼井, 2007:239) 正) (臼田, 2007:239) |
| 260 | 誤) 壇上文雄(1980): フランス鉄道時代の作家たち. 広島, 溪水者, 208p. 正) 壇上文雄(1980): フランス鉄道時代の作家たち. 広島, 溪水社, 208p. |

2013 年度 博士学位論文

19 世紀フランスロマン主義作家の旅行記に見られる
旅の主体の変遷



指導教授 舛谷鋭

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程

羽生敦子

【論文目次】

| | |
|--|-------|
| 目次 | I |
| 図、表、写真の目次 | VII |
| 第1章序論 | p. 1 |
| 第1節 研究の背景..... | p. 2 |
| (1) フランスにおける旅の主体 | p. 2 |
| (2) アメリカにおける旅の主体 | p. 2 |
| (3) ヨーロッパの19世紀と旅の主体 | p. 3 |
| (4) 本論文の事例とタイトルについて | p. 6 |
| 第2節 研究の目的と方法..... | p. 8 |
| (1) 研究の位置づけ | p. 8 |
| (2) 研究の目的 | p. 8 |
| (3) 研究の手順 | p. 9 |
| (4) 研究の方法 | p. 10 |
| 第3節 論文の構成..... | p. 11 |
| 第4節 用語について..... | p. 12 |
| 補注 | p.13 |
| 第2章 旅行者とツーリスト(観光者)に関するディスコース | p. 14 |
| 第1節「旅行者から観光者へ」の言説に関する研究史..... | p. 15 |
| (1) フランスの研究史 | p. 15 |
| (2) 20世紀ブーアスティンを嚆矢とした旅行者と観光者に 関する言説について | p. 16 |
| (3) マキヤーネルによる反論 | p. 17 |
| (4) コーエンとスミス.Vによるツーリストの分類 | p. 20 |
| (5) 日本における批判の諸相 | p. 21 |
| 第2節 フランス語文献における「ツーリスト」研究..... | p. 22 |
| (1) テーヌによる「19世紀ツーリスト」の類型 | p. 23 |
| (2) ユルバンの「ツーリスト」研究 | p. 24 |
| 第3節 フランス語 Voyageur から Touriste への変遷について..... | p. 26 |
| (1) フランス語 Voyageur と Touriste の辞書的定義 | p. 27 |

| | |
|--|-------|
| (2) ルソーの旅と Touriste | p. 27 |
| (3) ルソーの旅とその影響 | p. 29 |
| (4) イギリス人ツーリスト | p. 30 |
| (5) フランス語における Touriste の定義 | p. 30 |
| (6) 文学作品の中の Touriste | p. 31 |
| (7) Album とツーリスト(Touriste ,Tourist)について. | p. 32 |
| 第4節 考察..... | p. 33 |
| 補注 | p. 34 |

第3章 「旅行記」とは何か p. 36

| | |
|---|-------|
| 第1節 19世紀の旅行記に関する先行研究について..... | p. 37 |
| 第2節 シュポー(1977)「小説の周縁を彷徨う旅行記について」..... | p. 38 |
| (1) 旅行記のジャンルについて | p. 39 |
| (2) 旅行記の目的について | p. 39 |
| (3) 旅行記と小説の接近について | p. 40 |
| (4) 旅行記の「文学性」について | p. 41 |
| (5) 旅行記の目的の多様性について | p. 43 |
| (6) 旅行記に与えられた新しいコンセプトについて | p. 44 |
| (7) 日記形式の旅行記について | p. 44 |
| (8) 第2節のまとめ | p. 45 |
| (9) 考察 | p. 46 |
| 第3節 ル・ユナン(1987)「旅行記：文学界への内包」..... | p. 46 |
| (1) 科学的言説と文学的言説について | p. 46 |
| (2) 叙述の変化 | p. 47 |
| (3) 19世紀の「旅行記」 | p. 49 |
| (4) 考察 | p. 49 |
| 第4節 ユモリスティック旅行記..... | p. 50 |
| (1) サンサー(2001)「17世紀から19世紀のユモリスティック旅行記について」 の概要 | p. 50 |
| (2) テーヌの『ピレネ旅行記』について | p. 53 |
| (3) スターンの『センチメンタル・ジャーニー』について | p. 55 |
| (4) グザヴィエ・ド・メーストルの『私の部屋周遊記(1794)について | p. 56 |
| (5) ユモリスティック旅行記の下位分類 | p. 57 |
| (6) 新しい旅の主体：ツーリスト. | p. 57 |
| (7) ^{フィジオロジー} 生理学と Touriste. | p. 58 |

| | |
|--|-------|
| 第5節 サンサーの示す19世紀ユモリスティックな旅についての事例..... | p. 61 |
| (1) スタンダール『ある旅行者の手記』 <i>Mémoire d'un Touriste</i> (1838) | p. 61 |
| (2) トッフェール『ジグザグ旅行記』 <i>Voyage au zigzag</i> (1840) | p. 63 |
| (3) 考察 | p. 64 |
| 補注 | p. 66 |

第4章 作家の旅 p. 69

| | |
|-------------------------------|-------|
| 第1節 「ロマン主義」について | p. 70 |
| (1) ロマン主義以前の旅 . | p. 70 |
| (2) フランスにおけるロマン主義について | p. 73 |
| (3) 19世紀ラルース大辞典 による定義 | p. 75 |
| (4) フランス絵画に見られるロマン主義 | p. 78 |
| (5) ルソーとロマン主義 | p. 81 |
| (6) フランスロマン主義の背景 | p. 84 |
| 第2節 19世紀フランス文学者の旅について..... | p. 85 |
| (1) 19世紀フランス人作家の旅の頻度について | p. 85 |
| (2) オリエント旅行の系譜 | p. 86 |
| (3) 旅しない作家：ボードレー. | p. 87 |
| 第3節 エクリヴァン・ヴォワイヤジュールについて..... | p. 89 |
| 補注 | p. 93 |

第5章 シャトーブリアンの旅 p. 96

| | |
|--------------------------|--------|
| 第1節 シャトーブリアンについての概要..... | p. 97 |
| 第2節 シャトーブリアンとロマン主義 | p. 101 |
| (1) サン・マロとコンブール | p. 101 |
| (2) 亡命 | p. 104 |
| (3) ルソー | p. 105 |
| 第3節 パリからエルサレムへの旅..... | p. 107 |
| (1) 19世紀オリエント旅行の背景について | p. 107 |
| (2) 旅の目的 | p. 109 |
| (3) 出版の理由 | p. 111 |
| (4) ギリシャの旅 | p. 112 |
| (5) エルサレムの旅 | p. 132 |
| (6) エジプトの旅 | p. 139 |

| | |
|--------------------------------|--------|
| 第4節 旅の主体, シャトーブリアンについての考察..... | p. 144 |
| 補注 | p. 148 |

第6章 スタンダールの旅 . p. 151

| | |
|---|--------|
| 第1節 スタンダールについての概要..... | p. 152 |
| (1) 生涯について | p. 152 |
| (2) スタンダールと紀行文 | p. 154 |
| 第2節 スタンダールとロマン主義 | p. 156 |
| (1) スタンダールと山 | p. 156 |
| (2) スタンダールのロマン主義 | p. 160 |
| (3) スタンダールの英単語について | p. 163 |
| 第3節 スタンダールと旅..... | p. 164 |
| (1) ナポレオン遠征 | p. 164 |
| (2) スタンダールと故郷グルノーブル | p. 166 |
| (3) スタンダールとイタリア | p. 168 |
| (4) スタンダールとオリエント | p. 169 |
| 第4節 『ある旅行者の手記』 <i>Mémoire d'un Touriste</i> について..... | p. 171 |
| (1) あらすじ | p. 171 |
| (2) 出版にまつわる背景 | p. 173 |
| (3) タイトルについての諸相 | p. 175 |
| (4) 新聞紙上に見られる『ある旅行者の手記』への反響 | p. 177 |
| (5) 「鉄の商人」および「スタンダール」が使用した交通手段について | p. 180 |
| 第5節 旅を好んだ理由についての諸相..... | p. 182 |
| 第6節 考察..... | p. 184 |
| 補注 | p. 186 |

第7章 フロベールの旅 p. 191

| | |
|------------------------|--------|
| 第1節フロベールと旅の概要について..... | p. 192 |
| 第2節『ブルターニュ紀行』について..... | p. 193 |
| (1) 出発の理由について | p. 194 |
| (2) ブルターニュについて | p. 194 |
| (3) 「旅行記」の方向性 | p. 197 |
| 第3節ブルターニュ旅行について | p. 198 |
| (1) 旅の方法 | p. 198 |

| | |
|------------------------------|--------|
| (2) 旅の態度（属性）について. | p. 199 |
| (3) 旅の行程について | p. 201 |
| (4) 文学散歩 シャトーブリアンをめぐる旅 | p. 201 |
| (5) 19 世紀の都市観光 | p. 206 |
| (6) 考察 . | p. 210 |
| 第 4 節『エジプト旅行記』について..... | p. 211 |
| (1) 出版の経緯 | p. 211 |
| (2) 出発前 | p. 212 |
| (3) 交通手段について. | p. 212 |
| (4) 旅の形態 | p. 216 |
| (5) エジプト旅行のための準備と友人デュ・カンについて | p. 217 |
| (6) エジプト観光 | p. 219 |
| 第 5 節 考察..... | p. 222 |
| 補注. | p. 225 |

第 8 章 結論 p. 227

| | |
|---|--------|
| 第 1 節 本論文の概要 | p. 228 |
| (1) アメリカのツーリスト研究とフランスのツーリスト研究 | p. 228 |
| (2) フランス文学者による 17 世紀から 19 世紀の旅行記の変容に関する研究 | p. 229 |
| (3) フランスロマン主義とロマン主義作家の旅 | p. 231 |
| (4) シャトーブリアンの旅 | p. 232 |
| (5) スタンダールの旅 | p. 234 |
| (6) フロベールの旅 | p. 236 |
| 第 2 節 「トラベラー対ツーリスト」に関する研究..... | p. 239 |
| (1) フランスとアメリカの観光研究の違いについて | p. 239 |
| (2) フランスにおけるツーリスト研究 | p. 239 |
| 第 3 節 ロマン主義と作家の旅 | p. 240 |
| (1) 作家の旅と楽しみの旅 | p. 240 |
| (2) 現代に生きるロマン主義作家の旅. | p. 241 |
| 第 4 節 19 世紀, 作家の旅の社会的背景 | p. 242 |
| 第 5 節 作家の旅について..... | p. 245 |
| (1) 「旅の主体」としての考察. | p. 245 |
| (2) 社会・作品への影響 | p. 249 |
| 第 6 節 ツーリズムの萌芽について..... | p. 252 |
| (1) ガイドブックの視点から. | p. 253 |

| | |
|------------------------|--------|
| (2) イギリス人ツーリストとイギリス | p. 254 |
| 第7節 「ヴォワイヤージュ」の定義..... | p. 255 |
| 第8節 おわりに：「観光文学」の可能性 | p. 255 |
| 補注 | p. 257 |

| | |
|------|--------|
| 参考文献 | p. 259 |
|------|--------|

謝辞

付録資料

【 図, 表, 写真の目次 】

第1章

| | |
|---------------------------------------|------|
| 図 1-1 Route des Maisons des Ecrivains | p.6 |
| 図 1-2 旅と旅の主体の変遷(1) | p.9 |
| 図 1-3 論文の構成図 | p.12 |

第2章

| | |
|--|------|
| 図 2-1 Töpffer の Nouveau voyage en zig-zag (1854) | p.32 |
| 表 2-1 E.Cohen によるツーリストの類型化 | p.20 |
| 表 2-2 V.Smith によるツーリストの類型化 | p.21 |
| 表 2-3 Taine によるツーリストの分類 | p.23 |

第3章

| | |
|-----------------------------|------|
| 表 3-1 「旅行記」の両義性 | p.48 |
| 表 3-2 シャペルとバショームンの『アンコース旅行』 | p.52 |
| 表 3-3 スタンダールの『ある旅行者の手記』1838 | p.62 |
| 表 3-4 トップフェールの『ジグザグ旅行記』1840 | p.64 |

第4章

| | |
|---|------|
| 表 4-1 旅行記の変遷 (付録) | |
| 表 4-2 古典時代の旅行記 | p.73 |
| 表 4-3 イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴 | p.77 |
| 表 4-4 作家の旅 (付録) | |
| 図 4-1 ドラクロワ作 「アルジェの女たち」 Femmes d'Alger dans leur appartement 1834 | p.80 |
| 図 4-2 アングル作 「オダリスク」 La grande Odalisque 1814 | p.81 |

5 章

| | |
|--|-------|
| 図 5-1 シャトーブリアン | p.97 |
| 図 5-2 サン・マロとコンブールの地図 | p.98 |
| 図 5-3 パリからエルサレムまでの旅程図 | p.109 |
| 図 5-4 シャトーブリアンのギリシャの旅程図 | p.114 |
| 図 5-5 売却される Maison de Chateaubriand (1817 年) | p.147 |
| 図 5-6 植林するシャトーブリアン | p.147 |
| 年表 5-1 シャトーブリアンの生活 | p.101 |
| 表 5-2 シャトーブリアンのギリシャ、エルサレム、エジプトの宿泊施設(1806) | p.145 |
| 写真 5-1 サン・マロのグラン・ベ島 | p.100 |
| 写真 5-2 グラン・ベ島のシャトーブリアンの墓 | p.100 |
| 写真 5-3 港湾城塞都市 サン・マロ | p.102 |
| 写真 5-4 コンブール城 | p.103 |
| 写真 5-5 Valée aux Loups の Maison de Chateaubriand | p.146 |
| 写真 5-6 Maison de Chateaubriand に展示される鳥の剥製 | p.147 |

6 章

| | |
|---|-------|
| 図 6-1 1835 年ごろのスタンダール | p.152 |
| 図 6-2 『新エロイーズ』より、「メーユリの岩山にいるジュリーとサン・プルー」 | p.160 |
| 図 6-3 ジュネーブ湖畔のクララン | p.160 |
| 図 6-4 1799 年以前のグルノーブル | p.167 |
| 図 6-5 19 世紀 グルノーブルのグルネット広場 | p.167 |
| 図 6-6 パリ・モンマルトル墓地にあるスタンダールの墓 | p.168 |
| 図 6-7 『ある旅行者の手記』行程図 | p.173 |
| 年表 6-1 スタンダールの生活 | p.155 |

7 章

| | |
|-------------------------|-------|
| 図 7-1 フロベール (ナダール撮影) | p.192 |
| 図 7-2 フロベールのブルターニュ旅行の行程 | p.196 |
| 図 7-3 フロベールのエジプト国内の旅程 | p.213 |
| 図 7-4 1850 年の鉄道のネットワーク | p.215 |
| 図 7-5 1860 年の鉄道のネットワーク | p.215 |

| | |
|---------------------|-------|
| 写真 7-1 コンブール城周辺の湿地帯 | p.205 |
| 写真 7-2 文学散歩コース案内図 | p.205 |

| | |
|--------------------------------|-------|
| 表 7-1 フロベールのブルターニュ旅行中の宿泊形態と食べ物 | p.207 |
|--------------------------------|-------|

8 章

| | |
|--|-------|
| 表 8-1 (表 4-3 の再掲) イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴 | p.231 |
|--|-------|

| | |
|------------------------------|-------|
| 写真 8-1 Deauville のフロベールの別荘地跡 | p.248 |
| 写真 8-2 フロベールの銅像 | p.248 |
| 写真 8-3 Trouville の海岸 | p.249 |

| | |
|---------------------|-------|
| 図 8-1 踊るスタンダール | p.243 |
| 図 8-1 旅と旅の主体の変遷 (2) | p.256 |

付録

| |
|--------------|
| 表 4-1 旅行記の変遷 |
| 表 4-4 作家の旅 |

第 1 章 序論

第1章 序論

第1節 研究の背景

(1) フランスにおける旅の主体

日本語では、「旅」の行為者は、「旅人」「旅行者」「観光者」などと呼ばれ、観光研究の中でかれらの「旅」について学際的に検討される。彼らはフランス語では、*Touriste*, *Voyageur* (ヴォワイヤジュール) と呼ばれる。前者は文字通り英語の *Tourist* を語源とした単語で、フランスでは 19 世紀はじめに出現した (Larousse)。一方後者は、*voie* 「道」を起源とした単語 *Voyage* 「旅」の派生語であり「道を行く者」=「旅行者」として長期にわたって使用されてきた (1460 年にはすでに *voyager* が使用されている)。

現在の 2 語の差異について辞書による定義から概観すると、仏語辞典ラルース (1978) では、*Touriste* とは「自分の楽しみのためにどこかの国を訪れる人」と定義されている。一方 *Voyageur* においては、それぞれの時代における定義が詳細に説明されている。1637 年デカルト (Descartes, René 1596-1650) による「交通手段を使って長距離を移動する人」、1810 年、スタール夫人 (Mme de Staël, Germanine Necker, baronne de Staël-Holstein 1766-1817) による公共交通手段を使ってある距離を踏破する人、1942 年アラゴン (Agagon, Louis 1897-1982) による「徒歩で行程をこなした人」の例文が見られる。20 世紀のアラゴンの定義以外は、なんらかの交通手段 (といっても改良の程度はあっても馬車であることには間違いなし) を用い、それなりの距離をなんらかの目的を持って移動する旅人であろう。現在でも、パリの地下鉄、バス内では、乗客を *Voyageur* と表記しているが、以上を踏襲しているのであろう。さらに、シャトーブリアン (Chateaubriand, François René, vicomte de, 1768-1848) は「*Voyageur* とは歴史家である。見たこと聞いたことを忠実に語る義務がある。何事も書き加えてはいけなし、何事も省略してもいけない」と定義し、歴史家としての *Voyageur* の役割について言及している。後者の *Voyageur* と、前者の *Touriste* はともに、一般的には旅の主体を表す語として同義語的な関係にあるが、シニフィエにおいて差異が生じている。その差異に関し、Dossier Les tourisme en France 2005⁽¹⁾ において、テリエ⁽²⁾ (Christophe Terrier) は *Voyageur* にはポジティブな含意があるが、*Touriste* にはネガティブな含意があると記述している。しかし、差異の具体例

を示し説明することはない。

(2) アメリカにおける旅の主体

アメリカにおいて、ツーリストに対する Traveler の優越性、換言すればツーリストの劣勢が、マス・ツーリズム以後の 1960 年代から注目され、具体的には、ブーアスティン(Boorstin, Daniel, 1914-2004) が 1960 年代前半に『幻影の時代』*the Image* を出版して以来、「トラベラー/ツーリスト」論争(3)として継続している。観光学という新領域をもたらした論争のひとつである。多岐にわたる論点を持つテーマとして、現在でもメディア論、観光社会学、観光人類学の領域で古典的テーマである。

ブーアスティンは『幻影の時代』の中で、ヨーロッパのかつての旅(travel)の例を取り上げ、旅の価値や旅の意味を述べる。グランド・ツアーを例に、「旅行することは世界人になること(1964:94)」であり、「外国旅行はまじめな目的をもった人が、すくなくとも一生懸命遊ぼうとすること(前掲書:95)」だと断言し、「目的のある旅」の意義を列举する。

ところで、英語 Travel は Trouble と同様にラテン語 Trepalium (拷問) から派生したといわれる。フランス語においては Travail (労働) へと変化した。語源からも「(労苦をともなった) かつての旅」が Travel には内包されている。

(3) ヨーロッパの 19 世紀と旅の主体

ブーアスティンは 19 世紀、とりわけ、交通機関の進歩によって旅の性格が変化したことを嘆く。鉄道と汽船の快適さが旅を民主化させる一方で「旅」の質を低下させたと言及する(前掲書:97) 換言すれば、19 世紀以前の「馬車」や「帆船」そして「徒歩」の旅がその質において上位にあるということであろう。付表 4-1「旅行記の変遷」、付表 4-4「作家の旅」にまとめたが、「19 世紀」という時代が「旅」の歴史においても、旅の主体の変容を知る上でも重要な世紀であることが浮き彫りにされる。

再び、フランスの事例に戻るが、フランスの人類学者ユルバン(Urbain, Jean-Didier)は Touriste への否定的な見解に関し、「マス・ツーリズムによるツーリストへの偏見ではない。ヨーロッパにおいては 19 世紀にすでに反 Touriste の考えはあった(Urbain, 2002:19)」と言及する。産業発展を迎え、社会が近代へと

進む 19 世紀の旅は「近代以前」の旅と「近代」の旅とを分かつ旅であり、かつ「近代以前」と「近代」の双方の特徴を帯びた両義的な存在になることも可能である。ユルバンもまた、19 世紀という時代と「旅」の関係を言及する。

19 世紀のフランス社会を簡潔に記述すると、ロマン主義という芸術運動がヨーロッパ全体で席卷するなか、フランスの政治体制はナポレオン一世の第一帝政(1804-14)、王政復古(1814-48)、第二共和政(1848-52)、ナポレオン三世の第二帝政(1852-70)へと目まぐるしく変化した。イギリスに遅れて迎えた産業革命は社会構造を貴族社会から資本家社会へと変えつつあった。交通インフラに関しても、郵便馬車のネットワーク整備（確立）にはじまり、1840 年代以降は汽車や汽船が、交通手段の中心となっていく。しかし、それは進行中の「変化」であり、コンプリートしたものではなく、移行期そのものであった。つまり本研究の対象である旅の主体、19 世紀作家たちは、「変化」の真ただ中に存在した人々である。彼らは、頻繁に変わる政治体制を経験し、旅の手段においては、海上、河川上では「帆船」と「汽船」が、陸上では「馬車」と「鉄道」の新旧両手段を経験した。ボワイエ(Boyer, Marc, 1926-)はロマン主義作家が最後の「馬車」利用者であったと述べるが(2000)、彼らは、同時に汽車や蒸気船をはじめて利用した旅行者でもあった。交通手段が多様化されつつあったこと、ロマン主義運動の影響から「他者」あるいは「他所」への関心が高まったことは「旅」を 19 世紀の特徴のひとつにした。石井(2009)はフランスの 19 世紀を「旅の世紀」と呼ぶがその理由を次のように記す。

...いささか乱暴に要約してしまえば、18 世紀までの旅の主役はあくまでも探検家や航海者や商人たちであり、かれらが残した旅行記も、異国のめずらしい風俗習慣や、自国とは異なる人種や風土の観察・記録・報告という性格が強かったのにたいして、19 世紀には文学をなりわいとする作家たちが実際にかんりの遠隔地にまで足を伸ばすようになり、旅の経験を深く内面化した上で、自らのエクリチュールを契機づける不可欠の要素として意識し始めた。いわばこの時代を待ってはじめて、「旅」は単なる作品の素材ではなく、それ自体が文学的経験の一部をなすようになったといってもいいだろう。あえて 19 世紀を「旅の世紀」と呼ぶ所以である(石井, 2009:31)。

19 世紀フラン文学研究者のル・ユナン(Le Huenen, Roland)も

19 世紀を通し、フランスでは、自らの作品を旅に捧げない作家はいなかった。

特に、ロマン主義時代の潮流によりこれほどオリエントやイタリアやスペインに熱狂した時代はなかった(1987:51)

と言及する。

石井が 19 世紀を「旅の世紀」、ル・ユナンが旅に熱狂した時代と呼ぶように、19 世紀の作家を対象とした文学研究には「旅」を意識したものが多い。近年の文学研究を見てみると、フロベール研究では富沢(1993)の「フロベール『旅と作品』」、牛場(2006)の「プルーストとフロベール:料理と旅の描写について」、すこし古いが 1976 年にカレが論文「フロベールとマクシム・デュ・カン」のなかで「フロベールとマクシム・デュ・カンは、その旅行からいかなる利益をひきだしたのであろうか」とで問いかけている。ネルヴァル研究においては、田口(2011)が「ネルヴァル『東方旅行』スイスまでの旅:案内書、写真機、時刻表を持たない旅」の中で、ロマン主義時代の旅について論じている。また、ジャーナリストとしてのゴーティエのオリエントでの視点を畑(2011)が「ヨーロッパとアジアの狭間にて:テオフィール・ゴーティエ『コンスタンチノーブル』(1853)」の中で分析している。膨大なシャトーブリアン研究についても、本論文において援用するベルシェ(Berchet, Jean-Claude)のほかに、アントワヌ(Antoine, Philippe)が 2003 年に「エジプトのシャトーブリアン:失望する旅行者」Chateaubriand en Egypte: le voyageur disenchanté など「旅人」としての作家を対象に検証がおこなわれている。スタンダール研究については、スタンダール研究の第一人者デル・リット(Del Litto, Victor, 1911-2004)が幾度となく旅とスタンダールに関し言及する。臼田は『スタンダール氏との旅』において、文学領域ながらも現地調査を行い、旅人としてのスタンダールの追体験を行う。

また、作家と旅の関係を言及するためのものではないが、「作家」が現在の「観光(政策)」に利用される現象も頻繁である。アレクサンドリーヌ出版には *Sur les Pas des Ecrivains* (作家の足跡) シリーズがあり、それぞれの地方ごとに、著名作家の家やゆかりの場所を巡る文学散歩が紹介され、「場所性」と「作家」が語られる。地方自治体(オート・ノルマンディ Haute Normandie, イル・ド・フランス Ile de France)においても Route des Maisons d'Ecrivains (作家ゆかりの家をめぐるルート)が設定され(図 1-1)、おそらくフランスの知的財産としての作家の功績と、フランスの地方文化の豊かさを、「観光」という形態により人々に示している。作家と旅の関係については文学領域による学術的研究から観光政策まで幅広く利用されている。これまで観光学というものがアピールされな

かったため、あるいは認識されなかったために「旅」がテーマであるのにもかかわらず、観光学からのアプローチがみられない。これまで文学者たちが検証してきた作家の旅を、「観光学」領域で検討されることが必要であろう。



図 1-1 Route des Maisons des Ecrivains

2012 年 8 月 Rouen 市観光案内所(L'office du Tourisme)で入手した資料を転載

(4) 本論文の事例とタイトルについて

ここで、本論文の事例としてシャトーブリアン、スタンダール(Beyle, Henri,

1783-1842), フロベール(Flaubert, Gustave, 1821-1880)を選んだ理由, またタイトルを「19 世紀ロマン主義作家の旅行記にみられる旅の主体の変遷」としたプロセスについて示す. なぜ「旅人」ではなく「旅の主体」にしたのかに関して述べる.

第4章で論じるように, フランスに限らずヨーロッパ全体で, 「近代」という時代を迎えた. それはイギリスに始まる産業革命がもたらした工業社会, 産業社会であり, 社会構造の大転換期であった. ロマン主義の潮流もイギリスから波及し, 旅の本質にも変化が見られ, 義務から「楽しみ」のための一行動になった. 新しい「まなざし」が生まれ, 田園はもちろん, 荒れ狂う海や険しい山が「崇高(sublime)」として意識され, 「風景」へと変化した. 個人としての存在「私 moi」, そして「私」と対峙する「他者 autre」, 「他所 ailleurs」への関心が生まれた. また, エゴイズムやアンニュイ(倦怠)といった常套句も生まれた. 「アンニュイ」はシャトーブリアンに由来する感覚であるが, 第5章で示すが彼は「フランスロマン主義の父」と言われる人物であった. シャトーブリアンをロマン主義作家の第一例にした理由である. もちろん, 彼が「アメリカ旅行」や「オリエント旅行」の経験をしていたことも重要な要素であった. 次にスタンダーダールだが, 彼はミラノにおいてロマン主義の洗礼を受けている. しかし, あえて「ロマンティシズム Romanticisme」(フランス語ではロマン主義はロマンティスム Romantisme)を使用する. 膨大な研究が存在するスタンダーダールをこのように簡単に言うのは気が引けるがシャトーブリアンのエゴイズム(自己中心主義)への反発であろう. 1988 年版小学館ロベール仏和大辞典によると「Romanticisme は Romantisme という語が一般的になる以前に, ロマン主義運動を指すのにスタンダーダールが用いた用語」と記載されている. さらに, 彼はノマド的な生活を送り, つまり, 生活は「旅」の延長にあったことも本研究の事例のひとつに取り上げた理由である. 三人目のフロベールは, 序論でも述べた通り, ロマン主義から自然主義への移行期の作家である. 7 章では, フロベールがデュ・カンと共に, シャトーブリアンに追随する旅を提示するが, ここで彼らがシャトーブリアンを敬愛する青年であったことが明らかにされる.

ロマン主義の父シャトーブリアン, 彼に反発するがロマン主義運動には肯定的なスタンダーダール, さらにシャトーブリアンの影響を受けながらも, 作品には次の潮流を見せるフロベールという三者の旅をロマン主義時代の初期から終焉機の旅を代表するものとして事例とするに至った.

次に, 本論文においてタイトルとして, 三者を「旅の主体」と表記したが,

その理由について整理する。シャトーブリアンは数度となく「voyageur とは・・・である」と言及し、「旅する人」、つまり「旅する自分」を表明する、つまり「旅人」である「(特別な)自分」を表現するためには「旅人」より「旅の主体」と表記するほうが妥当であると考えた。第5章で確認するが、シャトーブリアンという「旅の主体」はブーアスティンが示唆した「能動的な旅人」そのものである。またスタンダールは、自身がどのような「旅の主体」であるかを語ることはないが、作品名に *Touriste* (*Mémoire d'un Touriste*『ある旅行者の手記』)をつけていることから、「旅する主体」への関心が読み取れる。フロベールに関しても、ブルターニュ旅行では、「・・・に行きたい」とか「・・・見たい」の言葉ではなくシャペルとバショームンのような旅⁽⁴⁾の仕方を理想的な旅として示し、「主体」への関心を記述している。また、旅行記で援用したル・ユナンも *Voyageur* の表記以外に、*Figure du voyage* とあえて使用している。*Figure* を直訳すると「人物像」、「外形、姿形」であるが、筆者が言わんとする「主体」に近いものだと解釈した⁽⁵⁾。以上が、タイトルに「主体」を用いた理由である。

第2節 研究の目的と方法

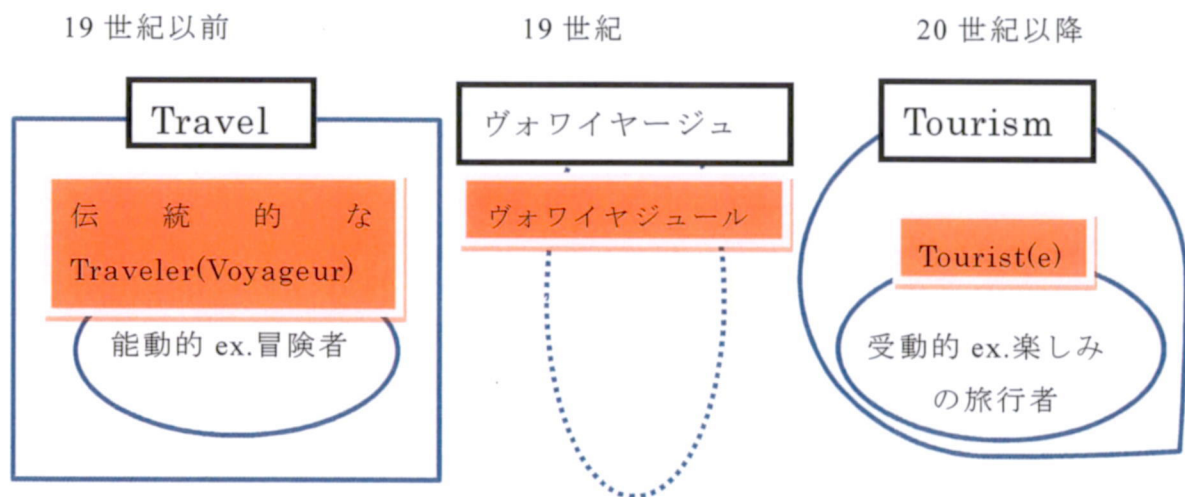
(1) 研究の位置づけ

第1節で述べたように、19世紀の旅は観光研究において、とりわけフランス近代観光を解明するうえで重要である。多くの作家が旅をしていることから文学領域においても作家と旅に関する研究は多い。そこでは旅から作家の内面性、感性を導き出すことが目的とされてきた。本研究では、社会的背景や作家の行動を中心に分析し、19世紀作家の旅を近代観光史の中に位置づけるとともに、観光領域における「文学」の有効性について立証し、観光学への新たな切り口を提示するものである。

(2) 研究の目的

過渡的な19世紀の旅と旅する人をヴォワイヤージュ、ヴォワイヤジュールと名付け、それ以前の旅(*Travel*)ともそれ以後の旅(*Tourism*)とも異なる旅と仮定し、ヴォワイヤージュの「旅の主体」となった19世紀の作家たちは、どのような旅の主体であったのか、旅の経験をしたのか、また、「旅」が作家自身、さらに文

学作品や社会へどのような影響を及ぼしたのか、これらについて明らかにすることが本研究の目的である。これまで漠然と語られてきた 19 世紀の旅あるいは旅の主体について、はっきりしない、なにか覆われたヴェールを少しでも拭うことができれば、近代観光史研究の一端に貢献できるであろう。21 世紀現在の視点から 19 世紀の旅の主体を俯瞰してしまうと、すべての旅の主体が traveler(voyageur)であるとの結果が予想される。しかし作家それぞれの旅の行動を詳細に観察することにより、近代以前には見られなかった行動や感覚があらわれると期待する。また「旅行記」というメディアを通し、つまりメディアが情報ソースとなり、一人ひとりの経験が時代、風潮を作り出す過程について考証を行う。



* 黒枠は旅の形態、オレンジは旅の主体を表す

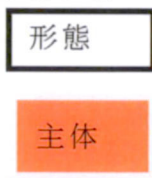


図 1-2 旅と旅の主体の変遷(1)

(3) 研究の手順

まず、旅行者(Traveler, Voyageur)から観光者(Tourist, Touriste)への言説に関し、ブーアスティンが『幻影の時代』のなかで言及したマス・ツーリストへの苦言

に対し、反論として、「観光学」領域で発展したマキヤーネル著 *the Tourist*, ツーリストを詳細に分類した E.コーエン, V.スミス編『観光リゾート開発の人類学』*Hosts and Guests* で示された「ツーリスト」について概観する。ユルバンの『旅の愚か者：ツーリストの歴史』*L'idiot du voyage: Histoires de touristes* を援用し、マス・ツーリズム以前の Touriste への否定的側面を確認する。また 19 世紀ラールス大辞典 *le Grand Dictionnaire Universel du XIXème siècle* の記述、ボワイエによるフランス観光史の記述から、J.J ルソー、ロマン主義など文学的要素を巻きこみながら、フランス語 Touriste に関して歴史的考察を行う。旅の主体としての作家を知るために、旅行記を分析対象とするが、旅行記を使用することの妥当性に関し、「旅行記の古典的論文」と評されるシュポーとユナンの論文を紹介しながらその正合性を確認する。つぎに 19 世紀多くの作家が旅を経験したことを年表にして証明し、作家と旅について考察を行う。その後は三人の作家について事例研究を示し、結論としてまとめる。

(4) 研究の方法

本研究は文献調査中心であり、事例として、19 世紀ロマン主義作家の書いた旅行記を分析する。対象作家はシャトーブリアン、スタンダール(Henri, Beyle, 1783-1842), フロベール(Flaubert, Gustave, 1821-80)の 3 人である。この 3 人を選んだ理由であるが、シャトーブリアンは 1867 年に生まれ青年期にフランス革命を経験し、政治家としても要職に就いたほどの人物であるが、作家としても 19 世紀フランス文学史における重鎮である。フランスロマン主義運動は彼が嚆矢とされ、ユゴー⁽⁶⁾を始めその後のロマン派作家たちに多大な影響を与えた。ロマン主義作家を代表する作家として旅行記『パリからエルサレムまでの旅程』*L'Itinéraire de Paris à Jérusalem* を中心に分析を行う。2 番目の事例にスタンダールを取り上げる。彼もロマン主義作家の一人であるが、シャトーブリアンのように反ナポレオンの姿勢ではなく、むしろナポレオンによって「旅」を知る人物であった。またシャトーブリアンのエゴイズムを嫌った人物である。もう一つのロマン主義の作家の旅の事例として妥当であろう。事例作品として『ある旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste* を使用する。文学作品のタイトルとして初めて Touriste が使用された（実際はシモンが 1816 年にタイトルとして Touriste を使用している）、あるいはこの作品によって英語由来の仏単語 Touriste が一般名詞として認知されるようになったということで意義深い旅行記である。

3 番目の事例はフロベールの『ブルターニュ旅行記』*Par les champs, par les grèves* および『エジプト旅行記』*Voyage en Egypte* である。フロベールはシャトーブリアンを尊敬しているが、彼自身をロマン主義作家の範疇にだけ入れるのは難しい。19 世紀初頭に席卷したロマン主義運動も、フロベールの活躍した時代、つまり 19 世紀中葉から後半にかけては、あたらしい風潮である自然主義、写実主義へと変化しつつあった。一方で、社会は政治の混乱が収束し、皇帝ナポレオン 3 世による「第二帝政」により対外的には成熟した国家となる。産業が奨励され、バブル期の様相を見せていた。この社会を知るフロベールの旅をロマン主義終焉期の旅として、研究対象とする。旅行記のほかに、彼らの残した旅行ノート、旅先から家族、友人に宛てた書簡も使用する。

第 3 節 論文の構成

本論文は全 8 章で構成される。第 1 章では、研究の背景と目的及び、研究方法と論文の構成を確認する。第 2 章ではフランス語 *Voyageur*（旅行者）から *Touriste*（観光者）に関するディスコースとして言語学的考察、社会学的考察を行う。第 3 章においては本研究の分析対象である「旅行記」というジャンルについて先行研究をもとに整理を行い「旅行記」が「旅の主体」を知るうえで一次資料になることを検証する。続く第 4 章では、「旅行記」の主体である作家に影響を与えた文化潮流「ロマン主義」について考察を行う。第 5 章から第 7 章までは事例研究としシャトーブリアン、スタンダール、フロベールの旅行記の分析を行う。最後の第 8 章において、事例研究をもとに「旅の主体」の変容過程について省察する。フランス近代史やオリエントの流行など、「旅」に駆り立てた外的要因にも考慮し、作家と旅の関係についてまとめる。また、「ヴォワイヤージュ」と名付けた時代の旅の主体の属性について考察する。旅行者と観光者の関係について通時的なのか断絶的なのかを結論付ける。

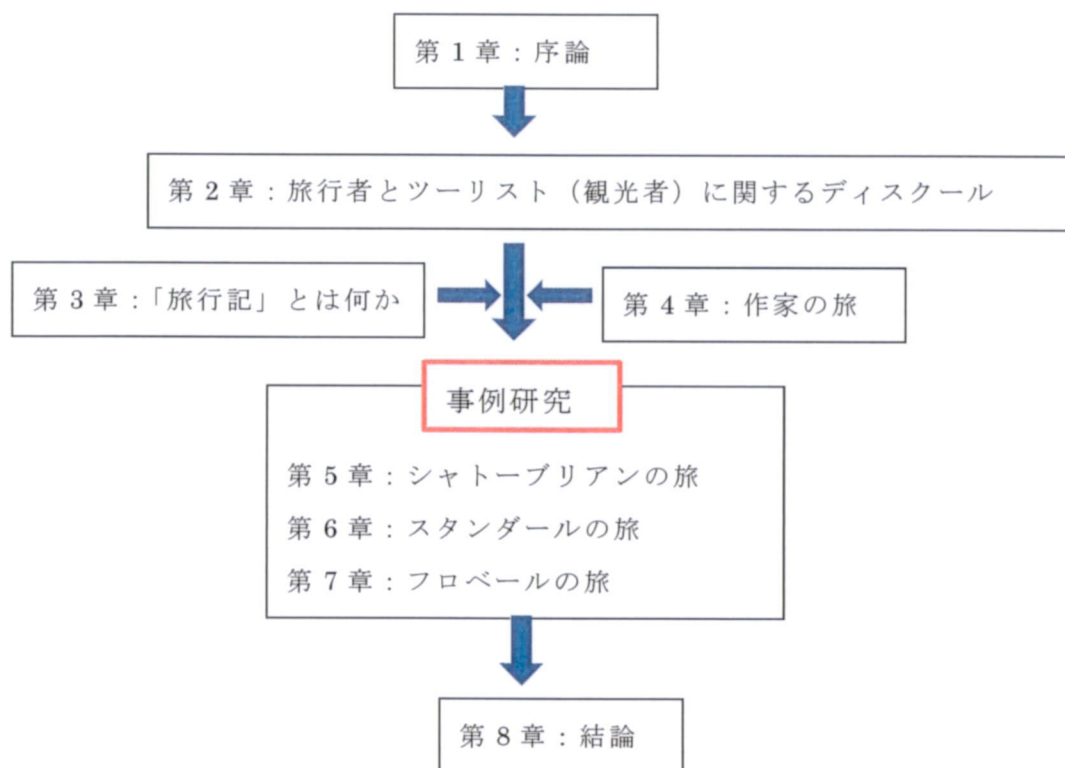


図 1-3 本論文の構成図

第4節 用語について

なお、本文中において *Touriste* はフランス人ツーリスト，*Voyageur* はフランス人旅行者とするが，後者 *Voyageur* は英語 *Traveler* と同質のものである．カタカナ書きツーリストは，一般的に使用される観光者としてのツーリストとする．また，9pの図で示したように，19世紀の旅と主体に関してはカタカナ書きのヴォイヤーージュ，ヴォワイヤジュールであり，*voyageur*=ヴォワイヤジュールではない．

【補注】

- (1)フランス政府 *Ministère de l'économie des finances et de l'industrie*(経済産業省)のなかの *direction du tourisme* が毎年発行する観光に関する報告書（現在は *La direction du tourisme* は *la direction générale de la compétitivité de l'industrie et des service* に名称変更）
- (2)*Direction du tourisme* のディレクター(2005 年当時)
- (3)ブーアスティンが『幻影の時代』の中で、トラベラーの方が、ツーリストよりも格上の旅行者であると示唆したことに始まる論争。
- (4)第3章で *Chapelle* と *Bachaumont* の『アンコース旅行記』について取り上げる。
- (5)「主体」を直訳すると *sujet* であるが、旅人の意思、旅の方法を含むものとしての旅人の主体を表現するものとして本論文においては *figure* のほうが妥当であると考える。
- (6)*Hugo, Victor* (1802-85)少年の頃、「シャトーブリアンにならなければ何ものにもなりたくない」というほど思いが強かった。

第 2 章

旅行者とツーリスト（観光者）に関するディスカール

第2章 旅行者とツーリスト（観光者）に関するディスコースについて

第1節「旅行者から観光者へ」の言説に関する研究史

(1) フランスの研究史

フランスにおいて、ツーリストに対する否定的な見方はマス・ツーリズム以前、19世紀から存在したと言われる。フランス語「ツーリスト」は英語からの借用語であるが、1876年 Larousse において、「暇と好奇心から旅をする人」(personne qui voyage par curiosité et desœuvrement)と、短い文章ながら初めて定義される。しかし、それ以前より「旅行者(voyageur)」よりも格下の旅行者を意味する単語として通用していた。1840年代というある一定の時期にだけ流行した「生理学」(physiologie)においては「時代を反映した主体」として注目を浴び、文学者たちが様々な定義づけを行い分類を試みている。1840年代と言えば、フロベール、デュカン、ネルヴァルを初め多くの作家たちが旅を経験した年代であり、巻末付録年表4-4が示すように、「旅」は頻繁に行われていた。学問の対象となったことから「旅人」という属性への関心も高かったと言えよう。第4章でも触れるが、19世紀フランスで流行した「生理学」とは「19世紀中頃の、特定の社会階層の生態描写、分析を目的とした書物の表題」であり、グリゼットと呼ばれたお針子⁽¹⁾などもその対象とされた文学領域の研究である。つまり、対象とされる事象はある時代を象徴とする存在であるが、科学的判断により導かれ描かれることはない。記述には筆者による皮肉が内包される。19世紀中葉には「Voyageurではない旅人」として、フランスではすでに「ツーリスト」への厳しい見方が存在していたと考えられよう。

ツーリズムの語源となった英国人によるグランド・ツアーの研究という枠組みで英仏の近代史、美術史、言語研究からのアプローチによる「ツーリスト」研究もみられる。イギリスの自国文化や風景の発見という貢献をもたらしたこと（中島、2007）や、旅の持つ教育学の側面に関する効果が言及される。しかし、グランド・ツアーの旅の主体ツーリストたちはトーマス・クック(Cook, Thomas, 1808-92)による発明と言われる近代観光以前(1841年以前)の旅人であるため、むしろ、旅の主体はトラベラーとして扱われる傾向にあり、「トラベラー」と「ツーリスト」を対峙して並べる研究対象にはなりにくい。

「旅行者から観光者へ」の変化が意識されるようになったのは、アメリカで、

1960年代にブーアスティンによって、おそらく彼の意図ではなかったが、「かつての旅行者と観光者」というアーキタイプが提示された以後であろう。それ以来、商業化されたホスピタリティ、あるいは産業化されたツーリズムと表現される「観光」の「旅の主体」であるツーリストの旅の経験、とりわけ「真正性」を巡って多様な解釈が、社会学、人類学、民俗学から展開された。同様に、「旅行者から観光者へ」に関する研究が「ホストとゲスト」、「文化の再構築と文化の破壊」などの視点から「観光者」が社会に与えたインパクトについて明らかにされている。ブーアスティンに対する反論を嚆矢とし発展した研究分野と言えよう。だが、ここで研究されているのは20世紀マス・ツーリズム以降（とりわけアメリカ社会）のツーリストを対象としていることを念頭に入れる必要がある。フランスでは、英米のように、社会学から *Voyageur* と *Touriste* に関する研究は見られない。近年ではユルバンが、旅の主体、とりわけ *Touriste* に関し、歴史、社会学、文学、人類学からの研究を行っており、フランスの観光研究においてボワイエに続く研究者であると筆者は予測しているが、両者とも、ヨーロッパ的アプローチなのだろう、20世紀の *Voyageur* と *Touriste* を論じるために、ルネッサンス期の旅、たとえば、ペトラルカ⁽²⁾ (Petrarca, Francesco, 1304-74)の旅や、モンテーニュ⁽³⁾ (Montaigne de Michel Eyquem, 1533-92)の旅をも検討している。社会学が対象とする「観光の現状」を研究するよりも、現在の「観光現象」（旅の主体の変化を含めて）がどのように形成されてきたのかに重点を置くのがフランスの観光研究と言えよう。

(2) 20世紀ブーアスティンを嚆矢とした旅行者と観光者に関する言説について

ブーアスティンは著作 *The Image* 『幻影の時代』を1962年に出版した。その中で20世紀におけるアメリカの精神構造や生活習慣の変容について、メディア論を中心に多岐の事象について観察した。『幻影の時代』の第3章「旅行者から観光客へ：失われた旅行術」は観光学研究において、古典的な論文となっており、ブーアスティンが観光研究者のように扱われる原因となった章である。彼は「疑似イベント(pseudo-events)」という独自の言葉を用い、かつての旅行者(traveler)に対し20世紀アメリカの観光者(tourist)、およびツーリズムに苦言を呈している。もちろん、この「疑似イベント」は旅の主体の変化を説明するただけに用いられたのではなく、体験の創造、現実の加工、出来事の大量生産が現代社会における象徴的な要素であり、このような体験、加工された現実がは

びこるアメリカ社会の嗜好を「疑似イベント」とする。高岡(2001)も「つまりあくまで疑似イベントの典型的な例として観光を引き合いにだしているに過ぎない」(71)のであると言及している。

ブーアスティンの「旅行者と観光者」に関する主張の一部を要約すると、かつての旅行者の目的はいろいろな土地に住んでいる人々に出会うための旅行であり、旅の初めから終わりまでスリルと「苦労(travail)」が絶えずあった。また、景色、空間の移動（時間で距離をとらえない）が必ず存在していた。しかし、19世紀半ば複製技術^{グラフィック}革命を経て旅行の性格が大きく変わった。例えば、交通手段の発達のおかげで20世紀のツーリストは、空間を距離でなく、時間でとらえるようになったこと、また、旅行者(traveler)が没落し、観光客(tourist)、観光(sight-seeing)が台頭するようになったことなどを挙げる(Boorstin 1962=1964)。更には、旅行者(traveler)は能動的であり、人・冒険・経験を求める旅行者であるが、観光客(tourist)は受動的であり、おもしろいことが起こるのを待っている人、あらゆることが自分のために用意されることを期待している人、と両者を区別している。

「ツーリスト」の旅に関する意識の「軽さ」に言及しているという印象が否めない。さらに、現代のツーリストは「真正性」を求めるのではなく「疑似イベント」で満足しているに過ぎないと観光分野での「疑似イベント」論を展開している。

この著書を嚆矢として、ブーアスティンは「旅行者は本物を求める主体、観光者は疑似イベントで満足する主体」と定型化した人物と見なされ、「旅行者」と「観光者」に関する論争の第一人者として観光学では周知される。

(3) マキャーネル(MacCannell,Dean)による反論

一方で、社会学者マキャーネルは70年代に著書 *The tourist* の中で「モダニティ(modernity)」を代表するものとしての「観光者」を社会学、人類学、記号学から研究を行い、ツーリストはブーアスティンが言及したような存在でないことを論述し、「観光研究」に新境地を拓いた。1976年の初版から約30年後の1999年に改訂版が出版されたことから、相変わらず著書 *The tourist* が「観光研究」において重要な一冊であることが理解できる。

高岡(2001)によると、マキャーネルは「(ブーアスティンは)観光者の態度と知識人の態度を完全に分けようとするこ

とに固執しているに過ぎず彼が提起した問題点から目をそらし、過ぎ去りし旅行のあり方へのノスタルジーや自分以外の観光者に対する憎悪とも言うべき嫌悪感を表明するだけである(72)」と批判した。

また、マキャーネルは観光者も「真正性」を求めること、ガイドブックや旅行社の介在なしに旅行する存在である事例を紹介する。

「1975年、ツーリスト達は自分自身で旅を企画し、マーク（認識、徴）されていない場所、例えば、歴史的悲劇や奇蹟が展開された場所、巨大モニュメントや自然災害跡地などであっても、かなり頻繁に自分たちで移動していた（旅をしていた）。すべてのツーリストたちがそうしていたわけではないが、アップーミドル階級の人々の何か理想的な型であった。ツーリスト（学歴もあり、収入もあるクラスの）たちは、派手なメディアの仲介がなくても、歴史的な出来事とその場所と現在との関係を理解していた(MacCannel, 1999:194)」

ツーリストたちは、メディアに左右されることなく目的地として選んだ場所に真正性を追求することができた。マキャーネルが示す事実によって、ツーリストたちは「真正性」を求める存在であり、「疑似イベント」で満足する存在ではないことが明らかにされる。また、旅の大衆化が浸透していたアメリカ社会であっても、1975年時点では、旅の目的地、あるいは旅の方法には社会的地位によるディスタンクションが明確に存在していたことを語る文章でもある。

The tourist の初版から20年以上を経た1999年に、改訂版 *The tourist* が出版されるがエピローグに、実は *Touristic* という単語を初めて使ったのはマキャーネル自身であったことが明かされる。ツーリスト(Tourist)に対する否定的側面について「語感」から得たマキャーネル的見解が披露され興味深い。

マキャーネル自身は、前述の通り自分が初出させたと語るが、実は英単語 *Touristic* が初めて辞書(OED)登場したのは1848年である。話を戻すが、マキャーネルによると、彼はフランス語 *Touristique* を意識して *Touristic* を使用したのであった。*Touristique* は *Touriste*（仏）から派生した言葉で1846年からすでに用いられている単語であり(Larousse)、現在でも *guide touristique*（観光案内）、*renseignements touristiques*（観光情報）というように使用される。一方、マキャーネルは *Touristic* という形容詞をつけるとなにか「否定的含蓄(negative connotation)」をもつ事象を表現することになってしまうと憂いている。それは *Touristic* をつけると商業主義に陥った「場所」、「物」を表すことに起因する。

マキャーネルは *Touristic* とはヒューマンノティス（人間の関心ごと）を分かちあうことでありながら、もう一方で商業的なやりとりがされることを示す形

容詞であると言う、つまり相反するような2つの状況が会合する場所を示す単語であると指摘する。1999年版のエピローグの中で、初版では、商業的側面から切り離して「人間の発見の旅」にフォーカスした研究を行ったことを言及した上で、観光が、世界で最大級のビジネスへと急成長した理由の核心を「非商業的利害関係(non-commercial relation)」の中に見出せていたら、私は若き社会学者として仕事を成し遂げていたであろうと回顧している (MaCannell, 1999:193)。

「資本主義社会」という「商業価値」が高く評価される社会で、メディア媒体に翻弄されるツーリストの位置づけが低下していったこと、さらには、かつては Touristic field (観光地) は The lure of the local (地方の魅力) で取り囲まれていた、つまり、ローカル性が問われていた場所が、市場のグローバル化が進むにつれ、「地方色を楽しめる場所」がますます減少し、均一化される現状などを取り上げ (idem:199)、これらの現象を「観光分野の商業化 (The Commercialization of The Touristic Field)(idem:196)」と非難している。

マキャネルは、またビルゲイツ⁽⁴⁾ (Gates, Bill 1955~)を例に出し、「金銭」の力により、ローカルアトラクションは売買され、再生産され、地球上のどこにでも移転可能になってしまったことや、将来は、世界中のいたるところで自国の文化と他国の文化がまざり、同一化した、均一化したアトラクションで溢れるようになってしまっているのではないかと、そうならば touristic の終焉ではないかと苦言を呈している。

Touristic とは、hype (偽物) ではないローカルオブジェクトを通じ、同じ考え方の人 (like-minded individuals) 同士が親密な人間関係を構築したり、世代間での関係を構築する場所であるとし、

『『あなたは、これを見たし、食べたし、感じましたよね』という観光文脈ではよくある一時が、human solidarity (人との連帯感) につながる。』と結論づけている。

つまり、観光者の存在がローカル間でのつながりを築くだけでなく、「国際理解」、「国際交流」あるいは、「世界平和」にまで貢献できるということ、ツーリズムには商業価値を越える力があることを述べているのであろう。演繹的思考に立ち戻ると、ツーリズムにそのような力があるのなら、ツーリズムという単語を派生させた「ツーリスト」の意味もそこに収束され、ブーアスティンが述べたように、ただ「擬似イベント」で満足している受動的な存在ではないことへと再帰させることができよう。

以上は1999年の*The tourist*の第3版のエピローグを中心に検討したものである。ブーアスティンが対象としたツーリストとは30年以上の隔たりがあり、直接的な反論というよりも、結局はむしろマキャネルのツーリストへの理想論が展開されていると言えよう。

(4) Cohen, Erik と Smith, Valene.L.によるツーリストの分類

ブーアスティンはツーリストを一元化し、単純に捉えているが、ツーリストの旅の目的は様々であるように、旅の主体としてのツーリストも同様である。1972年、コーエンは観光者を精密に類型化し(表 2-1)、ブーアスティンの観光者像が単純化されすぎていると批判する。スミスは、観光がもたらす「ホストとゲスト」の関係を調査するために行われた事例、「欧米以外の社会における初期の観光活動」、「ヨーロッパのリゾートにおける観光活動」、「複合社会における観光活動」に分類された全部で11に上る現地調査から、ツーリストの類型を行った。(表 2-2) コーエンの研究もスミスの研究も70年代のものであり、観光活動について再考を促した研究でもあった。

表 2-1 E.Cohen によるツーリストの類型化

| | ツーリストの型 |
|---|-------------------------------------|
| 1 | 放浪者 (drifter) |
| 2 | 探検者(explorer) |
| 3 | 個人参加型ツーリスト(individual mass tourist) |
| 4 | 団体参加型ツーリスト(organized mass tourist) |

E.Cohen (1972)を基に筆者作成

表 2-2 V.Smith によるツーリストの分類

| 観光客の型 | 観光客の数 | 地元生活水準への順応性 |
|------------------------------------|----------|---------------|
| 探検型観光客(explores) | きわめて限られる | 十分受け入れる |
| 旅行通の観光客 (elite touriste) | 滅多に見られない | 十分順応する |
| 型破りな観光客(off-beat tourists) | たまに見られる | うまく順応する |
| 並外れた観光客(unusual tourists) | ときどき見られる | なんとか順応する |
| 初期観光客 (incipient mass tourists) | 一定の入込み | 西洋的な快適さを探す |
| 大衆観光客(mass tourists) | 絶え間ない入込み | 西洋的な快適さを期待する |
| 団体観光客 (charter tourists) | 大量の入込み | 西洋的な快適さを必要とする |

V.Smith.(1989)*Hosts and guests* によるツーリストの分類を基に筆者作成

(5) 日本における批判の諸相

日本において、白幡(1996)がブーアスティンの議論には人類にとってよきものだった「旅」が、悪しき「旅行」に駆逐されてきたという嘆きばかりが目につくとし、このような知識人による大衆観光批判は観光への大衆の参入に対する貴族・エリート層の憂い以上のものではないと批判する。また、吉見は1996年の論文「観光の誕生：疑似イベント論を越えて」の中でブーアスティンへの2つの批判の可能性を述べる。一つ目は旅行の変容と「複製技術革命」との関係性について、二つ目は「ブーアスティンが19世紀前半までの欧米にはまだ自発的で豊かな、本当の旅が存在していたと考えている点」をあげる。「ブーアスティンは19世紀半ば以降の観光の発展を、こうした輝かしい発見の歴史からの墮落としてとらえている」のだが、吉見は以前の旅と現在の観光の間にあるのは「本当は断絶ではなく連続性なのではないだろうか」と疑問を呈す。言い換えれば旅行者と観光者は二項対立的な関係ではなく、「連続」する関係にあると

いうことであろう。筆者も、吉見と同意見であり、「旅する主体」として、旅行者と観光者は同軸上にあり、二つの「主体」を取り巻く社会、歴史あるいは産業構造がそれぞれの主体を断絶させているように見せているだけではないだろうか。19世紀の旅はそれ以前とも以後とも異なる、しかしながら連続した「旅の世紀」と言えるのではないだろうか。

近年では、高岡(2001)がブーアスティンの再考として、「疑似イベント」の着想の先見性に対し、「ブーアスティンは現実とイメージ、オリジナルのコピーといった旧来の区別が転倒したり両者の境目が氷解するという事態⁽⁵⁾にいち早く注目し、そのような事態に対するわれわれ自身の洞察力を促そうとしたのである(71)」と新しい見解を提示している。

初版から半世紀が経つ現在でも、観光学研究においてブーアスティンへの言及は後をたたない。彼の研究の一部に過ぎない「観光」への苦言が、これからも議論され、高岡が2011年に再考したように今後も再考され、新たに解釈されることであろう。

第2節 フランス語文献における「ツーリスト」研究

フランスでは、1840年代から、voyageur ではない旅の主体として touriste は意識されていた。また、増加する旅行者の旅が、戯曲や旅行記の作品数の多さ⁽⁶⁾にも表れる。

例えばラビッシュ(Labiche, Eugène, 1815-1888)とマルタン(Martin, Edouard, 1828-1866)の共作、喜劇『ペリション氏の旅行』*Voyage de Monsieur Perrichon*(1860)では、登場人物たちは Toutiste と設定され、あこがれのアルプスへと向かう列車にいる。彼らの行動や反応が皮肉を込めて描かれるが笑いを誘うアイロニーであり悪意のあるものではない。Touriste がどのような存在として人々から見られていたのかを知る上でも価値のある作品である。また主人公ペリションは「有閑階級のツーリスト」あることから、新興ブルジョワへのからかいとの批評も存在する。2012年12月現在、相変わらず上演されるロングランの作品である。

以上は一例に過ぎないが、1840年代に、「^{フィジオロジー}生理学」⁽⁷⁾をはじめとする文学的アプローチによるツーリストへの言及、むしろ「からかい」が盛んに行われていた。

(1) テーヌ(Hypolite, Taine,1828-1893)による 19 世紀ツーリストの類型

「旅行記」という文学作品からも旅の主体が表現される。イポリット・テーヌ著『ピレネー旅行記』*Voyages aux Pyrénées*(1855)の中に見られる *touriste* たちは「19 世紀ラールス」において *Touriste* の項目において定義の一例として紹介されている。テーヌの観察によって旅行者(*Touriste*)は 6 種類のタイプ別に分類される。19 世紀の新しい旅の主体を知る上で興味深い。テーヌは文学者であるが、当時生まれつつあった実証主義の信奉者であり科学的な省察を好んだ人物である。次ページの表 2-3 にテーヌの分類を示したが、19 世紀ラールスの編者はテーヌを 7 種目の *touriste* と提案しており、表 2-3 ではテーヌという *Touriste* を含めた 7 種の *Touriste* を示した。

表 2-3 Taine によるツーリスト分類

| 19 世紀 <i>touriste</i> の型 | 行動の仕方 |
|--------------------------|-------------------------------------|
| ルソーの旅を実行するツーリスト | ガイドブックの情報に精通している 旅の楽しみは歩くこと |
| ガイド本に従い行動するツーリスト | ガイド本を常に携帯し、ガイド本の指示通りに行動する人 |
| 草上の昼食をするツーリスト | パリから近郊の田舎に行ってピクニックをする人、ケチな旅行をする人 |
| 外食（レストラン）に行くツーリスト | 食へのこだわりを持つ新興ブルジョワ |
| 学術的研究をするツーリスト | 自分の研究に没頭するブルジョワ：オタク系 |
| 出歩かないツーリスト | ホテルから出ず、風景あるいはそこに いるというだけで満足するひと |
| テーヌのようなタイプのツーリスト | 不慮の出来事をも経験として受け入れ、楽しみながら受け入れられる人 |

「19 世紀ラールス」内 *touriste* の項目を基に筆者作成

表に見られるのはあくまでもテーヌの主観的分類であり、現在の社会科学的な見地からの分類ではない。さらにテーヌというインテリの歴史学者による見解であり、水平な目線での分類であるとは言えない。しかしながら、トーマス・

クックを嚆矢とする近代観光の登場以前、「ツーリスト」という単語にはすでに否定的含蓄が存在していたことを明らかにしている点において観光学的な価値のある資料と言えよう。また現在のツーリストに共通する要素が多いことにも驚かされる。ピレネー地方のツーリストの分類であるが、山田登代子(1998)『リゾート世紀末』に見られるパリ近郊のツーリストにも当てはまる分類である。

(2) ユルバン(Urbain, Jean-Didier, 1951-)の「ツーリスト」研究

これまで述べてきたように、フランスでは文学領域のアプローチにより、すでに19世紀には *Touriste* という、*Voyageur* とは異なる旅の主体が言及されてきた。おそらく、その歴史が、20世紀のマス・ツーリズム以後の旅の変容に関してブーアスティンのように「旅の墮落だ」というような短絡的な結論へと導かなかったのだろう。これまでの調査では、フランスにおいてアメリカでおこったような社会学的見地からの論争は見られなかった。筆者はウェブサイト *revue-espace.com* で偶然にユルバンというフランス人研究者が観光 *tourisme*⁽⁸⁾ に関する著書を多く出版していることを知った。*L'idiot du voyage: Histoire de touristes* ではフランスにおける「ツーリスト」への偏見の変遷が研究されている。

ユルバンについて説明するが、ユルバンはフランスの人類学者(民俗学者)、社会学者であり、「旅」と旅の主体について数多くの研究書が上梓されている⁽⁹⁾。本論文においては *L'idiot du voyage: Histoire de touristes* を対象文献としている。理由はサブタイトルが『ツーリストの歴史』と本研究の主旨そのままであったからである。ユルバンは第1章(全6章)で(主にフランスの)人々がツーリストをどのように把握して来たのかを省察する。以下が各章のタイトルである。

第1章「ツーリストとツーリストにまつわる言葉」 *le touriste et les mots*
第2章「ツーリスティックな動物から商品としてのツーリストへ」 *De l'animal touristique au touriste-marchandise*
第3章「旅行記の中のアンチヒーロー」 *L'antihéros des récits de voyage*
第4章「追剥にあった旅人」 *Le voyageur detroussé*
第5章「追放、ノスタルジー、眼炎」 *Ostracisme, nostalgie et ophtalmie*
第6章「ツーリストの他者(ツーリストではない誰か)」 *L'Autre du touriste*

タイトルだけを見ても「ツーリスト」が否定的な存在として語られることが予想されるであろう⁽¹⁰⁾。

1) Voyageur から touriste への見解

Voyageur としてセガレン⁽¹¹⁾(Segalen, Victor, 1878-1919), キュスティエヌ侯爵⁽¹²⁾(Marquis de Custine, 1790-1857), コビノー⁽¹³⁾(Gobineau de, Arthur, 1816-82), カスー⁽¹⁴⁾(Cassou, Jean, 1897-1988)の名前が挙げられる。彼らのツーリストへの見解の一部を紹介する。

「ツーリストの旅は素人の旅(voyage en amateur)」、「ツーリストは『スパイ』であり、ツーリストの名のもとにどこにでも侵入する」、「ツーリストは集団で行動し、それぞれが付和雷同的行動しかとらない」、「1850 年頃から、羊、そして犬などの『動物』に例えられたが、どこでもうるさい存在であったため、次第にスズメバチなど、虫『パラサイト』に例えられるようになった」、「ツーリストには魂がない」、「旅を商業化した犯人である」、「ホスト国を腐敗させた」、「『旅』という神聖な活動をスポーツやゲームに変えた」、「ツーリストは世界を大衆化させた」、「ツーリストは厚かましい」、「ツーリストはそもそも存在が間違っている(Il est une faute)」、「ツーリストは景勝地をダメにする」、「ツーリストは美術館、歴史的なモニュメント、景色にしか興味がない」、「『見た』数で、旅を判断する」、「ただの見学者」、「ツーリストは『外 autre』への関心が強い変人、病人である)」、「ツーリストは『記号』でしか見るできない眼病患者だ」、「ツーリストとは他者であり自分ではない」など、厳しい意見が披露される。

次に、touriste を使ったフランス語の慣用句から touriste がどのような存在であるか概観する。

① *se comporter en touriste*, ② *être là en touriste*, ③ *faire touriste*,

直訳すると①は「ツーリストのような振る舞いをする」、②は「ツーリストとしてそこにいる」、③は「ツーリストのふりをする」である。3つの例文全てにおいて表現されるのは、否定的表現としてのツーリストである。また、飛行機や電車で「ツーリストクラス」と言われる座席があるが、それは2等車(*deuxieme classe*)を意味する。もちろんファーストクラスにいるのは Voyageur である。ビジネス旅行者のことをフランス語では、ヴォワイヤジュール・ダフェール(*Voyageur d'affaires*)と言うが、仕事で旅する人を意味するためであろう。

以上の否定的要素は、Voyageur の視点によるツーリストへの見解である。一方で、Touriste の増加によって Touriste による Touriste への否定的な意見もみられる。そこに見られるのは、「差異化」を図るための行動である。

2) Touriste による Touriste への否定的な要素

自分自身ツーリストであるのにもかかわらず、「ツーリストとは他者である」と見なしツーリストであることを拒否する旅行者である。他のツーリストと同じ行動をとらないように、つまり差異化を図るツーリストの行動が列挙される。彼らは、「ツーリストが避けるような土地のものを食べ、土地の衣装をきる」、「ガイドブックはあえて読まない」、「高級志向のツーリスト」、「ツーリストが行かない場所に行くツーリスト」である。

実際、これらの行動は *voyageur* による行動、嗜好である。ユルバンは彼らを *un autre touriste* (another tourist) と命名するが、文字通り「もう一方のツーリスト」、換言すれば「ツーリストではないツーリスト」を表現しているのであろう。ここで注意すべきことは「ツーリストではないツーリスト」とは *voyageur* (traveler) を意味しないということである。二項対立は脱構築され、*Touriste* もまた変容する旅の主体であることが明らかにされている。

3) ユルバンの問題点と新しさ

帰納的論証と演繹的論証が混在している上、19 世紀から 21 世紀の現在の旅行者および観光者(ツーリスト)を社会的背景、歴史的背景(フランス語 *Touriste* と英語 *Tourist* の成り立ちは違うことなど)を無視し、同軸上で分析することに違和感がある。一方でツーリストに関しても「一種類ではない。プレツーリスト(*Prétouriste*)とメタツーリスト(*Métatouriste*)が存在する(ibid:116)」と提言する。プレツーリストとは、一番早く誰もまだ話題にしないヴァカンス地に行くツーリストであり⁽¹⁵⁾、メタツーリストとはマスツーリストの中で一番高級な旅をするツーリスト⁽¹⁶⁾を示すなど新しい分類も提示している。より複雑化するツーリストの定義づけへの可能性を示唆している⁽¹⁷⁾。

アメリカの文献における、20 世紀のマス・ツーリズム以降の「ツーリスト」の事例だけではなく、フランス、あるいはヨーロッパにおける初期のツーリストの事例を重ねることで、あらたな「ツーリスト研究」への期待ができることを提言したい。

第 3 節 フランス語 *Voyageur* から *Touriste* への変遷について

フランスにおける「旅の主体」の変容過程について、19 世紀ラールスは、新しい感性、あるいは自然を「美」として発見したルソー(Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778)との関係を明言する。ルソーとロマン主義、ロマン主義と *Touriste*

への関連性について検証を行った。

(1) フランス語 Voyageur と Touriste の辞書的定義

日本語では、「旅」の行為者は、「旅人」「旅行者」「観光者」などと呼ばれ、観光研究の中でかれらの「旅」について学際的に検討される。フランス語では、Touriste, Voyageur と呼ばれる。前者は文字通り英語の Tourist を語源とした単語で、フランスでは 19 世紀はじめに出現した (Larousse)。一方後者は、voie「道」を起源とした単語 voyage「旅」の派生語であり「道を行く者」＝「旅行者」として長期にわたって使用されてきた (1460 年にはすでに Voyager が使用されている)。仏語辞典ラルース(1978)によると、Touriste とは「自分の楽しみのためにどこかの国を訪れる人」と定義している。一方 Voyageur においては、それぞれの時代における定義が詳細に説明されている。1637 年デカルトは「交通手段を使って長距離を移動する人」、1810 年、スタール夫人は公共交通手段を使ってある距離を踏破する人、1942 年アラゴンは「徒歩で行程をこなした人」の例文が見られる。現在でも、パリの地下鉄、バス内では、乗客を「voyagereur」と表記しているが、以上を踏襲しているのであろう。一方、シャトーブリアンは「Voyageur とは歴史家である。見たこと聞いたことを忠実に語る義務がある。何事も書き加えてはいけなし、何事も省略してもいけない」と定義し、歴史家としての Voyageur の役割について検証されている。

(2) ルソーの旅とツーリスト

ルソーがロマン主義の先駆者であることのひとつに、ぶらぶらと歩きながらの旅、つまり時間にとらわれないその旅の仕方、さらに山をはじめとする自然、景観に対する新しいまなざし、つまり「風景」を誕生させたあたらしい「感覚」にある (石川、2000 ほか)。とくにルソーによるスイスアルプスへのまなざしは、多くの人々をひきつけ、アルプス地方の村や、スイスのジュネーブは「ルソー」の換喩表象の町となった。

19 世紀版ラルースは、ルソーを<初めてのツーリスト>と認証し、ツーリストという単語について長文による説明を掲載した初めての辞書である。

<<Du temps des diligences et des coches d'eau, le touriste existait à peine ; il n'y avait

que des voyageurs....Malgré le manque de moyen de communications faciles, le XVIIIe a vu J.J.Rousseau donner le premier exemple aux touristes par ses long voyageurs pédestres en Suisse et en Italie, qu'il accomplissait le sac sur le dos et le bâton à la main, se nourrissant de pain bis, de laitage et de cerises, en véritable enfant de la nature. (Boyer , 2000 :129, *Grand Laousse universel du XIXe*, tome 23 :360>>

石井(2009)も同箇所をその著書の中で引用し、ボワイエよりもさらに詳しく引用文を載せている。

「乗合馬車と川舟の時代には、ツーリストはほとんど存在しなかった。旅行者 *voyageur* しかいなかったのである。ボルドーからパリ行きの乗合馬車に乗る前には遺言を書いておかねばならないと思われていたし、こうした条件下での移動はほとんど娯楽旅行とはみなされえなかった。とはいえ、趣のある旅を好む者は自然なことである。美しい風景や目を楽しませる風景の魅惑はいつもそれほど強いものであったし、抗おうとしてもどうにもならないものであった。容易な交通手段がなかったのにもかかわらず、18 世紀にはジャン＝ジャック・ルソーが、スイスとイタリアへの長期の徒歩旅行によって、ツーリストの最初の例を示している。彼は背中に旅行鞆を背負い、杖を手に、ブラウンブレッドとミルクとサクラamboを口にしながら、文字通り自然の子供として旅をしたのだ」(石井, 2009 :24)

つまりツーリストとは純粋な楽しみのために旅行するものと定義されている。石井は上記の引用文とルソーの『新エロイズ』から、

「彼の旅の特徴といえば、自分の足で各地を巡りながら、目に映る風景におのれの感性を投射し、深いところで共振させた点にある。彼は歩かざるをえなかったから歩いたのではなく、歩きたいから歩いたのである。山河の雄大さや湖沼の崇高さを嘆賞しながら、文字通り足の向くままに各地を経巡るルソーにとって、旅は単なる移動手段ではなく、精神を涵養するまたとない機会であり、いわば生きることそのものであった」(同書, 2009 :25)

とルソーの旅について言及している。ルソーの言葉として、「古代の哲学者たちのように歩いていこう」、「植物や、文化（風土）に興味を持とう」「本で読むのではなく実際に見なくては」(Boyer, 2000 :130) などがあるが、巡礼者や戦

争従事軍人，商人，冒険家によって書かれた「旅行記」の中で旅をするのではなく，実際に「旅」に出ることが「人間」にとってどんなに意義のあることなのかを説いているのであろう。

(3) ルソーの旅とその影響

18世紀『新エロイーズ』*Julie ou la Nouvelle Héloïse*⁽¹⁸⁾『エミール』*Emile*⁽¹⁹⁾を始めとするルソーの思想はヨーロッパ中で評判となった。「自然」への傾倒は特に，イギリスのロマン主義作家たちに多くの影響を与えた。その結果，ルソーの出身地スイス，ジュネーブ，レマン湖周辺にイギリス人は押し寄せた。

イギリス湖畔詩人(lakiste)ワーズワース(Wordsworth, William, 1770-1850) もその一人であり，ケンブリッジ大学卒業後，グランド・ツアーに出かけ，フランス革命とルソーのスイスに熱狂した(Boyer 2000)。当時のイギリスの上流階級では「移動」には馬車を使うことが一般的であり，「徒歩」という手段はさげすまされていた。1794年，ワーズワースの妹が，グラスミアからケジックまでの13マイルを歩いたことで，日頃からドロシーが歩き回ることを腹にすえかねていた叔母に叱責されたことで，「歩くことがどうしていけないの？自然がすばらしい体力を下さったことに感謝しなきゃ」（中嶋，2007:118）と反論している。1782年にイギリスを訪れたドイツ人牧師も，

「徒歩旅行は野蛮人扱いされ，出会う人々からまじまじ見られ，哀れみをうめ，危険の人物と考えられかねない．．．だから，イギリスではペデストリアンは乞食か放浪者，よほど困窮している人間と考えられ，宿なし人よりもはるかに珍しい人間であるとみなされてしまう」（同掲書:118）

ルソーによってイギリス人の「旅」の意識が大きく変化した様子が垣間みられる例である。ドイツへの影響として，

「たとえばゲーテは 1775 年から何度もスイスを訪れて，山の威容に魅せられ，ルソーのことを考えては感動したりしている。」(石川，2000:49)

などがあげられる。

以後，スイスのアルプス地方でも，外国人観光客，特にイギリス人によって

モンブランやメール・ド・グラスの壮大な自然が流行の場所となり、1776年にはアルピニズムという言葉が生まれた。山の上でも、湖畔でも多くのイギリス人が見られたことが想像できる。イギリス人歴史学者ギボン(Gibbon, Edward 1737-94)も、「スイス旅行, アルプス, 氷河は流行になっています」(石川, 2000 :50)と述べている。一方、受け入れ側にとって、イギリス人の行動は「変わった」「奇妙な」ものに見られた。

(4) イギリス人ツーリスト

イギリスでは、当時、旅をすることは、fashionable な人間（上流階級で流行に敏感なひと）と見なされるための重要課題であった。「私はあそこに行ったことがあるし、あれも見たことがある」(Boyer, 2000 :190)と言えることが必要とされた。なぜなら、訪れた場所の数、山の数、横断した急流の数によって相手に対する評価が下されるからであった。それゆえ、将来どんな道に進むにしても大陸に行くことは必要不可欠だった(Boyer, 2000)。

フランス革命やナポレオンによる大陸封鎖令で一時は減少したものの、1830年から旧大陸へのイギリス人観光客の数は増加する一方であった。

「イギリス人は目立つ存在となっていた。彼らの衣服、話す言葉によって。すべては彼らがエキセントリックで風変りな存在であることを見せつけていた。そこで彼らを示す新しい単語が必要になったのである」(Boyer, 2000 :191)

「18世紀において、イギリス人（英国人）だけが tour という単語を＜旅＞として使用したことは周知の事実である。19世紀に入っても大陸側はこの＜英仏語 *franglais*＞を拒否し続けた。しかし1830年以後、少しずつこの単語を受け入れるようになった。とくに英国人の外国人を意味する形容詞 *Touriste* として」(idem :191)

このようにフランス語の *Touriste* はイギリス人観光客を示す言葉として成立した。

(5) フランスにおける *Touriste* の定義

リトレ(Littre)辞書(1872)による定義：ツーリストとは単に、好奇心と暇に

よって、外国を巡る旅行者、そしてその場所とは同国人によってよく周遊されているところである。フランス、スイス、イタリアではイギリス人旅行者をさす(Boyer, 2000 :192)。一方、1876年のラルースでは、「ツーリストとは好奇心と、有閑によって旅に出る人」となり「イギリス人」が省略されている。更に、年金生活者ランチエなど有閑階級層が没落した後は、リトレは再編集され、Touriste はただ単に英語 tourist,tour を語源とする語として記載された。Tour には、「青年ジェントルマンの教育のための旅行＝グランド・ツアー」の意味もあったことも記述されていなかった。さらに、「ラルース」も「リトレ」もスタンダールが使用した「ツーリスト」とトッフュール⁽²⁰⁾(Töpffer,Rodolphe1799-1846)の「ツーリスト」について掲載していない。

「かれらの『ツーリスト』を参照していたら Touriste という単語の意味がより厚みを帯びたものになったであろうとボワイエは指摘している」(Boyer,2000 :192) ちなみに、辞書ロベール(Robert)内において、ツーリストの項目中スタンダールが取り上げられるのは 20 世紀になってからのことである。

Stendhal ne sera nommé que dans le Robert, au XXe siècle. Après avoir rappelé que « touriste » a été enregistré en 1839 par Boiste dans la troisième édition de son dictionnaire, le lexicologue ajoute que le mot « s'est répandu en français avec Stendhal (Boyer, 2000 :192)

(6) 文学作品の中の Touriste

前述したように、フランスでは Touriste はイギリス人を指す言葉であった。スタンダールが 1838 年に *Les mémoires d'un touriste* で初めて「ツーリスト」をフランスに導入したと言われるが、作品の中の主人公であるツーリストは「鉄の商人(marchand de fer)」という職業を持ったフランス人(イギリス人でもなく有閑人でもない)であることから、様々な非難が上がったが、かれの功績としてツーリストという新語をフランス語に入れたことがあげられるとボワイエは言及している(Boyer, 2000)。

石川も自分自身をツーリストと呼んだネルヴァルの『東方旅行』を例に『『ツーリスト』とは、商用や巡礼などの目的があって旅をする人ではなく、楽しみゆえに旅をする人、つまり観光者をさしていた(石川, 2000 :151)』としている。一方でボワイエが「19 世紀には、すでにツーリストには侮蔑的な意味が内包していた」と言及するように(Boyer, 1999)、トッフュールの描いたイラスト

(図 2-1) からも「杖を携え、ちょっと変わった風貌」をした「物好きな変人」でもあったことがうかがえる。



図 2-1 Töpffer の *Nouveau voyage en zig-zag*(1854)の中のイギリス人ツーリストの風貌
(Boyer, 2000 :196)

(7) Album とツーリスト(touriste ,tourist)について

Tourist, Touriste の象徴として「アルバム」がある。ボワイエは「イギリス人ツーリストたちは、彼らの気を引くすべて（まなざしの対象となるもの）を詳細に書き留めた」と言及する。(前掲書 :197) つまり「まなざし(regards)」の対象外は無視された「旅」であった一方、まなざしの対象物を「記録」することは旅の重要な行為であった。

19 世紀フランス人のツーリスト(Touriste)も、旅行アルバム (album de voyage または album d'ami)を携帯していた。19 世紀文学に詳しく、フロベール研究家のドール・クルーレ(Dord-Crouslé, 2010)によると、アルバムは古くから存在し、16 世紀にはユマニストたちによりヨーロッパ中に広がり、libri amicorum(livre des amis : 友情の本)と呼ばれていた。旅の折、学生、あるいは文学者たちなどが携帯し、出会った人のパンセ（意見、意向）や詩、あるいは風景画や一族の紋章などを記載し交換し合ったと言われる。現在のサイン帳(carnet d'autographe)に引き継がれることとなる。一方でこの旅行アルバムがイギリスのロマン主義の影響を受け、個人的な旅の記録となり、旅行者自身でもクロッキーや文章を綴ったり、旅先の知らない文字などを入れるようになり、「旅行アルバム」として詩人や芸術家の特徴を示すものとなった。さらに 19 世紀のオリ

エンタリスト（ゴーギャン、ドラクロワ等の芸術家）の作品を経て、より専門的な、つまり個人の記録には留まらない、旅行記の一種「カルネ・ド・ヴォワイヤージュ(carnet de voyage)」として現在に引き継がれている。同時に、carnet de voyage は人類学者たちの記録から発展したともいわれている（Argod 2010）。

ドール・クルーレ（前掲書）はフロベールの『感情教育』のなかの、Paris から実家に帰る途中の主人公フレデリック・モローを紹介する場面を引用している

「18 歳の若者、髪は長く、腕には一冊のアルバムを抱えている」

これは典型的な「旅」にでる前の若者の姿であった。

第 4 節 考察

ツーリストにまつわる否定的側面が形成された仮定について、アメリカの観光研究、フランスの観光研究から検証を行った。アメリカではブーアスティン (1962) が *the Image* 『幻影の時代』の中で展開した「擬似イベント」に満足するツーリスト、「真正性」を持たないツーリスト論が発端となり、マキヤーネル、E. コーエン、V. スミスらが社会学、人類学の見地から反論を唱えた。以後「ツーリスト」研究は「観光学」に敷衍して論じられる。一方フランスではツーリスト研究は文学領域から 19 世紀より行われていた。Voyageur の時代、つまり 18 世紀以前の旅の主体との比較において、「楽しみのための旅を実行するツーリスト」への偏見が「^{フィジオロジー}生理学」¹、「旅行記」²、「戯曲」の中で告発されてきた。20 世紀のアメリカ、19 世紀のフランス、どちらも「ツーリスト」に内包された偏見を確認することができたが、その内容については異なっていた。また、アメリカの場合は旅の主体としてのツーリスト研究、あるいはツーリストへの非難が行われているが、フランスの場合、旅の主体というより、むしろ、19 世紀、新しく社会に登場した属性としてあざけりの対象となっていたのではないかと思われる。

21 世紀の現在、フランスにおけるツーリズム研究は実務的な研究を示す。しかし、ユルバンという研究者の存在を確認できたことは、筆者のこれからの研究において、非常に重要なことであった。

【補注】

- (1)Grisette は gris (灰色) から派生した言葉である。地方から進学を機に上京した青年たちが、一時の恋人としてお針子たちと付き合うことが社会現象として存在した。お針子たちはいつも gris(灰色)の服を身に着けていたことからグリゼットと呼ばれていた。
- (2)イタリアのアレッツォ生まれ。フランスのモンペリエ大学とボローニャ大学で法学を修めたのち、詩作とラテン語に傾倒した。古典ローマに倣ってラテン語を純正化するために、各地を旅して、古代の写本の研究をおこなった人物。
- (3)16世紀ルネッサンス期の哲学者。ボルドー市長。代表作は『エッセー』であるが、現在では尿路結石とよばれる病の治療目的としてイタリアへと温泉療法の旅に出かけた、旅の最中に綴らせた、あるいは自身で綴った旅日記も有名である。2012年に法政大学出版局より斎藤信広著『旅するモンターニュ』が上梓されている。
- (4)マイクロソフト社共同創業者、雑誌フォーブスの世界長者番付で1994～2006まで世界一になった。
- (5)後にドゥボールやボードリヤールらによって広範に省察された。
- (6)19世紀から行われていた。19世紀ラールスでは voyage の項に続き、戯曲や、旅行記(voyage で始まる作品名)が列記されるが、解説の長短はあるものの、141作品のタイトルが掲載されている。
- (7)「生理学」(フィジオロジー)とは、フランスで1840年代に流行した、特定の社会階層の生態描写、分析を目的とした文学分野である。生命現象を物理的、化学的に研究する学問ではない。
- (8)フランスでは tourisme という領域ではホスピタリティやプロモーションに関する実務観光を意味することが主流であり、Boyerの他には見つけられなかった。
- (9)*Sur la plage. Moeurs et coutumes balnéaires, Secrets de voyage. Menteurs, imposteurs et autres voyageurs invisibles, Ethnologue, mais pas trop... Ethnologie de proximité, voyages secrets et autres expéditions minuscules, Le voyage était Presque parfait* などがある。*Sur la plage* は英訳され *On the Beach* として出版されている。ユルバンの作品で日本語翻訳されているものは2013年現在見つからない。
- (10)しかしながらユルバン自身は、ツーリスト擁護するためにこの本を書いたと記している。
- (11)詩人、医師。民族誌や考古学分野にも業績を残した。中国、特に満州地域で流行していた伝染病患者を診るために家族で移住。医療活動の後は、現地で考古学の研究を行った。
- (12)外交官、旅行記作家。シャトーブリアンの友人でもあったが、同性愛者ということが世間に広まり、文学サロンからは追放される。しかし「旅行記」に自分の人生を見出した。ロシアの旅が有名。ロマン主義に傾倒。
- (13)ゴビノー伯爵。役人としてアテネ、リオ・デ・ジャネイロ、ストックホルムに滞在経験がある。ペルシャ旅行も経験している。退職後はヨーロッパを放浪する。ドイツでは精神治療のため温泉療法もうける。
- (14)小説家、批評家。
- (15)(il sera le premier touriste)最初のツーリスト誰よりも最初に行くツーリスト。
- (16)(il sera un touriste supérieur situé au-dessus de la foulditide vacancière)他のヴァカンス客よりも上位にいるツーリスト：ツーリストだが、他のツーリスト

より上にいると思っているツーリスト。

- (17) ツーリストが一パターンでないことを示す点で、コーエンやスミスと共通。
- (18) アルプスを舞台とした書簡恋愛小説。主人公ジュリーとサン・プルーをもとめてヨーロッパ中からアルプス参りの旅行者が集まった。
- (19) 教育書：「自然の最初の衝動は常に正しい」との前提のもと、悪しき社会から子供の内発性を守るべきであるとする消極的な教育論。
- (20) スイス人。スイスで、自分の生徒たちと徒歩による旅を行った。その時出会ったイギリス人の様子を文章とデッサンで表した本が『ジグザク旅行記』である。近年、マンガの原型としてデッサンが評価されている。

第 3 章

「旅行記」とは何か

第3章「旅行記」とは何か。

旅行記には「形式」、「定型」が存在しない。「旅」を唯一の共通事項とする。ゆえに、「地理学」、「歴史学」、「文学」など様々なジャンル分けが検討される。シュポー(Chupeau, Jacques)は、フランスにおいては、17世紀に「旅行記」の流行が見られ、文学界に影響を与えたことを明らかにし、「旅行記」とは文学の周辺に存在するなにか独立した体系であることを論じた。畑が「旅行記研究の古典的存在」と表現したこのシュポーの論文、およびル・ユナンの研究論文を基に「旅行記」の所属するジャンルについて再考する。「文学領域」に近い存在である「旅行記」であれば、ナレーションに重点が置かれる。つまり「旅の主体」である「書き手」の「旅」を知るための「資料」としての価値が高くなることが期待される。

つぎに、「文学ジャンルにあると認められている旅行記」の変遷について、サンスーの論文を中心に概観し、「旅の主体」の変遷：Voyageur から Touriste について考察する。旅行記の変遷にみられる「旅の主体」から「旅」に対する意識の変化について明らかにする。

第1節 19世紀の旅行記に関する先行研究について

本研究は19世紀のフランス人作家の旅を明らかにするものであるが、分析対象としてかれらの旅行記を使用する。近年フランス文学研究において、旅行記に関する研究論文が数多く発表されていることから、文学における「旅」への関心は明らかである。特に若手の仏文学者である畑は19世紀旅行記研究では観光研究、民俗学研究としても評価されるべき論考を発表している。論文「都市と旅行者—19世紀前半のオリент旅行記をめぐって」(仏語仏文学研究第28号)は、当時のオスマントルコに支配されたオリентと呼ばれる国の独自のシステムから人々の風習にまで精査した上で、ヨーロッパ人である旅行者(シャトーブリアン、ゴーチエ Gautier, Théophile, 1811-1872, ネルヴァル Nerval, Gerard, de, 1808-1855 等)がどんな行動をとっていたのか、つまり旅行行動をそれぞれの旅行記から明らかにし、観光研究においても価値が高い。

フランスにおいては、シャトーブリアン研究の第一人者であると同時に19世紀のオリент旅行記に関する大家としてベルシェ(Berchet, Jean-Claude)が挙げられる。*Voyage en Orient, anthologie des voyageurs français dans le Levant au*

XIX ème siècle(1985)は大作であり、1097 ページにも上る。ベルシェはシャトーブリアン、ラマルチーヌ、ネルヴァル、フロベール、デュ・カンに関する旅について旅行記を中心に分析しているが、歴史的、社会的状況についても省察は深い。また、ベルシェの弟子である、野崎歓は、『異邦の香り』のサブタイトルとして「ネルヴァル『東方紀行』編」とした著書を2010年に上梓している。もともとネルヴァルを専門にしている野崎であるが、『異邦の香り』では、自らをTouriste(ツーリスト)と名乗るネルヴァルの旅、目的が明白でない「フラヌール(遊歩者)」の旅をネルヴァルの奇妙な行動から明らかにする。また同じ場所を旅したフロベールやシャトーブリアンのまなざしとの違いを紹介しネルヴァルの特異性をひきだす。サブタイトルにもあるように「旅行記」分析による作品である。

ボワイエ(2001)は19世紀の作家ほど「旅」をした時代はないと言及するが、多くの旅を経験したシャトーブリアンをはじめ前述した作家達が「旅」を通して研究されるのは当然の事であろう。また、オリエント旅行記に関する研究はサイードの『オリエンタリズム』へと導かれ、ポストコロニアル、ジェンダーと様々な文学批評の対象となる。

スタンダールはヨーロッパから外に出ることはなかったが、イタリアに関する旅行記を残した。小説的な紀行文として1817年『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』*Rome, Naples et Florence en 1817*を上梓するが、これは本名のアンリ・ベール Henri Beyleではなく、騎兵将校ド・スタンダール(De Stendhal, officier de cavalerie)著として出版した初めての作品である。この旅行記から、作家「スタンダール」が誕生したという点において、スタンダール研究において重要な旅行記である。

文学領域では、以上のように「旅行記」が一次資料として重要視される。本研究においても観光学研究の枠組みの中で「旅行記」を一次資料として作家の旅を分析する。文学領域では作家の資質、つまり内面性に関して「旅」を結論づけることもできるが、観光学領域では、内面性というより作家の行動から、ある時代(「ヴォワイヤージュ」と定義した時代)、本研究では19世紀の「旅」の変容過程を考察することが可能であろう。このような点から、観光学研究においても旅行記の価値は高い。

第2節 シュポー(Chupeau)による研究論文

「小説の周縁を彷徨う『旅行記』について」 *Les Récit de Voyages aux Lisière du Roman*

(1) 旅行記のジャンルについて

シュポーは 1977 年、*Revue d'histoire littéraire de la France* 誌に *Les Récit de Voyages aux Lisière du Roman* のタイトルの論文を発表した。

研究の発端に関して、「1933 年アメリカ人 Raph Coplestone Williams が 17 世紀の小説を分類していた時に、どのジャンルにも振り分けられない作品に出会い、その多くが『旅行記』であった」という事実を紹介している。

シュポーは 17 世紀の文学界において、「フィクションの危機(Crise de fiction)」と呼ばれる小説の叙述（ナラティブ）変化と旅行記の関係性に注目し、旅行記が及ぼした文学界への影響について言及する。

研究の意義として小説と回想記(Mémoire)の研究は膨大にあるのにもかかわらず、旅行記と小説の関係性についての研究が少ないことを述べている。

17 世紀とは、フランス史において「太陽王」とよばれたルイ 14 世の治世(1643-1715)である。「文学」では、プレシオジテ(Préciosité)と呼ばれる貴族趣味のスタイルが流行し、マダム・ランブイエ(La marquise de Rambouillet, 1588-1665), マダム・スキュデリー(Madeleine de Scudéry, 1607-1701), マダム・ラファイエット(Marie-Madeleine Pioche de La Vergne, comtesse de LaFayette, 1634-1693)のサロンがとりわけ有名である。プレシオジテとは文学スタイルはもとより生活スタイルまで広範囲に渡って流行していた動きである。「フランス語の純化」を追求する運動の一環であるばかりでなく、服装、習慣にいたるまで広がり、何よりも「ノーブレス」「エレガントである」ことが第一条件として求められる潮流であった(鈴木, 1971, Bray, 1848 他)。

一方政治的には、領土拡大のための植民地政策が邁進した時代である。領土拡大のため、対外貿易のため、兵士、商人、漁師、船員、奴隷らが海を渡った。結果として、旅、冒険を語る、多くの「旅行記」が残された。シュポーは宮廷内で流行った文学と「旅行記」の相互作用についての関心を寄せる。

(2) 旅行記の目的について

シュポーは、旅行記(Récit de voyage)の特徴について、

「航海者の簡単な航海日記であろうと、学者や古代人の日記であろうと、それは（旅行記は）いつも調査の報告書(Compte-rendu)であり、地球上での不確実な事実を確実なものにするため、あるいは修正するための価値がある。そこには「真実」と「科学」を教える役割があり、簡潔な描写(Description)が求められた」(539)

と述べる。

例として、1661年11月13日にシャプラン(Chapelain, Jean, 1595-1674)⁽¹⁾がベルニエ(Bernier, François, 1620-88)⁽²⁾に宛てた手紙を提示し、旅行者(Voyageur)シャプランの多岐にわたる興味の対象を紹介する。

「インドに向けて旅立つシャプランの興味は1000もの領域に広がる。国の歴史、考え方、行動様式、宗教、科学、風習、地理、社会、政治、技術、仕事、建造物、手工業、大工仕事、指物・・・などから女性の立場や彼女たちの社会地位についてまでも・・・」(538)

さらに、シャプランは「旅行記」の中で、多岐に渡る事柄を記述することを約束する。それは当時の旅行者 Voyageur の興味の対象であり、「旅の目的」を記述しているといっても過言ではないであろう。

「ルイ14治世の初期に旅行記の流行は高まった」(538)とシュポーは明言し、その証拠として多くの「旅行記」を列記している。「旅」の目的は前述したように「真実」「科学」など未知なものを発見すること、あるいは確認することであったが、「権力」主導による「商業的發展政策(Expansion commerciale)」が存在したことも言及している。「旅行記」の目的として、海外進出を先駆けて行っていたイギリスやオランダに遅れをとっていたフランスの実情を王に伝える伝達方法としても用いられていたという例もあげている。

(3) 旅行記と小説の接近について

シュポーは「旅行記」の「文体」や「真実性」が、それまでの「文学」、つまりプレシオジテや「英雄を題材としたお話」(Roman héroïque)という「詩的でありフィクション性を持つこと」にその優位さが置かれていた「文学」や「小説」の価値を変容させていった過程についても分析する。

小説の軽さ(Frivolité du roman)と旅行記の有益性、実用性(Utilité)は相反するものであるが、旅行記の機能である「実用的な記述」を知識として得る行為よりも、「実用的な知識」を楽しみとして読む行為に変化したのではないかと分析し、この「両義性」を「旅行記」に特有な個性としている。一方で、17世紀の旅行者は旅行記の中の「古くからある疑惑(虚構性)」をかき消すことができず、遠方での旅の「真実性 Véracité」に懐疑心を持ち続けていた。

A beau mentir qui vient de loin.(540)

「もっともらしい嘘は遠くからやってくるものだ」

の格言が示すとおり、旅行者の証言は簡単には信用してもらえず、旅行者の第一の義務は「誠意(Bonne foi)」を見せることであった。作者としてではなく「証人」として文章を書き、さらに「信用性(Crédibilité)」を高めるために、「簡潔な文体」で書くことが「旅行記」にとって重要であった。

ユナンも引用したシュポーの文章であるが、

「レトリックとフィギュール(文体)を拒否することによって、旅行記は『文学』、『フィクション(虚構)』の周辺に身を置くことになった。」(540)⁽³⁾

つまり「文学領域」ではないなにかとして存在するようになったことが示された。

(4) 旅行記の「文学性」について

1) 実務的側面と娯楽的側面

シュポーは

「しかしながら、『旅行記』の作者が正確で役に立つ情報に固執し、『読者の喜び』を無視していたと結論づけるのは間違っている。そこには発見のすばらしさ(Merveilleux)や冒険の不思議さ、そして装丁の楽しさなどもあるのだから」(541)

と旅行記の「文学性」に触れる。

前述した旅行記の両義性を「実務的側面」と「娯楽的側面」と提言し、「旅行

記」は資料的価値を重視しているために「文学」領域から除外されているとしても、「喜び」「楽しみ」が存在するなら、「文学」の役割を担っているのではないかと述べる。

17世紀の「肘椅子の旅(Voyage dans un fauteuil)」の流行に触れ、人々が魅了された要因について、まず(椅子に座ったままであることから)危険を伴うこともなく旅ができるという利点を述べ、さらに「旅行記」がもつ素材の多様性、旅行者による観察のオリジナリティ、冒険の特異性、ノンフィクションである「旅行記」の真実性などをその魅力とする。簡潔な文体こそが、物語に「真実性(Authenticité)」を与えるものとされ、「旅行記」の方向性が明確となった。

「旅行記」の楽しみとは、描写の正確性、冒険への勧誘、真実性(単なる本当の話 Simple vérité)であることが明らかになり、「旅行記」の新たな道が切り拓かれた。つまり「見せる」(Faire voir)、体感させる」(Faire vivre)、「信用させる」(faire vrai)こそが「旅行記」の三原則となった。

19世紀のロマン主義運動のテーマのひとつであったエキゾチズムも「見せる」(Faire voir)、つまり描写の役割から誕生したものであると言及し、「文学分野」への影響を示唆する。

2) 二重の本質(Double nature)について

ユナンの論文においても、検討が続けられているが、「旅行記」と「小説」を隔てるものは、描写と叙述(語り)の役割(比重)である。「旅行記」においては両者が必ず存在し、シュポーはそれを「旅行記」の二重の本質(la double nature)と述べる。地理的情報を多く伝えるための「旅行記」例えば、タベルニエ⁽⁴⁾(Tavernier, Jean-Baptiste, 1605-89)、ベルニエ、シャルダン⁽⁵⁾(Chardin, Jean, 1643-1713)においては特に描写が充実していたため、資料本(Livre de documentation)とも呼ばれるほどである。しかしながら、次第に、その教育的側面(地理的情報を提供すること)は「楽しみ」に打ち消され、旅行記は「冒険記(Récit d'aventures)」へと変化する傾向にあった。つまり主人公(作者)の語りを中心に置かれるようになったのである。旅行家モケ⁽⁶⁾(Mocquet, Jean, 1575-1617)は「正確な町の情報や好奇心をそそる出来事の情報に関心を持たず、私の身の回りに起こったことだけに関心を持つなんてなんで不幸な読者たちだろう」(544)と書き記す。また、彼の *Voyages aventureux du Portugais Fernando Mendez Pinto*(1628)『ポルトガル人フェルナンド・ピントの冒険旅行記』例では、その「真実性」は疑わしいものであるが、どのページにも「冒険」が存在した。

ヴァイオレントな場面があったり、戦いにはいつも商取引が結びついていることなどを、旅行者(voyageur)がその場面を回顧するという手法で語られ、「本当にあったこと」という印象を創出している。

このように自伝的な語りと逸話(Historiette)が「旅行記」という「新ジャンル」をつくり、「文学的価値(Intérêt littéraire)」が見出されるようになった。

このジャンルでは資料的情報は概略のみ掲載され、自伝的な冒険、つまり「旅行記の第一部」を占めるものとは完全に切り離される。そして「体験した出来事のそれぞれ」は逸話として後半で語られる。

資料(ドキュメンテーション)と小説の周辺で、「旅行記」は「本物のようなお話(Histoire véritable)」の領域へと進んだ。その基盤となるのは「伝記的な話」と「本当の新しい情報(La nouvelle vrais)」にある⁽⁷⁾。

シュポーは次に事例としてジェルマン・ムエツト⁽⁸⁾ (Mouette, Germain, 1651-91)の旅行記をあげ、その役割について分析を行っている。

(5) 旅行記の目的の多様性について：ジェルマン・ムエツトの「旅行記」を事例に

1) 政治的利用

何よりも読者を喜ばすことに重点が置かれているが、一方で(現地)で囚われたキリスト教を描くことにより、教会への寄進を促す目的などが読み取れる。「旅行記」はコルベールの重商主義に貢献したこと、さらにはアラビア語に関する情報を掲載したことが、フェズ、モロッコ、タフィレ王国との交渉に役立ったことなどシュポーは「旅行記」の政治的利用について言及している(547)。

2) 文学的利用

ムエツトの「旅行記」の中の『アフリカ便り』*Nouvelles africaines* を例に挙げ、その文学的価値をドラマティックな話(Histoire dramatique)や軽い色物(Galante)、とりわけそのエロティックさにあるとする。その作品の特長は資料的な描写を除外することにあった。つまり『アフリカ便り』は文学的価値のある作品であると言える。さらに、『レヴァント』*Levant* を書いたニコラ・デュ・ロワール(Nicolas du Loir)を挙げ、その旅行記の価値は資料というより、エキゾチズムに彩られた恋愛話にあると言う。要するに旅行記の目的は、学者である読者よりも(町の)小説読者を楽しませることにあった(548)。旅行記が「読者」

を意識しはじめた結果でもある。

(6)「旅行記」に与えられた新しいコンセプトについて

自伝的な旅行記，冒険小説風旅行記，エキゾチック小説風旅行記から，旅は小説でもない，何か違った文学作品を提供することになった。

ルイ 14 世治世におこったヌーヴォーロマン（新小説）⁽⁹⁾の中のひとつの平凡な存在にならないように，旅行記は，わざとらしさのない，真実が書かれた文体にすること，たとえそれが真実（現実）であろうとそのフリだとしても，「報告された事実」というスタイルを持たせることがテーマとなった。旅行者による文章，つまり校正経験不足の文章を選び，文学的スタイルや法則を拒否したことが，（文章，文学の）美的価値観を急激に変化させた。シンプルな表現方法，格調高い文章，自然体で書かれた文体にこそ優越性が認められ，過度な装飾体が好まれなくなった。このような「変化(Transformation)」があったことは重要である。文学作品では表現方法に重点が置かれていた時代，「旅行記」は反文学形式で構成されていたが，その成功により新しい文学の道が切り拓かれたのである(548,549)。

1632 年のレヴァント旅行記の序文には，「真実以外の装飾は要らない」とまで書かれていた。

Voyage de Levant...,1632 ; « advertissement » (non paginé) « ne demande point [...] d'autre ornement que celui de la vérité »

メマニュエル・ダランダ⁽¹⁰⁾ (D'Aranda,Emanuel) は読者に，ある叙述について紹介する。

「長い余談やレトリックを使用することなく，美しく飾り立てることなく，シンプルで素直な叙述が良いのである。そこにこそピトレスクな語りがあるのだから。つまり，そこには生き生きとした語りがあるのだ。たとえば水夫が仲間同士でテンペストや水難について語るように。あるいは戦場の戦士たちが。あるいは羊飼いがその群れにやってきたオオカミを語るように。」⁽¹¹⁾

(7)「日記形式」の旅行記

自然のまま（あるがまま）に書くことや本物を書くことの価値は，再編され

た旅行記よりも、生のままの旅日誌 (journal de route) や手紙を好む風潮を引き起こした。しかしながら資料そのもの(document brut)までもが神聖化されることはなかった。また、「旅行記」には学者と作家との共同作業も見られた。学者連中が声高にいう「素材の質の良さ」だけでは上流階級の要求を満たすのには不十分であったことを示している。かれらはまた、「旅行記」においても表現の楽しさ、卓越さを求めていたのである。さらに、「旅行記」の形式に移すと、「自然さ、素朴さ」や「本物らしさ」がより効果的に表現できる「日記形式」が登場する。「書簡形式」であると、手紙の相手により、制限される要素があるが、「日記形式」であればより自由に書くことができるからである(540,550)。

(8)第2節の総括

第2節では、シュポーによる「旅行記」が文学ジャンルに内包されていく過程について概観した。シュポーは、17世紀において「旅行記」は上流階級のためのお楽しみの文学へと移行したこと、「旅行記」の流行が17世紀後半における文学情勢の変容にも関わっていること、具体的には「プレシオジテ」とよばれる気取りの精神の衰退に関与していると述べている。またエキゾチック小説(Nouvelle exotique)や空想的旅行記(Récit du voyage utopique)、小説的旅行記(Relation romancée)なども古典主義時代の小説に変化を及ぼしたが、結局エキゾチック小説は、大量に出版されたため月並みな作品に埋もれ、さらにアフリカ、トルコを舞台としたエキゾチズム小説は軽いお色気小説(Nouvelle galante)、あるいは、喜劇や悲劇小説の単なる「アバター」と化してしまったと言及している。一方で空想旅行記はフィクションではあるが、叙述方法により現実性が保持された上に、当世批判が込めることのできるジャンルへと進んだと分析する。

シュポーは17世紀に「本当らしい話 histoire véritable」への嗜好があったことを述べ、「旅行」によるものであったと言及する。1660年以降(古典主義時代以降)の小説が「ある現実の表象」に傾倒したこと、同様に、人々がピトレスクなものへと魅了されたこと、冒険記、自伝的な語り、そして簡潔で自然な文体が受容され、好まれたことも「旅行記」による影響が高いと述べる。「旅行記」はまた「回想」や「書簡」においてもその価値が認められると分析する。(553)

以上のように17世紀の文学、とりわけ小説分野に変化をもたらしたものが、

旅行記であったことをシュポーは実証した。簡潔な文章が好まれた背景には、そこに本物的効果が存在したからである。一方で、読者たちは、楽しみも求めたため、フィクションとしての手法も必要であった。つまり、旅行記の重点は、描写から叙述へと変化し、ドキュメンタリーであった旅行記から冒険小説も生まれた。シュポーは旅行記の変遷の構図を完成させたと言えよう。

(9) 考察

描写から叙述（語り）へと移行したこと、換言すれば「旅の主体」＝「書き手」になることは、19世紀ロマン主義作家の旅行記につながる動きである。シュポーは、旅行記がピトレスク（生き生きと）に語られること、描写の代わりにエキゾチズムが語られる、表現されることも、人々に受け入れられた要素とする。すでに、「ピトレスク」や「エキゾチズム」という言葉を連発していることから、19世紀の「旅行記」への影響を故意に示唆していると考えられる。さらには「*récit* 話・語り」を「本当らしく」するため「旅」という枠組みが有効であったなどを述べている。

「旅行記」の定義には複雑な要素が曖昧模糊として存在し、「旅行記」というジャンルは、一定の場所を決めきれず、シュポーの論文のタイトル通り「文学」の周辺に彷徨っていることが結論付けられる。しかしながら、これまで考察したように、シュポーは「旅行記」のジャンルについて「文学」に入れようと様々な「旅行記」の往来を繰り返しておりその研究の深さには学ぶべき点が多い。

「旅行記」のジャンル分けの困難さが十分に露呈された論文である。

次にユナンの論文についての概要を紹介する。ユナンはカナダのトロント大学の教授であり19世紀フランス文学、バルザックを専門としているが、旅行記に関しても造詣の深い研究者である。

第3節

Le Huenen, Roland(1987) *Récit de voyage : l'Entrée en littérature, Etudes littéraires*
「旅行記：文学界への内包」

(1) 科学的言説(*discours scientifique*)と文学的言説(*discours littéraire*)について

ル・ユナンは「旅行記」を「文学」ジャンルに内包（*Entrée*）するにあたり、

次のように言及した。

旅行記はそれぞれが、独自のコードを持ちながら、自立した形式を持つ。

1) Journal (日記) 的ものとして、例えば、モンテーニュの「旅日記」2) 伝記的ものとして、シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』*Mémoire d'outre-Tombe*, 3) 書簡形式によるものとして、ジョルジュ・サンド(Sand, George, 1804-1876)の『旅行者からの手紙』*Lettres d'un voyageur*, 4) 民族学エッセーとして、レヴィ・ストロース(Levi-Strausse, Claude, 1908-2009)の『悲しき熱帯』*Tristes tropiques*の形式に分類される。

以上の分類から明らかにされるのは「旅行記」を既存のジャンルに当てはめることの困難さである。しかしながら、ル・ユナンは「旅行記」に共通する二つの領域が存在するとし、それぞれを、科学的言説(Discours scientifique)と文学的言説(Discours litterarie)と名付けた。

文学がランゲージュ（規律、規則）において権威でない時代、あるいは旅行の主体が「商人、冒険者、船乗り、兵士など」であった時代には「旅行記」は「簡潔な文体」で真実を伝えることが最重要事項であり「科学的言説」と分析される、そして、ルネッサンス以降、「文学」が「楽しみのための効果」を持つてからは、旅行記の「内容」、「形式」に文学的言説が見られるようになる。さらに、19世紀になり、「文学者」＝「旅の主体」になると「文学的言説」はますます強化された。

(2) 叙述の変化

ル・ユナンは、特定のジャンル、つまり「文学ジャンル」に「旅行記」を位置づけようとしているのだが、その理由づけが、当該論文のなかで試みられている。その概略については以下の通りである。

「旅行記」は時代を反映するものであるが、本来（当初）の役割は新しい発見に関する正確な叙述が最重要項目であった。ルネッサンス期になると、娯楽(un effet d'agrément)としての「文学」の流行の影響を受け、実体験を素材としない「旅行記」がもてはやされた。さらに17世紀になると、「旅行記」の「新形式」が誕生する。「新しい情報」が「旅行記」のテーマではなく、旅行者（主体）の感情（心の描写）に中心が置かれることにより「旅行記」に新しい価値が与えられた。

1) スターン(Stern, Laurence, 1713-68)の『センチメンタル・ジャーニー』

この新形式の旅行記の嚆矢としてスターンのセンチメンタル・ジャーニーを挙げる。場所の説明はほとんどなく、主人公ヨリックの感情のままに旅は繰り広げられ、目的地に着くわけでもなく未完の旅である。しかし反響は大きかった。

- 2) ルイ 14 世治世のフランスでは「肘掛椅子にのった旅」とよばれた「旅物語」（実際の旅はない）が宮廷で流行していた。ル・ユナンは文学のフィナリテ（目的）と旅行記のフィナリテの差がほとんどなくなったことを指摘し、「旅行記」が文学へと歩み寄ったことを確認する。一方で、哲学の時代、つまり 18 世紀の啓蒙時代になると、科学的に立証された事象が好まれるようになったこと、読者層は小説の読者と知識人に広がりを見せたことを述べる。「旅行記」の両義性に関して、「小説（フィクション）」との比較を行う。

3) 両義性について

表 3-1 「旅行記」の両義性：l'ordre du descriptive と l'ordre du narratif

| | フィクション (小説) | 旅行記 (科学的ディスクール) | 旅行記 (文学的ディスクール) |
|----|----------------|--------------------|--------------------|
| 描写 | × (飾りとしてのみ) | ○ 重要 (学術的) | ○ |
| 叙述 | ○ | △ | ○ (特にロマン主義作家以降) |

Le Huenen(1987)の論文より筆者作成

叙述(Narration)と描写(Description)の重点の置き方が旅行記を、「冒険記」へと導く。「場所」から「人物」、つまり「旅の主体」に光があてられるようになったが、本格的なものはロマン主義時代の作品を待たなければならない。17 世紀、旅行記における「旅の主体」による「主観性」は国家権力と教会権力により禁止され、「旅行記」はもっぱら権力のプロバガンダに使われた。国家政策としての「旅行記」が大量に生産された。

旅行記の役割とはフランス人に危険を冒すスリル感という喜びを与え、英国、オランダとの戦争を煽るためであった。旅行記の潜在力が読者に大胆不敵な冒険者とはいかなるものかを教え、同時に未来の旅行者に向けて多くの科学的な情報を与えた。つまり、「旅行記」は時代の価値観やイデオロギーに影響され存

在であった。

(3) 19 世紀の「旅行記」

19 世紀のロマン主義の時代になると「旅」そのものが重要になる。「旅行記」はこれまで見てきたような「旅から得られた結果」とか「結論」のひとつではなく、まず「旅」そのものが第一条件となった。たとえばシャトーブリアンの旅行記『パリからエルサレムへの旅』では、小説『殉教者』*Martyres* のための「イメージ」を求めて旅に出たことが明らかにされている。

さらに、「シャトーブリアンの目的とフィナリテを旅に位置づけたのは文学である、同時に旅人という主体がますます「作家」という実体と混同していくのである」(51)⁽¹²⁾と言及する。

シュポーは旅の主体は航海者、地理学者、宣教師、商人、大使、兵士、国の役人であり、作家以外の活動領域に従事している人々であったが、19 世紀には作家が「旅の主体」となったと言及する。

19 世紀を通し、フランスでは、旅の思い出を題材として自分たちの作品を書かない作家ほとんどいなかった。特に、ロマン主義時代、ロマン主義的流行は、オリエント、イタリア、スペインの旅への熱狂を生んだ(51)⁽¹³⁾。

このように、文学者による「旅行記」の生産空間への介入が、旅行記自体の価値の本質となり、その空間構造を深層から変えた。以前のように、政治や宗教からの影響を受けることなく作家(旅の主体)が自立して書くようになった。しかしながら、「旅行記」のプライオリティーが「初めてを語る」ことに変化はない。シャトーブリアンも、「旅行者は歴史家である、見たこと、聞いたことを忠実に語らなければならない」と「旅行者の役割」について断言する⁽¹⁴⁾。

旅の主体が「旅行記」のトピックとなり、「場所」は完全に隠されるわけではないが、表象化される。表象が旅行記の新しいエクリチュールの存在条件となり、「旅行記」に特有シーニュ（徴）が浮き彫りにされる。シャトーブリアンは現実に知覚した風景よりも、表象・シーニュを重要視した⁽¹⁵⁾。

(4) 考察（第 1 節と第 2 節）

以上の 2 つの論文が「旅行記」に関する古典的研究と言われる作品である。

シュポー、ル・ユナンは「旅行記」のジャンルが「文学領域」にどのように近づいて来たのか、あるいは入ってきたのかについて、まず17世紀の文学の潮流であった「プレシオジテ」、「サロン文化」にもたらした影響、またその反対に「貴族趣味」から「旅行記」が受けた影響について検討している。さらにはルイ14世治世であった17世紀のフランスの社会、つまり絶対王政、植民地拡大政策、コルベールの重商主義、教会勢力などの特殊要因が見られる社会であるが、このフランス史との関連において、「旅行記」の「娯楽的側面」「科学的貢献」「政治的側面」「宗教的貢献」についても、大量の旅行記分析により研究を行っている。

ル・ユナンは論文のタイトルが示すように、「旅行記」を「文学ジャンル」に入れているが、科学的言説の「旅行記」において、地理的な情報が不可欠であった「旅行記」が、19世紀のシャトーブリアンの作品『パリからエルサレムへの旅』の中では、「旅行記」にも関わらず、地理的情報を与えず、ただ町の名前（スパルタ）だけが記述されるという例をあげ、表象としての町があるシーニュを持つことを言及する。シャトーブリアンは長い序文をあげ、参照した多くの文献に触れる。シャトーブリアンの作品の読者たちは「旅行記の作家」とおそらく知識を共有しており、表象としての地名を記すだけでそのシーニュを共感できたのであろう。その間テクスト性により、旅行記の「文学領域」への「Entrée（内包）」が強化されたのではないだろうか。

本論文において、「19世紀」の「旅行記」を分析対象とするが、該当年代の旅行記は、すでに著名な文学者であったシャトーブリアン、フロベール、スタンダールらのものであることから、さらには、シュポーやル・ユナンの論文内で十分検討されたように、「文学ジャンル」に振り分けられる旅行記であると考えられる。「書き手」でありかつ「旅の主体」である彼らの「旅行記」は、彼らの「旅」に対する考え方や姿勢を知るための重要な資料となりうると確信し研究を行った。

第4節 ユモリスティック旅行記について

(1) サンスー(Sangsue, Daniel) の *Le récit de voyage humoristique (XVIIe-XIXe siècles)* の概要

前述したシュポーとル・ユナンの論文内でも明らかにされているが、「旅行記」

は「科学的言説」が中心であった「旅行記」の作者である「旅の主体」は、航海者、探検者などであったが、「旅行記」に娯楽的要素が求められる時代になると、「旅行記」は「文学的言説」に重点が置かれるようになり、文学者が「旅の主体」へと変化した。文章の書き手がアマチュアから専門家変わったことにより、「旅行記」における文体（スタイル）が洗練され、旅行記は文学性を帯び、言い換えればフィクション性を帯びたと言える。そこには、「作家」が巧妙に仕組んだテクニクも存在する。

サンスー(Sangsue Daniel)⁽¹⁶⁾は、Le récit de voyage humoristique (XVIIe-XIXe siècles)(2001)の中で、旅行記の分類に関して、より緻密な分類の必要性を唱え、「ユモリスティックな旅（皮肉に満ちた旅）」Voyage humoristique という分類を提言した。17世紀の『シャペルとバシヨーモンの旅』*Voyage en Encausse* から19世紀のトッフュール(Töpffer, Rodolphe, 1799-1846)の旅を対象として、旅の主体の感情(sentiments)が表現される「ユモリスティックな旅」について興味深い研究を行っている。

まず「ユモリスティックな旅」というタイトルであるが、その命名の理由として、19世紀、多くの旅行記のタイトルに humoristique が使用されていること⁽¹⁷⁾、ユモリスティック旅行記は、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』の影響を受けていること、つまり英語ユーモア⁽¹⁸⁾のまなざしで書かれていることの2点をあげる。さらにそれまでの旅を伝統的な旅(Le voyage traditionnel)と呼び、「ユモリスティックな旅」との比較を行う。

1) 伝統的な旅について

- ① 伝統的な旅行とは、知るため、発見するため、学ぶための旅であり、旅行記は科学的言説であった。民俗学、人類学、哲学、植物学、動物学に貢献する
- ② 伝統的な旅行とは中世の巡礼の旅や 19 世紀のシャトーブリアンやラマルチーヌの旅なども指す

一方、ユモリスティックな旅は宗教上の理由からでも知識を得るという満足感を味わうためではない。探検家と違いユモリスティック旅行者は遠い国やエキゾチックな場所を求めない。フランスの地方やドイツやスイスとの国境地帯を旅するだけである。

2) 旅する都市について

- ① 伝統的な旅行者はパリやローマといった文化的大都市を選ぶ
- ② ユモリスティックな旅行者はマージナルな場所を選ぶ

3) 旅の方法について

- ① 伝統的な旅行者は道に沿ってまっすぐに進む。デカルト主義哲学（合理主義者哲学）が唱えるように、まっすぐな道を選ぶ（無駄のない行程を選ぶ）。
- ② ユモリスティックな旅行者は、通常の方法とは外れ、気ままで、偶発的で、ジグザクに進むことや遠回りをするをいとわない。

ユモリスティックな旅行者はユーモア（皮肉）のヴィジョンを洗練させ、喜んで皮肉る。まじめな旅行者は格好のターゲットとなった。

サンスーは「ユモリスティックな旅」の創始者としてモンテーニュの名前をあげる。しかしながら、これまでの旅とは違うコンセプトの「旅」の存在を提示するものの、実行するには至らなかったとして、1656年に書かれ、1663年にケルンで出版されたシャペルとバシヨームンの『アンコース旅行』Chapelle et Bachaumont, *Voyage a Encausse* をユモリスティックな旅行のはじめと定義づけた。

表 3-2 シャペルとバシヨームンの『アンコース旅行』

| | |
|----|--|
| 形式 | 60 ページの書簡形式。2 人の兄弟に向けて書かれる。散文や詩が混在。規則的でない長さの 10 音節詩なども混在。 |
| 内容 | 様々なテーマが軽快に語られる。訪れた町で彼らは食事に招待されるが、ターブル・ドット（招待者）と友人との会話が「旅行記」の中核をなし、町の様子や車窓の風景の描写に関してはほとんど存在しない。あざけり、からかいも多いが、時には重い話題も挿入される。 |

Samgsue (2001), および『アンコース旅行記』から筆者作成

かれらの旅行記の模倣例として、ラ・フォンテーヌ⁽¹⁹⁾(la Fontaine de, Jean, 1621-1695) の『パリからリムーザンへの旅』*La relation d'un voyage de Paris au Limousin* やルフラン・ド・ポンピニャン(Lefranc de Pompignan, Jean-Jacques, 1715-1790)の『ラングドックとプロヴァンス旅行』*Le voyage de Langue d'Oc et de Provence*(1740)などを挙げている。いずれも町の景観や風景描写に重点を置くことなく、旅行者のユーモア（ブラックユーモア）によって

「旅」の出来事が語られている。

ボワイエ(2000=2006)もシャペルとバシヨームンの旅行記の重要性を記述しているが、かれの視点は、ルイ 14 世の時代にパリを離れたという彼らの行為の特異性である。

「当時は宮廷から遠ざかることはどんなことでも流刑のように感じられた。旅行で重要なことは唯一、宮廷を離れたこと以外にはなかった」(Boyer :2000 =2006:96)

「旅行記」の内容の斬新さについてはなにも記述しないが、以後の作品への影響の大きさについては、

「1 世紀以上にもわたって (17 世紀と 18 世紀)、この軽妙な旅行記は再版され、続編まで出された (ルフラン・ド・ポンピニャンの手により)」

と、サンスーと同様の例を掲載している。

(2) テーヌの『ピレネ旅行記』

サンスーの論文内では検討されていなかったが、1853 年に『ピレネ旅行記』*Voyage aux Pyrénées* を上梓したテーヌも、アンコースの町に入るとともに、シャペルとバシヨームンの旅行記に触れる。この「旅行記」の影響の大きさを体感するために、その一部を引用する。

「町を迂回すると、アンコースの町は指呼の間にある。シャペールとバシヨームンが胃病を治すためにこの町にきていた。平素から人一倍胃袋を酷使しているのだから、これもやむをえないところだ。かれらは旅行記を書いているが、文体はかれらの日常生活そのまま、まことにざつくばらん、屈託のないものだ。かれらは昼間少しずつ旅を続けて、その間に酒を飲んだり話し合ったりする。しかも、あちこちに在る友人の宅を訪ねてごちそうになるかと思えば、貴婦人に言い寄ったり、土地の女たちを巧みに丸め込んだりする。あるいはまた、健康を祝ってアプサン酒を引っかけ、浴びるほどマスカット酒を飲んで、思ったことを韻文や散文に書きつづる。これでよく胃袋の養生になることだと思われるが、自他ともに許す当代のエピキュリアンなのだからしかたがない。栄光などまったく念頭に

ない、淡泊で気さくな詩人で、目に見、耳に聞くものはなんでも吸収し、ひたすら気慰みに筆を運ぶといったあんばいだ」(杉, 1973 :300)

さらに、彼らの旅行記の中の「詩」の部分や彼らの視点が描かれた文章の引用を行う。そして、現代との旅の比較を次のように述べる。

「当時旅人は途中やたらと足を止めては、勝手気ままにみだらな冗談口をたたいたものだ。当時のフランス人は、現代人の好尚に合った、鉄砲玉よろしくのどんぼ返りや代訴人の旅のような性急な旅行はしなかった。ポワティエに行くのにも5日もかけ、夕方日が沈むと体を休めたものだ。当時は物質的にも、よき生活の可能だった最後の時代であり、また、オランダの絵画に見られるように、裕福なブルジョワジイ繁栄の最後を飾る時代でもあった。そのよき時代もすでに過去のものとなってしまった。(中略) こんにち、ブルジョワたちは哲学者然として乙にすましているが、実は野心に満ちた実業家なのだ。嘆かわしいといわなければならない」(同書:305)

『ピレネ旅行記』の文章から、テーヌは、1850年代のフランスを、「(産業も科学も) 進んだ現代社会」と意識していると思われる箇所を相当数見つけることができる。彼はそんな社会に対し「他所」に対する「優越感」と「変貌していくフランス社会」への「嘆き」という混沌とした感情を抱いていることが想像できる。そんな感情を持ちながら、旅先で出会った旅人ツーリスト達を観察し、『ピレネ旅行記』中の「社交界」の章で分類を試みるが、それはあたかも、シャペルとバショームンのようなユモリスティックな視点による分類であった。テーヌは、かなりユモリスティックに、あるいはサティリックな描写することがあるが、

「ピレネ山脈の山々には二、三壮大な感じのあるものもありましたが、ぼくがいたいのは、そんな山々ではなくて、名もないその辺の山や川とか、道の辺の農家の日ざしとか、平野のかなたにそびえる鐘楼とか、そういった触目の景の思い出なのです」(同書 : 387)

パリに住む都会人のロマン主義的なまなざしを感じる証言であり、サティリックな表現の矛先はピレネでも大きな町や「社交界の人々」であった。

シャペルとバショームの「旅行記」とテーヌの「旅行記」には、200年近い隔たりがあるが、テーヌがその「旅行記」の「文学的価値」を認め引用をしたのであろう。その文学的価値とはやはり、「ユモリスティックな視点」であったと考える。第7章で論じるフロベールも「シャペルとバショームの旅」に影響を受けていたことがブルターニュ旅行で明らかにされている。

(3) スターンの『センチメンタル・ジャーニー』について

サンスーは次に、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』がもたらした影響について論じる。以下はその概要である。

18世紀末と19世紀全体の「旅行記」の嚆矢となる作品がスターンの『センチメンタル・ジャーニー』である。スーペル(Serge Soupel)⁽²⁰⁾はこの作品について「アンチ旅行記」と述べるが、スターン自身も、これまでの旅行記とは全く異なるものだと言明している。スターンは左右、目もくれずひたすらまっすぐに進む旅行者(Voyageur)を皮肉る。スーペルはこの皮肉を嚆矢として旅行者(Voyageur)を、無為な旅行者、好奇心の強い旅行者、嘘つき旅行者、厚顔な旅行者、虚栄心のかたまりの旅行者、退屈する旅行者、必要から旅に出る旅行者等の分類分けにつなげたのではないかとする⁽²¹⁾。そして、語り手スターンはセンチメンタル旅行者に分類される。スターンの旅、イギリスからフランス経由でのイタリアの旅は、これまで英国人が行ってきたグランド・ツアーのような伝統的な旅ではない。スターンは建造物について学びたいとか、見たいとかの希望はない。彼の旅行記には建築物の描写はまったく見られない。それゆえ、「アンチ旅行記」であるとみなされるのである。スターンの旅のモチベーションは感情(sentimental)であり、恋愛感情にほかならない。

女性への感情が、旅人(ヨリック)を町に留まらせ、あるいは次の町に向かわせる。乗る予定ではなかった馬車に乗ることもある。目的地はイタリアであるが、到着する前にこの旅行記は中断してしまう。その理由については、偶然なものなのか、スターンの身に起きたデリケートな問題(女性問題?)によるものなのか知る由もない。しかしながら、ヨリックの恋愛感情だけでこの旅行記は成り立っているものではなく、そこには乞食となった僧侶、せむし男、没落貴族なども登場し、かれらに対する感情も描かれている。

サンスーはスターンの彼らに対する「まなざし」に注目し、この感情(sentiments)こそが、スターンの「新しいところ・特長」とであるとみなす。さら

に、この感情がメランコリーへと結びつき「センチメンタル・ジャーニー」と表現されるのだが、これこそが、ロマン主義作家に受け入れられた要素とする。そして、ここにこそシャペルとバショームンの作品との違いがあると言及する。

ユーモア(l'humour)について、フランス語 *humeur* の本来の意味、諧謔(かいぎゃく)的冗談、冗談(皮肉好き)の意味であることを知る必要がある。なぜなら、ヨリックは、英語でいうブラックユーモアに身を委ねている旅行者なのである。

「パリで小人が多いのは子供を作る場所が不足しているから」と記述してみたり、最終章の後に序章をつけたりと、人を驚かすユーモアがある。語り手であるヨリックという名前にしても『ハムレット』の道化師に対する敬意からの命名であった。(Sangsue,2001:1148)

(4) グザヴィエ・ド・メーストル(Xavier de Maistre,1763-1852)の作品『私の部屋周遊記』 *Voyage autour de ma chambre*(1794)

サンズーはつぎに、グザヴィエ・ド・メーストルの作品 *voyage autour de ma chambre*(1794)⁽²²⁾をあげる。

前述のシャペルとバショームンの旅行記が、グランド・ツアーの人々の旅した距離を大幅に縮めフランスだけになったことを示したが(これもユーモアである)、メーストルは更に旅行行程を短縮した。これはクック隊長の『世界一周旅行記』やグランド・ツアーの旅とは正反対の旅である。タイトルが示すように、自分の部屋の周遊記である、建造物や町の描写のかわりに、椅子、ベッド、書斎、本棚、その中に並べられた本などが描写される。最後に椅子から落ちるということが旅の思いがけない出来事になる(それ以上の旅が続けられなくなり、旅が短くなってしまった)。

メーストルは絵画についての描写を「遠足(Excursion)」と呼ぶ。旅行者はただ身体的に部屋を旅しているわけではなく、絵画を見るとき、語るときの「思考」や「夢想」によっても旅は続けられることを示す。他のユモリスティックな旅行者同様、彼もまた古典的旅行(*Voyage classique*)が好んだ合理的な旅の仕方を拒否する。旅行者は感情(*humeurs*)に導かれることを示す。

『センチメンタル・ジャーニー』も『私の部屋周遊記』も出版されると成功を収め、イミテーションがはびこったとサンズーは述べているが、「旅」の目的・

意義について再考させられる作品である。

(5) 旅行記の新分類：ユモリスティック旅行記の下位分類

サンズーは彼らの旅行記から影響を受けた作品に共通することは「感情 (sentimental)」が中心の旅であると述べる。さらにその「旅」を2つに分類した。

1) 旅の空間を縮小したもの

Voyage autour de ma chambre (1794) 『私の部屋周遊記』メーストル

Voyage autour de mon jardin (1845) 『私の庭周遊記』アルフォンス・カール

Voyage hors barrière des Caprices et zigzag de Gautier (1845)

『ゴーチエの気まぐれ旅行記』ゴーティエ

Voyage du numéro 43 de la rue Saint-Georges au numéro 1 de la rue Lafitte (1852-1856)

『サン・ジョルジュ街43番地からラフィット兄弟街1番地までの旅』
ゴンクール兄弟

2) 地理的制限のないもの、無限の旅

Un autre monde, le voyage illustré de Grandville Granville (1852)

『別世界、グランヴィルの挿絵入り旅行記』グランヴィル⁽²³⁾

Le voyage où il vous plaira T.Johannot, A.Musset, P-J.Stahl (1852)

『あなたの好きな旅』T.ジョアノ, A.ミュッセ, P-J.スタール

これまで見てきたように、ユモリスティックな旅行記作家たちは、「伝統的な旅 (Voyage classique)」を皮肉ることが対象であった。次に、サンズーは「旅」、「旅行」そのものではなく、「旅の主体」が皮肉られる現象、あるいは「ツーリスト (Touriste)」について観察を行う。

(6) 新しい旅の主体：ツーリスト

19世紀ユモリスティックな旅に関して、珍しい動物「ツーリスト」の発展に関する考察が不可欠なものとする。なぜならその動物が「旅行」の飛躍的な伸びに関係するからである(1153)とサンズーは述べる。

Touriste とは本来、ヨーロッパを旅するイギリス人旅行者を示し、次に「楽しみ」のために動き回るすべての旅行者、さらには旅するために旅する旅行者、換言すれば「何の判断もできないままに旅行する人(1153)」を意味するようになった。

当然、ユモリスティックな旅行は、ツーリストを恰好の皮肉の対象とするが、同時にヴォワイヤジュールの奇癖（マニアックな旅行方法）や 19 世紀の交通手段の難点を対象とした文学作品も登場する(1153)。

さらには 1830 年から 1840 年にかけて流行した physiologie（生理学）という風刺文学のなかで、Touriste というカリカチュア化された職業があたかも科学的なものとして説明されている。また 1814 年から 1830 年だけでも 1000 以上の旅行記が出版された(1153)こともあり、ユモリスティックな旅(le voyage humoristique)の対象はこの「工業化された文学(littérature industrielle)」にも向けられた。同時に「皮肉」の対象は新しい手段である鉄道にも向けられた(1153)。

ユルバン(2002)は 19 世紀中葉における「touriste か voyageur か」という主体の議論について、「あたかもドレフュス事件⁽²⁴⁾で世論が 2 派に分断したように」意見が分かれたと述べているが、それは touriste が社会的に影響を及ぼすほどその数を増やしていたことを示すものであろう。

(7) ^{フィジオロジー}生理学⁽²⁵⁾と Touriste

ベンヤミンも『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』(1938)の「Ⅱ 遊民」パノラマ文学において「生理学」について次のように述べる。

「中でも愛好されたのは、『生理学』と銘打たれたポケット版の、じみな小冊子の数々だったが、これらの小冊子が追求している対象は、市場を実地に見る人間が会う諸類型であって、大道の行商人からオペラ座のロビーにたむろする伊達男にいたるまで、パリの生活をいろどる人物で生理学者の眼をのがれた者は、ひとりもいなかった。」(野村編訳, 1994 :172)

つまり、「ツーリスト」もまた時代を象徴する対象として、あるいはパリの生活風景を象徴するものとして「生理学」の格好の対象となったのであろう。さらに、

「かれらはことごとく素描された。このジャンルの絶頂期は、40 年代の初めにあ

たる。当時のジャーナリストはこのジャンルで腕をみがいたのであり、ボードレールの世代はみなこれを通過してきている」(idem:172)

と続ける。1841年に76冊が刊行されたのち、このジャンルは衰退に向かい、市民王政の消滅とともに消え去ったことから、「プチ・ブルジョワ」的なジャンルとみなされる。またベンヤミンはエドゥアルト・フックス(Fuchs, Eduard 1870-1940 政治風刺をしたジャーナリスト、カリカチュア研究で知られる)の漫画史の研究から、「生理学ものの発端にはいわゆる9月法令——1836年の検閲強化措置——があること」を指摘する(idem:172)。この法令により、風刺の訓練をつんだ有能な芸術家(画家、作家)たちの一団は、政治の領域から一挙に駆逐されたと結論付けられている。

* (7)におけるベンヤミンの引用文については、『ベンヤミン・コレクション 4 批評の瞬間』のp.210にも見られる。

以下アロワ(Alhoy, Maurice)⁽²⁶⁾とボーヴォワール(Roger de Beauvoir, 1806-66)による2つの生理学の作品を挙げるが、それらを参照すると、とりわけ、ボーヴォワールが『フランス人の自画像』*Les Français peints par eux-même*の中で執筆した「ツーリスト」は、政治家を直接名指しすることはないが、「ツーリスト」という媒体を通して政治風刺あるいは社会風刺をしているように読み取れる。旅行主体としてのツーリストの風刺ではあるが、その奥にはツーリストという富裕層階級を風刺しているのであろう。

1) アロワ『旅行者の生理学』*Physiologie du voyageur*(1841)ドーミエの挿絵入り「ツーリストとは鹿のような足を持ち、カササギのようにおしゃべりで、サルのように物まね好きな生物種である」と断定し、さらに皮肉を込めツーリストの下層化分類を試みる。

- ・ 芸術家ツーリスト(Le touriste artiste)：毎年5月になるとヨーロッパの各地にクロッキーを描きに出かけるが、結局いつも「来年、また来よう」と言って描かないツーリスト
- ・ 教育関係ツーリスト(Le touriste universitaire)：公共教育の代表、相互学校の子供の様子を見に行くという口実の下、ぶどうの収穫の様子を見に行く
- ・ おしゃべりツーリスト(Le touriste causeur)：いつも同じことをしゃべる

ので近くには聞いてくれる人がいなくなり、話を聞いてもらうためによそに行くツーリスト

- ・ きまぐれツーリスト(Le touriste humorique)：家より良い場所はないと思いつながら旅をするツーリスト。旅の理由も行き先もわからずに旅立つ。いたるところで文句を言う。
- ・ 嘆き悲しむツーリスト(Le touriste pleureur)：鉄道や、道路建設のために古い建物が破壊されるのを見ては嘆き悲しむツーリスト。一方でその現場をあえて旅する「嘆き悲しむ」ことが好きなツーリストでもある。
- ・ これまでの習慣を追放するツーリスト(Le touriste chasseur)：アレクサンドル・デュマのように、これまでの料理法を覆すツーリスト。ビフテキの代わりに虎を食べよう、つまりこれまでの風習を変えようとするツーリスト
- ・ 論客ツーリスト(Le touriste controversiste)：メリメ（歴史建造物視察官でもあった作家）を例に、どんなものにも、大げさな歴史的叙述をつけるツーリスト
- ・ 道楽ツーリスト(Le touriste viveur)
- ・ 人道的ツーリスト(Le touriste humanitaire)：あれば必ず最初に牢獄を見学したいツーリスト
- ・ 物乞いツーリスト(Le touriste mendiant)：旅の思い出として必ずなにかをねだるツーリスト
- ・ 騎士ツーリスト(Le touriste du Devoir)：「なぜ決闘でわれわれは殺しあわなければならないのか」と自問しながら喧嘩を挑むツーリスト

以上のようにツーリストを分類するが、アイロニーの文章であり、当時の世相を理解しないと読み取れない文章ではある。アロワは Touriste の章の最後に、もっと書きたいのだが、書くスペースがないので、後は読者に任せるとして次の章へと話題を変える。

2) ボーヴォワール著 『フランス人の自画像』 *Les Français peints par eux-même*

ツーリストをひとつの種族(race)と見なす。種族を分類する前に、フランス人ツーリストとは何かを語る。ボーヴォワールによると、ツーリストたちは、上流階級の一部を構成する。とりわけフランスにおいてはこの一族（人種）がフランス社会の多様性を示すひとつである。ツーリストはさまえるユダヤ人がいたように昔から存在し永遠に存在する。われわれは Voyageur として生まれ、ツ

ーリストになる (On naquit voyageur, on devient touriste). たとえば、動乱や革命など、数えきれないほどの事件によって人々は祖国から遠方に追いやられてきた。多くの哲学者もツーリストとなり祖国を出た。一方で、退屈から祖国を出るものもいた。フランスではツーリストは無数に分類できる種族なのである。その一例として、

- ・ 金持ツーリスト (Le touriste riche) : たくさんの国を旅して、「まあ、お選びください」と商品の見本を語るように国を説明するツーリスト。あらゆる所で最高級ホテル、レストランを利用する。訪問国の高官を知っているなど。
- ・ 貧乏ツーリスト (Le touriste pauvre) : いつも出費について考えているツーリスト。支払いのときは必ず大騒ぎをする。寝袋とイギリス製の皮のカバン、時計、傘だけを持ち歩くなど。
- ・ 破産ツーリスト (Le touriste ruiné) : 流行の品々やおしゃれな人を嫌う。
- ・ 政治家ツーリスト (Le touriste politique)
- ・ ギャンブラーツーリスト (Le touriste joueur)
- ・ 文学ツーリスト (Le touriste littéraire) : 旅行記を書いて出版社に儲けさせてもらおうとたくらむツーリスト

「貧乏」「破産」とあるが、これはアイロニー表現であり、いずれも「金持ちツーリスト」である。ボーヴォワールは、未開の島や探検すべきところはもはやない。われわれの世紀にはもはや発明などない。新しい世界や新しい海洋を発見することはない。発見ではなくて、訪問し、その場所について明らかにすることが必要とされている時代であるとすでに「発見の旅」が終了していると言及する。ボーヴォワールによれば、1840年にはもはや voyageur は存在していないと言えよう。

第5節 サンサーが示す19世紀ユモリスティックな旅についての事例

(1) スタンダールの『ある旅行者の手記』 *Mémoires d'un touriste* (1838)

この作品は、「小説」というスタイルをとりながら、スタンダールの自伝的旅行記といわれている。「ツーリスト」という名詞が、スタンダールという作家によってタイトルに用いられたことが、まず画期的な事象であった。同時に彼のユモリスティックな姿勢が顕示される。表にあるように、英国人を示す名詞を

フランス人に使用することや、有閑階級であるべき階層にもかかわらず、主人公のツーリストは、「外交員」であったことがユモリスティックな対象とされるが、単なる「英語マニア」のしたこと、あるいはスタンダールのスノビズムだとも言われている (Boyer, 2000, Urbain, 2002)。スタンダールはサンサーが表現する「伝統的な旅」のやり方を拒否していることも明らかである。(たとえば、歴史的建造物に興味を示さないなど)。一方でサンサーが示した通り、スタンダールがツーリストの単語を選んだ時代には、その後に含蓄される否定的な意味合いがないことを考慮すると、Voyageur とは違う、より近代的な「旅人」と考えるべきなのであろうか。しかしながら、Voyageur ではない時点ですでにその主体はツーリストと考えるなら、スタンダールはやはりツーリストだったのではないか。スタンダールの旅については第 6 章にて詳細に論ずる。

表 3-3 スタンダールの『ある旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste*(1838)

| 事項 | 対象 | ユモリスティックな要因 |
|------|---|---|
| タイトル | <i>Mémoires d'un touriste</i> | Touriste は英国人，有閑人を指す言葉に対し主人公はフランス人 |
| 主人公 | Marchand de fer 鉄の商人 (commis-voyageur 外交員) | Anti-voyageur として認識された外交員が主人公 * 風景も見ることなくひたすら仕事のために移動する人と批判されていた |
| 事象 | 大袈裟な言い回しはしない 批判はしない | 小さな出来事を詳細に語る 盗難も，田舎の風習もユーモアとしてとらえる |
| 描写 | 建造物 | 描写しない 歴史家メリメのような歴史的叙述はしない |
| 旅の仕方 | Philippe.L | 気ままな旅，計画性はない |

筆者作成

(2) トッフェールの『ジグザグ旅行記』 *Voyage en zigzag*(1840)

つぎにトッフェールの属性であるが、かれは明らかに「ツーリスト」を意識している。服装から旅の仕方に至るまでが彼の関心の対象、からかいの対象となっている。しかしながら、トッフェール自身もまた、*Voyageur* とは言えないのではないだろうか。現在でも *Touriste* の定義が確立しているわけではない。しかし、辞書の定義、とくに 19 世紀ラルースの定義に書かれている「ルソーの旅を最初のツーリストの旅とする」から演繹的に導くと、トッフェールは *Touriste* そのものである。なぜなら、彼も、伝統的な旅とは異なり、ルソーのように自然を楽しみながら、ふらふらと歩くことを「楽しみ」として好んだからである。トッフェールも、ルソー同様にスイス人であることも影響しているかもしれない。トッフェールがジグザグ旅行記を書いた 1840 年には、まだラルースにおいて、「*touriste*」の項目がない時代であるが、彼がツーリストをその「行動」の特異さで攻撃したのにもかかわらず、トッフェール自身も *Touriste* であつたと考える。(表 3-4)

表 3-4 トッフェールの『ジグザグ旅行記』 *Voyage en zigzag*(1840)

| | ユモリスティック 対象 | ユモリスティックな視点 |
|--------------|-------------------------------|---|
| タイトル | ジグザグ旅行記 | <p>単語：speculation への皮肉</p> <p>1) Speculation：投機</p> <p>2) Speculation：目的地までの最短距離を見積もること（合理的な旅）</p> <p>1),2)とも 19 世紀中葉，実業家が夢中になっていた．</p> <p>19 世紀のスイス社会のツーリズムの産業的飛躍に対する懐疑心</p> |
| Touriste の分類 | Touriste (特にイギリス人ツーリストが対象) | <p>レインコートを着る touriste</p> <p>藁の上の touriste</p> <p>激昂する touriste</p> <p>自分のいる空間，場所について何も理解していないが，とにかく感動する touriste</p> <p>便利な方法を好む touriste</p> <p>ピトレスクを連発する touriste</p> |
| | 宿屋の主人 | 金銭的な食欲さ |

筆者作成

(3)考察

言葉の意味は，時代の変遷とともに変化することが多い．Voyageur と Touriste の定義づけは相変わらず困難を伴うが，サンスーの論文を知ることにより，「ユモリスティックな旅行記」を分析対象とすることによって，旅の「主体」の変化も明らかにできる可能性を見出した価値は大きい．

サンスーは当論文の中で，上記 2 人以外の「旅行記」におけるユモリスティック，つまり皮肉の対象を明らかにしている．19 世紀における Touriste の存在を旅あるいは社会の重要な要因とみなし，具体的にどのように表現されていた

のか、あるいは、どのように見られていたのについて演劇作品にいたるまで様々な例を示している。しかしながら、「皮肉る主体」については、「旅行記」の著者を示すだけであり、著者が *Voyageur* なのか *Touriste* なのかについては何も語らない。この点はこれからの研究課題としたい。

また、サンスーは、ユモリスティックな旅の嚆矢として英国人であるがスターンのセンチメンタル・ジャーニーを論じている。主人公ヨリックが旅するのはフランスであったことは重要である。筆者は近代旅行記の嚆矢として、あるいはル・ユナンの文学的言説の旅行記の嚆矢としても定義できるのではないかと考える。この旅行記により、「旅」の主体の内面、あるいは「旅」の目的地を決定するのは「主体」自身であることが明らかになった。つまり、スターンの作品以後、旅行記を分析することにより「主体」と「旅」との関係を見出すことが可能になったと考える。さらに、「旅の主体（旅人）」にユモリスティックなまなざしが向けられた時から *Voyageur* ではない別の形態の「旅の主体（旅人）」が出現したと考えるべきである。

【補注】

(1)文学者。宮廷からの信頼が厚く、リシュリュー枢機卿により開設したばかりのフランス学士院に招待された。

(2)旅行家、医者、哲学者。モンゴル旅行記を残した。

(3)原文

Par ce refus de la rhétorique et des figures de l'éloquence, le récit de voyage se place résolument en marge de la littérature et de ses mensonges(Chupeau,1977 :540).

(4)パリ生まれ、モスクワで死亡。Voyageur (旅行家)であり、インド貿易のパイオニア

(5)旅行家、作家。とくにペルシャ、オリエント旅行記は有名

(6)アンリ 4 世に直訴し、旅の許可を得た。11 年間で 5 回の大旅行をした。サン・マロを出発し西アフリカ諸島を回り帰国後、ブラジル、ギアナ、モザンビーク、最後にはパレスチナへとオリエント旅行も経験した。

(7)原文

En marge de la documentation et du roman, la relation entre donc dans le champ de l'« histoire véritable » et trouve sa raison d'être principale dans l'agrément du récit autobiographique et de la nouvelle vraie(Chupeau,1977 :547).

(8)ジェルマン・ムエット(1651-1691 ?)パリ郊外ボネールで生まれる。作家。1863 年に刊行された自伝的旅行記 *Relation de la captivité du Sr. Mouette dans les royaumes de Fez et de Maroc, où il a demeuré pendant onze ans* 『ムエット氏の 11 年間に渡るフェズとモロッコ王国における捕虜日記が有名である。

(9)この「ヌーヴォーロマン」は単に「新しい小説」を示すだけであろう。20 世紀の新しい文学を意味する「ヌーヴォーロマン」とは異なる。

(10)フランドル地方出身のスペイン人である。バーバリ (アフリカ北西部の海岸地方) 人によって捕えられ、1 年間(1640 年から 1641 年まで)アルジェで奴隷として過ごした (売られるまで滞在)。この捕虜日記は現代人にとって非常に読み易い。なぜなら、シンプルな文体で生き生きと語られているからである。自身の経験や出来事を披露する一方で、当時のアルジェの様子についても語る。たとえば、歴史、地理的情報、政治、風俗、逸話など。

(11)原文

Si Emmanuel d'Aranda, par exemple, a choisi de présenter à ses lecteurs une narration « toute naïve et toute simple, sans l'embellir des figures de Rhétorique, et de grandes digression », c'est qu'il y avait conscience de l'agrément d'un récit pittoresque, conte avec une vivacité familière, « comme un Matelot parle entre ses amis de tempêtes et de naufrage ; in Soldat de batailles et de plays ; et qu'un Berger fait mention du loup venu dans son troupeau » (Chupeau,1977 :549)

(12)原文

C'est la littérature de lors qui fixera au voyage son objet et sa finalité, en même temps que la figure de voyageur se confondra de plus en plus avec celle de l'écrivain(Le Huenen,1987 :51).

(13)原文

Au long de XIXème siècle, il n'est guère en France d'écrivains qui n'avaient pas consacré une partie de leur oeuvre à leurs souvenirs de voyages, aucune époque en particulier ou la mode romantique confèrait aux voyageurs en Orient, en Italie ou en Espagne une actualité renouvelée(Le Huenen,1987 :51).

(14)原文

Un voyageur, écrit Chateaubriand, est une espèce d'historien : son devoir est de raconter fidèlement ce qu'il a vu ou ce qu'il a entendu dire ; il ne doit rien inventer(Le Huenen,1987 52)

(15)原文

A la motivation mimétique, première, naturelle, viennent répondre les rêveries sur un nom, opération seconde, culturelle, qui réécrit le réel en fonction d'un modèle antérieurement connu. Ainsi conçu, la description, qu'elle soit allusive, énumérative ou citationnelle, affiche ostensiblement sur sa nature fabriquée et son statut d'objet littéraire.(Le Huenen,1987 52)

(16)ヌシャテル大学の文学教授であり、19世紀フランス文学、とくにスタンダールに関する研究を多数執筆しているが、「旅行記」に関する研究業績を重ねる人物である、とくに「旅行記」の間テクスト性やパロディについての論文が多い

(17)例えば、*Voyages humoristiques*, Hachette,1856, A Houssaye

(18)英語ユーモア humour はフランス語 humeur の含有する意味の一つ冗談・皮肉好を語源とすることばである。

(19)17世紀の詩人。イソップ寓話を基にした寓話詩 *Fables de la Fontaine* が代表作

(20)フランス人英文学者、パリ第三大学 (Sorbonne nouvelle) 教授

(21)Urbain(2002)も voyageur の変容の一形態として、スターンの当該作品から voyageurs oisifs, voyageurs curieux, voyageurs menteurs, voyageurs orgueilleux, voyageurs vaniteux, voyageurs qui s'ennuient, voyageurs par nécessité として彼らの存在を紹介している。

(22)ソントグは『書くこと、ロラン・バルトについて』の中の「死後の生、マシャード・デ・アシス」の章で、メーストルの作品をマシャードの手本であり、メーストル自身は文学的小旅行を発明した人物であると言及する。

「もうひとつ、マシャードの手本になったのがグザヴィエ・ド・メーストルの驚異的な本であった。彼は国外に出て行くフランスの貴族で(長い人生の大半をロシアで過ごした)、決闘のかどで投獄されていた1794年執筆の『室内旅行』*voyage autour de ma chambre* によって文学的小旅行を発明した人物であるが、この本では、椅子、机、寝台といった楽しい場所への対角線的、ジグザグ的な訪問が語られている」(ソントグ, 2009:57)

(23)ベンヤミンが『パリー19世紀の首都』の「B グランヴィルあるいは万国博覧会」でグランヴィルのシニカルかつユートピア的要素について述べている。「万国博覧会は『スペシアリテ』からなる世界を築き上げるが、グランヴィルの^{ファンタジー}幻想的作品も同じことを実現する。それは宇宙を近代化するのだ。彼の手にかかると、土星の輪は土星の住民たちが夕方散歩にやってくる鑄鉄のバルコニーが土星の輪となり、そこを歩く人々は、自分が土星の住民に変身したと感じられる^{ファンタスマゴリー}魔術幻灯の中に入り込んだとも言えそうである。この(グランヴィルの)グラフィックなユートピアに文学において対応するのが..(以下省略)(今村・三島訳(2003,44))

(24)1894年、フランス陸軍参謀本部勤務の大尉であったユダヤ人アルフレッド・ドレフュスに対する冤罪事件。世間が軍部対ドレフュス派に二分するほどであった。新聞の第一面となったエミール・ゾラの発言 *J'accuse* (われは

弾劾する)はその象徴的行動であった

- (25)「生理学」と訳されるが、生命現象を物理的、化学的に研究する学問ではない。19世紀中頃の、特定の社会階層の生態描写、分析を目的とした書物の標題(小学館ロベール仏和大辞典1988)であり、文学領域に属する学問であった。
- (26)ジャーナリスト、作家。マージナルな社会階層にも目を向けたジャーナリストであった。生理学シリーズはほかに、『娼婦の生理学』*Physiologie de la Lorette*(1841),『運搬業者の生理学』*Physiologie du débardeur*(1842),『債権者と債務者の生理学』*Physiologie du créancier et du débiteur*(1842)がある

第 4 章

作家の旅

第4章 作家の旅

第3章において旅行記について分析を行った結果、17世紀、「肘掛椅子の旅」と表現される旅行記の流行があり、この現象を契機に旅行記はドキュメンタリーから小説領域に移行してきたことが明らかになった。ここで重要なのは旅行記の書き手には実際の旅が要求されていないことである。一方で19世紀になると旅行記の書き手でもあり、旅の主体、つまり実際の旅を経験するのも文学者たちであった。第4章においては、19世紀のロマン主義時代における作家の旅、および旅の頻繁さについて、それ以前、17世紀から18世紀の古典主義時代の旅との比較を行い、19世紀ロマン主義時代、旅と作家の関係にはなにか特別な関係があったことを検証した。さらに、「ロマン主義」について考察を行った。

第1節「ロマン主義」について

(1) ロマン主義以前の旅

Boyer(2000)はルネッサンス期、古典主義時代の旅とその主体について論じている。

ルネッサンス期の人間にとって「大旅行」とはイタリア旅行を意味していたが、その主体のほとんどは、宣教師、兵士、芸術家、商人であり、職業的義務としての「旅」を遂行したものであった。(Boyer, 2000:17) モンテーニュもイタリアへと旅立ち(1580-81)、旅日記には、voyageurとしての「好奇心」が描写されるが、旅の目的は「病氣療養」のためであった。

17世紀、18世紀は古典主義時代(1660-1715)にあたるが、太陽王と呼ばれたルイ14世の治世であり、フランス文化の隆盛期であった。フランス文化の華やかさ、卓越性はヨーロッパ中に伝播した。しかしそこにVoyageurの貢献はないとボワイエは言及する。なぜなら、古典主義時代の人々、宮廷人、哲学者、文学者などを示すが、かれらは sédentaire (定住者：移動をすることのない人々)であり、旅への関心がなかったからである。古典時代のフランスは外国にほとんど依拠するところなかった。アザール(Hazard, Paul, 1878-1944, 比較文学者)も、古典の精神は「安定」を好んだと述べる。イエズス会士ダンヴィル(Dainville, de François, 1909-1971, 地理学者、歴史学者)も、「デカルト的停滞⁽¹⁾は近代地理学の遅れを招いた」と語り「1660年は地理学でも転換期をしめす」と言及する。

転換とは、新しい発見の休止時代に入ったことを示す。学問の中心が修辞学になったのである。ボワイエはフランスのこのような自己中心的態度、中華思想をしめす証言はいくらでもあり、この時代の「空欄」状態の年表をみれば明らかであると述べる。また、絵画の世界においてもエキゾチズムなど存在しなかった。定住志向は、ルイ 14 世にも言えることであり、結婚のためにバスク地方を訪れたほかには、生涯において「旅」をすることはなかった（ルイ 14 世によってヴェルサイユに宮廷ができる以前は、季節ごとに地方の城を回るのが宮廷の活動のひとつであった）。ボワイエはさらに、17 世紀後半に旅をした宮廷人もいるが、かれらは娯楽として新しい地方（国）を見るための旅であり、モンテーニュ以来、旅への好奇心が後退していると結論づける。

たしかに、シャペルとバショームンの旅においても、風景や、歴史的建造物への興味、関心は見られない。シャペルとバショームンの旅にあこがれ、友人デュ・カンと旅をするフロベールも、彼らと同じ場所に立った時、「なぜ、光景に対しなんの感想もないのだろう」と疑問を持つが、「その感覚の違いが時代の違いをあらわすのだろう」と述べている（渡辺，2005）。

フランスは成熟した文化を持ってしまったため、「他所」を知る必要性がなかったこと、宮廷の権力があまり強く、パリから離れることは、社会からの脱落を示すことが、「旅」が敬遠された理由であろう。

一方で、第3章で論述したように、旅行記の流行がルイ 14 世の時代にあった。しかし、それはお楽しみのための文学作品としての流行であって、実際の旅が求められたわけでない。また、当時は領土拡大が重要な政策のひとつであり、多くの兵士、船員らが植民地獲得のための航海に出たという歴史的事実もあるが、彼らの旅は国策としての旅(Voyage)であった。

次に、畑(2009)の論文から、18 世紀において、哲学者(Philosophe)と旅人(Voyageur)に関するディスコースがあったことを紹介する。

Voyageur 旅行者：さまざまな理由から旅をする人、また時にその報告を行う人。しかしこの点において旅行者とは通常、あまり正確さを行使しない。ほとんどが常に自分が見たものに、見ることもありえたものを付け加える。（中略）ストラボンがメネラオスの旅行記について言った言葉、すなわち「旅行記を書く人間は、確かに全て嘘つきだ」という言葉があてはまらない旅行記はほとんどない⁽²⁾。（畑 2009:33）

畑は、航海者なら、彼らの発見はフランスの植民地獲得につながるものであり、商人も「国の富み」につながり、宣教師なら、キリスト教の普及（フランスの植民地政策につながる）という大義名分があるが、Voyageurはおそらく自分のための旅をする人である、例として「イメージを探しに」とオリエントへ旅立ったシャトーブリアン⁽⁴⁾の例をあげる。さらに、ヨーロッパから出ることのなかった「哲学者」（ルソーとジョクール⁽³⁾）は「旅行者」には客観的な観察能力が欠如しているとして、ヴォワイヤジュールの「旅行記」を否定していた事実を紹介する（畑，2009）。

また、ボワイエも18世紀の人々はJ'ai lu「私は読んだ」という行為に優越性を持っていたと言及している。（Boyer, 2000）

一方でブーガンヴィル Bougainville⁽⁴⁾、ヴォルネー Volney⁽⁵⁾ら Voyageur たちは哲学者の机上の空論に激しく反発する。自分の目で実際に現地を見た「Voyageur（旅行者）」の言い分には根拠が存在することを強調する（前掲書：36）。哲学者の J'ai lu「私は読んだ」という態度に対し、voyageur たちは J'ai vu「私は見た」と反論した。

このディスクールにおいても、「旅」が否定的にとらえられた時代であったことが明らかにされる。

旅行記の出版を表す年表（4-1）を作製したが（付録参照）、古典主義時代（1660-1715）を抜粋したものが、表（4-2）である。

表 4-2 古典主義時代(1660-1715)前後の旅行記

| 1660-1715 | 古典時代 |
|--------------------------|--|
| J.B. Tavernier(1676) | Les Six Voyages de Jean-Batiste Tavernier en Turquie, en Perse et aux Indes 『タヴェルニエの6つの旅行:トルコ、ペルシャ、インド』 |
| J.Bunyan(1678) | Le Voyage du pèlerin 『天路歷程』 |
| J.F.Regnard(1681) | Voyage en Laponie『ラップランド旅行』 |
| J.Marquette(1681) | Decouverte de quelques pays et nations de l'Amérique septentrionale 『北米の国家と国民に関する発見記』 |
| W.Dampier(1697) | Voyage autour du monde 『世界一周旅行』 |
| W.Dampier(1705) | Nouveau voyage autour du monde 『新世界一周旅行』 |
| ?(1721) | Passage du Pôle Arctique au Pôle Antarctique『北極から南極へのパッサージュ』 |
| Montesquieu(1721) | Lettres persanes 『ペルシャ人からの手紙』 |
| J.Swift(1726) | Les Voyages de Samuel Gulliver 『ガリヴァー旅行記』 |
| L.Sterne(1768) | Le Voyage sentimental 『センチメンタル・ジャーニー』 |
| D.Diderot(1772) | Supplément au voyage de Bougainville(1796)『ブーガンヴィル航海記補遺』 |
| J.Cook | Voyage autour du monde(1768-1771) 『世界一周旅行』 |
| J.J. Rousseau(1782) | Rêveries du promeneur solitaire『孤独な夢想者の散歩』 |
| Comte de Volney(1787) | Voyage en Egypte et en Syrie 『エジプト・シリア旅行』 |
| F.de Chateaubriand(1791) | Voyage en Amérique『アメリカ旅行記』(出版1827) |
| X.de Maistre(1795) | Voyage autour de ma chambre『私の部屋周遊記』 |
| M.Park(1798) | Voyage dans l'intérieur de l'Afrique 『アフリカ内部の旅』 |

Urbain, J-D(2002)を基に筆者作成

表 4-2 はユルバン(2002)を基に、筆者が作成したものであるが、赤字はフランス人の冒険家、哲学者、作家たちの作品を示す。1676年のタベルニエから1772年のディドロ(Diderot, Denis, 1713-84)まで、古典主義時代は「定住を好んだ」との通り、旅行記の出版も少ない。18世紀になり、モンテスキュー(Montesquieu, Charles Secondat, baron de la Brède et de, 1689-1755)の『ペルシャ人の手紙』*Lettres persanes* やディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』の出版もあるが、どちらの著者も実際の旅を経験したものではない。旅行記の出版からも実際の旅への否定的な見解が露呈されている。

しかし18世紀後半になり、絶対王政が揺らぎはじめる。これまで、閉じ込められていた「私」という存在と、「他所」の存在が現れる。1789年のフランス革命において社会や既成概念が解体され、フランスの「ここ」という中華思想からの脱却の進行を余儀なくされた。

(2) フランスにおけるロマン主義について

19世紀、多くの作家が旅を経験した。フランス国内はもとよりオリエントとよばれる東方や、アメリカ、アジアまで広範囲に及ぶ旅であった。旅の主体が作家であったことや、19世紀前半は、新聞等、メディアの発展期であったことから、人々に「他所」への関心を引き起こした。作家と旅の関係に関する研究は文学史上だけでなく、観光研究においても重要な課題である。作家たちの旅の多さについて語る上で、交通機関の整備・発展、つまりイギリスに遅れて始まった産業革命による恩恵を考慮する必要がある。しかしながら、作家が旅するのは、ハード面の改良によるものだけではない。作家の旅とは19世紀の文化潮流である「ロマン主義運動」が背景に存在する「旅」であり、ボワイエは「すべてのロマン主義作家たちは旅行家であった」*Tous les romantiques sont voyageurs*(Boyer,2000)と言及する。

ところで、「ロマン主義運動」は多義であり、漠然と使用される傾向にある。そこで、筆者はロマン主義運動のひとつ「エキゾチズム」に焦点を当てた研究を行った⁽⁶⁾。①時間のエキゾチズム *L'Exotisme du temps*②空間のエキゾチズム *L'Exotisme de l'espace*③自然へのエキゾチズム *L'Exotisme du nature* への分類を試み、ユゴー(Hugo, Victor(1802-1885)、ゴーチエ Gautier, Théophile(1811-1872)、ネルヴァル(De Nerval, Gérard 1808-1855)、ロチ Loti, Pierre(1850-1923)など19世紀に活躍した文学者がどのタイプのエキゾチズムの流れを汲むのかについて考察を行った。さらに、ロマン派の旗手ユゴー、ゴーチエとロマン主義後期の作家フロベールの南西地方への「旅」⁽⁷⁾から、(オリエンタリズムへと着地するであろう)「エキゾチズム」を抽出し、彼らが旅に求めたものを模索しまとめた。

ロマン主義作家はなぜ「旅」を好んだのであろうか。イギリスのロマン主義詩人たちは旧大陸、フランス、イタリア、ドイツを旅し、ルソーの地スイス、アルプス地方を好んだ。

しかし、イギリスにはすでにジェントルマン育成のための「グランドツアー」があり、旧大陸を旅することをロマン派詩人の特徴とは言えない。一方でフランスでは、ボワイエが言及したように、「旅」がロマン主義作家の特徴のひとつとなる。アンシャン・レジーム下、フランスは「絶対的な国家」であり、「他者」、「他所」を意識することはなかった。あるいは「個人」、「私」の存在がなかったとも言えよう。ところが、「ロマン主義運動」という風潮により、「自我」、「自由」、そして「他所」を知る。「旅」へと関心が向かうのは当然の結果であろう。また「他所」を知ることは「自分」「自国」を知るという再帰的な作用を伴うことを作家達、特にシャトーブリアンは「旅行記」や「自伝」で示す。

観光研究においても「ロマン主義」を取り上げることは重要である。アーリが、フーコー(Foucault, Michel, 1926-1984)の「まなざし(regard)」を援用して構成された『観光のまなざし』*The Tourist gaze*(1990)は観光研究者にとって必須の文献である。しかし、アーリによって、研究者はロマン主義に対する正確な知識もないまま、なんとなく「ロマン主義的まなざし」という定句を使用する傾向にある。さらにその扱いは一元的で、「ロマン主義のまなざし」＝「自然へのまなざし」に固定されてしまった感がぬぐえない。恐らく、アーリが『観光のまなざし』で示唆したロマン主義が原因と考えられる。アーリが提示する例は、イギリスの事例であり、イギリス的ロマン主義の解釈のひとつであろう。もちろん「自然へのまなざし」はフランスロマン主義運動にも見られる。しかし、真髄ではない。

本章ではフランスロマン主義運動についてイギリスロマン主義運動との関係を踏まえながら、整理を行い、「ロマン主義」について再考する。

(3)19 世紀ラールス大辞典 *Le Grand Dictionnaire universel du XIXème siècle* par Pierre Larousse)による Romantisme の概要

まず、19 世紀ラールスに掲載された Romantisme からロマン主義の全体像について概観する。以下は 19 世紀ラールス大辞典の Romantisme の項の翻訳である⁽⁸⁾。(下線は筆者による)

フランスにおいてロマン主義運動(Romantisme)は 1830 年より少し前から、ルイ・フィリップ王の治世まで続くが、現在もまだその運動は終焉していない。主な特長としては既成の法則を打ち破る、つまり古典の形式、至る所で効力を発揮していた決まり事を覆すことである。18 世紀文学と現在の文学との間に起こったこの運動はフランス革命のようなものであり⁽⁹⁾、法律、風俗(文化)、家族さえも変化させうる新しい考え方、希望である。この運動に影響されない精神的な活動はない。

しかし、フランスで誕生した運動ではない。ドイツからはスタール夫人によってもたらされ、イギリスからはシャトープリアンによってもたらされた。両者はフランスロマン主義の親と言われている。

ルイ 14 世の絶頂期から 18 世紀中ごろまで、フランスはヨーロッパの文化の中心であったが、ドイツに亡命したフランス人プロテスタントがドイツに自国文化

を根付かせ、7年戦争の結果プロシアとイギリスが友好関係になりシェークスピア、ヤング、オシアン⁽¹⁰⁾の影響を受けたゲーテやシラーにより文学が再生され、フランス文化の地位が低下したという背景があった。

ドイツでこのような文学運動が成し遂げられている間、イギリスでも同様に文学運動が成し遂げられた。シェークスピア、あるいは他の忘却の彼方に置かれた作家たちが、文学という舞台に戻ってきた。パーシー・シェリーは古いバラッドをまとめ出版し、自然への関心を再起させた。そして、ワーズワース (フランス革命時、オルレアンにいた)、コールリッジ (Coleridge, Samuel Taylor, 1772-1834) など湖水派 (Lakistes) が誕生した。かれらが対象とした湖は Westmoreland, Cumberland⁽¹¹⁾ であった。さらにバイロンが登場した時、彼の詩で表現され感情 (Emotion) は混とんとした (フランス革命後の不安定な) 状況にいるわれわれ (フランス人) と同じものであった。「苦しみは彼らのものであり自分たちのものであるのだ」 (Ses douleurs sont à la fois les siennes et les nôtres), バイロン (Byron, George Gordon, sixth Baron, 1788-1824) の「自分の中を見て、自分を知らなさい」 (regarde en toi-même et connais-toi) の言葉の中に彼の信条がある。

一方ウォルター・スコット (Sir Scott, Walter, 1711-1832) は「過去を考えなさい」 (songe au passé) と言って、ほこりに覆いかぶされていた中世という時代に光を当てた。

フランスでは、イギリスのバイロン、ウォルター・スコット、ドイツのシラー (Schiller, Johann Christophe Freidrich von, 1759-1805), ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von, 1749-1832) を模倣するだけであったが、1802年シャトーブリアンがキリスト教精髄を著しフランスロマン主義運動が始まる。シャトーブリアンは『キリスト教精髄』、『アタラ』、『ルネ』、『殉教者』を著し、ミルトン (Milton, John, 1608-1674) の『失樂園』 *Paradise Lost* やシェークスピアの作品も翻訳した。シャトーブリアンの旅については第5章で扱うが、新大陸の未開の森を経験し、さらにはオリエントまで巡礼の旅に出た。彼のロマン主義的特長は、「わたし」という一人称で語られること、「アンニエイ (ennui)」という孤独感、喪失感や、「エキゾチスム」に代表される。

またスタール夫人は1802年に『ドイツ論』 *De l'Allemagne* を発表し、ゲーテ、シラー、カント、ヘーゲルを紹介した。(スタール夫人が1795年に発表した『小説論』に関してはゲーテ自らが翻訳した) 1820年にはラマルチヌが『瞑想』 *Méditations* さらに1822年、16歳のユゴーが『オード』 *Odes* を発表する。

サント・ブーヴ⁽¹²⁾ (Charles, Augustin, Saint-Beuve, 1804-69) はランブイエ館に集

う彼らをシャトーブリアンやスコットの影響を受けたエリート集団と表現している。

イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴を表に簡潔にまとめたのが、表 4-3 である。

表 4-3 イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴

| 国 | イギリス | ドイツ | フランス |
|-----|----------------|------------|--------------------|
| 特長 | 文学，芸術 | 哲学，芸術 | 文学，芸術，政治 |
| 代表者 | バイロン W.スコット | シラー ゲーテ | スタール夫人 シャトーブリアン |

19 世紀ラールスを基に筆者作成

次にロマン主義運動と政治の関係についての記述を引用する。

「文学の動きが政治に結びつく。なぜなら、ロマン主義者たちはロワイヤリスト（王党派）であり自由古典派であったのだ。ロマン主義運動による革命（改革）は形式と本質の革命であった。17 世紀は形式主義（古典主義）の詩であったが、ロマン主義はしなやかで力強い詩へと変わった。」⁽¹³⁾

「ロマン主義は、1848 年の 2 月革命で言われたように偶然の事故であり、世の中を覆すものであった。それは、未開人による侵略であり、一時はそれに従ったが、幸運にも追い払うことができた運動であるという人もいる。対抗して、言えることは、19 世紀のロマン主義文学を削除すれば、それは 19 世紀すべての文学を削除することになるということだけである。」⁽¹⁴⁾

以上が 19 世紀ラールスの *Romantisme* の項目からの引用文であるが、「継続中」のロマン主義について、執筆者自らもその影響下にあることが読み取れるのは興味深い。

フランスにおいて「ロマン主義」が「勝利」として認識されたのは、1830 年のユゴーによる『エルナニ』*Hernani* の公演での「勝利宣言」である。作品名は「エルナニ合戦」と呼ばれる闘争をも含む。文学的闘争を超えた闘争であった。赤いチョッキを身に着けたゴーチエが上演を妨害した古典派と争ったのは

有名なエピソードとして伝えられる。この出来事、事件により「ロマン主義」は「流行」としてではなく、成立年がはっきりした「風潮」として認識される。

19世紀ラールの説明でも明らかなように、フランスにおいてロマン主義運動は「古典主義」対「ロマン主義」の文学的論争を嚆矢とする「文学運動」であったが、絵画や音楽、政治も巻き込まれていった。シャトーブリアン、スタール夫人、アレクサンドル・デュマ、ラマルチーヌ、ユゴーなど、「政治」に介入する文学者が多いのもフランスロマン主義の特徴のひとつとされる。

戯曲は、三一致の法則⁽¹⁵⁾に束縛されていたが、ロマン主義勝利によって、解放された。作家による散文形式の詩や小説はロマン主義運動により「文学作品」として認められるようになったことは重要である。現在の「文学」領域の多様性は19世紀ロマン主義を嚆矢とするものである。

Je, moi という一人称で自己を語ること、風景を描くこと、自由に意見を述べる「旅行記」もまた、ロマン主義運動の範疇内の行為であろう。19世紀に出版された「旅行記」の多さはフランスロマン主義作家の「他者」「他所」への関心の高さを示す。その嚆矢となるのはシャトーブリアンのオリエントやアメリカ大陸へのまなざしであり、そのまなざしは、イギリスやドイツのロマン主義の特徴とは異なるものである。エキゾチスムへのまなざしはフランスロマン主義の主要項目であると言えよう。

一方で、前述したように、ロマン主義運動は王党派により支持された運動であった。フランス革命前に生まれた、シャトーブリアン、スタール夫人、スタンダールはそれぞれ、王党派の人物である。19世紀、近代フランスを謳歌したロマン主義運動であるが、政治的には「反近代精神」がそこに存在した。しかしコンパニョン(A. Compagnon, 2005)の言うように「反近代は近代である」という論理において、ロマン主義運動は近代を象徴する運動であると言えよう。

(4) フランス絵画に見られるロマン主義

(3)で述べたように、文学においては「詩」に関しても「演劇」に関しても「形式」からの解放がロマン主義運動の始まりであった。絵画に関しても、形式を重んじる古典主義からの解放がその嚆矢とされる。普遍的な美である「理想美」を目指すものではなく、「個」の感受性が主体となる新しい「美」を目指すものであった。美はアレゴリーで示されるものでなくなった。「感じ方」は千差万別であり、「理想美」の世界には存在を許されなかったグロテスクなものや怪奇な

幻想、死のイメージなどが、大きな役割を占めるようになった。高橋(1990)は芸術家の「独創性」が評価されるのはロマン主義による「個性美」を誕生以降であると言う。

独創性を求めることは、一般の社会に対して反抗的となり「個性」を強調することであり、「個性」は「歴史趣味」「異国趣味」という現実逃避で表現された。また「私」という「個」が確立された。歴史趣味とは「文学」と同様に、中世の騎士物語の世界、キリスト教の伝への関心であるが、英雄を誉めたてるのが「ロマン主義」ではなく、英雄の対極にある現実を描くことを創造活動の原動力とするものである。(前掲書)例えばドラクロワ(Delacroix, Ferdiand Victor Eugène, 1798-1863)の絵画「キオス島の虐殺」(1824), 「民衆を導く自由の女神」(1830)などがある。

絵画においても、「個」は「他」への関心を導き、歴史、遠い異国が作品のテーマとなる。

1) ロマン派の関心

① オリент

すでに、アラブの世界は、さまざまな旅行記や幻想的な物語の流行とあいまって、ロマン主義の格好の題材となっていたが、オリентと呼ばれる地域がナポレオンによるエジプト遠征、アルジェリア併合、ギリシャ独立戦争以来、旅行可能な「現実の世界」になった。結果として、オダリスクだけがオリентを表象するものではなく、風景、黒人女など異国的モチーフが多様になった。ジェリコー⁽¹⁶⁾(Gericault, Théodore, 1791-1824)の馬(アラビア産の駿馬)が大量に持ち込まれたことも関係する

② 自然

一方で「孤独な世界」を求める画家たちは神秘的な自然風景を描いた。

2) 新しい表現方法

① 色彩重視

ロマン派の絵画は、デッサンよりも色彩が重視される。色彩は仏語で *couleur* と言うが、文学においては *couleur locale* 「地方色」がロマン主義文学の特徴とされる。

② 構成

型にはまった構成よりも、いきいきとした生命感と躍動感を表現できる構成

が要求される。「旅行記」もまた、書簡形式、日記形式など「形式」にとられない文学であること、さらに「旅行記」で展開される世界が求められるのは、科学的叙述ではない生き生きとした世界である。

3) ドラクロワの絵画とオリエント

1832 年政府がモロッコに派遣する大使団の随員員の一人に選ばれ、1 月から 6 月にかけて、スペイン、モロッコ、アルジェリアなどを旅行した。



図 4-1 ドラクロワ作 「アルジェの女たち」*Femmes d'Alger dans leur appartement* (1834)

色彩表現がさらに豊かになったことはのちの印象派への動きへとつながる。フロベールら 19 世紀中葉に活躍した作家たちは、文学だけでなく、ロマン主義の絵画からもオリエントのイメージを持ったのであろう。

4) ロマン主義の展開について

1819 年のサロンにおけるジェリコーの「メデュース号の筏」によってロマン

主義運動が始まる。

「一口に言って，ロマン主義の時代は，藝術が市民社会のあいだに浸透していく時代と言ってもよい（中略）。このような全体的傾向の中で，ジェリコー，ドラクロワ以外にロマン派ないしロマン派的傾向の画家として活躍したのは，歴史画家およびオリエンタリズムの画家たちであった（高橋，1990:212）

「オリエンタリズム」の画家たちがテーマとした「オリエント」の地域とはレヴァント地方（地中海の東側，ギリシャ，トルコ，シリア，キプロス，レヴァノン，イスラエル，エジプトを含む地域）でありフランスのロマン主義の特徴であった。一方で，ロマン主義と対峙する関係にあった新古典主義でも，「オリエント」はテーマとされ，アングル(Ingre, Jean-August, Dominique, 1780-1867)の「グランド・オダリスク」が与えたオリエントへの視覚イメージへの影響は大きい。

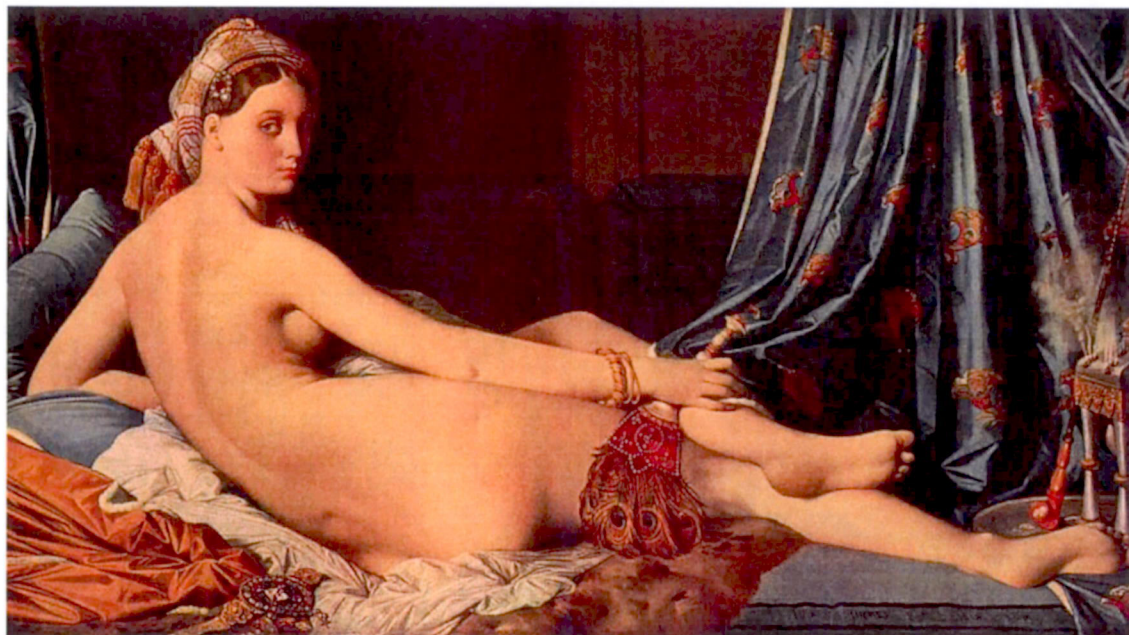


図 4-2 アングル作 「オダリスク」 *La Grande Odalisque*(1814)

(5) ルソーとロマン主義

19 世紀ラールの説明において，フランスのロマン主義はイギリスとドイツ

からの影響を受けて発展していく過程が述べられているが、イギリスロマン主義を代表する作家、ワーズワースやバイロンに影響を与えたのは、ジャン＝ジャック・ルソーである。ルソーについての言及がないのは不思議である。

ルソーの『法の精神』*De l'esprit des lois* がフランス革命に影響を与えたことは周知の事実であるが、書簡小説『新エロイズ』が18世紀のイギリス人やイギリス人作家に多大なる影響を与えたことも重要である。

鈴木(2002)は『新エロイズ』がイギリス人作家にもたらした影響について、

『新エロイズ』は1790年代、1800年代の英国小説に次のような知的枠組みを提供した。つまり、ジュリとサン・ブルーの情熱的恋愛を通して、一組の男女が愛し合っていれば、社会の慣習、しきたり、制度に逆らっても、二人にはその愛を成就させる権利があるということ。さらには、実際の行動がいかなるものであれ、美德に対する情熱さえあれば、また社会の不合理的で不自然な規範ではなく、自然の感情、感受性、感性、衝動を自分の行動の指針にしさえすれば、社会通念上はその行動が罪に満ちた恥ずべき転落に見えようとも、その行動は称讃すべきものとなるということ。すなわち、美德は人間のとる行動や行為にかかわっているのではなくて、むしろ感性、感受性、情熱にかかわっているのだ、ということ。ようするに、つねに感情、感受性、衝動の方が、親の権利、国家の法律、社会のしきたり、因習的道德の上位に位置するのだという知的・思想的枠組みを呈示した。(鈴木、2002:14)

と言及する。

1979年の「現代思想」ではルソーの総特集号が組まれている。今泉は「ルソーからドイツロマン派へ—その〈内的受容〉をめぐって」の中で、民衆の出身者であるルソーの「民衆の感情の代弁者」という側面こそが、ルソーを「ロマン主義の始祖」へとまつりあげる最大の要因と言及する。フランスロマン主義の流れに関して、

『新エロイズ』は18世紀ヨーロッパの最大のベストセラーであったという。従来理性や形式を尊重する文学にかかわって、感情を重視するこの書簡体の小説の中に、民衆は、自分の心の奥に潜んでいた感情とか憧憬とかいった諸々の感情が余すところなく表現されているのを見た。貴族の娘ジュリと平民サン・ブルーの身分違いの恋愛という、テーマとしては決して新しくないこの物語に盛られた

もの一多感な魂の吐露、彼岸的恋愛、憂鬱、パッセージとして取り込まれた自然などは、初めて文学のなかに表現されたものとして鮮烈な印象を与えたのである。だが、こうした諸特徴はフランスのプレロマンティックにそのまま受け継がれ、たしかにまたロマン主義の性格の一端を担うに至るのだが、もちろん、このく感情の原理だけがロマン主義の原理なのではないし、ルソーがロマン主義に引き渡したもののすべてではない。では、どうしてルソーがロマン主義の始祖なのか、と改めて問い直せば、それはほぼ同時に、そもそもロマン主義とは何か、という錯雑たる問題と呼び込んでしまう」さらに「『今や誰もが古典主義に関して一家言をもつようになった』とゲーテが語って以来、ロマン主義に関しては、実に多くの定義が下されてきた。ロマン主義といったとき、例えば、ドイツ、イギリス、フランスといった国々における一定の時期の文学的運動も意味すれば、ロマン主義音楽をはじめ、絵画、医学、政治、歴史学など、さまざまな領域にロマン主義という冠がかぶせられる。あるいは、ある心的傾向をもった人間像を指すこともある。このように多様なロマン主義的諸現象に対しなされた概念規定は、例えば、「正確な定義付けは愚かしい」とまでヴァレリーが行ったように、かくて今や、ほとんど無限の拡散を示しているのである。」（今泉,1979:198）

今泉(1979)はカント、シラーへの影響について述べたのち、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー(Herder, Johann, Gottfried, von, 1744-1803 ドイツ哲学者、文学者)によるドイツ語とドイツ文学への新しいまなざしや、彼の東方リガへの遠征による体験がスラブ地域に、土着性、民族性を鼓舞するロマン主義的民族意識を育てるきっかけになったことについて言及する。ドイツロマン主義の背景には、17世紀の三十年戦争(1618-1648)以後のフランス文化支配下のドイツという事情があり、そこで17歳のヘルダーがルソーを愛読し影響を受けていく過程について説明する。

こうして、概観すると、それぞれの国に分けて論じるとしても、ロマン主義の定義は非常に困難であることが明らかになった。文学上の形式においては古典主義対ロマン主義の二項対立が存在すること、産業革命下の社会では、都市対田園、国（ヨーロッパ）対民族、パトリオティズム対ナショナリズム、私対他者など、新しいまなざしにおける二項対立が存在している。しかしながら、ロマン主義とは、ルソーという18世紀の巨人とヨーロッパの各国の社会状況（条件）が培った大きな潮流であることは確かなことである。産業革命が進んだイギリスにおいて、都市対田園、あるいは都市対自然はロマン主義を象徴す

る大きな要素であった。湖水詩人たち(lakists)、ワーズワース、コールリッジはイギリスロマン主義文学を代表する。フランスでは『19 世紀ラールス大辞典』の説明でもあったように、イギリスを模倣する形で伝播したロマン主義であったが、シャトーブリアンやスタール夫人によってフランスロマン主義がはじまり、ユゴーによりロマン主義の勝利が宣言される。形式の変化だけではなく、「他所」及び「自分」を意識した「旅行記」が文学に近づいたのも特徴のひとつであろう。また、政治色が強いとも言われる。それは、シャトーブリアン、ラマルチーヌ⁽¹⁷⁾、ユゴーなど、ロマン主義作家の象徴とも言われる人々が政治活動に介入している所以である。スタンダールは政治家ではないが、知事という職歴があった作家である。彼らを政治活動に仕向けた社会的背景として、政治体制の混乱期であったことは重要である。さらに、一方で産業が発展により社会体制、社会階層にも大きな変化がみられた時期であった。

(6) フランスロマン主義の背景

渡辺(1976)は「ロマン主義」とは 18 世まで抑圧されていた「人間回復運動」のひとつであり、「幸福になるための運動」であったとする。しかし「自己」「自我」を取り戻した先には、「孤独感」が残るという「ロマン主義」の限界を言及する。

「フランス大革命は『文明人』や『啓蒙された人』や『感じやすい人』の華やかな言説の論理的結末であると同時に、神人同形説開展途上の悲劇であり、高潔で残忍たらざるを得なかったロベスピエールを立役者とする一篇の叙事詩である。そして、いかに純粋な善意も流血を伴い不正な犯罪をすら惹起せしめ得ぬことを教える惨憺たる実例でもあり、禁断の果実を食ったものの蒙った痛ましい刑罰のひとつであった。(中略)大革命とともに出現したナポレオンは、専制君主として振る舞ったが、人々はかえって個人解放の手本を如実に与えられたのである。教皇も人間であり、ルイ 14 世も人間であり、そしてナポレオンはコルシカ島の生まれの平民ではないか？人類がルイ 14 世に要求したことが、ルイ 14 世に劣らぬ専断の英傑ナポレオンによって期せずして人民に与えられてしまった。19 世紀初頭の浪漫主義思潮も、その人間観もこれと切り離しては考えられない。個人の確立、個人の孤独、個人と社会との対立は、この時代から新たな条件として人間像に加えられるのである。王者となった個人は、感情や官能の復権のた

めに華々しい歌を唱い、19世紀初頭の人々は再びルネサンスが到来したことを信じた。浪漫派前期の華々しい文芸運動は、まさに新しいルネサンスとして発足したのである。しかし、ほどなく王者となった自我は、他我との聯帯を喪失して己の周囲に無限の虚無を感じ、とりとめもない孤独に沈潜することにいたる。この浪漫的孤独感や相対主義から脱却せんとして、また人間は幸福を掴もうとして、あらゆる試みを行うのである。[...]いづれも人間の幸福のための試みであったが、個人間の聯帯を恢復せんとする意欲が強く働く一方、個人の沈潜はいよいよ深くなって行ったことも見のがせない。(渡辺,1970:212)

近代観光の中で誕生した新しいまなざしを「イギリスロマン主義」「フランスロマン主義」「ドイツロマン主義」などと、分類するのは観光研究においてもやはり困難であろう。しかし、「自然へのまなざし」のみをロマン主義と言い切ってしまうのは、あまりにロマン主義運動の範疇が狭すぎる。19世紀の新しいまなざしの事例について更なる検証を進め、「ロマン主義」由来のまなざしについての分類が必要であろう。検証により、漠然としたロマン主義(運動)の一面が整理され、観光研究からのアプローチによる「ロマン主義の定義」導くことができるのではないだろうか。

第2節 19世紀フランス文学者の旅について

(1) 19世紀に活躍したフランス人作家の旅の頻度について(表4-4参照)

19世紀の作家たちの旅が頻繁であったことを示すために、シャトーブリアン、ラマルチーヌ、スタンダール、バルザック Balzac (1799-1850)、ユゴーHugo (1802-1885)、アレクサンドル・デュマ A.Dumas (1802-70)、ゴーティエ、ネルヴァル、フロベール、デュ・カン Du Camp (1822-94)、ボードレール Beaudelaire (1821-67)を例に「旅の年表」を作成した。巻末の付録資料(表4-4)参照していただきたい。そこから明らかになることは、旅の頻度だけではなく、場所の多様性である。

ヨーロッパの近隣諸国(イギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、スペイン、イタリア)から、ギリシャ、セルビア、ロシア、コーカサス、ウクライナ、キエフ、そしてオリエント地方(北アフリカと地中海の東側の諸国)に旅の領域は広がっていることが示される。さらに、ボードレールを除いて、

長期の旅も一生に一度のものではなく、数度にわたり行われていた。交通機関に関しては簡単に表の内部に示したが、その発展を考慮しても、彼らの旅の距離、頻度には驚かされる。

シャトーブリアン、ラマルチーヌ、スタンダールは、外交官としての職務を携えていたことが、より「旅」を頻繁なものにしていた。しかしながら、シャトーブリアンもアメリカ旅行の頃はまだ、一介の青年に過ぎず（結局は文学活動において重要な役割を果たすことになるアメリカの旅であったが）渡航した頃は、旅がもたらす困難さからも、旅の主体は「冒険者」であったと言えよう。

ラマルチーヌのオリエントの旅は、シャトーブリアンの旅費⁽¹⁸⁾の倍以上に、費用をかけたものであった（石井、2000 ほか）。250 トンの帆船を借り切り、15 人の乗組員を雇い、娘に乳を飲ませるための山羊、図書館と表現されるほどの膨大な数の書籍を積んだ。スタンダールはイタリアでの任務があるなしにかかわらずフランスとイタリアを数十回におよび往復した（詳細は第 6 章を参照）。

一方で、バルザックとデュマも「疲れを知らぬ」旅行者であった。バルザックには借金取立てから逃げるための移動もあったが、ハンスカ伯爵夫人⁽¹⁹⁾に会うためにウィーン、ドレスデン、サン・ペテルスブルグ、キエフとフランスを往復する⁽²⁰⁾。デュマは豪傑であり、一生の浮き沈みも激しいものであったが、旅の頻繁さや行き先にもその豪胆ぶりが表れている。シャトーブリアンやユゴーに会うために、スイスやジャージー島に行き、アフリカ旅行やロシア旅行も経験する。イタリアでは独立戦争に参加し、武器の調達まで行った。「楽しみ」を求める旅行者であったり、「商人」としての旅行者であったり、旅の主体としての属性はさまざまであったが、社会的地位は「作家」としてすでに確立していた二人であった。

(2) オリエント旅行の系譜

シャトーブリアンの 1806 年のオリエントの旅は、19 世紀、「作家によるオリエントの旅」の系譜において、創始者と位置づけられる。次に続くラマルチーヌはシャトーブリアンを意識しての旅であり、ネルヴァルのオリエントの旅はラマルチーヌから引き継がれたものである。ネルヴァルは 1842 年であるが、デュマは 1846 年にスペイン、北アフリカへゴーチエやフロベールとデュ・カンもまた 40 年代にオリエントに向けて出発している。

1830 年代はジャーナリズムの発展期であり、さまざまな新聞が発行され、そ

の販売数を左右したのは価格のほかに、フイユトン小説（新聞小説など）や旅行通信欄の人気であったと言われる。ゴーチエはジャーナリストとして旅を経験したが、新聞等によって影響を受けた、知識人、つまり富裕階級の人々に 1840 年代にはオリエントをめざし「旅」に出るという旅の選択肢が生まれつつあったと考える。「文学者」によって開拓されたのが（フランスの）19 世紀オリエント旅行の特徴のひとつである。その後、ジョアンヌガイドのオリエント版が 1861 年に出版されたこと、スエズ運河が 1869 年に開通したこと、1855 年パリ・マルセイユの鉄道が完成したこと、1871 年モンスニ峠にトンネルが完成したこと、1883 年にオリエント急行が開通したことにより、スペインから南下するコース、トルコからレバント地域に入るコース、マルセイユから北アフリカへ向かうコース等が、より確実で安全なものとなった。オリエント旅行は大衆化し、ギリシャ、エジプト⁽²¹⁾、エルサレムがツーリストの目的地となった。

(3) 旅しない作家：ボードレー

ここで、これまでの事例と正反対の事例を紹介する。旅を謳歌する作家とは対照的にパリから出ようとしなかった詩人ボードレーである。詩集『悪の華』*Les Fleurs du mal* の作者として知られる作家である。ナポレオン三世とパリ知事オスマンによる巨大プロジェクト「パリ大改造」に反対した人物であり、『パリの憂愁』*Le spleen de Paris* が代表作のひとつである。

ボードレーは、放蕩行為が原因で義理の父オーピック将軍（Aupic, Jacques, 1789-1857）により 1841 年に喜望峰経由でインドへ旅に出される。しかしモーリシャス島で嵐に遭遇し、途中で引き戻ってしまった。パリに戻ってからは、同時代の作家（文学者）たちのようにフランス国外に「他所」を求めて旅をすることはなかったが、パリにおいては 50 回以上も転居を繰り返した。ベンヤミン(Benjamin, Walter, 1892-1940)は『パサージュ論』で「パリ—19 世紀の首都」を論じるが、その中の覚書のひとつとして「ボードレー」をとりあげる。19 世紀の都市の遊歩者は「フラヌール」⁽²²⁾と呼ばれるが、ボードレーがまさにフラヌールであった。フラヌールにとってパリは一つの自分の部屋のような感覚であり、自分は部屋の中を移動しているにすぎないと指摘される。しかしながら、フラヌールにとってパリは「閉じられた部屋」ではあるが、第二帝政期という時代、パリにはすでに世界中から物が集まる時代であった。歴史的な背景を考慮すれば、パリという空間は、閉ざされてはいるが、同時に、

「外」との扉ももつ「開かれた世界」でもあったと考えられる。

旅を好む友人デュ・カンに対し、皮肉を込めて書いたと思われる詩が、『悪の華（第二版）』に含まれている。

旅 マキシム・デュ・カンに

I

地図や版画の大好きな、子供にとって、

地上世界は、その広大な食欲と同じ大きさだ⁽²³⁾。

ああ！^{ランプ}灯火の下で見る世界の、なんと大きいこと！

思い出の目で見える世界の、なんと小さいこと！

(中略)

だが、しかし、^{まこと}真の旅人とは、出発するために出発する
人々のみ。その心は気球にも似て軽々と、彼らはついに己れ
の宿命から離れることなく、

そして、なぜかは知らず、常に言う、「ゆこう！」と。

それは、雲のかたちをした欲望をもつ人々、

そして、新兵が大砲を夢見るように、彼らは夢見る、

かつて人間の精神がその名を知ったこともないような、

変わりやすく、未知の、涯しもない逸楽を！

(以後省略)

「求めるものはどこにもない」と旅の経験がほとんどないボードレールが訴える。ボードレールにとって、旅人(=voyageur)とは何かを求めるために出発する人ではなく、とにかく出発する人たちのことであり、現実のような現実でないような不確かな空間（どこでもないどこか）にいる状態にいることを楽しむ人たちである。詩はⅡに続き

(Ⅱの第二節より)

風変りな運命ではある、目標はところを移し、

どこにもないのだから、どこにでもあり得る！

その期待は決して倦むことをしらぬ、＜人間＞が、

休息を見出すため、いつも狂人のように駆けるという運命！

われわれの魂は、その理想郷を探し求める三本マストの船。
甲板に声がとどろく、「目を見ひらけ！」と。
檣楼^{はうろう}の上の声が、熱烈に、狂ったように、叫ぶ
「恋だ・・・栄光だ・・・幸福だ！」と。おお地獄！暗礁では
ないか！

阿部良雄訳(1998)ボードレール詩集 1. 筑摩書房

ここでさらに、「旅人」の求めるものの「不確かさ」、つまり「何かを見つけたつもりが、何もなかった」、あるいは「やっと見つけたつもりが、実はずっと前から自分の近くにあった」ものとして表現される。ロマン主義作家が求めた「(遠方の) 他所」が否定される。換言すれば「他所」とは近くに存在することをうたっているのだろう。あるいは「他所」など存在しないことをうたっているとも考えられる。

ボードレールは「フラヌール(遊歩者)」⁽²⁴⁾という主体になることで、「他所」とは身近にあることの存在を証明している。

ベンヤミンはボードレールを通し「19世紀の首都パリ」について語るが、当時のパリは「他所」をも飲み込む存在であったことをユゴーは次のように表現している。

「よそにあるものはすべてパリにある」

ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』より

第3節 エクリヴァン・ヴォワイヤジュール (Ecrivains-voyageurs) と呼ばれる作家について

19世紀、「旅する主体は作家」であることを示す単語があらわれる。1838年スタンダールの『ある旅行者の手記』への批評文の中で、スタンダールは *voyageur littéraire* (文学的旅行者) と表現されている (Pléiade 版 1992)。Voyageur であれば、科学的な叙述や絶対的な真実の描写の束縛から逃げられないが、*Voyageur littéraire* に求められるものは、文学作品としての旅である。1830年代にすでに *voyageur* と文学者の旅行(者)を区別して表現している点に注目すべきである。

一方で、「文学者の旅」という概念が一般化されたのはむしろエクリヴァン・ヴォワイヤジュールという旅の主体、あるいは単語である。現在インターネットに「*écrivain-voyageur.net*」というウェブサイトがあり、19世紀から現在の作家たちが対象とされている。作家と旅（旅行記）の年表を確認すると、1954: *la naissance de l'écrivain-voyageur*（1954年エクリヴァン・ヴォワイヤジュールの誕生）と記載されている。エクリヴァン・ヴォワイヤジュールを直訳すると旅行作家である。日本語における旅行作家とは、紀行文を書くライターのことであり、何か限定的な属性を持つてしまうことを踏まえカタカナ表記とする。フランス語では、旅行体験から文学作品を創造する作家の呼び名であり、小説や詩、あるいはエッセー集と文学ジャンルは問われていない。本屋の配置を見ても、旅行ガイドの並びにエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの作品が陳列されてあったり、あるいは「フランス文学」の書架に配置されていたりと、「旅行記」と同様に曖昧なカテゴリーである。グルメ Goulemet(2004)によると比較的にあたらしい言葉であり2004年時点でもフランス語辞典 Robert にはまだ収録されていない。グルメ(2004)はエクリヴァン・ヴォワイヤジュールなどという社会的ステータス(*Etat social*)が彼らに与えられる以前より、作家たちはいつも旅をしていた。ある者は、亡命、ある者はビジネス、ある者はローマ見物に、さらにある者は遠方の町にあるおごそかなものを見るために旅をしてきた。作家は商人、兵士と同様にその職業の存在以来、つねに旅行してきたと言及する。かれらにとって旅をすることは、空間を移動すること、ある地点からある地点へ行くことであり、決してインスピレーションを求めるものではなかった。紀元前5世紀のヘロドトスの旅を例に挙げ、インスピレーションなど探究せず、彼が求めるのは「史実」に必要な資料(*documentation*)であったことや、旅日記（1580年6月22日から1581年11月30日まで）を文学作品として残した印象のあるモンテーニュの旅の目的は温泉による湯治目的であり、そこには作家の作品としての価値はないとグルメは分析する。さらにその日記は、モンテーニュの死後しばらく経て偶然に発見されたものにすぎない。ところが、19世紀の作家たちが「旅の印象」を語った旅行記⁽²⁵⁾をリストにあげると数えきれないほどである(Goulemet, 2004)。グルメは「旅」と「文学」の関係の新しい関係ができたことを示唆し、旅の良し悪しにかかわらず、旅をしなければならなかった時代であると言及する。作家にとって、あるいは作家になるためには「旅」は義務であったとも言えよう。一般的に19世紀以降、「旅」を経験し、作品にした作家たちをエクリヴァン・ヴォワイヤジュールと考えるのが妥当であろう。

それではエクリヴァン・ヴォワイヤジュールのサイトで見つけた 1954 年とは何を意味しているのでしょうか。恐らく、ブーヴィエ(Bouvier, Nicolas, 1929-98)が、20 世紀の旅のバイブルとなった旅行記 *l'usage du monde*(1963)の旅に出発した年であることに注目したのであろう。ニコラ・ブーヴィエをもってエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの存在が定義されたということであろうか。しかしながら、そのウェブサイトでは 19 世紀の作家やその作品も扱うことを考慮すると、サイト製作者の主観的な、あるいは自己満足的な年表であると言わざるを得ない。⁽²⁶⁾

また、ベルティ(Berty, Valérie)は *Littérature et Voyage au XIXe siècle* (2001)の中で、オリエント旅行を経験した作家、シャトーブリアン、ラマルチーヌ、フロベール、ネルヴァル、ゴーチエ、デュマを *touriste-écrivain* (以下、ツーリスト・エクリヴァンと記す)と呼ぶ。それ以前の旅行者、旅行が義務あるいは仕事であった旅行者(Voyageur)と一線を画するために Touriste を用いたのであろうか。また、彼らのように著名にはならなかったものの、オリエントを旅して、旅行記を残した人々もツーリスト・エクリヴァンの範疇に入れている。彼らに共通するのは「ブルジョワであり、一般的に、文学に携わる人々である」⁽²⁷⁾と述べるように、ブルジョワ階級の旅行者として Touriste⁽²⁸⁾を使用したのであろう。エクリヴァン・ヴォワイヤジュールを使用せず、ツーリスト・エクリヴァンを使用した理由についての言及はない。ベルティの Touriste についての解釈が、「ツーリストはあらかじめ決められた行程を辿る⁽²⁹⁾」、「ツーリストは、事物に向かって足を進めず、事物のイメージに向かって進む、つまり記号化された事物を求める」⁽³⁰⁾の二つの文章に表現されている。シャトーブリアンは 19 世紀オリエント旅行の行程(ヨーロッパから地中海東部、北アフリカを経由してヨーロッパに戻るという円環)を定着させた第一人者であるが、「イメージを探しに行った(『パリからエルサレムまで』の序文)」と断言することから、ベルティは彼をツーリスト・エクリヴァンと呼ぶのであろう。

ベルティは旅の主体(Voyageur あるいは Touriste)への興味よりも、むしろ Ecrivain(作家)に関心を寄せる。かれらのオリエント旅行には文学的野心があるかどうかについて旅行記からの分析を試みる。さらにかれらは序文において、「文学的野心はない」と言っておきながら、オリエント旅行記が出版されるに至った経緯について考察を行う。

ツーリスト・エクリヴァンとはエクリヴァン・ヴォワイヤジュールより狭義であり、19 世紀オリエント旅行をしたブルジョワ作家示す単語だと言えよう。

二語が共存することは、どちらの語もまだ定着していない証拠でもある上、ヴォワイヤジュール(Voyageur)とツーリスト(Touriste)の使い分けが使用者に結局、委ねられる実情を踏まえれば、これからも定着することはないとも考えられる。

【補注】

- (1)成熟した文化を持つフランスが他所（外国）に興味を持つのは無駄である。
- (2)畑(2009:33)原典：Encyclopédie, ou dictionnaire raisonne des sciences, des arts et des métiers(1751-80), reprint, Stuttgart, Bad Cannstatt, frommann-holzboog, 1967, 35 vol
- (3)百科全書の「ツーリスト」の項を執筆した。
- (4)Bougainville, Louis-Antoine(1729~1811) ルイ 15 世に仕えた航海者，探検者． 1766~1769 に世界一周旅行に出る． 帰国後 *Description d'un voyage autour du monde*(1771)を執筆．
- (5)Comte Volney, Constantin-François Chassebœuf de la Giraudais, (1757~1829) 哲学者，オリエンタリスト，民俗学者，人類学者． 1782~1786 の 4 年間エジプト，シリアに滞在．準備期間が 1 年あったと言われる．帰国後 *Voyage en Egypte et en Syrie* を執筆した．正確な情報伝えた．
- (6)2010 年度修士論文「ロマン主義運動と王政復古期のピアリッツの発展，および第二帝政下のピアリッツの変容について」
- (7)ユゴー『ピレネー旅行記 *Voyage aux Pyrénées* 1843, ゴーチエ *Voyage en Espagne* 1840, フロベール *Voyage aux Pyrénées et en Corse* 1840』
- (8)引用部分の原文 On a donné, en France, le nom de romantisme au grand mouvement littéraire qui commença un peu avant 1830, se poursuivit durant tout le règne de Louis-Philippe et dont l'évolution n'est même pas encore terminée. Son caractère principal fût, dès l'origine, le renversement des règles établies, la transformation complète des formules que nous avait léguées l'antiquité classique, formules restées jusqu'alors presque universellement en vigueur. Rien de plus légitime que cette transformation et, jusqu'à un certain point, de plus nécessaire ; un fait capital comme la Révolution française s'étant intéressé entre la littérature du XVIIIe siècle et la nôtre, ayant changé les lois, les mœurs, la famille même et donné une nouvelle issue aux idées et aux aspirations, il était impossible qu'un pareil changement n'eût pas son contre-coup dans les œuvres de l'esprit.
En France, il eût été plus logique d'appeler germanisme la révolution littéraire qui éclata en 1830 ; c'est d'Allemagne qu'elle nous était venue, et Mme Staël nous l'avait apportée entre les pages de son livre célèbre. De son côté, Chateaubriand nous l'apportait d'Angleterre en traduisant et en commentant les plus originaux des poètes anglais. Ils furent tous deux les parrains du romantisme français.
Jusque vers la moitié du 18e siècle, et surtout depuis l'apogée du règne de Louis XIV, c'était la France qui avait imposé ses mœurs et sa littérature aux pays voisins. Elle avait donné le ton en toutes choses, au théâtre comme dans les jardins. Pendant que l'Allemagne accomplissait son grand mouvement littéraire, l'Angleterre accomplissait le sien. Shakespeare, si on a oublié, du moins bien dédaigné, revient en pleine lumière. L'évêque Percy publie les vieilles ballades nationales qu'il a recueillies avec un zèle enthousiaste. Il se manifeste à la fois un élan vers l'idéal et un retour à la nature dignes d'attention. Un groupe littéraire personnifie cette double tendance : c'est l'école des Lakistes (Lakists), composée de Wordsworth, Coleridge, Southey, Wilson, etc., et poètes avaient chanté les lacs de Westmoreland et de Cumberland. Plus enfin, comme en Allemagne avaient paru Goethe et Schiller, Byron parut en Angleterre, puis Walter Scott. Si à ces noms nous ajoutons ceux de Chateaubriand et de Mme de Staël, nous aurons, dans une proportion relative, nommé les chefs du romantisme et spécialement de ce qu'on a désigné et qu'on désigne encore sous le nom d'école romantique en France.

- (9)高橋(1990)が「詩人ヴィクトル・ユーゴーは、『ロマン主義とは藝術におけるフランス大革命だ』と喝破したが、ロマン主義には確かにそのような急進的一面があったのである(198p)」と言及するように、おそらく、ユーゴーの発言であろう。
- (10)18世紀後半にスコットランドの詩人マクファーソンが「発見」したと称して刊行した古代ゲールの詩人オシアンの長編詩は「北方のホメロス」としてロマン派の詩人、画家たちの枕頭の書となった(高橋,1990ほか)。
- (11)イギリス北西部に位置する。
- (12)19世紀フランスの文芸評論家・小説家・詩人。ロマン主義を代表する作家の一人で、近代批評の父とも言われる。『月曜閑談』*Causeries du lundi*)
- (13) A l'ardeur des principes littéraires vint se joindre celle des principes politiques ; car il faut remarquer que les romantiques étaient royalistes et les classiques libéraux ;
La révolution qu'a faite le romantisme a été une révolution de forme et de fond ; au vers roi des et symétrique du XVIIe siècle, le romantisme a substitué un vers souple et puissant.
- (14) Il est des gens qui s'imaginent que le romantisme a été un accident, une catastrophe, comme on l'a dit de la révolution de 1848, une invasion de barbares un instant sublie et heureusement repoussée. Il n'y a qu'une seule chose à répondre à cela : c'est que supprimer la littérature romantique du XIXè siècle, c'est supprimer toute la littérature.
- (15)3つの一致(単一とも言う)とは、「時の単一」「場所の単一」「筋の単一」を言い、劇中の時間で一日のうちに、一つの場所で、一つの行為だけが完結すべきであるという劇作上の制約。
- (16)代表作に本当に起こったなまなましい事件を題材とした『メデュース号の筏』が代表作とされる。ロマン派絵画の先駆者とみなされるが32歳で早世している。
- (17)第二共和政(1848年の2月革命後の政治体制)、外務大臣となる。1848年12月の大統領選挙に出馬するが、後のナポレオン三世となるルイ・ナポレオンに敗れる。
- (18)現在の貨幣価値に換算すると5000万ともそれ以上とも言われている。
- (19) Hańska, Ewelina(1802-82) ポーランドの貴族女性 20歳以上も年の離れたハンスキ伯爵と結婚しウクライナで田舎生活を送っていたが、バルザックを知り文通を開始。夫人に会うためにバルザックはヨーロッパ各地に赴く。1850年バルザックと結婚するが、その3ヶ月にバルザックは死去する。
- (20)当時(1847年)、普通の旅行者ならば少なくとも二週間を必要とした旅行(キエフ、ウクライナ)にバルザックは8日間で目的地に着くことを予定した。「パリ北駅で車中の人となる。ブラッセルを経てケルンまでは鉄道、ここから西独のハムまでは駅馬車、ハムからハノーバアまでは早馬車、ハノーバアからベルリン経由でポーランドのグレイビツまでは薪をたく機関車での鉄道、ここから先は鉄道と馬車を乗りつがねばならず、さらにこの先は貸切の早馬車を全力疾走させて(檀上,1980:63)」9日間でハンスカ夫人のもとに着いたことが、死後出版された『キエフ紀行』に書かれている。
- (21)すでにエジプトはイギリス人ツーリストであふれていた。植民地であるインドへの通路としてエジプトは存在していた。
- (22) Flâner: se promener sans but, au hasard; user son temps sans profit
Litré(Ed.1863-1877)日本語訳: 目的もなく、行き当たりばったり歩くこと。無

為に時を過ごすこと（リトレ）。

(23)精神（人間の内なる世界）の次元に属するものは大きく、物質（外界）の次元に属するものは小さいという、この詩を貫く命題。（出典：阿部良雄訳（1998）ボードレール全詩集 1 筑摩書房, 290p.より）

(24)Flâneur も Touriste 同様、「生理学」の中で対象とされる。ラクロワ(Lacroix, Auguste de, 1805-1891)は著書 *Le flâneur*(1841)で、フラヌールとツーリストの違いに言及する。

Le flâneur est essentiellement national, différent, en cela, des grands hommes, en général, qui sont de tous les pays, et du touriste, en particulier, qui observe à la course. Sans doute le flâneur aime aussi le mouvement, la variété et la foule ; mais il n'est pas travaillé par un irresistible besoin de locomotion..

訳：フラヌールは本質的にはフランス特有のものである。外国からきた著名人ではなく、動的に観察するツーリストとも異なる。たぶん、フラヌールも動くことや変化を感じることを、群衆を見ることを好む人である。しかしどうしても旅行（移動）したという欲望によって行動を起こすことはない人である。

(25)「印象記」ともいう。

(26)Nerval と Chateaubriand を間違えて記載するなど訂正すべき事項もあった。

(27)Ce sont des bourgeois, généralement des hommes de lettres.....(Berty, 2001:65)

(28)本来は有閑階級のイギリス人旅行者を意味していたことを踏まえているのであろう。

(29)原文 *Le touriste suit un itinéraire fixé à l'avance* (Berty, 2001:64)

(30)原文 *Ils ne marche pas vers les choses, mais vers les images des choses ; c'est-à-dire vers la chose réduite au signe.*

第 5 章

シャトーブリアンの旅

第5章 シャトーブリアンの旅

シャトーブリアンは19世紀フランス文学において重鎮であるが、現在、日本において著名な作家とは言えない。代表作『アタラ』*Atala*、『ルネ』*René*や『墓の彼方からの回想』*Mémoire d'outre-tombe*の邦訳は存在するが、すでに20年以上前に出版されたものである。第5章で対象とする作品*L'Itinéraire de Paris à Jérusalem*に関しては邦訳が出版されていないため、筆者による自己翻訳をもとに分析を行った。邦訳を参照することのできる6章、7章と続く事例研究よりも、原文引用等を含め、ページ数がかなり多くなっていることをまず述べておきたい。一方で、フランス本国においては近年、新たに注目されつつあり作家である。2012年3月にはガリマール出版からベルシェ著『シャトーブリアン』が出版されている。本研究が、「観光分野」におけるシャトーブリアン研究として拓かれる一歩となることを希望している。

本章ではGarnier-Flammarion(1968)版*L'Itinéraire de Paris à Jérusalem*を使用しているが、出典情報ではGF,1968と省略し記載する。



François-René de Chateaubriand

図 5-1 シャトーブリアン

石井(2009)より転載

第1節 シャトーブリアンについての概要 (年表 5-1 参照)

フランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアンは1768年ブルターニュ地方サン・マロで誕生した。シャトーブリアン家は古くから続く貴族の家柄である。幼年期にサン・マロから30キロほど内陸のコンブールの城へと転居するが、サン・

マロで生まれ育ったことはかれの人生において大きな意味を示す。



図 5-2 サン・マロとコンブール

<http://www.gite-mont-st.michel.com/image/carte-bretagne.jpg> より加筆転載

将来像が見えないまま学業を終えた 1789 年、パリに嫁いでいた姉を頼りに上京、フランス革命を目の当たりにする。残酷なまでの人々の狂乱に、大きな恐怖を感じ、フランスから出たいと着想する。ジャック・カルティエ(Cartier, Jacques, 1491-1557)に代表されるサン・マロ出身の冒険者たちのように、かれには本来極限への嗜好(le goût de l'extrême)があった。(Lund,1986 , Balcou,2001 ほか) 貴族階級に属する人々の多くはコブレンツへと亡命したが、シャトーブリアンは「亡命」には納得するものの、自分しかできない亡命のやり方として「アメリカ」という亡命先を選んだ。「アメリカ」という考えを導いた要因に、マルゼルブ氏⁽¹⁾(Malesherbes, Chretien-Guillaume de Lamoignon de, 1721-1794), ジャン＝ジャック・ルソー, ベルナルダン・ド・サン・ピエール(Bernardin de St.Pierre, 1737-1814) による『ポールとヴィルジニー』*Paul et Virginie* など、百科全書的な植物学への関心, よき野蛮人への関心, 自由への関心, 未開の地への関心, 「野生」(sauvage) と「自由」(liberté)への哲学的関心があった(Chinard, 1970 ほか)。

1791 年 4 月 8 日, アルマン大佐⁽²⁾(colonel Armand)より, アメリカ大統領ジョージ・ワシントン宛ての親書を受け取り, 「コンブールの騎士」⁽³⁾(Chevalier de

Combourg)として、サン・マロ (St.Malo) からアメリカ大陸へと旅立った。9年旅の予定であったが、途中でルイ 16 世が処刑されたことを知り、フランスに帰国することを決意する。結局 9 カ月の滞在であった。フランスに帰国後、ベルギー、ドイツへと移動する。ドイツではフランス軍に合流した。1793 年から 1800 年まではロンドンで亡命生活を送る。経済状況は厳しくフランス語の家庭教師などを生活の糧としていた。一方で亡命中の 1797 年に『革命論』を出版し、文学者としてのキャリアを開始する。また、1798 年に母親、1799 年には姉ジュリーという最愛の家族を立て続けに失い、それまではあまり興味のなかったキリスト教に目覚める。1800 年にパリへと帰国する。アメリカ旅行を題材とした『アタラ』Atala(1801)、さらに『ルネ』Renéを含む『キリスト教精髓』Génie du Christianisme(1802)を出版し、大成功を収める。文学的成功が政治家としての道も切り拓き 1803 年には大使館書記官としてローマへ赴任する。1804 年 2 月にパリに戻る。3 月にアングラン公(Duc d'Enghien, 1772-1804)の死刑執行がナポレオン一世の命により行われたことに反発し書記官を辞任する。同年には妻とフランス旅行およびジュネーブ旅行に出かける。1806 年、オリエント旅行へと出発する。1807 年、帰国後、ナポレオンからの亡命を図るために、パリから 3 リュー(12 キロ)離れたヴァレ・オー・ルーに城を買い蟄居する⁽⁴⁾。1809 年『殉教者たち』Martyres を出版する。1811 年には『パリからエルサレムへの旅程』を出版し、同年には、アカデミー・フランセーズの会員に選出される⁽⁵⁾。1814 年『ブオナパルト』Buonaparte 出版⁽⁶⁾。ナポレオン失脚後、王政復古の 1815 年には再び政界の重鎮として政府に登用される。1821 年、全権大使としてベルリンへと赴任。翌年 1822 年にはロンドンへと転任するが、同年末、外務大臣に就任することになりパリへと帰国。外務大臣任期中にはヴェローナ会議にも出席している。しかしながら、1824 年には首相ヴィレール氏へ反論を唱え、突然辞任を表明する。以後、自由主義者となり、言論の自由やギリシャの独立を支持する。この政治的態度の変化によって民衆からの支持を得る。1827 年、アメリカ旅行から 36 年後になるが、『アメリカ旅行記』Voyage en Amérique を出版する。1828 年ヴィレール氏失脚の後、政界に復帰、ローマ大使となる。翌年 1829 年に、ポーリニャック内閣と対立しローマ大使を辞任する。辞任後はピレネー温泉地コートレットへと旅立つ。1830 年、7 月王政が成立すると、政治活動を終え、執筆活動に専念する。1832 年に、スイス旅行、1833 年にプラハ旅行に出かける。最後の旅は 1843 年のロンドンであり、2 週間の滞在であった。1848 年パリにて逝去するが、葬儀はサン・マロにて執り行われ、遺骸は遺言通りグラン・

ベ(Grand Bé)に埋葬される。彼の自伝である『墓の彼方からの回想』*Mémoires d'outre-tombe* は 1811 年 43 歳の時に執筆を開始した。死後 50 年経った後に出版してほしいという希望があったが、結局 1848 年、つまり彼が没した年には新聞のフィクション（新聞小説）として公開されている。さらに、グラン・ベへの埋葬に関しては、すでに、『両世界評論』が 1834 年に『回想録』の「遺言の序文」を発表しており、彼の希望（グラン・ベに埋葬してほしいという）は生前から公表されていた。第 7 章で述べるがフロベールやデュ・カンはその存命中の 1847 年にその墓を訪れている。2 人が行った際にはすでに、墓石も用意されていた。

シャトーブリアンはその生涯においてブルターニュへと帰省することはほとんどなかったと言われるが、青年期に旅立ったサン・マロへ、死後永遠に留まることを選択した。サン・マロからサン・マロへの帰郷（文字どおりの *one tour*），つまり人生かけて、ひとつの旅を完成した人生であったと言えよう。



写真 5-1 サンマロのグラン・ベ島 2012 年 8 月 6 日筆者撮影



写真 5-2 グラン・ベ島のシャトーブリアンの墓 2012 年 8 月 6 日筆者撮影

年表5-1 シャトーブリアンの生活

| | |
|-------|------------------------------------|
| 1768年 | フランス・ブルターニュ地方サンマロにて誕生 |
| 1789年 | パリでフランス革命を目の当たりにする |
| 1790年 | アメリカへの渡航を着想する |
| 1791年 | 4月アメリカ大陸へと渡航 |
| 1792年 | ルイ16世が追放されたことを知り帰国 |
| | ベルギー→ドイツ(仏軍に合流)→ジャージー島へ |
| 1793年 | ロンドンへ亡命 |
| 1797年 | 『革命論』を出版 |
| 1798年 | 母親の死 |
| 1799年 | 姉ジュリーの死 |
| 1800年 | パリに戻る |
| 1801年 | 『アタラ』出版 |
| 1802年 | 『ルネ』を含む『キリスト教精髓』を出版 |
| 1803年 | 大使館書記官としてローマ赴任 |
| 1804年 | 2月パリに戻る。3月妻とフランス国内およびジュネーブ旅行 |
| 1806年 | オリエント旅行に出発 |
| 1807年 | ヴァレ・オー・ルーに家を購入 |
| 1809年 | 『殉教者たち』出版 |
| 1811年 | 『パリからエルサレムへの旅程』出版 アカデミー会員となる |
| 1815年 | 王政復古 政界の重鎮として登用される |
| 1821年 | 全権大使としてベルリン赴任 |
| 1822年 | ロンドン赴任 年末には外務大臣に就任 |
| 1824年 | 6月辞任 |
| 1828年 | 政界復帰、ローマ大使 |
| 1829年 | ローマ大使辞任 ピレネー温泉地コートレットへ |
| 1830年 | 7月王政成立 執筆に専念 |
| 1832年 | スイス旅行 |
| 1833年 | プラハ旅行 |
| 1843年 | 2週間ロンドンへ |
| 1848年 | 逝去 葬儀はサンマロにて 遺骸はグラン・ペに遺言通り埋葬される |

筆者作成

*年表と表は通し番号とする

第2節 シャトーブリアンとロマン主義

(1) サン・マロとコンブール

シャトーブリアンの生誕地サン・マロの位置するブルターニュ地方はフランス西部大西洋岸沿岸の地域である。18世紀においてはフランスの辺境地域であ

った。これは地理的解釈ではなく歴史的、政治的な意味での辺境である。ブルターニュ地方は845年から主権国家を構成していたが、1523年フランソワ1世の治世にフランスに併合された。しかしながらその後はブルボン王家による絶対王政により中央集権が確立され、ブルターニュ地方は「パリ以外の場所」の存在でしかなかった。一方で、大西洋に接する地方であり、地理的には開かれた地域であった。ブルターニュという「地理的に開かれた場所性」(大西洋沿岸であり、港も多いこと)がその後の彼の人生に大きな影響を与えた(渡辺, 2007, Balcou, 1998 ほか)。生誕地サン・マロは要塞港湾都市であり、シャトーブリアンは「海」と「船」に囲まれて育ったこと、船員たちが「アメリカ」や「インド」について語るのを聞いて育ったといわれる。さらに彼が生まれる数年前に探検家ブーガンヴィル(Bougainville, Louis Antoine de, 1729-1811)がサン・マロに世界一周を終え寄港したこと、あるいはカナダを発見したジャック・カルティエがサン・マロ出身であったことが、かれを「旅」へといざなった要因とされる(Lund, 1986, Chinard, 1970 ほか)。つまり、サン・マロは「未知」の世界への「出発地」であった。



写真 5-3 港湾城塞都市 サン・マロ

2012年8月6日筆者撮影

貴族とはいえ、没落貴族であったシャトーブリアンの父親は家の再興に熱心であった。商売の才覚があり、私掠船の船長(*corsaire*)として大成功を収める。そこでコンブール城を買い取り、一家はサン・マロから引っ越す。

シャトーブリアンの名前には、ドがつくが、これは貴族階級に属することを示す。起源はギヨーム征服王の臣下にまで遡り、聖ルイの忠臣として十字軍に参加したほどであった。しかしながら、直系が断絶した後はフランス王家からの援助もなく零落する。経済的な困窮はもとより、フランス王家に対する屈折した感情も芽生えたといわれる(Roulin, 1994, Balcou, 1998 ほか)。一方で、ブ

ルターニュという地域にいらながらも、一地方に閉塞的に留まることなかったのは、血族的には中央と結びついていたという「誇り」によるものであろう。シャトーブリアン自身は、その後、「ウルトラ王党派」として「フランス」へと帰属する。シャトーブリアン家の紋章は朱色の地にブルボン王家のゆりが描かれているが、そこには「私の血でフランス国旗は染められる」(Mon sang teint la bannière de France)と記されている。

前述したとおりシャトーブリアンの父親は私掠船による商売での大成功によりコンブール城を購入し、一家の復興を遂げた。しかし、この城の周りは広大な森林があるばかりで、サン・マロのような賑わいは全くない。ここでの憂鬱な気持ちや友人もなく姉ジュリーと過ごす時間によって得られた「アンニユイ」(ennui)や「憂鬱」(mélancolie)が彼独特の感情となり、フランスロマン主義の父、シャトーブリアンを形成したといわれる。

彼自身も、次のように述べる。

C'est dans le bois de Combourg que je suis devenu ce que je suis, que j'ai commencé à sentir la première atteinte de cet ennui que j'ai trainé toute ma vie, de cette tristesse qui a fait mon tournement et ma félicité (Lund, 1986 : 8*)

* *Memoires d'Outre-Tombe* からの引用

「私が現在の私になったのも(私を形成したのも)、一生涯付きまとうことになったアンニユイを最初に感じたのも、私に苦悩や喜びをもたらしたこの憂鬱感を初めて感じたのもコンブールであった。」



写真 5-4 コンブール城

2012年8月7日 筆者撮影

フランス革命後、城は放置され、荒れ放題の状態が長年続いた。1847年にフロベールとデュ・カンが、ブルターニュ旅行中に見学に訪れ、その悲惨な状態を描いている。(第7章参照) 現在も、城はシャトーブリアンの子孫の個人所有であり続け、修復され、見学者に公開されている。整備された広大な庭が広がり、文学コースと看板がたつ近隣の緑豊かな公園とともに、ロマン主義発祥の地(Berceau de Romantisme)と語られる。

シャトーブリアンは、ディナン(Dinan)、ドル・ド・ブルターニュ(Dol de Bretagne)で教育を受けたため、コンブール城で暮らしたのは2年間に過ぎないが M.H.Viviani(2010)は「妄想の2年間 (deux années de délire)」と表現し、特別な2年間であったと言及している。

(2) 亡命

シャトーブリアンにとっての亡命とは、まず父からの亡命、すなわち、ブルターニュからパリに向かったこと(ブルターニュからの亡命)、次に祖国を離れ、アメリカへと旅立ったこと(フランスからの亡命)、さらにイギリスへと政治亡命したことである。ナポレオンがアンギャン公を処刑したことに抗議して公職を辞し、その後、オリエント旅行へと赴くが、この『パリからエルサレムへの旅程』も亡命行動としてみなすこともできる(Roulin, 1994)。亡命と旅が重複するのも、18世紀後半から19世紀中葉までの政治的不安な時期の特徴といえるだろう⁽⁷⁾。しかしながら、「旅」と明らかに異なり「亡命」であったのは、1793年から1800年の7年間のイギリス滞在である。知り合いもなく、貧困生活を送っていたが、英文学には精通することができた。シェークスピアの作品に出会い、ミルトンの『失樂園』を翻訳するなど、「イギリスロマン主義」を知った時期であった。『革命試論』*Essai sur la Révolution*(1797)を上梓し、「書く」活動も始めた。亡命中には、フランスにいる母と姉を立て続けに失う。しかしこの悲劇によって忘れていたキリスト教への宗教心に目覚め、帰国後に『キリスト教精髓』を上梓することになる。この作品が彼を「文学者」として世間に名を知らしめる。

「フランスを離れた時、私は若かった。この4年間の苦勞によって私は老いてしまった。4年前、田舎に蟄居し、相談する友人も、私の事を聞いてくれる人もなく、

昼間は生活するために働き、夜は悲しみと夢想によって書き続けた」

と『墓の彼方からの回想』の中で孤独の生活を語る。

しかしながら、この「孤独感」が、ロマン主義においては重要なテーマのひとつであったため、シャトーブリアンはフランスにおいてロマン主義作家の第一人者になれたのであろう。

また、ロマン主義は「他所」にも関心を注ぎ、シャトーブリアンを例にすると、他所は Sublime へと昇華する。「他所」にいる自分、さらには「他所」において自分が排除された世界（祖国フランス）を見る自分、つまり自分は Sublime にいる、さらには自分自身が Sublime となる。Sublime とは「崇高」と訳されるが、ロマン主義の文脈におけるキーワードのひとつである。一般的には「山」がその代表である。18 世紀以前は恐怖の対象でしかなかった山、あるいは山から見る景色が Sublime の対象となったが、シャトーブリアンは自分自身を Sublime とする。Sublime である「私」とは才能が備わった人間であり、哲学者であり、旅行家であり、思想家であり、行動力のある人間であり、金持ちではあるが貧困も知る完璧な人間であると結論づける。

「旅」、「亡命」という行為によってシャトーブリアンは「作家」、後には「政治家」になった。さらにシャトーブリアンにつきまとうイメージ、スタンダードのいう「鼻持ちならない」と形容する傲慢な人格をも形成したのであろう。旅がまだまだ一部の人間だけのものであった時代のヴォワイヤージュの優越感なのかもしれない。

(3) ルソー

18 世紀生まれのシャトーブリアンにとってルソーからの影響は大きく、アメリカの先住民への関心も、ルソー由来のものであった。『アタラ』で繰り広げられるアメリカ先住民の世界はルソーの「野生」(Sauvage)の世界であった。しかしながら、ルソーへの傾倒は後年変化する。その理由に関しては膨大な先行研究があり、この論文の主旨ではないので、ここでは変化があったことのみを記述する。『アタラ』の序文にみられるのは、ルソーのような「野生」(Sauvage)への礼賛の姿勢ではない。

「それにまた、私はルソーのような未開人の心酔者ではない。(中略)まったく

の自然状態」がこの世で最も美しいものであるとは信じていない。私はこうした自然状態を目にする機会を得たいたるところで、このような状態がいつまでもまことに醜いものであると思わざるを得なかった」『アトラ』の序文より（辻訳,1961）

ルソーによる机上の思考に対する、実際の「体験」に基づく反論であろうか。さらに、「山」への賞賛をするルソーに対しても反駁する。

Je suis bien malheureux, car je n'ai pu voir dans ces fameux chalets enchantés par l'imagination de J.J. Rousseau que de méchantes cabanes remplies du fumier des troupeaux, de l'odeur des fromages et du lait fermenté : je n'y ai trouve pour habitants que de misérables montagnards, qui se regardent comme en exil et aspirent à descendre dans la vallée (Dédéyan, 1973 :30)

「わたし（シャトーブリアン）はまことに不幸であった。ルソー氏のイマジネーションにより魔術にかけられたあの有名な山岳でみたのは、家畜のふんとチーズの臭いと牛乳の発酵する臭いで充満するバラック小屋だけであった。住民といえばまずしい山の住民ばかりでだれもが亡命者のようであり、谷への生活を熱望していた」（Dédéyan, 1973 :30）

あるいは、高い山に登ると、思考（瞑想）は、なにか崇高(sublime)なものになるとルソーは唱えるが、シャトーブリアンは賛同しない。

小倉は、山への感性の違いについて、アルプスの風景に親しんだルソーと、ブルターニュという沿岸地方で育ったシャトーブリアンの感性の違いについて言及する。（小倉, 2000）

一方で、若いころ、シャトーブリアンはルソーの『新エロイズ』*La nouvelle Héloïse*、『告白』*Les Confessions*、『孤独な散歩者の夢想』*Les Rêveries du promeneur solitaire*を夢中で読み、『エミール』*Emile*や『社会契約論』*Contrat social*の考えに傾倒した。しかし、貴族という身分により、政治的には曖昧な態度をとった(Roulin, 1994)。フランス革命後、多くの貴族が亡命したコブレンツに向かうことなく、アメリカという土地への旅立ちを選んだことが彼の意思、つまり亡命はするが、貴族の亡命を表象する場所にはいかないという意味を表明している。シャトーブリアンのアメリカ旅行に関しては、概要でマルゼルブ氏からの影響を述べた。ルソーはマルゼルブ氏の友人のひとりであった。多岐にわたりシャトーブリアンの周辺にはルソーの存在が確認されている。

シャトーブリアンは、『アタラ』、『ルネ』、『墓の彼方からの回想』の中でルソーに対する反論を述べる。自身の著書においてルソーはしばしば言及の対象となるが、ルソーとは意識せずにはいられない存在であった。シャトーブリアンを通し、ルソーという巨人も浮き彫りにされる。

シャトーブリアンのロマン主義、換言すればフランスロマン主義とは、根底には「ルソー」の「自然」、「平等」、「自由」、「感性」があり、イギリスロマン主義に合致したシャトーブリアンの「孤独」、「アンニュイ」、さらに「他所」への関心が涵養されたものと言えよう。シャトーブリアンとルソーはフランスロマン主義にとっては不可欠な存在であった。

第3節 パリからエルサレムへの旅

(1) 19世紀オリエント旅行の背景について

19世紀、シャトーブリアンを嚆矢として多くのフランス人作家が「オリエント旅行」を経験した。しかし19世紀前半の旅は大航海時代同様に帆船の旅であり、風のままに進路をとるしか方法は存在せず、陸においても、不確かな道を馬車で進むことしかできず、トルコ、シリア、エジプトへの旅は相変わらず危険であり、かつ孤独であったとベルシェは言及する(Berchet, 1985)。また、シャトーブリアンの『パリからエルサレムのへの旅程』に関しても、エルサレム、あるいはアテネまでの旅がせつかりすぎると非難する人もいるが、航海に必要な風向きを常に意識しなければならない旅において仕方のないことであり、実際エジプトにおいてはカイロを見る時間よりも、アレクサンドリアに旅立つための風を待つことに時間を費やした例を述べる。

一方でベルシェは19世紀中葉になると、アメリカで開発された蒸気船が、フランスでも運行されはじめ、とりわけ地中海での海上交通が、安全性においても、速度においても劇的に変化し、さらにはギリシャ・トルコ間の停戦とアルジェリアにフランス軍が駐留したことにより、とりわけフランス人旅行者にとっては、身の安全が確保されるようになったと言及する。

シャトーブリアンがエルサレムに旅立つのは1806年であり、旅の方法としては前近代の方法といえよう。つまり、陸路では馬車、海路では帆船を利用した旅である。「オリエント」という場所を定義するのは難しいが、本稿におけるオリエントとは、オスマン・トルコ占領下におけるギリシャ（しかし、西洋文明

の起源でもある), トルコ, シリア, パレスチナ, エルサレム, エジプト, チュニス (カルタゴ) である⁽⁸⁾. すでにオスマン・トルコの勢力は衰えていたが, 政治的には, アガやパシャによる「専制政治」, 文化的には「廃墟」で表象される地域である. 地元民 (ローカル) にいつ襲撃されるかわからない状況の下, 「旅人」の装備にも, 命がけであった「旅」の様子が反映されている (p107 参照).

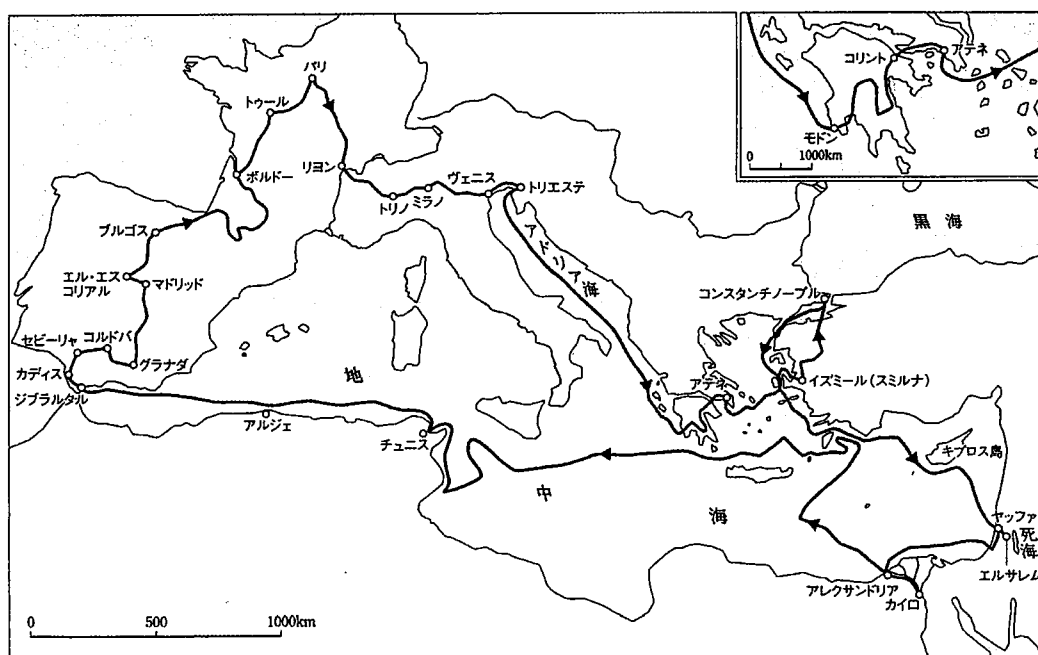
旅の同行者は, フランス人下僕ジュリアン(Julien)と, 旅先で調達した通訳あるいはジャンッセール(jannissaire)と呼ばれるオスマン・トルコの兵士であった. 1806 年当時, シャトーブリアンはすでに, 文学者であり, ナポレオンからも意識されるほどの政治家であった. 出発前に「辞任」してはいるが, フランスの高官であることには変わりなく, 旅先において, ギリシャではヴィアル(Vial)氏やアテネ在住のフォーヴェル(Fauvel)氏, エジプトでは, フランス領事に面会している (コロンではドイツ副領事). 領事家に宿泊しながら, 町を見学することもあった. 次の場所に出発する前には, パシャへの紹介状 (フィルマン firman) を携帯し, 形式的には身の安全は保障された旅であった. パシャの好意により, 通訳やジャンッセールが与えられていた.

Touriste あるいは Tourisme などといった「楽しみのための旅」を意味する単語が存在しない時代である. 特に, シャトーブリアンの場合は「安全な旅」を遂行するための義務感からか, 旅の途中において, 庶民との接触はほとんど存在しなかった.

畑(2003)はオリエント (オスマントルコ帝国) 特有の社会体制, 一般に「ミッレト」と呼ばれる異民族統治システムにふれ, 「分割された都市」としての一面を論じ, そのひとつの共同体「フランク人街」を紹介する.

「レヴァントでは『フランク人』と総称される西洋人のことである. 実際いくつかの都市では, 非常に古い時代から, 西洋から来た商人がある独立した地域を作って居住していたことが知られている. オスマントルコ帝国では 14 世紀から, これらの西洋人商人がその外国人の立場によって不利益を被らないように, 様々な恩恵が与えられてきた. 通常「カピチュレーション」と呼ばれるこの恩恵は, フランス, 英国, ロシアといった国々に治外法権を与え, 領事が独自に同国人を管理することを許していたのである. 西洋人はそれゆえ, オリエントの都市では「フランク人街」と呼ばれる一角に居住し, 帝国内の他の共同体と同じような自治権を享受していたのである.」(畑, 2003 :57)

『パリからエルサレムへの旅程』の行程については図 5-3 に示した通りである。1806 年 7 月パリを出発し、陸路でヴェニスまで向かう。8 月 1 日にトリエステからギリシャに向かい乗船する。モドンにてギリシャに上陸する。8 月 10 日からスパルタ、アテネ滞在（8 月末まで）し、イズミール、コンスタンチノーブルを経てヤッファ(現在のテルアビブ)へ、10 月 4 日にエルサレムに入城する。10 月 20 日にエジプト（アレクサンドリア）に到着する。その後はカルタゴ（現在のチュニス）、アルジェに立ち寄り、スペイン経由で 1807 年 5 月 3 日にフランス（パリ）に帰国する。



パリからエルサレムへ、エルサレムからパリへの旅程

図 5-3 『パリからエルサレムまでの旅程』図

石井(2009:4)より転載

(2) 旅の目的： 「イメージを捜しに」

序文において、旅の目的は次のように語られる。

Je n'ai point fait un voyage pour l'écrire; j'avais un autre dessein: ce dessein je l'ai rempli dans les *Martyres*. J'allais chercher des images; voilà tout.

私は書くために旅をしたのではない。私には意図することが別にあったのだ。『殉教者』の中で満たした意図である。私はイメージを探しに行ったのだ (*L'Itinéraire de Paris à Jerusalem* 序文より)。

イメージという曖昧な言葉を用いたのは、彼自身の「旅人 voyageur」の定義を踏まえての事だろう。彼にとって「旅人」とは、以下のような存在である。

Un voyageur est une espèce d'historien: son devoir est de raconter fidèlement ce qu'il a vu ou ce qu'il a entendu dire; il ne doit rien inventer, mais aussi il ne doit rien omettre;

「旅人とは歴史家の一種である、旅人の義務とは自分が見たもの、人々が話しているのを聞いたことを忠実に語ることである。何も作り出してはいけないのだ (何も付け加えてはいけない)。しかし省略することもいけない」存在である。 (*L'Itinéraire* の序文より)

つまり、シャトーブリアンが例に挙げる、シャルダン⁽⁹⁾(Chardin, Jean, 1643-1713)やタベルニエ⁽¹⁰⁾(Tavernier, Jean-Baptiste, 1605-89,) チャンドラー(Chandler, Richard, 1738-1810 考古学者)やマンゴ・パーク⁽¹¹⁾(Park, Mungo, 1771-1806)やフンボルト⁽¹²⁾(Von Humboldt, Alexandre 1768-1859)などの学者たちが、「研究」、「見聞」、「体験」、「報告」をするために必要不可欠であったものが「旅」であり、「旅行記」とはその成果を忠実に語る手段であった。ところが自身は、どの国も結局通過するだけであり、学者のように知識を深めることができなかった。うわべだけのイメージを展開するになるだろうという「前置き」であろう。しかしながら「『自伝(Mémoires)』として読んでほしい」⁽¹³⁾と読者に「読み方」までも強制(依頼)し、自伝であるから、旅行者である「私」は、自分の考えと自分の運に従って語ると、シャトーブリアン特有の「私」が発揮されることが宣言される。

「イメージを探しに行く」という曖昧な表現をするが、シャトーブリアンは、この旅を幼少の頃から決意していた。彼の家系をたどるという必然的な行動であった。

「シャトーブリアンは『パリからエルサレムへの旅』冒頭で誇り高く宣言する。われこそは「いにしえの巡礼者の思念、目的と感情を抱いて聖地を旅するために

国を出た最後のフランス人」であると、大革命によって深く揺るがされたスピリチュアルな価値の再建を生涯の使命とするこの『キリスト教精髓』(1802年)の著者には、巡礼者としての正統性が備わっている。何しろ彼の遠い先祖には、聖ルイ王の十字軍に加わった十字軍騎士がいるのだ。その先祖の話を七歳の時に聞かされて以来、彼は「エルサレムへの巡礼をつねに夢見てきた。夢を実現すべく、武装した従者を従え、自らもサーベル、ピストルに猟銃まで抱えて聖地エルサレムめざし進んでゆくその姿は、まるで若きボナパルトのごとき勇ましきさだ(野崎,2006:42-43)」。

先祖が聖ルイ王に仕えていたことは、その後直系が途絶え、落ちぶれたシャトーブリアン家にとって、唯一の誇りであり、Bannière(バニエール：紋章を配した四角の旗)に書かれた文字にもその誇りが読み取れる。シャトーブリアンにとって、エルサレムへの旅は十字軍の名誉回復のため、つまり先祖の名誉回復の「旅」でもあった。もちろん、『キリスト教精髓』、『殉教者』作者であるかれにとって、エルサレムはキリスト教徒としての巡礼でもある。またすでに、「アメリカ」を研究し、歴史に関しては「古代ケルト」や「古代ローマ」に関し、研鑽を積み、実際に「現地」を自分の目で見ている。しかしヨーロッパ文化の発祥地である「古代ギリシャ」の遺跡を訪れていない上、メンフィス、カルタゴの遺跡にも訪れていない(*L'Itinéraire*の中で述べている)。「高貴」なヨーロッパ人としての教養、おそらく近代人としての教養を完全に身に着けるためにも、不可欠な「旅」であったのだろう。

(3) 出版の理由

旅の目的を以上のように分析したが、旅行記『パリからエルサレムへの旅程』を出版した理由について、作家でもあり、大学で教鞭もとったフランス文学者のビュトール⁽¹⁴⁾(Butor, Michel, 1926-)は『パリからエルサレムへの旅程(1811)』は『殉教者』*Martyres*(1809)の読者のための作品であると説明する。『殉教者』の読者に場面設定される場所の歴史と地理的情報を供給するためであり、究極的には『殉教者』に *mettre les couleurs*(put the colors)を施すための作品であると言及する。*Couleurs* はカラー、色彩のことである。ビュトールによる解釈であり、シャトーブリアンが用いた用語ではない⁽¹⁵⁾。さらに、ビュトールも旅行記から具体的な例を示し説明するわけではないので、論者の推測ではあるが、

mettre les couleurs「色を付ける」とは、小説『殉教者』がより生き生きと展開するための工夫であり、オリエント的な色彩を施すための情報を記述する事であろう。シャトーブリアンのパリからエルサレムへの旅はガイド的性格を帯びた文学作品であったと言えよう。『パリからエルサレムへの旅程』の本来のタイトルは、*L'Itinéraire de Paris à Jérusalem, de Jérusalem à Paris*『パリからエルサレムへの旅程、エルサレムからパリへの旅程』である。ビュトールによると、一般的に、「旅行記」では目的地から出発点への記述、つまり帰路に関しては省略されることが多く、往路でいかに労苦や発見があった旅においても、帰りの描写はほとんどない。シャトーブリアンも、『パリからエルサレム』では往路だけが記述の対象となってしまうことを危惧した結果のタイトルであろうと言及する。さらに、ビュトールはシャトーブリアンにとってはパリでの「執筆行為」までも含めてひとつの旅が完結するものであり、mettre les couleursという作業がパリで行われたことを重視する。「旅行記」がより鮮明な印象を読者に与えるための作業である。

この mettre les couleurs という行為が、その後の couleur locale(local color)、ロマン主義作家達が、ピトレスク（ピクチャレスク：絵のような）と同様に夢中になった「地方色」へと異化し、自動化され、フランスロマン主義作家の旅行記の特徴の一つになった要因であると考ええる。

(4) ギリシャ

Voyage en Orient (Berchet, 1985)で、19世紀フランス文学者によるオリエント旅行記の体系を示した J=C.ベルシェの解説によると、ギリシャは、遺跡や、キリスト教と共に発展した古い文化の存在から西洋と言われるが、19世紀のギリシャはヨーロッパにとって、紛れもなくオリエント地域であった。一部が政治的に独立していたとしても、古代トルコの一地方であるこの地域は食習慣や服装から、あるいは気質からもレヴァントの空間（地中海東岸一帯の古称、フランス語で Levant）であったと分析する (Berchet, 1985)。

また、ビュトールは、18世紀の人間にとって、ギリシャとは古代ギリシャのことであったと明言する。ケルト学、古代ローマに関する研鑽を積んだシャトーブリアンにとって「古代ギリシャ」は学問を完成する上で必要であった。

(Butor, Berchet, 1985 ほか) ギリシャに行くことは悲願であったに違いない。それは旅程にも示される。シャトーブリアンの乗船した船は、トリエステから

スミルナまで直接行ける船であったのだから、「巡礼」だけが目的ならば、ギリシャに立ち寄る必要などなかったのである。召使いのジュリアンを船に残しスミルナで合流することにして、シャトーブリアンだけがギリシャに上陸する。上陸後は通訳兼召使いのジョゼフを新たに雇い旅を続ける。

19世紀の旅人は、地理上ではオリエント領域と認識される場所に、西洋の根源を求めに旅立ったのである。現在でも「ギリシャ」の両義性は語られるところである。西洋哲学の発祥の地、遺跡、キリスト教徒の点において西洋と認識されていたが、EUへの加盟によって「ヨーロッパ」の一国であることが国際的に認知された。しかし、2012年「財政危機」の状態を生んだ体制に「非ヨーロッパ的」な要因が求められている。本章のテーマではないが、オリエント対西洋という二項対立の成立の難しさを「ギリシャ」が示している。

さて、シャトーブリアンであるが、1806年7月13日パリを立つ→ミラノ→ヴェニス→（船）→トリエステ（フランス領事セギエ(M.Segurier)氏がスミルナ行きの船を用意）→アドリア海の島々、ファノ島→8月10日ギリシャ・モドンへと入る。

ギリシャに向かう喜びは、

「つまり、私は、古代ギリシャとの境界、古代ラテンとの境界にいた
ピタゴラス、アルキビアデス（ソクラテスの弟子）、スキピオ、シーザー、ポンペイウス、シーザー、アウグストゥス、ホメロス、ヴェルギリウスらはこの海を渡ったのだった。名もない旅人(voyageur obscur)である私は、あのギリシャとイタリアの偉人たちを乗せた船が打ち消した痕跡の上を辿りながら、偉人たちの祖国にミューズを捜しに出かけようとしていた！」(GF, 1968:57)

と表現される。以後、古代、神話にまつわる話、地名の由来などが続く。シャトーブリアンの「ギリシャの旅」は「古代を探す旅」であり、1806年に古の歴史を投影するタイムトラベルであった。

ギリシャの旅程については図5-4の通りである。

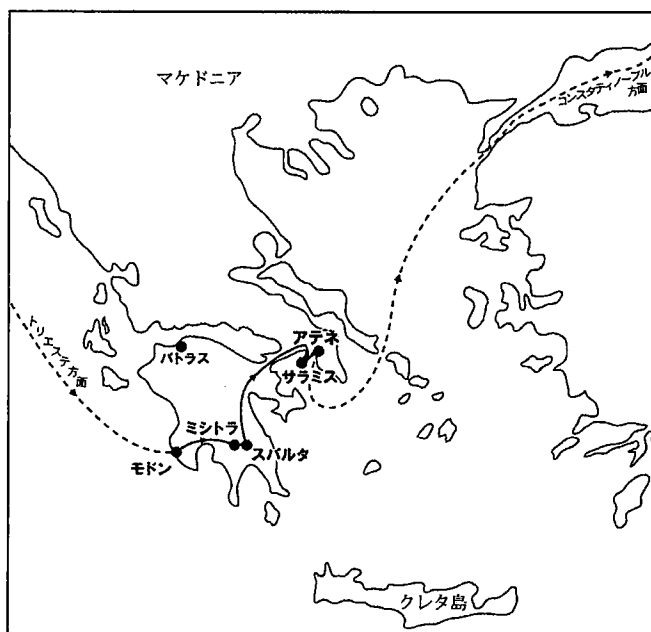


図 5-4 シャトーブリアン人のギリシャの旅程図

筆者作成

1) モドンまで

旅の同行者に関してだが、ヴェニスまではシャトーブリアンの妻も同行していたが、ヴェニスからは家来のジュリアン、次に、スミルナまではミラノ出身で現代ギリシャ語を話す商人ジョゼフも随行する。最初の港モドンでは、港から半リユ(約2キロ)のところで水に浸かってしまう。武装した兵士(jannissaire ジャニッセル)の救助を受ける。シャトーブリアン一行を興味深そうに見ていたトルコ人も、海に入って船を曳く。モドンは静かで忘却の町のようにあったが、パリを出発してわずか一か月でオデュッセイの近況を尋ねるテレマックも居たであろうこのギリシャの道に来たと感慨深い。モドンではフランス領事ヴィアル氏の紹介によりアガ (Aga: オスマントルコの高官) に謁見する。アガは彼らにジャニッセル一人と馬を用意し、安全に旅が継続できるようにとの配慮を受ける。モドンにはフランス人の役人が常駐していないため、ドイツの副領事宅に宿泊する。シャトーブリアンは歓待され、スイカやブドウ、黒パンなどの接待を受ける。一方で家来のジュリアンは船で待機。ジョゼフもドイツ人宅には宿泊していない。つまり、知事から直接受けるホスピタリティーは、シャトーブリアンだけであった。

次に、モドンからコロンに向けて出発するが、かれらの服装に注目したい。

「ガイド（あるいはギリシャ人の御者）が先頭に立ち、予備のための馬も手綱につけている。次に、ターバンを巻き、ピストル2丁、ベルトには短剣を差し、わき腹にはサーベルをつけ、手には鞭をちらつかすジャンニッセル、その次に私が続く。わたしもほぼジャンニッセルと同様の装備であるが、それに2丁の猟銃も加えていた。最後に、ジョゼフが続いた」(GF.1968 :66)

(ジュリアンは船で待機中)

シャトーブリアンにとって旅の楽しみのひとつがフランス人の功績を見つけることであった。フランス人の優越性を再確認し、さらには、旅行記に記すことにより、読者に対しても自国の優秀さを知らしめ、ナショナリズムの高揚へと導いたことは否定できない。

「正しい価値判断のできる国民を持つフランス、その国民の功績を辿るのが好きだ。功績がないところなどあるのか？コンスタンチノーブル、ロドス島、シリア、エジプト、カルタゴ、私が行ったあらゆる場所に(中略)、フロリダのポプラの木々の下にもフランス人兵士の墓はあるのだ」(idem:68)

つまり、フランス人の功績はいたるところにあることを言いたいのであろう。

2) コロン（港町）

領事のヴィアル氏の家に宿泊するが、ここでもすばらしい歓待を受ける。シャトーブリアンは、オートリーヴ(Hauterive)氏に、タレーラン⁽¹⁶⁾(Talleyrand)氏にエシェル地域(Echelles)⁽¹⁷⁾におけるフランス領事宛ての推薦状を書いてもらうように頼んでおり、その手紙のおかげで歓待を受けていることを自覚している。ヴィダル氏はシャトーブリアンのために町を案内するばかりでなく、ジャンニッセルも用意し、モレ（ペロポネソス半島の町）からアテネまで随行させた。さらにヴィダル氏はモレのパシャへの手紙とミシトラのトルコ人宛の書簡もシャトーブリアンに託した。(シャトーブリアンの身の安全を保証するため)

メッシリア、アルカディア、ラコニアに接する山間の隘路にあるカン kan（隊商の宿舎）で宿泊する。そこで、トルコ（ギリシャであるがトルコに占領されているため）に対するシャトーブリアンの偏見が吐露される。

En Turquie, toutes les institutions publiques sont dues a des particuliers ; l'Etat ne fait

rien pour l'Etat. Ces institutions sont le fruit de l'esprit religieux et non de l'amour de la patrie : car il n'y a point de patrie.

「トルコにおいて、国の制度（機能）のすべては個人によるものである。国家は国家のために何もしない。様々な制度は宗教心の賜物であり、祖国愛がもたらしたのではない。なぜなら、ここには祖国など少しも存在しないのだから。」

(idem :75)

泉も、カンも、橋も、すべてが廃墟となっている。トルコでは近代所産 (fabrique moderne)を見たことは一度だってない。そこから結論づけると、イスラム教徒たちの国では、宗教は弱まり、その宗教とともにトルコ人の社会国家もまた潰れようとしている。荒廃したイスラム社会にイスラム教の墮落、さらに宗教の墮落がもたらす社会の崩壊を言及する。

Trippolizza (トリポリッザ) 近くで、武器を見せるようにパシャの警備兵に言われ、互いの武器を交換し合う。長い間吟味された上、最後にはシャトーブリアンの頭上で、警備員は引き金を引いた。この経験によって、二度とトルコ人の前では、ふざけたことは言わないと決める。

「トルコ人というのは恐れられていないことがわかると寛容であるが（大人しいが）、恐れられていると感じると、横柄になるのだ。私がフランス人であることがわかると、パイプを差出し、武器を返した」 (idem :79)

つまり、警備兵を恐れたシャトーブリアンの姿が暴露されている。

3) モレアス (Morée) の首都トリポリッザ Trippolizza にて(8月14日)

パシャの通訳官 (drogman)の所に赴き、できるだけ早く許可書⁽¹⁸⁾を発行するように要求した。しかし若い通訳官はイタリア語で、まずパシャは病気であり、すぐにはできないと対応した。次に、パシャは女の所へ訪問中であり、待機するようにと命じる。シャトーブリアンのせかす言い方から、フランス人はいつも慌てていると非難する。イスラム諸国では、欧米と時間の流れが違うことを示しているのであろう。

シャトーブリアンは待ちきれず、形式的な手続きとして願い出ただけであって、許可書無しでも問題ないことを告げる(トルコとフランスは友好関係にあった)。それなら、なぜ願い出たのか疑問は残るが、より安全な旅を考慮しての行

動、あるいは自分自身の立場、つまり「政治家」あるいは著名な「作家」であることを考慮してもらうための行動であったのかもしれない。

「私は部屋を辞したがその一時間後、通訳官 (drogman) が『すぐに手続きしましょう』と言いに来た。私の口調から、なにかとても重要な人物とみなしたようであった。そして、私が彼の主人に告げ口するのではないかと恐れたようであった。パシャ (Sa Granderu=Pacha) の所に行って、私の用件について話した方がいいとのことであった。2 時間後タルタル人が迎えにきて、パシャのところに向かった。パパスとモレの長老のいる部屋で待機させられた。彼らの振る舞いから、なにかわれわれのためのレセプションが用意されていることを感じた。醜い恰好をしていたので困ったことに思われた。パシャに謁見しにやってきた外国人というよりむしろ野営から出てきた兵士のようにであった」 (idem :79)

4) パシャとの面会の場面

シャトーブリアンは手を胸の上におき、パシャに敬礼した。領事からの手紙を差し出し、フランス人という特権のおかげで順番を待つことはなかった。パシャは「どこから来てどこに行きたいのだ」と尋ねた。シャトーブリアンは「エルサレムに巡礼に行くのです」と答えた。さらに、キリスト教の聖地への途中中であり、その後はローマの古代遺跡を見に行くことを伝えた。モレアスに立ち寄った理由は、馬を確保するため、それから Isthme (イトム：オデュッセウスの国) に行くための許可書 (firman de poste) を嘆願するためであることを話した。パシャは「歓迎します」と答えた。シャトーブリアンは自由に町を見学する許可、および許可書 (firman de poste) に関しても快諾された。パシャは、シャトーブリアンに「兵士なのか、エジプトの戦いに参加したことがあるのか」を聞いた。「どんな意図をもってこのような質問を私にするのかを理解できなかったが、兵士だったことはあるが、エジプトには一度も行っていない」と答えた。パシャはかつてアブキール (aboukir) の戦い⁽¹⁹⁾でフランス人に捕らわれたことがあるが、フランス人に手厚い扱いを受けたこと、その恩を忘れたことはないことを告げる。つまり、フランス人には好意的な人物であることが判明する。領事からの手紙は当然なことであるが、フランス人という国籍もまたシャトーブリアンにより安全な旅を保障していた。

5) トリポリッザ

「トリポリッザの町は完全に近代化されていた」と皮肉る。なぜなら、近郊の畑で多くのメダルが発掘されており、シャトーブリアンもひとりの農民から3つを購入したのだが、暗い中の交渉の上、高く売りつけられてしまった。ギリシャでは、旅行者を見ることによって、(旅行者の行動を知って) 彼らの古代の価値を知り始めていた。

ローカルにとって価値のなかったもの、ローカルが価値を知らなかったものが、旅行者の行動によってその価値を知るという現象である。

「廃墟の中でふらふらとぶらつきながら、遺跡のなかに、非常に新しい落書きがあるのをみつけた。それは壁にクレヨンで書かれたフォーヴェル氏の名前だった。」

(idem :83)

シャトーブリアンは、旅行者の楽しみのひとつ(旅行者でなければ味わえない楽しみ)として、突然、初めて足を踏み入れる遠い国で、祖国を思い出させる名前(知り合いの名前)を見つけたときの喜びをあげる。現在、旅先における「歴史的建造物」への落書きは、嚴重注意事項であるが、19世紀当時、旅先での「落書き」は習慣化されていたと考えられる。エジプトのピラミッドへの落書き、アルプスでの落書き、スイス、レマン湖のシオン城にはバイロンの残した落書きがあり、現在では観光資源となっているほどである。

6) ミシトラ (ミストラ : モレアスのまち)

シャトーブリアンはヴィダル氏がミシトラのトルコ君主、イブライム・ベイに親書を書いてくれたおかげで、宮廷に招待される。つまり、ミシトラにおいても、まず「宮廷」を目指す。宮廷内での様子は以下の通りであった。

「ゲストルーム(salle des étrangers)に入ると、私のような旅行者であるイスラム教徒とイブライムの客でいっぱいであった。私も彼らのように、武器を壁にかけた。だれもわれわれに話しかけることはなかった。身分を聞くものもない。それぞれ、たばこを吸い続けるか、となりの人と話続けるか、眠り続けるかであり、わたしに目を向けることはなかった。」(idem :85)

イブライムは、フランス語半分、イタリア語半分で話しかけ、ジョゼフにはギリシャ語で話しかけた。病気の子供がいるため、きちんとしたもてなしをし

てあげられないことを残念に思うことを告げる。タバコとコーヒーが振る舞われた。シャトーブリアンはここでの休息中、外を見ながら、「ヘレネとメネラオスの国にいるのだ」と感慨深い。そして、人類の歴史に思いをはせる。さらにこれまでの旅、アメリカの森、ドイツでの道のり、イギリスのヒースの茂み、イタリアの畑、大海原での風景を思い出す。

数時間後、イブラヒムが病気の子供を連れてくるが、シャトーブリアンたちは効果のある薬草の名前を、もう無駄だとは思いつつも告げる。イスラム教の祈りが捧げられる姿を見て、最悪な宗教ではあるが、祈る姿には感動する。ジャニッセールに馬とガイドを迎えに出している間、食事が出される。食事の様子は以下のとおりである。

「私が長椅子で横になっている前に、低いテーブルが用意され、木製のプレートに鶏肉のミンチ入りライス(un poulet haché dans le riz)が載っている。指を使って食べた。鶏肉の後には、銅鍋に入った羊のシチューが給仕された、それからイチジク、オリーブ、ブドウが出され、最後にチーズが提供された(ミシトラチーズ)。料理を変えるたびに、奴隷が手の上に水を流し、もう一人の奴隷が大きな、真白い布で手を拭いてくれる。ワインは遠慮して飲まなかった。コーヒーのあと、ひげを洗うために石鹸が出された。」(idem :85-86)

異教徒である旅人への高度なホスピタリティーが読み取れる。フランス人であったこと、許可書(firman)を所持していたことがもたらす待遇の「特別さ」を示す事例とも言えよう。

食事最中にジョゼフを通し、シャトーブリアンはいくつもの質問を受ける。19世紀初頭、オスマン・トルコ支配下のギリシャにおいて「旅 voyage」あるいは「旅人 voyageur」がどのように理解されていたのかを知るうえで興味深い記述である。

シャトーブリアンは、

「あなたは、商人でも、医者でもないのに、どうして旅をしているのでしょうか？」(idem :87)と問われ、

「人々を観察するためです。とくに死んでしまったギリシャ人たちを」と答えた。この答えに人々は笑った。そして、直接会話できない状況から、

「トルコに来るのなら、トルコ語を学ぶべきであったですね」と返答される。

確かに、オスマン・トルコという広大な領域を旅するのであれば、「語学」へ

の準備も必要であると思われるが、シャトーブリアンにとってトルコ語、イスラム教徒の言葉を学ぶことは論外だったにちがいない。また、当時、レヴァント地域においてはイタリア語が共通語として認識されていたため、フランク街を中心に行動したであろうシャトーブリアンにとって、言葉の問題はさほど大きな障害ではなかったのではないだろうか。(シャトーブリアンはイタリア語を理解する)

失笑されたシャトーブリアンは最良の返事を見つける。

「エルサレムまでの巡礼の旅なのです」(idem :87)

と答えた。この答えに対し、

「Hadgi ! Hadgi !素晴らしい！」との反響を得る。

質問をした相手を完全に満足させることができた。シャトーブリアンは、「宗教は共通言語（普遍の言語）のようなものである。このトルコ人は私が単なる好奇心によって祖国を離れたことは理解できないが、墓で祈祷するため、神にいくつかの繁栄あるいは不幸からの解放を願うために行くことは自然と理解できるのだ」と感想を述べる。

また、食事を供されたゲストルーム (Salle des étrangers) での出来事で心に残るものとして、食事風景がオリエントのかつての風習を思い起こさせたことや、貧しい客人が多かったが、全員が平等にもてなされていることを挙げる。もちろんシャトーブリアンも、その家来たち (ジャンニッセールとジョゼフ) 三人も平等に給仕された。この接待に関しトルコ人がアラブ人から借り受けた(学んだ)ホスピタリティーの美德と評価する一方で、食事中はコーヒー(最後に提供される)の段階まで奴隷も主人も一緒だったのにもかかわらず、食後、部屋を出るとすぐに奴隷の首を切ってしまうことに衝撃をうける。

首を切ったことへの理由はわからないが、この記述の結果、「奇習」あるいはトルコ人の「残忍性」が印象づけられている。

7) アミクレ(Amyclée ラコニアの古い町)への旅

旅人シャトーブリアンは「騙される」という経験をする。

「ジャンニッセールが新しいガイドを連れてきた。ガイドは Amyclée だけでなくアルゴまでの馬を調達するかどうかと聞いてきた。私は彼の言い値で、調達することにした」

実は、フィルマンを所持しているシャトーブリアンには払う義務はなかったのだが、「人々を知るために旅をしているのだ」と公言してしまったことから、「詐欺」にあう経験（「人々に騙されるという経験」）をも知らなければならなかったのである。彼は、自分の愚かさに腹をたてる。新しいガイドと、人は良いがとても無知なギリシャ人ガイドを伴って旅をした。

アミクレへの風景についての記述が続く。桑の木、イチジクの木、エジプトイチジクの木、スイカ、ブドウ、キュウリがなる風景をフランスのシャンベリーの光景に例える。果実が乾いたギリシャの風景に色彩を与えている。アミクレではアルバニア人に破壊された十数軒のギリシャ建築のチャペルが描写される。シャトーブリアンはフルモン修道士が1731年か32年に書きうつした寺院の過去帳(nécrologe)を探すが見つからない。破壊の勢いはすさまじく、ある旅行者が数か月前にほめたたえた最小限の遺跡さえ、次の旅行者は見るできないほどであった。

8) ミストラ城からの眺望：スパルタ

ギリシャでの最大の関心のひとつはスパルタを見ることにあった。ミストラ城からの眺めラコニア溪谷の素晴らしさを称賛する。しかしながら目的地であるスパルタ（ラコニアの都市）が見つからず絶望的になる。

「あらゆる人がアテネを見た。しかしわずかな旅行者のみがスパルタまで足を伸ばす。スパルタの遺構について描写した者は誰もいない。」(idem :92)

つまり、シャトーブリアンはスパルタの「遺構」について記述の第一人者になりたいのである。幸運にも（おしゃべりな）ギリシャ人ガイドのおかげで、廃墟を見つけることができた⁽²⁰⁾。ミストラ城から遠くに見える溪谷に見えるのは、数本の木々に囲まれた茅葺屋根だけであった。そこがスパルタであった。

「私の視線は全世界で最も有名な場所に立つあのみすぼらしい小屋にくぎ付けであった。涙が眼に溢れた。あの小屋だけが唯一スパルタのあった場所を教えてくれるのだ。」(idem :95)

ガイドは新しい遺跡 (ruines modernes) を見せたがり、アガやパシャたちの歴史を語りたがったが、シャトーブリアンは全く興味がない。ミストラ城から

下る途中、大司教館の前を通ると、扉のところでフランス人を待ち受けるパパス（東方教会の聖職者）に出会った。入りたくないとは思ったもののよい言い訳が見つからず、結局中に入る。パパスたちは感じが良い人ばかりでイタリア語を介し会話が行われた。外国人に慣れているようであった。

9) モレアス(la Morée)

「道はかなり安全である。食べ物もある。モレアスにおいて、旅は容易であった。とくにアメリカの未開を経験した人間にとっては。ペロポネソス半島への道ではいつもイギリス人に会おう。パパスたちは最近、イギリス人の古物商や役人を見かけたといっていた、ミシトラにおいてさえも、イギリス人の宿屋(Auberge Anglaise)と呼ばれるギリシャ人の家がある。(イギリス人のための宿屋) ローストビーフを食べ、ポートワインを飲んでいるそうだ。旅人はイギリス人に感謝しなければならない。ヨーロッパ全土において、イタリアでも、スイスでもドイツでも、スペインでも、アテネやコンスタンチノーブル、スパルタに至るまで、よい宿屋を作ったのはイギリス人なのである」(idem :96)

教会（大司祭館）の建物はドーム型であるが、シャトーブリアンはその大きさだけに感心する。さらに、もしそれが小さい建物であれば、ただの頭蓋骨にしかみえないとけなす。教会の中を案内されると司祭の図書室で、写本を見る。フランス語の印刷物、翻訳書を見せられるが、そのなかにイタリア語から現代ギリシャ語に翻訳された『アタラ』を発見したことを（翻訳者はギリシャ人で、ヴェニスでイタリア語版を見つけたものを翻訳した）わざわざ挿入するところにシャトーブリアンのエゴティズム（自己陶醉）が見られる。

教会を出た後バザールを通してイブラヒムの家に戻る途中、タユゲテ(Taygete)犬を買い、オデュッセウスを真似して Argus と名付ける。Argus とはオデュッセウスが育て、主人の帰りを 20 年間待ち続けた犬のことである。シャトーブリアンは「ホメロス」の世界にいる。

10) スパルタ

シャトーブリアンは念願のスパルタに向けて出発する。本当は一人で行きたいほどであったが、ジャニッセルを一人連れた。(ジョゼフとガイドは一度通ったユーロタスの橋で待ち合わせをしている)

「私がそのふもとにいたこの丘こそスパルタの城壁のあった丘なのだ。スパルタが私の目の前に広がった。私の周りには静けさのみがあるだけであった。大きな声で叫んだ。レオニダスよ！この偉大な名前を呼び起こすひとつの遺跡さえもない。スパルタは偉大な名前であったことさえ忘れられてしまったようだ」
(idem :99)

次に、その場所について調べ始める。歩数でその広さを確認し、自分の視界の範疇で、東、北の風景（歴史的、伝説の）を描写する。古代ギリシャを目の前の風景に投影させた「風景」を消費しているのである。

スパルタを見たこと、感じたことの感激は強く、

「1806年8月18日、午前9時にユーロタス川沿いにたった一人で散歩したことを私は生涯忘れないであろう」(idem :103)と述べる。その後ジョゼフたちと落ち合う。ミシトラから持ってきたパンとドライイチジクでの昼食をとった。シャトーブリアンはメモや場所のデッサンを取り始めた。その2時間後、城塞の西側の廃墟をふらつく。そこはレオニダスの墓があるにちがいない場所であった。廃墟の中で我々だけが「生きている」ことを感じる。シャトーブリアンは無駄だと思いつつ、レオニダスの遺灰ではないかと石さえも探した。城壁の西側に見えた塔の近くに、ライオンの彫刻であったかのような残骸を見ると、ヘロドトスが、レオニダスの墓の近くにはライオンの像があると書いていたことを思い出し探してみたが、無駄であった。

シュリーマン(Schliemann, Johann Ludwig Heinrich, Julius, 1822-1890)がトロイアの存在を疑わなかったのと同様にシャトーブリアンも「神話」を「歴史」の一部と確信していたのだろう。

「ジョゼフは頼んでおいたように19日の早朝3時に私を起こした。馬の準備を整え、出発した。スパルタを振り返り、ユーロタス川を見納めとした。この偉大な遺跡を目の前に感じる悲しみや二度と見ることもない場所を去る悲しみを我慢することができなかった」(idem :104)

「フルモン修道士とルロワはラコニア（スパルタ）に光をあてた第一人者であった（中略）私の調査が将来にまで行き渡るか知らないが、少なくとも私の名前はスパルタと一体化するであろう、忘却にあったスパルタを救った唯一の人間とし

て・・・」(idem:105)

と結局、自分の功績として印象付ける。

11) アルゴス (Argos)

異国に在住する外国人への言及がある。イタリア人医師 Avramiotti は領事のフォーヴェル氏とともに、地図に新しい地名の横に古い地名を書き入れる作業をしていたが、これは何年もその地に滞在したものでなければできない作業であると言及する。しかし、イタリアを恋しがるアヴラミオッティ(Avramiotti)氏を見て、

「人生が進むにつれ、人間の心には2つのものが戻ってくるものだ。それは祖国と宗教である。若い頃は、どんなに、両方を忘れていたとしても、遅かれ早かれ現れるものである」(idem:114)

と述べるが、おそらく7年間のイギリス亡命の体験からの発言であろう。

あらゆる旅人がコリントについて描写している。しかし、フォーヴェル氏によるとトルコ人たちは、もはやだれもこの地に入れようとしない。

シャトーブリアン自身も入ることができなかった。政治的な理由であろうか。付近を散歩する許可も下りなかった。

村の中心のかなり清潔なカン(隊商の宿)に宿泊することができた。ジャニッセールは日用品の買い出しに、ジョゼフは夕飯の用意をする。シャトーブリアンはその間、周辺を馬で散歩する。

12) メガラ(Mégare)

アルバニア人の家で宿泊をする。夕方6時前であったため、習慣通りに、廃墟の中をふらつく。かなり長い散歩のあと、アルバニア人のホストの所に戻ると、人々がシャトーブリアンに病人を見せようと待機していた。トルコ人と同様にギリシャ人たちも、フランス人には医学的知識、あるいは何か特別な秘儀を持っていると思っていた。

シャトーブリアンは

「見知らぬ外国人に向ける純粋さは何かに響くものがあり、昔の風習を思い起

こさせる。それは、人間の人間に対する高貴なる信頼感である。アメリカの未開人達も同様の態度であった」(idem :121)

と感想を述べる。

シャトーブリアンにおけるルソー的なソヴァージュ(savages: 野生)への礼賛がみられる描写ではないだろうか。と、同時に、自分というゲストは「上」で、ホストであるかれらは「下」という関係に根付いた賞賛である。

ホストから見たヨーロッパの旅行者への期待も表現されている。ギリシャに住むかれらにとって、ヨーロッパとは「先進的」な存在であり、たとえ「旅人」であったとしても、「教養ある」人種として認識されていたのであろう。ヨーロッパ人とは、医者、学者、とにかく、なんでも知っている人であった。ゲストである旅人もローカルに対し「記号的まなざし」を向けるが、ローカルもゲストを「記号的まなざし」というフィルターをかけ認識していたのである。

Je crois que la religion et l'humanité ordonnent dans ce cas au voyageur de se prêter à ce qu'on attend de lui : un air d'assurance, des paroles de consolation, peuvent quelquefois rendre la vie à un mourant, et mettre une famille dans la joie.

「宗教とヒューマニティによって、旅行者である私は、かれらの期待に応えなければならない。安全な空気、慰めの言葉などは死にかけたものを再生し、その家族を喜びでいっぱいにするのだ」(idem :121)

と、旅行者の義務を果たそうと瀕死の状態のギリシャ人の少女を看る。

「少女は死にかけていた。アルバニア人の農民が髪装飾のためにつけている銀のコインを外させた。三つ編みと金属の重さは脳に熱を貯めてしまうからである」(idem :122)

民俗学的情報も忘れずに記述されている。

「ペスト予防のためのカンフルをもっていたので彼女に分けてあげた。病人にブドウを食べさせ、最終的にはキリストとマリア様に祈った。私は、すぐに治りますよといったが、望みは薄いと思われた。多くの死に行く者をこれまで見てきたため、今回もそこに多くの希望は持てなかった。」(idem :122)

お礼にと女性たちからワインを勧められる。「病人を看て喜ばれる私」は「ホストの心に刻み込まれる存在」と格上げされ、「旅人の特権とは、たくさんの思ひ出を（旅先で）残し、見知らぬ人のたちの心の中で、時には自分の（旅人）友人の心の中より、より長く生き続けることである」と結論づける⁽²¹⁾。しかし、この言葉は恐らく『オデュッセイア』のホメロスの言葉⁽²²⁾を引用したものであろう。

フォーヴェル氏（アテネの領事）を知るアテネの人にイタリア語で話しかけられる。シャトーブリアンは、アテネの詳細、とくに遺構の情報を得ようと試みる。アテネの人は必ず「フォーベル氏はこのように語っています」と説明することから、フォーヴェル氏はアテネの地理にも歴史にも詳しいことが明らかにされる。

サラミス島には、もはや全くギリシャの面影がないことを嘆く。夜、感傷にひたりながら砂浜を散歩するが、「今、このとき、ギリシャでこの偉大な名前、テミストクレス⁽²³⁾を偲んでいるのは私だけだろう」と語る。シャトーブリアンがまなざすのは「古代」に対してなのである。

その晩宿泊させてくれた家族に御馳走をふるまう。ジョゼフが羊の肉を買ってくる。ジャニッセル以外は慌ただしく準備にかかる。ジャニッセルはパイプをくわえくつろぐ。

「全員テーブルについた、つまり、御馳走を前に地べたに座り込んだわけである。

主人はパンを焼いてくれたが、そんなにおいしくはなかった。しかしながら、柔らかく、窯から出したばかりのできたてであった。ケレス（豊穡の神）ばんざいと叫びたいほどであった」(idem:126)

アルバニア人の社会的地位はわからないが、おそらく役人ではない庶民との数少ない経験のひとつであったであろう。

シャトーブリアン一行は、翌朝（朝三時）にアテネに向かって出発した。アテネに向かうことは最大のイヴェントであったことが、正装していたことが記述されている。

「我々はこの記念すべき日のために正装で決め込んだ。ジャニッセルはターバンを巻き直し、万一の場合に馬の手入れをした」(idem:127)

アテネではフォーヴェル氏の家に向かう。『風光明媚なギリシャ旅行』*Voyage pittoresque de la Grèce*の著者 De Choiseul-Gouffier から託された手紙と、外務大臣タレーランからの親書を渡す。

フォーヴェル氏は前述のとおりアテネのフランス領事であるが、すでに長い間アテネに住み、学術的な研究を行っている。才能ある人物で、芸術家あるいは古代専門家であるとシャトーブリアンは言及する。

「アテネの描写に関しては、読者の方々はわたしにそれを期待していないであろう」(idem:131)

と述べた上で、著名な人物による先行文献の紹介をする。地図情報に関しても、自らは描写しないことを宣言する。さらに

「先駆者の先生方を踏襲した学術的な作品ではなく、日々、あるいは時間ごとに私がたどった道についての報告書のようなものであり、私の人生の一年間の日記として考えてほしい」(idem:132)

と告げる。

13) フォーヴェル氏宅での食事

メニューは羊の煮込み、チキンの煮込みであったが、半分フランス風半分トルコ風であった。ワインは美味であったが、松ぼっくりをワインの瓶の中に浸す習慣には疑問を呈す。

アテネではギリシャでの「土産物」に関して語る。近代観光は観光産業の登場を促したが、そのひとつが土産物店であろう。土産物とはゲスト（来訪者）にとっては旅の記憶を表彰するオブジェであり、観光地のホスト側にとってはその経済活動において重要要因のひとつである。しかし、1806年のギリシャにおいて観光産業は「無」の状態である。近代観光以前、「旅人」が「旅の思い出」として持ち帰ったものについて、具体例が記述される。「土産物」からも「旅の主体」の属性が明らかにされる。

「城塞から降りるとき、パンテオンの大理石の一かけをもらった。アガメムノンの墓石の一部を拾ったこともあった（はがした？）それ以来、自分が通り過ぎた

(見た) モニュメントの一部をはがすようになったのだが、ショワズール氏(Choiseul)やエルギン卿(Lord Elgin, -1841)が持ち帰ったものほど素晴らしいものではないが、私は満足している」(idem:147)

Quand je revois ces bagatelles, je me retrace sur-le-champs mes courses et mes aventures ; je me dis : « J'étais là, telle chose m'advient. »

「その品々を見ると、すぐに私は旅を思い出す。私はあそこにいたのだと」

14)エルギン卿のみやげものについて

エルギン卿と比較をしているが、エルギン卿とかれが持ち帰った品々について加筆する。エルギン卿とはイギリス貴族であり外交官である。1798年(32歳)コンスタンチノーブルのイギリス大使に任命された。イギリスの美術界に貢献したいという思いから、アテネの代理人を使い、遺跡からアクロポリスを持ち運ぼうと一部を解体した。膨大な数の彫刻をイギリスへ運んだ。まずは自身のコレクションとして自費で運びだし、イギリス政府に全部買い取ってもらう予定であった。莫大な費用がかかった上に、船の一隻が沈没し、引き揚げ作業にさらなる費用が必要となる事態に陥った。イギリス政府が買い取るが、エルギン卿がかけた費用には及ばなかった。その後、盗品は修復(かなりいい加減に扱われたといわれる)作業のあと、大英博物館で展示される。1980年代から、ギリシャ政府から返還の要請が出ているが、イギリス側は、「これはギリシャのみならず、ヨーロッパの遺産である」「大英博物館ではあるが、無料で一般公開されていることの価値」「当時の支配国オスマントルコの下承を得ていること」「ギリシャにそのまま放置していたらすべては破壊されていたであろう」などを理由にギリシャ側への返還を拒否している(関, 2001)。

エルギン卿が入手した品々は「土産物」というより「盗品」に近い。「考古学」の発展のためという建前のもと、ヨーロッパ人の傲慢さ、あるいはイギリスへの祖国愛からの行為だったのであろうか。ナポレオンもオベリスクをフランスに運ばせているが、19世紀前半のオリエントを旅する目的のひとつが、「研究」の名のもとに「遺品」を持ち帰ること、ル・ユナンの科学的言説で説明されたような科学的物証を求める旅であったと言えよう。次に、シャトーブリアンはホメロスの主人公との比較も行う。

「オデュッセウスはファイアケス人（オデュッセウスが嵐に難破して打ち上げられた島の住人）に贈られたたくさんの財宝がつまった大箱を持ち帰ったが、私はスパルタ、アテネ、アルゴ、コリントで見つけた 10 数個の石のかけらを持ち帰った。（つまり石のかけらしか持ち帰らなかった）フォーヴェル氏が下さった 3 つ 4 つの陶器でできたヘッド、ロザリオ、ヨルダンの水をービン、死海の水ービン、ナイル川の葦数本、カルタゴの大理石、アルハンブラの石膏を持ち帰った」
(idem :147)

さらに、シャトーブリアンは旅の費用について「私は 5 万フランを旅費に費やした」(idem :147)と語る。現在では 5 千万くらいに換算される費用であり、オリエント旅行は、承知の通り、一部の特権階級者に限られた冒険であった。

15) 女性についての記述

読者宛てに、アテネの女性たち、トルコ人、ギリシャ人、アルバニア人の風習について語る。詳しくは chandler の『ギリシャ旅行記』の 26 章を読むようにと前置きをしながらも、アテネの女性はモレアスの女性ほど大きくもなく、美しくもないと語り、とくに化粧の仕方がよくないと忠告する。ロマン主義時代になるとアングルの描く女性像オダリスクが記号化されたオリエントの女性像になるが、1806 年においては神話に登場するものの具現化されていないギリシャの女性像があったのであろう。しかしながら、古代の哲学者、文学者たちの名⁽²⁴⁾をあげ、彼らはギリシャの女性よりも外国の女性にひかれていたことを言及し、アテネの女性はいちどもその美貌で有名になったことはなかったと、ギリシャ女性の美に対し厳しい見解を示す。(idem :149)

16) 仲間との別れ

天候状況、風の向きが「旅程」を支配する。「旅」は自然と共存し、旅の主体である人間は、自然および「旅」に支配される。

「フォーヴェル氏はもう少し滞在したらどうかと勧めてくれたが、エルサレムへ行くための季節を逃したくなかったため、遠慮せざるを得なかった。北風はもはや 6 週間しか残っていなかったのだ。もしコンスタンチノーブルに着くのが遅かったら、西風によってコンスタンチノーブルで足止めされたであろう」(idem :161)

ギリシャをともに過ごした仲間との別れに際し、シャトーブリアンも感傷的になる。ヴィアル氏のジャニッセルに金を支払い、解雇した。主人宛ての令状を託した。多少なりとも危険の伴う旅において、一緒に過ごした仲間との別れはつらいものである。

「自己意識」の高いシャトーブリアンであり、常に自分が一番であることを望む、つまり一人で物事を進める人物であるが、「仲間」との連帯の重要さを、ギリシャでの数日間で実感したことが素直に語られる。寝食を共にしただけではなく、危険も同じように味わった仲間は「旅」の思い出の一部として存在し続ける。

次に、道中、奇妙な夢想をしたことが語られる。

「私はヨーロッパ全土に、革命に疲れ、平安を求めている誰もが、アテネの遺跡に癒されに來ること、私がそこでの安寧と休息を保証することを公表した。道を拓き、宿泊所を建設し、旅行者のためのさまざまな便宜を用意していた。オトラント⁽²⁵⁾からアテネに最短で、もっとも容易に横断できるようにレパント湾に港を買った。(中略)大学を創設し、そこでは全ヨーロッパの子供たちがギリシャ語の書き言葉と話し言葉を学ぶためにやってくる。農業も奨励した。スイス人とドイツ人の一群がアルバニア人と混じり合い、毎日新しい発見をするのである、そしてアテネは墓(廢墟)から抜け出そうとしていた。」(idem :162)

戦争や、革命無き平和な時代を夢見る。そして私こそがそれを実現する人物であると言っているのであろう。

シャトーブリアンは、荒廃したギリシャを旅して、「キリスト教」だけを価値ある存在とする。現代ギリシャ語までも、「腐敗」の対象とする。

「唯一宗教だけがそこで私たちを考えてくれていたのだ(私たちのためにあったのは、宗教だけであった)。ギリシャの新しい建物は、今日スパルタやアテネで話される腐敗した言葉に似ている。どんなに、それがホメロスやプラトンの話した言葉だと支持したとしても、下品な言葉と、奇妙な構成の混在はいつも異邦人たちの期待を裏切る」(idem :168)

さらに、歴史家として、ローマ帝国が墮落した理由とスパルタとアテネが崩壊した理由について考察を行い、前者が墮落した理由と後者が崩壊した理由は

異なることを帰納的に論証するが、「民主主義」が国家としてのアテネを衰退させたと断定する。シャトーブリアンの政治的な考え方が「アンチ近代」であることが披露される。

「強力な敵に立ち向かわなくてはならないとき、たったひとつの意思（民意）だけが祖国のために必要なとき、完全な民主主義の国家は最悪の国家である」(idem :172)

と言及する。

17)ギリシャに対するこれからの不安

キリスト教を捨てイスラム教に改宗してしまうのではないかという不安を吐露する。なぜなら、ギリシャ人には北の気質がない、南の人の多くの習慣を受け入れる、宗教も同じことであり、コーランに従うしかないだろう。モハメッドの本（コーラン）には、文明の原理はないなど、イスラム教への嫌悪感が記述される。

ギリシャの旅は以上である。

18) 考察

1768 年生まれのシャトーブリアンは 18 世紀の世界観を継承する。ギリシャへの関心は、オスマン・トルコ治下のギリシャではなく、古代ギリシャであり、ホメロスの世界である。1806 年当時ただの村であったアテネに感動し、場所さえもわからなくなっていたスパルタを確認する。自分こそが 19 世紀現在のスパルタを語る、記述する第一人者となることを宣言する。さらに、ギリシャの没落理由について省察し、夢想とはいえ、現実を目前に自分だったら、あるいは自分なら、古代ギリシャのような平和で知的な社会が作れることを語る。イスラム教については、厳しい見解を披露し続けるが、人々に対しては「素朴」であり、優しいまなざしを向ける。「素朴」への言及からはルソーの影響が滲む。

ホメロスの時代、ギリシャの国々では、異国から来た訪問客に対し「歓待」することが常であった（草皆訳、1998）

アテネで、シャトーブリアンたちが通り過ぎるのを見かけると、ギリシャ人たちは頭上で手を振り、「ようこそ！アテネの遺跡へ！よい旅を！」と叫んだ。ゲストを歓待する姿勢とともに、現在は、廃墟化した遺構の国に成り果てたが、ペイディアス⁽²⁶⁾とイクティノス⁽²⁷⁾の国であったことへのプライドを見る。

19世紀初めのギリシャの宿泊施設に関してだが、シャトーブリアンから「ホテル」の名前は聞かれない。領事からの親書を必ず携帯していたため、アガヤ・フランク街の領事宅に宿泊していたこと、また、まずしい地方では、カン（中東での隊商の宿舎；公設市場）を利用していたことが明らかになった。一方で、「モラレス」で見た通り、ギリシャにおいても、イギリス人旅行者、つまり楽しみを求める「旅行者」の存在がすでに増加傾向にあったことも明記されていた。その理由についてシャトーブリアンはすでに交通網の重要性を説いていたことがうかがえる。

「私がアテネに到着したとき、二人のイギリス人旅行者が旅立ったところであった。他にロシア人画家もいた。小さな村にすぎないアテネであったが、古代好きな外国人が頻繁に訪れていた。なぜなら、アテネはコンスタンチノーブルへの途上にあり、海路からもたやすくアクセスすることができたからである。」
(idem :134)

(5) エルサレム：キリスト教のゆりかご（生誕地）としてのエルサレム

ベルシェは19世紀、エルサレム（聖地）への巡礼の復活について言及する。

「巡礼とはパレスチナまでの平和十字軍(*croisade pacifique*)であり、彼らの旅程はシャトーブリアンの足跡を辿るものであった。つまり、近代エルサレム巡礼への行程はシャトーブリアンを嚆矢とするものである。しだいに、ツーリストの大群(*une masse croissante de touriste*)が出現し、エルサレムはトルコ人グループによる軽蔑的な保護下、少しずつ真正性を守りながら、ルルドのような存在になった」(Berchet, 1985 :589)

また、ベルシェはエルサレムでシャトーブリアンが期待したことは、本当、本物の「感激」を味わうことであり、ロドス島に着くと、すでに、7歳のときブルターニュの教会でナザレのマリアを前に洗礼を受けたことや、祖先である、シャトーブリアン男爵がサン・ルイ王についてオリエントに向かったことが想起されたことを述べる(idem)。

シャトーブリアン自身はエルサレムでの行動について、「Saint-Sepulcre 墳墓寺院を参拝する以外に聖地（テール・サント）のペール（神父様）に役立ちた

いという希望があった」と記述している。

1) 墳墓教会の記述

シャトーブリアンは修道院を9時に出た。2人の修道士と通訳と使用人とジャニッセルと共に、徒歩で、キリストの墓が収められている教会へと向かった。旅行者たちは皆、この教会について、この世で一番崇高な教会であることを述べ、哲学者、あるいはキリスト教徒としての考察をしている。歴史家でもある旅行者シャトーブリアンは何かを記述したい。しかし、何が自分に残されているのだろうかと自問自答する。すでに記述されたことをリピートする意味はないし、するつもりもない。しかしながら、聖地の描写は省略すべきではないという結論に至る。なぜなら、今回の旅のもっとも本質的な部分がなくなる恐れがあるからである。(この旅の最大の目的の一つは「巡礼」)長時間考えた後、エルサレムの主要遺跡について書くことにきめた。考察は以下の通りに決めた。

- ① Personne ne lit aujourd'hui les anciens pèlerinages à Jérusalem ; et ce qui est très usé paraîtra vraisemblablement tout neuf à la plupart des lecteurs (GF,1968 :271)

今日、昔のエルサレムの巡礼について誰も読む者はいない：つまり、多くの(現代の)読者のほとんどにとって、(すでに記述された事実であったとしても)全く新しいことのように映るであろう。

- ② L'église du Saint-Sepulcre n'existe plus ; elle a été incendiée de fond en comble depuis mon retour de Judée ; je suis, pour ainsi dire, le dernier voyageur qui l'ai vue ; et j'en serai, par cette raison même, le dernier historien Mais comme je n'ai point la prétentions de refaire un tableau déjà très bien fait, je profiterai des travaux de mes devanciers, prenant soin seulement de les éclaircir par des observations.(idem :271)

墳墓教会(L'Eglise du Saint-Sepulcre)はもはや存在しない；私が帰国してから、火事ですっかり焼けてしまったのだ；つまり、私はその教会を見た最後の旅行者なのだ。ということは、最後の歴史家でもある私は墳墓教会について記述する義務がある。

以上の二点からも、すでに旅行者によって記述があるエルサレムや墳墓教会について「旅行記」の中で記述することを告げる。しかしながら、「すでに素晴

らしい描写があるので、同じことをするつもりはない。私より前人の研究を利用しようと思う」と述べ、町や教会の様子については先行研究を利用する。シャトーブリアンにとって、「自分が一番」であることが、やはり不可欠なのである。

次に、シャトーブリアンは近年（19世紀初頭）の旅行者の旅の仕方について苦言を呈する。

「最初の旅行者は幸福であった。彼らは批判に晒されることが少しもなかった。まず、読者たちが真実と決して相反することのない宗教心（信仰心、信念）を持っていた。第二に、あるがままの国を見るための唯一の方法は、伝統と記憶（歴史）を踏まえてみるものだ」と皆が確信していたからである。実際、手には聖書と福音書をもって聖地を回る必要があった。（聖書と福音書をもって、実際に見ることが、何よりも求められた）もし、言い争いや言いがかりを（聖地で）したいと思うなら、これほど遠いユダヤに行くことはない。ギリシャやイタリアを旅しながら、ホメロスやウエルギウスに文句ばかり言う人をどう思うか？（しかし）これこそ、今日の旅の仕方なのである」（idem :282）⁽²⁸⁾

「書物の記述事項を確認することが旅の目的になっている」というシャトーブリアンの苦言である。

墳墓教会の記述は先行研究に任せて、「教会に入る」という旅行最大級の目的を果たした時の心境を語る。

「恐らくキリスト教徒の読者の皆さんは、今、この恐れ多い墳墓教会に入る時、私がどんな気持ちであったかを知りたいであろう。実際、その感情を言い表すことができないほどであった。一度にたくさんのことが、私の心に浮かび、特別な考え（感情に）に立ち止まることはなかった。約半時ほど、墳墓のある小部屋のなかで跪いた、視線を墳墓の石から反らすことはなかった」（idem :282）⁽²⁹⁾

シャトーブリアンはゴルゴタまで赴いた。エルサレムが旅のクライマックスであることが明らかにされる。

「ギリシャの遺跡に感動したが、聖地の眺めを味わうと、ギリシャの感動は小さいものである」（idem :283）

シャトーブリアンの服装であるが、フランス流の軍人の装いであり、侮蔑されることのないように毅然としたものであった。

2) 十字軍について

シャトーブリアンは、『パリからエルサレムまでの旅程』のなかで、

「18 世紀の作家たちは、十字軍を忌まわしい日の出来事として説明することを好んだ。私はこの無知で不当な行為に対し反論したい。十字軍は、言われているような愚か者ではなかった、彼らの主義においてもその結果においても。キリスト教徒は少しも攻撃的ではなかったのである」(idem :300)

と言及する。また、サイードは『オリエンタリズム』 *Orientalism* の中で、シャトーブリアンの姿勢について

「彼は至るところでアラブという東洋人^{オリエンタル}に出くわすのであるが、彼らの文明、宗教、習俗たるや、まことに低俗にして野蛮、かつ対立項的なものなのであって、それゆえヨーロッパによる再征服は当然のこととして行われなければならないのだ。十字軍は侵略などではなかった、と彼は主張する。十字軍はウマル[第二代正統カリフ、？—644]の勢力がヨーロッパに及んだことに対するキリスト教側からの反撃にほかならないのだ。そのうえ、十字軍が、かりにその原型において、あるいは後代からそれを見るとき、やはり侵略行為であったとしても、十字軍が提起した問題は、人がたくさん死んだというようなありきたりの問題をはるかに超越しているのだ、とかれは付け加える」(板垣、杉田監修、1993 : 393)

と紹介する。さらに、シャトーブリアンの十字軍の問題の本質についての言葉を引用する。

「十字軍は、たんに聖墓の解放をめぐっておこったものではなく、むしろ、この地上における二大勢力のうち、文明の敵として系統的に無知[これはもちろんイスラムをさす]と専制と隷従とに味方してきた宗派と、現代人の内に叡智にみちた古代の霊をよびさまし、彼らを卑しき隷従から脱却させた宗派と、そのいずれかが勝利を得るかをうらなうものであった」(前掲書 : 393)

『パリからエルサレムまでの旅程』においても、シャトーブリアンは、その意義においても、結果においても十字軍は愚か者ではない。近年、この（十字軍という）戦闘的な企てが、文学（文芸）と文化の進展（発展）に効果的（好意的）なものであったことを人々は認め始めたとする。19世紀にエルサレムへの巡礼が復活し、ベルシェが前述したように、ツーリストの大群がエルサレムを訪問するようになったことを踏まえると、シャトーブリアンの文学や文化の発展に貢献したという十字軍論も、21世紀という現在から見れば、「正論」となりうる。

シャトーブリアンが『パリからエルサレムまでの旅程』を出版した第一の目的は『巡礼者』*Martyre* の読者のため、つまり、彼らに『巡礼者』をより深く理解してもらうためであった。さらに『巡礼者』に *Mettre les couleurs* 色彩をつけることであったと言われる（Butor 1976）。「エルサレム」の章はその役割をつよく担った章である。「ギリシャ」のように記号的なまなざしによる描写はほとんどみられない。町の様子や物価、寺院の内部の様子からエルサレムという国の歴史が忠実に語られる。一方で、「最後の十字軍」と自称することからも、「エルサレム」、とくに墳墓教会参りへの感動が大きいことが記述されている。

3) 通りの名前についての報告(GF, 1968 :311)

人々が町と呼ぶこの瓦礫（残骸）の塊のなかで、砂漠状態の空虚な通路や市門にも名前をつけ楽しんでいることを報告する。町の区分けがかなり奇妙であったことを報告の理由として挙げているが、最大の理由は、旅行者はまだ誰もそのことについて報告していないこと、つまり、シャトーブリアンが最初の報告者になれるという判断からであった。

城門の名前は以下の通りである。実際はアラビア語であるが、フランス語訳が掲載されている（通訳に訳してもらったもの）。

La porte du Bien-Aimé（恋人の門）：西門。ベツレヘム方面への門

La porte du prophète David（預言者ダヴィドの門）：南門。シオンの丘のダヴィドの墓の正面にある

La porte des Maugrabins ou des Barbaresque（西洋人門あるいはバーバリ人門）：南東にある門。

La porte Dorée（黄金門）：東門。キリストが受難まえにエルサレムに入る際に通った門といわれる。

La porte de la Sainte-Vierge(聖母マリア門): オリーブ山に対して東にある門。サンテチエンヌが殉死するときに通った門であり、それを見ていたマリア様から、サンテチエンヌ門あるいは、聖母マリア門と呼ばれる。

La porte de l'Aurore(夜明け門): 北門。ジェレミーの嘆きの洞窟へと導く門。
3つのメインストリートの名前

La Porte de la Colonne ou de Dames(記念碑の門): 北西門。王の墳墓へと続く。
かつての巡礼者はこの門からエルサレムに入城した。

3つのメインストリート

La rue de la Porte de la Colonne(記念碑の門通り): 南北を縦断する通り

La rue du Grand Bazar(グランド・バサール通り): 東西を横断する通り

La Voie Douleureuse(嘆きの道): la porte de Vierge からゴルゴタへの道

7つの通り

La rue des Turcs(トルコ人通り)

La rue des Chrétiens(キリスト教徒通り) 墳墓教会からラテン修道院への道

La rue des Arméniens(アルメニア人通り) 城(墳墓教会)の東側

La rue des Juifs(ユダヤ人通り) すべての精肉屋がある

La rue près du Temple(テンプルの近隣通り)

さらに、門や、通りの名前から歴史事実を紹介する。

4) 外国人に対する反感(idem :315)

シャトーブリアンは、ある日は午後2時ごろ墳墓教会を出て、修道院へと戻った。パシャの兵士たちはホスピス⁽³⁰⁾を占領し、自由奔放に暮らしていた。自分の部屋に戻る途中、通訳のミッシェルと共に回廊を渡っている時、二人の若いオスマン・トルコ兵に出くわす。かれらは、頭からつま先まで武装し不思議な音を立てていた。しかしながら彼らにあまり恐怖を感じない。なぜなら、マホメットにとって不名誉なことに、立っていられないほど酔っぱらっていたのである。シャトーブリアンを見るや否や、大声で笑いながら通路をふさいだ。シャトーブリアンが立ち止まった直後に、兵士の一人がかれの後方にまわり頭から押さえた。

一方で、もうひとりとは鞆に収まってないサーブルの背でシャトーブリアンの首を叩いた。ミッシェルが大声をあげ始めた。シャトーブリアンは兵士の手をはずして、頭を押さえた兵士の喉元に飛びついた。一方の手でひげを掴みもう一方の手で壁に押さえた。兵士の顔は真っ黒になった。その後は手を

緩めた。シャトーブリアンたちは、ゲームにはゲームを屈辱には屈辱で仕返しした。ひげを掴まれるという行為はトルコ人にとって最大の屈辱であり仕返しをすることすら考えられなくなっていた。シャトーブリアンはヒーローとして描かれ、トルコ人兵士は「悪人」として描かれる。

エルサレムでは修道院に宿泊しているが、シャトーブリアンの宿泊した部屋について観察する。

「私の宿泊した部屋は巡礼者の大部屋と呼ばれた。暗い感じの中庭に面し、すべてが壁に覆われていた。家具は、病院にあるようなベット、緑のサージ織のカーテン、テーブルと金庫が一つ。私の召使たちは、私の部屋からはかなり離れたところに2部屋を使用していた。ツボには水があふれんばかり入っていた。イタリア式のランプ一つが部屋を照らす。部屋はかなり広いが、暗かった。私が先ほど書いた中庭に面した窓からしか陽は入らなかった。13人の巡礼者が扉、部屋側の扉に名前を書き残していた。最初に書かれた名前は、シャルル・ロンバールといってエルサレムには1699年に来た、最後はジョン・ゴードンといい、1804年と記されていた。私はこの13人の巡礼者（旅行者）の中で3人のフランス人しか見つけることができなかった。」(idem :334)

このエルサレムの章の特徴の一つに、日常生活に関するガイド的記述が展開することがあげられる。

エルサレムのワインは美味で、味はフランスのルシヨン地方のワインと似ていると評価する。果物に関しても、ブドウ、なつめ、ザクロ、スイカ、リンゴ、いちじくを食べ、パンも美味しかったと食べ物に関しては評価が高い。さらに、羊、仔牛、小麦、油、野菜の値段について記述する。野菜はとても高い（ヤッファや近隣の村から）。食料以外でも、また、カンや修道院に宿泊することを望まない人のために、部屋を借りることができることも情報として掲載するが、安全は保障できないと注意も促す。部屋の値段、さらに職人の賃金、土地の値段、農業など日常に関する情報を与える。次に、旅行者である、巡礼者の支出についても語る。巡礼者の支出についても語り、主な出費は、トルコ人やアラブ人に支払わなければならない税金、つまり、サン・リュウ寺院への参拝料金、カファリへ、あるいは通過許可を得るための料金であった。シャトーブリアンの支出ノートが掲載される。ノートは通訳のミッシェルによるもので、スペル間違いの多いイタリア語（シャトーブリアンの証言）で書かれている。今後の

巡礼者のための情報であろう。シャトーブリアンの巡礼は「文学巡礼」ともいわれるが、エルサレムの章では、実用的な情報が満載である。

また、「エルサレム」の名前は、オリエントの都市の中で別格であったことが明らかにされる。

「アテネでもスパルタでも自分の国にいるようには生活できないが、エルサレムはなおさらであった。その名前はたくさんの秘儀、謎を思い起こさせる。想像力を慄かせる。この驚異の町ではすべてが驚異でなければならない」(idem :344)

実際にエルサレムに行って知った驚きとして、カトリック（ヨーロッパ）の巡礼者が少ないことをあげる。教会はお布施と巡礼者の寄付により運営されるが、帰途を心配する巡礼者たちはそれほど寄付を残すことはできない。教会の困窮状態にシャトーブリアンは驚き、神父たちの働きに敬意を示す。（神父たちにとってはあたりまえのことであり、反対にシャトーブリアンの態度に驚く）。

一方でフランス外交官による働きかけが書かれている証書のコピーをみて、これほど遠方にまで、アジアの入り口にまで、心をかけるフランスの偉大さを称賛する。

5) 考察

先祖の名誉回復のため、あるいはキリスト教徒としての巡礼の旅である『パリからエルサレムの旅程』においてエルサレムはこの旅の意義において最終目的地であった。ギリシャで感動した風景も、エルサレムに比べると色あせるほどであったと感想を述べる。しかし、エルサレムも宗教施設以外は廃墟であった。とくに、カトリックの司祭たちへの援助が少ないことや巡礼者が少ないことを憂いた。ガイドブック的な実用情報量の多さは、自分自身の巡礼を契機にカトリック教徒の巡礼が増えるようにという戦略であったのではないだろうか。シャトーブリアンが巡礼を行った時代、エルサレムは、ツーリストの存在にはまだ遠かった。エルサレムにも、（フランス流に）武装して入場するが、この態度は巡礼者というより、むしろ「十字軍」の一員として入場することを好んだ結果であろう。ビュトールによると、当時エジプト遠征のナポレオン軍がエルサレムでも見かけられ、彼らを最後の十字軍と意識していたともいわれる。

(6) エジプト

エジプトは『パリからエルサレムへの旅程』の帰途上の地であり、本来ならクライマックスであったエルサレムの後の補足的な場所である。しかしながら、ナポレオンのエジプト遠征以来、流行の場所となったエジプトは、忘れられていた場所エルサレムと対照的な存在であった。エルサレムの章で披露された実用的情報は、「エジプトの章」において、多くの専門書や町に関する書物が出版されていたこと、『殉教者』の中ですでに記述したという理由から、ほとんど見られない。ここで展開されるのはむしろ、シャトーブリアンの管見である。

石川(2000)はエジプトの章に関し、

「シャトーブリアンの旅はまずエルサレムを目的地としていたのであるが、しかし『パリからエルサレムへの旅路』のなかでは、エルサレムについての記述は全体の四分の一にもみえない。ギリシャについてのほうが量的には多いし、またシャトーブリアン自身の感情や意見がいきいきと語られているのは、むしろエジプトの章のほうである。旅行記が書きすすめられてゆくうちに、いや、旅がつづけられるなかで、聖地巡礼の旅は古代文明をさぐる旅のほうへと重点を移していったようにみえる(147-148)」

と語る。一方で野崎は

「残念ながら、シャトーブリアンにとってエジプトとは、どうしようもなく進歩から取り残された惨めな国、『愚味なイスラム教徒』の国でしかなかった。同時代のエジプト社会に注ぐ彼のまなざしは冷ややかなものだ」(野崎、2006:174)

と言及する。

しかし「この光景に匹敵するは地上にまたとない」さらに「かくも壮大なモニュメントを築き上げた君主は高邁な精神の持ち主に違いない」と語るシャトーブリアンの言葉を引用し、

「しかしピラミッドに関しては称讃を惜しまない」(前掲書:174)

とピラミッドに寄せる特別な感情があったことを述べる。

ヤッファ(現在のテル・アビブ)に戻り、エジプトのアレクサンドリアへ向かう。しかし港には船がなく、陸路で行くことも面白いと考えるが、内紛が多い

ことを理由にすべての道（passage）がアラブ人によって封鎖されていたため不可能であった。10月16日午後8時、通訳のジャンと召使いのジュリアンとともにアレクサンドリアに向けて出港する。遠ざかるヤッハの夜景を見て、巡礼をおこなったことをうれしく回想する。アレクサンドリアまで4日を要した（4日しかかからなかったと表現する）が、地中海は穏やかでこれまでの船旅で一番こちよかったと感想を述べる。

一方で、今回は素晴らしい航行であったが、いつひどい旅になるかわからないとこれまでの経験から気を緩めることはない。船旅、つまり帆船の旅は運を天に任せるようなもので、人間の力ではどうにもならないことが頻発する。しかし、シャトーブリアンはそこに魅力を感じる旅の主体であった。船乗りの生活には、われわれが好み、縛りつけずにはいられないなにか冒険的な（危険な）魅力があるという。（*L'Itinéraire* の序文より）

「私たち」と一人称複数形で話すことから、「読者」も巻き込みながら「旅」に魅了されるのは「危険」と「楽しみ」という表裏一体の属性によるものであることを確認しているかのようである。渡辺一民（1976）も述べたように、シャトーブリアンという旅の主体は船員、冒険者、探検者であったと言えよう。

1) 辛辣な表現

アレクサンドリアはシャトーブリアンにとってアントニウスとクレオパトラの狂乱のパーティーが開かれた場所であった。しかし19世紀、文明が誕生した場所は無知と野蛮人の地に成り果てたと嘆く。専制政治は喜びだけでなく苦しみまでも打ち消すと告発する。

アレクサンドリアについて、補足する。

「1798年にナポレオン・ボナパルトがエジプトに上陸したころ、アレクサンドリアは6000人が住む小さな町であった。政治や経済の中心はカイロであった。しかし19世紀、アレクサンドリアは地中海において重要な地位をしめる港町となり、エジプト一番の港となる、とりわけムハンマド・アリーがアレクサンドリアを強化することを望んだ。1829年に海軍造船所を建設し、ヨーロッパ人に門戸を開放した。スエズ運河が開通するまで、インドへの道として必ず通る港であった。アレクサンドリアの役割は交通インフラにより強化される。1870年以降、カイロと紅海が鉄道で結ばれた。その上エジプトはムハンマドの経済政策下であり、綿の輸出国となり、アレクサンドリアから地中海へと輸送された。スエズ運河開通後

もアレクサンドリアの役割が減少することはなかった。19世紀末にはアレクサンドリアはエジプトの主要商業都市となった」⁽³¹⁾

アレクサンドリアでは、領事ドロヴェッティ(Drovetti)氏の家に宿泊する。かれの家は海辺で、商業港に面していた。ドロヴェッティ氏には帰りのチュニス行のオーストリア船に乗れるように便宜を図ってもらうなど、いろいろ世話になった人物である。ちなみにドロベッティとは、ナポレオンのエジプト遠征にも大佐として参加した人物であり、エジプトでの古代遺物の発掘・蒐集への貢献は大きい。(井手, 2001)

10月23日、ロゼッタに向け出発。ジュリアンは発熱のため領事の世話に、そしてジャンをコンスタンチノーブルに送り返したため、領事にジャニッセルをひとり与えられた。エジプトにいるからにはナイル川とピラミッドは見たいと強く希望する。実際にナイル川を見て「ナイルはまさしく美の中にある(Le Nil était dans toute sa beauté)」と感動する。

ロゼッタでは、こんなに素晴らしいデルタを見たことがなかったと自然の作り出す風景に感嘆する一方で、そこには自由政府がないことを嘆く。反近代精神のシャトーブリアンと言われるが、「自由政府なくして幸福な国民は存在しない」あるいは「独立なしの『美しい国』などない」と断言する様子は、あきらかに「近代人」であった。ロゼッタの澄みきった空とその下にある現実社会とのギャップが描写される。さらにそこで強調されるのは、わが祖国、フランスの素晴らしさである。

「私はわが祖国の栄光の記憶以外に、雄大な平原の光景にふさわしいものを見出すことができなかった」(野崎, 2006:176)

ロゼッタのフランス領事サン・マルセル(St.Marcel)氏による歓待を受ける。そこでフランス人商人のカフ(Caffe)氏と知り合いになり、カイロまで同行する。安全のためアルバニア人の隊長も同行する。しかしながら、カイロまでは、天候不良のため、7日間に及ぶ死を意識した旅が続いた。

2) ピラミッド

ナイル川を船で遡上しピラミッドに接近したシャトーブリアンは

「われわれはピラミッドから十里以上離れたところにいた。なお 8 時間近く船が進んでいくあいだずっと、私は甲板でそれらの墳墓を眺めていた。近づくとつれてそれらは大きくなり、天に昇っていくかと思われた」⁽³²⁾(前書：176)

とピラミッドに感激し、次に「初めてピラミッドの姿を見た時、賞賛しか感じなかった」と述べる。さらに、「大きな建物というのは人間社会全体の栄光を表象する本質の一つである」⁽³³⁾と言及しエジプトの栄光を称賛する。ピラミッドを見たエジプトへの感激はなおも続き、「エジプトが世界で一番美しい国に見えた⁽³⁴⁾」と称賛をおしまない。シャトーブリアンはファラオの墓(ピラミッド)を見るためにさらに 5 日間をカイロですごしたが、結局無駄に終わる。ナイル川の水がひかないため、馬でピラミッドまで行くことが出来なかったのである。船で行くためには水位が低すぎ、アラブ人さえも 3 週間か 1 か月くらい待たないと無理だろうと判断した。もしそうするなら、シャトーブリアンはエジプトで冬を越さなければならず、都合が悪かった。すでに悪天候等により何度も足止めされていた。「ピラミッドを見るために、フランスを二度と見られないのか・・・」と悩んだ末「ピラミッドには触れることはできないが、この目で見たではないか。これで満足してアレクサンドリアに戻るべきだ」と決意する。しかしながら「私」がピラミッドを見た足跡を残す必要性を感じ、M.Caffe に、(私は行くことができないので)私の名前をピラミッドに書いてくれるように頼んだ。シャトーブリアン自身はかつてのローマ人の慣例のようだと述べる⁽³⁵⁾。

シャトーブリアンは、ピラミッドに行けなかったこと以外はカイロの町に満足する。その理由として千一夜物語が表象するようなオリエンタルな町であったことを挙げる。西洋人が期待するオリエントの世界、あるいはオリエント的雰囲気のある町であったのだろう。一方でフランス人が多いことを伝え、その影響として女性たちの文化的な変容を示唆する。「女性たちが控えめではなくなった」「ヨーロッパ風の身なりをしていて、バカにするのには程遠かった」などの表現がみられる。カイロを初めて訪れたシャトーブリアンが比較するのは、神話によってコード化されたカイロの女性や風習であり、それは、ヨーロッパ人によるオリエントの消費の仕方を代表するまなざしであった。

カイロの後、再びアレクサンドリアに戻ると、シャトーブリアンの希望通りに、M.Drovetti 氏がチュニス行のオーストリア船の手配をしていたが、天候不順により 10 日間アレクサンドリアで足止めされる。この間、アタラの作者であることを知られ、アタラ氏と呼ばれる経験をする。

3) 考察

エルサレムというクライマックスを経験した後にもかかわらず、「エジプトが一番美しい国に見えた」という感想を与えたものはやはり「ピラミッド」であろう。「どうしようもなく野蛮な国」と言いつつも、文明発祥地のひとつであるエジプトの歴史には賞賛を惜しまない。エジプトでシャトーブリアンが告発するのは「イスラム」「専制政治」である。さらにそこに住む人々を「野蛮人 Barbar」と総称してしまうのだが、その姿勢が、『オリエンタリズム』の作者サイードによる厳しいシャトーブリアンへの見解へと流用されるのであろう。

エジプトでは悪天候が続き、領事による援助や、保護を受けている特別な旅行者であってもピラミッドへの登頂を果たせなかった。天候や自然に抵抗できない厳しい旅の現実が語られる。シャトーブリアンには消化不良の旅であったのではないだろうか。しかしながら、Caffe 氏にピラミッドへの署名を依頼したことで、「ピラミッド登頂」は彼の中で完結しているとも思われる。今日、ピラミッドにシャトーブリアンの署名があることは報告されていないが、もし発見できたなら、当時、遺跡に（無残にも）残された数々の署名の懐疑性（ほんとうに本人が書き残したのかどうかについて）を証明する事象のひとつになるであろう。エジプトでのフランス人の多さも語られていたが、スエズ運河開通以前である 19 世紀初頭においてアレクサンドリアはインドへ向かうためのイギリス人の駐留場所でもあったことから相当数のヨーロッパ人がいたと考えられる。近代 Tourism とはまだ言えない時代であるが、シャトーブリアンが述べているように、服装においてはすでにゲストの影響を受けたローカルの姿があった。

第4節 旅の主体、シャトーブリアンについての考察

シャトーブリアンは一人で町を散策することもない。しかしながらホスピタリティに関する描写や「ゲスト」が及ぼしたであろう「ローカル」の近代化に関しての言及もある⁽³⁶⁾。後者の関係性に関しては、サイードが『オリエンタリズム』の中で厳しい目線で言及する関係性の定型⁽³⁷⁾にそぐわない表現もあり興味深い。一方で、保護された旅行者と言っても、貧しい国では、食べ物の調達にも不便をし、熱に冒され、「死」も意識した旅ではあった。また、異国、他所をみる「楽しみ(plaisir)」が作家シャトーブリアンによって表現されている。

廃墟や遺跡を前に、時空を超えた「楽しみ」、古代の「光」を『オデュッセイ』などの古典作品という記号を通し楽しむ旅の主体があった。むしろ、「記号的まなざし」だけが「ギリシャ」の存在を証明するものであった。「楽しむ」という感覚を享受した点においては、現在の Tourism に共有できる要素である。

次に、ギリシャ、エルサレム、エジプトでの宿泊施設についての情報をまとめ、表にした。(表 5-1 参照)

表 5-2 シャトーブリアンのギリシャ、エルサレム、エジプトの宿泊施設(1806)

| 場所、都市名 | 宿泊場所 | 宿泊施設についての記述 |
|------------------|----------------|-----------------|
| モドン | ドイツ領事の家 | |
| コロン | フランス領事の家 | |
| 山間部 | カン | |
| モレアス (トリポリッザ) | パシャの家 | |
| モレアス (ミシトラ) | イブライム・ベイの宮廷 | イギリス人のための宿屋は存在 |
| メガラ | アルバニア人の家 | |
| アテネ | フランス領事フォーヴェル氏宅 | |
| エルサレム | 修道院(hospice) | 民家の部屋を借りることもできる |
| アレクサンドリア | 領事ドロベッティ氏宅 | |
| ロゼッタ | 仏領事サン・マルセル氏宅 | |

L'Itinéraire de Paris à Jérusalem より筆者作成

1806 年の旅において、シャトーブリアンの「ホテル」での宿泊は確認することができなかった。領事の家、あるいは、宗教施設に滞在することがほとんどであるが、隊商の宿カン、時には野宿をすることもあった。メガラではアルバニア人の家に宿泊しているが、どんな人物の家なのかは不明である。

年表 4-4、表 5-1 で示したように、多くの旅を経験したシャトーブリアンにとっても、エルサレムへの旅は特別な旅であった。「みやげもの」として、ギリシャではパルテノン神殿の大理石、エジプトではナイルの水などを持ち帰ったが、さまざまな体験をした旅を再生産するために、毎年、エルサレムに入国した 10 月 4 日を記念日としてパーティーを開催した(Degout ed,2012)。さらに記憶再生

装置としての植林があった。シャトーブリアンが購入したヴァレ・オー・ルー (Vallée aux Loups) の敷地には広大な庭があり、旅を経験した地域の植物⁽³⁸⁾を自分の手で植え続けた(図 5-4)。

「数々の旅を思い出すためであった。彼は、自身が訪問した国の植物の種を植えたのであり故郷ブルターニュの商人や船乗りたちの習慣に似た行為であった」
(Dgout, 2010 :25)

また、シャトーブリアンの家の中では、大きな鳥かごのなかで色とりどりの剥製の鳥が展示されているが、これは、シャトーブリアンが旅にでる度に妻に送った鳥だと言われる(写真 5-5)。これも、また船乗りの習慣であり、Voyageur の習慣を踏襲した行為と言えよう。

2012 年現在でも、同じ場所にその木々は残り、訪れる 21 世紀のわれわれ旅行者もシャトーブリアンの旅を感じることができる。2012 年 8 月に筆者が Maison de Chateaubriand を訪れた際に、受付で、どのような人が見学に来るのかを尋ねたところ、学校行事として小学生が「遠足先」としてくることが多いとのことであった。



写真 5-5 Valée aux Loups の Maison de Chateaubriand (2012 年 8 月の筆者撮影)



図 5-5 売却される Maison de Chateaubriand (1817) (*L'ermitage de Chateaubriand* より転載)



左) 図 5-6 Vallée aux Loups の庭に植林するシャトーブリアン (*L'ermitage de Chateaubriand* より転載)



右) 写真 5-6 Maison de Chateaubriand に展示された鳥の剥製(2012 年 8 月筆者撮影)

【補注】

- (1)18 世紀の有力政治家であるが、法律家でもあり、植物学者でもあった。娘が二人いたが、一人はシャトーブリアンの兄と結婚し、もう一人はトクヴィル (Alexis de Toqueville 1805-1859) の母となる女性であった。
- (2)Marquis de la Rouerie, Armand Tuffin de, 1751-1793 ブルターニュ出身のフランス人だが、アメリカ独立戦争において大活躍をした人物。
- (3)貴族の称号シュヴァリエ：男爵 Baron よりも下の位。
- (4)現在は Maison de Chateaubriand として公開されている。
- (5)アカデミー・フランセーズ (フランス学士院) 17 世紀に設立。フランス語の純化と統一のために設立され、その目的のために辞書の編纂が任務の中心であった。現在も編纂は継続して行われ、新語についてもこの機関で検討される。会員は終身であり、この会員に選出されることは学者としての成功を意味する。
- (6)ブオナパルト：ナポレオンの名前ボナパルトをイタリア語読みにして、コルシカ島出身の皇帝 (ナポレオンが生まれる前年までイタリア領であった) をからかいの対象とした。
- (7)ヴィクトル・ユゴーは、1851 年から 1870 年まで亡命生活を送る。
- (8)シャトーブリアンの旅程によって、以後のオリエン特旅行の「オリエン特」領域が定着したと言われる。
- (9)作家であり voyageur：ペルシャについての研究で有名な人物。
- (10)商人であり voyageur：インドとフランスの商取引を始めた人物。
- (11)外科医であり voyageur：アフリカ、ナイル研究で有名な人物。
- (12)生物学者、地理学者、探検家であり voyageur。
- (13)Je prie donc le lecteur de regarder cet Itineraire, moins comme un Voyage que comme des Memoires d'une annee de ma vie.
- (14)Butor, Michel (1926-) 小説家としても知られる、フランス文学の大家。ジュネーブ大学で教鞭をとる。本研究では 1975 年に録音されたシャトーブリアンに関する授業内容を参考にしている。サイドも『オリエンタリズム』において彼の著書を参考文献にあげている。
- (15)『アタラ』の序文のなかで、シャトーブリアンは vraies couleurs (リアルカラー) という言葉を使っている。さらに vraies couleurs を描くためには「現地」に行く必要があると説明する。
- (16)Talleyrand-Périgord, Charles-Maurice de (1754-1838) 大貴族出身の政治家：フランス革命、第一帝政、復古王政、7 月王政に外交官として活躍し、ウィーン会議ではブルボン家代表として出席。フランスの政治に大きな影響力を持った人物。
- (17)地中海東部の諸港(Echelles du Levant)：中近東との交易の拠点となった、あるいは commerce des Echelles 中近東交易：マルセイユ商工会議所の管轄下にあった。
- (18)firman de poste：コリントのイトム Isthme を通過するための許可書。
- (19)1798 年 8 月 1 日から 2 日にかけて、エジプト、アレクサンドリア近くのアブキールでイギリスのネルソン率いるイギリス艦隊がフランスのナポレオン艦隊を破った戦い。ナイルの戦いとも呼ばれる。ナポレオンは英国の商業活動を妨害するためにエジプト遠征を画策していたが、それを察知したネルソン艦隊の勝利であった。

(20)本文中において、フランス語 guide ではなく cicéron とイタリア語で表記されているが、これは雄弁な哲学者キケロを語源とする単語であるが、シャトーブリアンもおしゃべりなイタリア人を皮肉っているのであろう。

(21) C'est un privilège du voyageur de laisser apres lui beaucoup de souvenir, et de vivre dans le cœur des étrangers quelquefois plus longtemps que dans la mémoire de ses amis.(GF :135p)

(22)客というものは、親切を示してくれた主人のことは、いつまでも忘れずに思い出すものだからな。出典先：ホメロス『オデュッセイア』(下) 岩波文庫

(23)テミストクレス：BC.528-BC.462：アテナイの政治家、将軍。ペルシャ軍をサラミスの海戦で破った人物。

(24) ペリクレス、ソフォクレス、ソクラテス、アリストテレス、プラトン

(25)イタリアの港町。イタリアをブーツの形に例えると踵にあたる。アドリア海に面している。

(26)紀元前 5 世紀、パルテノン神殿の建設の総監督といわれる、古代ギリシャの彫刻家。

(27)紀元前 5 世紀、パルテノン神殿を建築したといわれる建築家。

(28)原文

Les premiers voyageurs étaient bien heureux ; ils n'étaient point obligés d'entrer dans toutes ces critiques : premièrement, parce qu'ils trouvaient dans leurs lecteurs la religion qui ne dispute jamais avec la vérité ; secondement, parce que tout le monde était persuadé que le seul moyen de voir un pays tel qu'il est, c'est de le voir avec ses traditions et ses souvenirs. C'est en effet la Bible et l'Evangile à la main que l'on doit parcourir la Terre-Sainte. Si l'on veut y porter un esprit de contention et de chicane, la Judée ne vaut pas la peine qu'on l'aille chercher si loin. Que dirait-on d'un homme qui, parcourant la Grèce et l'Italie, ne s'occuperait qu'à contredire Homère et Virgile ? Voilà pourtant comme on voyage aujourd'hui : effet sensible de notre amour-propre qui veut nous faire passer pour habiles, en nous rendant dédaigneux. (GF :282)

(29) 原文

Les lecteurs chrétiens demanderont peut-être à présent quels furent les sentiments que j'éprouvai en entrant dans ce lieu redoutable ; je ne puis réellement le dire. Tant de choses se présentaient à la fois à mon esprit, que je ne m'arrêtais à aucune idée particulière. Je restai près d'une demi-heure à genoux dans la petite chambre du Saint-Sépulcre, les regards attachés sur la pierre sans pouvoir les en arracher.

(30)修道院 (旅人、巡礼を無料で止める修道院月付属宿泊所)

(31)<http://www.lesclesdumoyenorient.com/Alexandrie-au-XIXeme-siecle.html>

(32)原文

Nous découvrîmes le sommet des Pyramides : nous en étions à plus de dix lieues. Pendant le reste de notre navigation, qui dura encore pres de huit heures, je demeurai sur le pont à contempler ces tombeau ; ils paraissaient s'agrandir et monter dans le ciel à mesure que nous en approchions. (GF :379)

(33)原文

Les grands monuments font une partie essentielle de la gloire de toute société humaine.(GF : 380)

(34)L'Egypte m'a paru le plus beau pays de la terre (GF : 384)

(35)サイドは『オリエンタリズム』の中で、「彼は、ピラミッドを遠方からしか眺めることができなかったの、わざわざピラミッドまで人を遣って、石

の上に自分の（シャトーブリアンという）名前を掘り込ませ、さらに後世の我々のために、『敬虔なる旅人』として、人はいかに些細なものであれその義務のすべてを履行すべし」という言葉を付け加えさせたのであると記述する。さらにその行為について「シャトーブリアンにとっては、書くことがすなわち生きる行為であった。彼は生きているかぎり、あらゆるものに、遠くにある一片の石ころさえ、文字をきざみつけらいではいられなかった」と説明する。

(36) 5章(4)ギリシャ参照。

(37) サイドによると、シャトーブリアンのオリエントの人々に対する態度は終始「^{オリエンタル}東洋人たるアラブは『再び野蛮状態に陥った文明人』」であり、彼らへの称賛は皆無のような印象を与えるが、シャトーブリアンもローカル（オリエントの人々）に感心することもあった。

(38) « Je les connais tous par leurs noms, comme mes enfants, écrivait Chateaubriand de ses arbres : c'est ma famille, je n'en ai pas d'autre » (Mémoires d'outre-tombe). L'écrivain porta une attention toute particulière à son parc et planta lui-même des espèces parfois rares lui rappelant ses souvenirs de voyage : cèdre du Liban, platane de Grèce, cyprès chauve de Louisiane, tulipier, catalpa, magnolia, hêtre pourpre, etc.

「私は植林したすべての植物の名前を言える、わが子のように：（植物は）私の家族であり、ほかに家族はいない」と『墓の彼方からの回想』で述べる。

Maison de Chateaubriand のサイトでは、

「作家（シャトーブリアンのこと）はとりわけ庭園に関心があり、自分自身で旅を想起させるような珍しい種類の植物を植えた。たとえば、レバノン杉、ギリシャのプラタナス、ルイジアナ杉、モクレン、カタルパ（落葉高木）ブナなどであった」と記載されている。

<http://maison-de-chateaubriand.hauts-de-seine.net/web/chateaubriand/le-parc-de-la-maison-de-chateaubriand>

第 6 章

スタンダードの旅

第6章 スタンダールの旅

フランスロマン主義時代の特徴のひとつとしてオリエントへの関心があったことを第4章で論じ、付録年表4-4で、シャトーブリアン、ラマルチーヌ、ネルヴァル、デュ・カン、フロベール等がオリエント旅行を実際に経験したことを示した。第5章ではオリエント旅行の事例としてシャトーブリアンの旅『パリからエルサレム』を取り上げ、シャトーブリアンにとってのオリエントや、オリエントにおける旅の主体シャトーブリアンについて考察し、論じた。第6章では本研究の第2番目の事例としてスタンダールの旅について論じる。スタンダールもまたロマン主義時代の作家であり、多くの旅を経験した。しかしながら、オリエント旅行は未経験であった。スタンダールの旅から、ロマン主義作家のオリエント以外の関心について考察し、もう一方のロマン主義時代の旅について検証する。

第1節 スタンダールについての概要（年表6-1を参照）



図 6-1 1835 年ごろのスタンダール

Del Litto(1965)より転載

(1) 生涯について

本名アンリ・ベール Beyle, Marie=Henri は 1783 年 1 月 23 日にグルノーブルで生まれた。父親は検察官であった。母は 7 歳の時に死亡している。しかしながら、医師であった母方の祖父に可愛がられ、裕福でブルジョワ的平穏な幼年期を過ごした。父親との確執、および、外見的にも陰気で美しくないグルノーブルはスタンダールにとって嫌悪の対象であった。16 歳になりエコール・ポリテクニック⁽¹⁾への試験を受けるためパリへの上京を機に、グルノーブルで二度

と暮らすことはなかった（短期滞在はあり）。しかしながら、念願の上京を果たしたにもかかわらず、体調不良になり、エコール・ポリテクニク⁽¹⁾への最終試験を受けなかった。しかし、幸運にも母方の親戚ダリュ⁽²⁾（Daru, Pierrel 1767-1829）のつてにより、陸軍省に入省することができた。ナポレオン・ボナパルトが連戦練磨の勢いでヨーロッパ各地に領土の拡大を図っていた時代であった。スタンダールは、そのナポレオン軍に参加し、イタリア（1800）、ドイツ（1806-1808）、オーストリア、ハンガリー（1809）、ロシア（1812）、ヴィルナ、ケーニヒスベルグ、ダンツィヒ、ベルリン、フランクフルト（1813）へと遠征に旅立った。遠征中には、陸軍省での活躍もあり、将来を有望視されたが、1802年頃には文学的計画をたて詩人になることを考え始める。しかし紆余曲折のあと挫折し、1806年、再びダリュ氏に頼み込み、陸軍会計監査官臨時補佐となり、ブラウンシュヴァイクへ派遣される。1813年の2か月半に渡るナポレオン遠征の行進では肉体的にも精神的にも疲労困憊するが、「座りきりの文学者が千年かかっても推測できないような経験を実感してきたのだから」と満足する（鎌田・岩本、2007:323, Del Litto, 1965:337）。1814年にナポレオンの失脚とともに失職する（1830年まで失業状態）。同年、祖国を捨てる覚悟でミラノへと向かう。その後もイタリア各地、ジェノバ、リヴォルノ、フィレンツェ、ボローニャ、パルマ、ヴェネツィア、ローマ、ナポリなどを旅し、パリやロンドンにも赴く。

1830年7月革命後、再びダリュ氏に懇願し、チヴィッタヴェッキアの知事⁽³⁾に任命される（1831年）が、以後、単調な生活に耐えられなくなると旅に出かけた。ここでの生活によりノマド志向がさらに強くなったと言われる（Del Litto, 1965）。一方で、1830年、ド・スタンダール著として『赤と黒、19世紀年代記』*le Rouge et le Noir Chronique du XIXème siècle*（以後『赤と黒』と表記）を完成させる。1835年、文学者として名誉勲章を授与される。1836年には体調不良で、療養のためパリへと向かうが、滞在中にモレ伯爵（Comte Molé, 1781-1855）の厚意で3年間にも渡る長期休暇が与えられる。その間に、『旅行者の手記』*Mémoires d'un Touriste* ための取材旅行であるフランス旅行を初めドイツ、オランダ、ベルギーへと旅行。1839年4月、『赤と黒』の著者として『パルムの僧院』*La Chartreuse de Parme* を出版、同年8月に、チヴィッタヴェッキアに帰省する。1841年に初めての発作に見舞われ、翌年の1842年休暇療養中のパリでホテルから役所に向かう途中、脳卒中のため死去。

一般的に、スタンダールは、小説『赤と黒』、『パルムの僧院』を書いたフランスの大小説家として認識される存在であるが、実際はパリにおいても、ミラ

ノにおいても定住する家を持つこともなく、生涯を通し「ノマド（旅的生活）」を貫いた人物であった。パリ、ミラノ、ロンドンなど都市に滞在中は劇場に通いつめ、とくにイタリアにおいてはオペラに夢中になり、絵画も含めて芸術には造詣が深かった。墓碑にはミラノの人として生きたことがイタリア語で書かれている。

(2) スタンダールと紀行文

まず、小説的な紀行文として 1817 年『1817 年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』*Rome, Naples et Florence en 1817* を上梓するが、本名のアンリ・ベール (Henri Beyle) ではなく、騎兵将校ド・スタンダール著 (De Stendhal, officier de cavalerie) として出版した初めての作品である。この旅行記から、作家「スタンダール」が誕生したという点において、スタンダール研究において重要な旅行記である。表向きは日記形式の旅行記、案内記ではあったが、政治批判などを繰り返したため、のちにミラノの自由主義者の危険人物として監視される原因となった作品である。その後、改訂版『1826 年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』*Rome, Naples et Florence en 1826. Troisième Edition* を出版する⁽⁴⁾。1829 年に『ローマ散歩』*Promenades dans Rome* を出版する。デル・リット (2007) はこの出版はもともと「商業的な企画」であり、ローマを目指す多くの旅行者に記念建築物や博物館など、ローマという都市をよく知り、味わうのに必要な情報をまとめた一種の実用的な案内書を提供するのが目的であったと述べる。しかしながら、結局スタンダールがとった手法は前作『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』と同様であり、一人称で語ることはなく、旅行者が登場人物となり、「事件」「政治」「流行」「風習」さまざまな話題が提供された上、旅行者自身の意見が披露されている。評判は期待以上であり、その後、幾世代にもわたり、旅行者たちは『ローマ散歩』を携えて「永遠の都」を訪問したと言及する。

年表6-1 スタンダールの生活

| | |
|-----------------|--|
| 1783年 | グルノーブルで生まれる |
| 1799年 | (16歳)11月10日、エコール・ポリテクニク入学準備のためパリへ 11月10日はブリュメール月19日であり、ナポレオンが政権を奪還した事件の翌日 病気のため入学は断念する |
| 1800年 | 2月、祖父の従兄弟のダリュ氏の力により陸軍省事務局で働き始める 5月7日、ナポレオンの第二次イタリア遠征に参加 ノマド的生活がはじまる |
| 1802年- 1803年 | 軍を辞めイタリアから戻り1803年までパリ(右岸)のホテル住まい |
| 1804年- 1810年 | 1806年陸軍に復職(再度、ダリュ氏の貢献)、ドーフィネ地方からパリへ戻る(ホテル住まい) |
| 1810年- 1814年 | 官僚として順調に出世、ミラノ、モスクワ、ドイツ戦線、ミラノへ |
| 1814年 | 王政復古により職を失う(1830年まで無職状態) 8月～、「ナポレオンとともに没落」「精神的亡命者」→ミラノ中心の北イタリア滞在(1821年まで) 8月～10月、ジェノヴァ、リヴォルノ、ピサ、フィレンツェ、ボローニャ、パルマと44日間の旅行 |
| 1815年 | 7月～8月、パドヴァとヴェネツィア旅行 |
| 1816年 | 4月～6月、グルノーブルに帰省 |
| 1817年 | 1月～2月、ローマ、ナポリ旅行 4月、『イタリア絵画史』の出版のためにパリへ(グルノーブル経由) 11月末、ロンドン旅行の後ミラノに帰る |
| 1818年 | 前半、グルノーブルへ 後半、ミラノ周辺のヴァレーゼやコモを歩く旅 |
| 1819年 | 5月、ヴォルテッラ(メチルドに会うため)、フィレンツェ 7月、ミラノに戻る 8月、父の遺産処理のためグルノーブルへ 10月、『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』の出版のためパリへ |
| 1820年 | 3月、ボローニャ、マンドヴァ旅行のほかはミラノに残る(メチルドへの関心のため) |
| 1821年 | 6月、(ミラノ政府に睨まれ)パリに戻る(ホテル住まい) パリに帰る前コモ湖で10日間 シェイクスピア観劇のロンドン滞在 |
| 1822年 | 8月、『恋愛論』出版:ミラノの思い出、メチルドの思い出 |
| 1823年 | 10月、フィレンツェ(イタリア旅行)へ |
| 1824年- 1826年 | パリ滞在(ホテル住まい) |
| 1826年 | 9月、ロンドン旅行(3ヶ月) |
| 1827年 | 7月、イタリア旅行(6ヶ月) |
| 1828年 | 1月、パリへ戻る |
| 1829年 | 南仏旅行(3か月)『ローマ散歩』出版 |
| 1830年 | 【7月革命】16年に渡る無職生活が終わり、トリエステへ 『赤と黒』出版 チヴィタ=ヴェッキア、仏領事に任命される |
| 1831年 | パリ(1度目の休暇) |
| 1835年 | 『リュシアン・ルーヴェン』出版 |
| 1836年 | 5月、パリ(2度目の休暇)1939年まで3年の休暇:本来は3ヶ月の予定) |
| 1837年 | 5月～7月、休暇中に執筆活動を行うが、途中で中断するものも多い。 『ある旅行者の手記』のための第一回取材旅行、メリメがブールジュまで同伴 |
| 1838年 | 7月～11月、『ある旅行者の手記』のための第二回取材旅行、ポルドーからスペイン(バスク地方) 『ある旅行者の手記』出版(第一巻) |
| 1839年 | 『パルムの僧院』出版 |
| 1841年 | 11月、健康悪化(3度目で休暇申請が許可される) |
| 1842年 | 3月22日、外務省の玄関を出たところで脳出血を起こす 3月23日、死去 |

筆者作成

第2節 スタンダールとロマン主義

観光学研究では「山」あるいは「自然」へのまなざしをすべてロマン主義として解釈する傾向にある。スタンダールの作品からロマン主義を再考する。

(1) スタンダールと山

スタンダール（ベール）にとってフランスロマン主義、近代フランスの誕生に大きな影響を与えたルソーの存在が彼の意識に関係なくちらつく。スタンダールは、故郷グルノーブルを嫌っていたのにもかかわらず、幼い頃、祖父の家の窓から見て、慣れ親しんだ「山の風景」とルソーのアルプスの風景を重ねる。実際グルノーブルは、フランスとスイスの国境近くにあり、『新エロイズ』の舞台を、「理想」ではなく現実風景として実感できたのではないだろう。スタンダールは16歳で、念願のパリへと上京するが、「山」の见えないパリに失望する。当時のパリは、大改造以前の路地が右往左往にひしめき合い、そのうえ不潔な街であった。また、その「汚さ」と同様に、「山」の景色がない場所としてのパリ対しても少年の心は暗くなる一方であった。しかし、これは特に「ルソー」の影響でも、ロマン主義的な感情ではなく、恐らく、「喪失感」にすぎない。だが、スタンダールに限らず、この「山」というものへのまなざしが、「自然への新しいまなざし」を語ったルソーとの共通項とみなされ、「近代文学史」の嚆矢を示す「ロマン主義運動」の線上で語られることがしばしばある。さらに、近年「観光研究」においても「ロマン主義」という記号が濫用され近代観光を考える上で重要な視点とされている。結果として、観光学では、畏怖の対象としての「自然」、あるいは、賞賛の対象としての「自然」への視点を一括してロマン主義的なまなざしとする傾向にある。また、「ロマン主義」を語るのであれば、18世紀後半から19世紀中葉まで、ヨーロッパ全土に広がった「ロマン主義運動」はそれぞれの国で固有の潮流や解釈があることも考慮することは重要である。現在の観光学で「ロマン主義」と語る切り口はかなり乱暴である。

イギリスでの『ジュリーまたは、新エロイズ』*Julie, ou la nouvelle Héloïse*（以後、『新エロイズ』と表記）の成功、つまり、どちらかと言えば小説の背景(舞台)への賞賛によって、アルプス地方がルソーの換喩的场所になり、イギリス人観光客であふれた歴史的事実が存在する。それはイギリスロマン主義の解釈ではないだろうか。もちろん、鈴木(2002)が指摘するように、「美德は人間

のとり行動や行為にかかわっているのではなくて、むしろ感性、感受性、情熱にかかわっている」という知的枠組みの下、多くのイギリス人ロマン派作家が主人公ジュリーの「感受性」に関心を寄せる。しかしワーズワースなど湖水派(lakiste)と呼ばれる環境としての自然を愛でる一派を誕生させたのは周知の事実である。フランスにおける『新エロイズ』の関心は、むしろ、ルソーによる登場人物の性格描写、心の思うままに生きるという人間本来の自然の姿であった。英語、フランス語とも *nature* と表記される事象への関心であるが、環境における *nature* と人間本来の姿の状態を示す *nature* という分別が存在する。

一方で、ルソーは「山歩き」にフィジカルな楽しみ、つまり「目で見える楽しみ＝精神的な楽しみ」ばかりではなく「身体的な楽しみ」を表現していることを示唆する。これまで「観光学のロマン主義」では検討されていない視点ではないだろうか。「身体」への関心をフランスロマン主義の一つの特徴とすることが発見できれば、新たに近代観光へのルソー的影響が検討できるであろう。

ルソーは多分野に渡って後世に影響を残した人物である。哲学分野や音楽分野に関する研究も膨大にあるが、2012年の生誕300年祭を記念しての講演会の内容においても、ルソー研究は主に文学研究や、法学研究が中心である。J.アーリー(Urry, John, 1946-) がフーコー(Foucault, Paul-Michel 1926-84)の「まなざし(regard)」を応用した著書『観光のまなざし』*The Tourist Gaze*(1990)の中で、「ロマン主義的まなざし」を提唱し、観光発展への関係を示唆したことは画期的であったが、観光学にとって、都合の良い、正統な理論構築のための手段となった感がある。

フランスにおけるロマン主義と「自然」へのまなざしについて、荒木(2011)は『『風景の時代』ロマン主義と風景のコードの変化について』の中で、*locus amoenus*⁽⁵⁾から *locus terribilis*⁽⁶⁾への変化を述べている。

「ナポレオンが1800年のイタリア遠征に際して敢行したアルプス越えは、1760年代にハラーやルソー、ソシュール(Saussure, Horace-Benedict, de 1740-1799)らの作品が生み出したアルプスのテーマの再燃をもたらしたといわれる。(中略)スタンダール自身はこの種のテーマとはほぼ無縁と言ってよいが、それでもグラン・サン・ベルナールの峠でアルプスの景観を前にした『アンリ・ブリュールの生涯』*Vie de Henri Brulard*の話者は、「雪に覆われ、雲を突いて聳えるこれらの山々を前に、ルソーであれば書いていたかもしれない文章」について思いを巡らさずにはいられない。この時アルプスの山容に向けられたスタンダールの視線

を導いていたのは、明らかにルソーの記憶⁽⁷⁾だったのである（荒木, 2011:17）」

以上の引用文が示すのは、ルソーのようにアルプスへのテーマに興味がなかったスタンダールであるが、実際に目の当たりにすると、やはり「感動」していたことを示す⁽⁸⁾。荒木はスタンダールのまなざしにルソー由来のロマン主義を認める。

一方で、グラン・サン・ベルナールの峠⁽⁹⁾での体験に関し、デル・リットは

「ベールは馬を御するというよりむしろ引っ張られ、雪で覆われたころがりやすい小石をよろめきながら、山をよじのぼる。湿気にぐっしょり濡れて震えながらも、かれは幸せだ。『じゃあ、ぼくは困難に向かっているんだ』と幸せそうに繰り返す。かれを取り巻く雄大な風景の美に興奮する。はじめて、心おきなく賞嘆の念に身をゆだねる。『わたしはいつのまにか、風景の美しさに極端に敏感になったいた』と彼は認める。—『自然は嫌いだと思っていたのに』（鎌田・岩本, 2007:60, Del Litto, 1965:71）

と、やはり、スタンダールの心の変化について語るが、これをロマン主義的な内面の変容とは分析せず、むしろ、「自然の美しさ」に執着していた父親からの抑圧からの解放からの幸福感だとする（鎌田・岩本訳, 2007, Del Litto, 1965）

荒木によると、ルソーの『ジュリーまたは新エロイーズ』は、これまで文学的には見られなかった2つの美意識を提示している（荒木, 2011）。それは、眺める対象としての「アルプス」の景観と、もう一つは「高みにあること」の感興にまつわる「自然」と「人間の内面」との照応である。後者、つまり「高み」への願望からアルプスのヴァレー地方は、『新エロイーズ』を携えた旅行者の巡礼地となった。荒木はこの現象を前ロマン主義における自然のテーマの一類型とみなす。観光的には、「アルプス」への関心は、「アルプス登攀」という流行を呼び、ヨーロッパの近代観光史を形成するための重要な要因であるが、文学研究においては18世紀末、一冊の書物が示した新しい視点を通して、それまでの地理的存在にすぎなかった「アルプス」が文学的テーマの一個の「風景」へと変化したことを示す要因と分析される。

角津(2005)も

「特にロマン主義とよばれる時代において、風景は詩人や画家、作家らの内面に結びつく存在として作品の対象となった。中でも、最もその捉え方が変化したものは山の風景である。山は長い間、悪魔の住む場所という見方をされていたが、この時代では、戦慄を覚えさせる甘美な怪奇な風景と思われるようになった。この時代において山は崇高な風景と捉えられていた」(角津, 2005:7)と述べている。

以上に見られるようにスタンダール研究において、スタンダールと「自然」を語るために文化背景が言及される。

また、荒木は、「風景」(paysage)とは本来、田園(campagne)のことであり、その美意識とは、木立、草地、泉ないし小川、花々、鳥の囀り、微風が構成するものでアーリ 18 世紀後半までつづいたと言及する。つまり、自然へのまなざしは近代特有のものではないと言えよう。

『新エロイズ』におけるルソーの貢献は、これまでほぼ一元的に「田園」という範疇に収斂していた「風景」のテーマに、「高山」という、全く別のカテゴリーを付け加えた点にあった。『新エロイズ』が促した「田園」から「高山」へのテーマの移行は、言い換えれば都市の周辺の「人間的」な自然から「野生の」自然へという（二種類の自然の間の）領域の移行であり、それまで専ら畏怖の対象だった高山が一つの美的範疇に変貌を遂げたことは、ルソー以降、アルプスのテーマの流行と共に、文学が *locus terribilis* という新たな風景のモデルを手に入れたことを意味していた。（荒木, 2011:19）」

16 世紀の旅行者モンテーニュは、チロル地方の溪谷や山を「風景」として楽しみながら旅をした新しい型の旅人⁽¹⁰⁾であるが、19 世紀の旅行者のまなざしとは異なる。

「モンテーニュにとって「心地よい風景」、「美しい風景」とは、山々にとり囲まれた溪谷や溪流、貴族の邸宅や教会がみえる段々になった平野、村落や教会などが点在するなだらかな山の斜面、さまざまな果樹や麦畑などに覆われた丘陵など、多様で変化に富んだ景色である。ただし、この様な景色を心地よい、美しいと感じるこの旅人の感性は、18 世紀後半あるいはジャン＝ジャック・ルソー以降の旅人たちが自然の風景に感動する感性と同じではない。モンテーニュの場合は、ルソーとロマン主義の詩人たちとは異なり、手つかずの、野生のままの自然

よりも、人間の手が加わった自然、つまり耕作が行き届き、人家が点在する丘陵や平野の景色を心地よい、美しいと感じたようである。(斎藤, 2012:85)」

すくなくともフランスにおいて「ロマン主義的」自然へのまなざしを語るとき、「山」への畏怖を起源とした「まなざし」を考慮する必要がある。自然の雄大さをただ称賛するというよりも「雄大さ」に「恐ろしさ」を感じ、そこに「美」を認めるまなざしである。



図 6-2 『新エロイーズ』, 「メーユリの岩山にいるジュリーとサン・プルー」

鈴木(2002)より転載



図 6-3 ジュネーブ湖畔のクララン

鈴木(2002)より転載

(2) スタンダールのロマン主義

さて、スタンダールにとっての「ロマン主義」について再考したいと思う。前述したように、アルプスの山からのルソー由来のロマン主義的なまなざしの

他にも「畏怖」由来の「美しさ」である locus terribilis を好む様子が旅行記の中で示される。

「200 歩も足を運ばないうちに、私はこれまで見た中で最も美しい自然の光景に出くわした。街道はだしぬけに荒涼とした谷に下る。海から 100 里はありそうなこの狭い谷底を、上げ潮に乗ってヴィレーヌ川⁽¹¹⁾が猛スピードで逆流していく。海流が抗いようのない威力で狭い谷の兩岸まで侵入する有様は、そそり立つむき出しの岩壁の物凄さと、まだ少し見える平野の光景と相まって、いきなり私を活発な夢にふけらせた。ナント以来落ちこんでいた無気力とは大違いだ。理由がわかるより先に、その効き目を感じとり楽しんだことはいくまでもない。いまこうして書いて初めて、その理由がわかったほどである。そのときの私は、30 人の戦いやら、ブルターニュ史上で私が知るほんのわずかな事件のことを考えていた。しばらくして、ウォルター・スコットのきわめて美しい風景描写が記憶に蘇った。うっとりしながら、心の中でゆっくり味わう。この土地の貧しさがスコットの感動をさらに深めた。その醜さが、といたいところだ。景色がもっと美しければ、これほど恐ろしくはならなかったろう。美しさを感じとる方に注意力を削がれたろう。海がまったく見えないので、なおさら潮の出現が異様に思える」

(山辺 1985:9)『ある旅行者の手記 2』

*下線は筆者によるもの

第3章でロマン主義についてすでに既出であるが、イギリスロマン主義を代表する「ウォルター・スコット」にスタンダール自身も傾倒していたことが表現されている。「畏怖」を「美」とする一つの事例であり、「畏怖」を楽しみとして享受する旅の事例でもある。

ところで、スタンダールがロマン主義を知るのはミラノであった。1816年にロドリコ・ディ・ブレーメ⁽¹²⁾の棧敷⁽¹³⁾で、ミラノに立ち寄る外国の有名人、特にイギリス人⁽¹⁴⁾たちに出会い、さまざまな会話を交わす。ブレーメの下に集まる常連客のほとんどが愛国者でロマン派であった。イタリアは、1816年当時まだ統一には遠く、それぞれの地方が占領軍に占領されていた⁽¹⁵⁾。このような状況の中で、祖国のために立ち上がろうとすること、つまり国民的精髓を高揚させることが、当時のヘゲモニーである古典主義理論への闘争と混じり合うこととなり人々はロマン派へ傾倒した (Del Litto, 1965)。

スタンダールはロマン派の政治性を確認する。

「スカラ座の機軸で交わされている激しい会話に耳を傾けながら、かれはロマン派であるということが、現実には国民的伝統に訴えているのだ、とわかった。つまり文学的論争は政治的闘争の一面ほかならないのだった」(鎌田・岩本, 2007:181 Del Litto, 1965:193)

さらに、自らもロマン派へと引き込まれていったことが、書簡で明らかにされる。スタンダールが決定的に、ロマン派宣言をした手紙は 1818 年 4 月に友人 アドルフ・ド・マレスト(Marest, Adolphe de)宛てであった。

「ぼくは猛烈なロマン派(Romanticisme)だ。つまりラシーヌに対してのシェイクスピアの味方であり、ボワローに対してバイロン卿の味方だ。」(鎌田・岩本訳, 2007:182 Del Litto, 1965:194)

スタンダールは、Romanticisme という語を使用しているが、フランス語 Romantisme より古い単語である。スタンダールは Romanticisme⁽¹⁶⁾を使うことから前ロマン主義作家⁽¹⁷⁾ともよばれる所以である。

以上を踏まえ、スタンダールの文章から「ロマン派主義的」なものを求めるとすれば、「自由」、「愛国心」にまつわる政治的論点や文学的論点を惹起する事柄を追求することが、スタンダールのロマン主義なのではないか。代表作の『赤と黒』や『パルムの僧院』のテーマと一致する。さらに 2 作品は 19 世紀、つまりスタンダールの時代ならば、「現代小説」であることも特徴であり、栗須(2007)は「小説の主題を現代に置くのは、スタンダール流のロマン主義のひとつの主張であった⁽¹⁸⁾」と述べる。

また、スタンダールとルソーの自伝研究を行った中川(1979)による「エゴチズム」にまつわる「私」の使い方にもロマン主義を認める。(3)スタンダールの英単語を参照 160p)

スタンダール自身はルソーの信奉者ではないが⁽¹⁹⁾スタンダールの研究者が指摘するように、『アンリ・ブリュラーの生涯』には『新エロイズ』の読書が少年期の感情教育において重要な役割を果たしたことが示唆されている(高木, 2008:250)。スタンダールも好意を持ったバイロン卿に多大な影響をもたらした「ルソー」の存在は、意識せずとも、「自然」とくに「山」へのロマン主義的見解へと引き寄せる。

さらに、前述の中川は、文体において、je, moi を多用し「私」の存在を意識させるのも「ロマン主義」の特徴であると指摘する。一方「私」に対する「他者」「他所」、つまり「エキゾチズム」もロマン主義由来の現象である。フランスでは「ナポレオンの遠征」の時代と重なり、特に「エジプト遠征」によってエジプト学が盛んに行われるようになり、オリエントを中心としたエキゾチズムに関心が向けられた。しかし、Romanticisme, 前ロマン主義世代のスタンダールの場合は、スペインへの赴任を一度打診したようだが、ヨーロッパ諸国への旅が中心であった。エキゾチズムという点においては、スタンダールはロマン主義的な作家ではなかったと言えよう。

(3) スタンダールの英単語について

スタンダールはシェイクスピア(Shakespeare, William, 1564-1616)を好み(旅にも携行する), 原書で読むほどであった。ロンドンやミラノでもイギリス人と交流をしていたことから、英語力はかなり高かった。そのため、英語でなければ、本来の意味が表せない単語、とりわけ概念を示す名詞はそのまま英語で用いる。その代表的なものに Egotisme と Romanticisme がある。

前者は『エゴチスムの回想』 *Souvenirs d'Egotisme* と自伝的作品のタイトルにもなっている。Egotism(英)をフランス語に翻訳すると Egoïsme と本来なら訳すべきであったが、フランス語の Egoïsme とは意味が違うとして、英単語をフランス語風に綴り Egotisme としている。エゴチスムもエゴイズムも、「自己顕示」にまつわる単語である。一般的にエゴチズムは自己中心主義、エゴイズムは利己主義として訳され、あるいは認識されているが、「スタンダールのエゴチスム」というくくりでは自己分析に向かう作家の姿勢を意味する。「私」を主語にする文体はロマン主義の特徴であるが、シャトーブリアンのように「私」を強調する文章に嫌悪感を持ったスタンダールはシャトーブリアンとは別の「私」の表現法をエゴチスムという語で完成させた。

すでに述べたとおり、スタンダールが「ロマン主義」を知った英国人の仲間との交流によるものであった。彼らの発音のまま Romanticisme を使用したのであろう。

『ある旅行者の手記』の中で、主人公は、気持ちの良い場所への感想として、「ここは snug だ」とあえて英語を使う⁽²⁰⁾。現代ならフランス語で C'est sympa(sympathique)と短い単語で表現できそうであるが⁽²¹⁾、当時は適当な単語

がなかったのであろうか。Snug という英単語は現在でもフランス語として普及されていない。主人公が英国を何度も旅していたことを表現するためのひとつの手段であったのか、スタンダール自身の言葉に対する愛着であったのか、文学研究からは明らかにされていない。ボワイエはスタンダールの英語好き (anglomania) ぶりを言及するが、英単語を使うのはスタンダールのスノビズムの現れであることも否定できないであろう。

スタンダールは読者を常に意識していた作家だと言われる (山辺, 1983)。『赤と黒』、『パルムの僧院』では、To the happy few と読者に向けている。この英語を理解する人のみを対象としているのか、(産業革命を迎えたフランスで) 金儲けに夢中になっている「かわいそうな人たち」に向けているのか、あるいは経済主義の世の中に生きるすべての人に向けているのか、想像の域を超えることはない。

最重要課題の Touriste についてであるが、スタンダール自身、旅の主体としてのツーリストに関する言及はない。Voyageur というフランス語よりも英語を好んだだけの可能性もある。この課題については、第 4 節(3)の「タイトルについての諸相」内で論じる。

第 3 節 スタンダールと旅

(1) ナポレオン遠征

ナポレオン遠征がスタンダールの生活、つまり旅を中心とした生活へ導いたのではないだろうか。ナポレオンがスタンダールに与えた影響は大きい。

1) 概要

1799 年 16 歳のスタンダールはエコールポリテクニクへの最終試験を受けるためにパリへと上京するが、生活の違いに圧倒され、あるいは夢見たパリの現状 (汚いまち) に失望する。精神的にも肉体的にも衰弱し結局試験を受けることはなかった。しかしながら、母方のいとこ、のちの大陸軍経理部長ピエール・ダリュの世話で陸軍省の下役として働き始めることができた (1800 年 1 月)。さらに 5 月には予備軍にしたがいイタリアへと出発する。6 月ミラノに到着する。この街の印象はかれの生涯に大きな役割を与える⁽²²⁾。その後、軍隊生活に嫌気がさし、1802 年に一度は辞職するが、再びピエール・ダリュに懇願し、1806

年 10 月陸軍会計監査官臨時補佐としてドイツのブラウンシュヴァイクへ派遣される。1808 年 2 月パリに戻るが 3 月には会計監査官の資格でオーストリア戦役に参加。戦闘中の都市をいくつも通過する。5 月から 11 月までウィーン滞在。1810 年パリに戻る。1811 年 4 月 29 日から 5 月 3 日まで友人たちと（フェリクス・フォールとルイ・クロゼ）ルーアン、ル・アーブルへと旅行し、はじめて大西洋を見る。しかし海辺の景色はあまりかれを夢中にしない。同年 8 月イタリア旅行にでる。ミラノ、ボローニャ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ポンペイを旅する⁽²³⁾。1812 年 9 月、モスクワへと出発命令により到着。フランス軍はいつでも優勢であったため、狩猟にでるくらいの気持ちであった。しかし 10 月にはモスクワの火災、つまりフランス軍の窮地を目の当たりにする。1813 年 1 月、パリに到着。2 カ月半にわたり、ヴィルナ、ケーニヒスベルグ、ベルリン、フランクフルトを經由しての旅であった。心身ともに疲労困憊をしていた。

その後 1814 年にナポレオン帝政が瓦解し、4 月に給与が停止し、ナポレオン遠征による「旅」は終わる。しかしながら、彼のイタリアへの旅、イギリスへの旅は以後も続く。

以上がナポレオン軍の一員としてのスタンダールの「旅」である。

山辺は、『ある旅行者の手記』の訳者解説のなかで、次のように簡潔にまとめている。

「同時代のフランス人文学者でスタンダール(1783-1842)ほどヨーロッパ各地をかけめぐった男も珍しい。16 歳で郷里のグルノーブルからパリに出ると、たちまちナポレオン軍の一員としてアルプス越え、イタリアの土を踏む。1806 年から 1809 年までは役人として、フランス占領下のドイツ、オーストリアに滞在。1811 年には休暇をとって再びあこがれのイタリア。12 年にはナポレオンのロシア遠征に加わってモスクワまで行き、命からがら逃げ帰るという大旅行。13 年にはまた任務でドイツやイタリアに行き、王政復古後の 14 年から 21 年までミラノに“亡命”し、その間イタリア各地をまわるかたわら、ロンドンにも足を伸ばし、21 年パリに戻ると、数カ月後には 2 度目のロンドン旅行。」(山辺、1983:412)

2) ナポレオン遠征とスタンダールの旅

ここで、ナポレオン遠征がスタンダールに及ぼした影響について再考したい。

グルノーブルで生まれたスタンダールに「旅」を教えたのがナポレオン遠征であった。「遠征」に参加していなければ、旅三昧の人生を送ることはなかったであろうし、彼自身「旅」の作用、効用を感じることもなかったであろう。イタリア芸術への芳醇な知識も備えることも、市井の人々の生活を観察する習慣はもちろん培われることない上に、『赤と黒』、『恋愛論』 *De l'Amour*, 『パルムの僧院』 *La Chartreuse de Palme* といった19世紀を代表する文学作品が生まれることもなかったであろう。なぜなら、前述した、1800年の「遠征」によるミラノ滞在ではすでに、『パルムの僧院』への誕生秘話が示唆され(Del Litto, 2007), さらに、1806年、軍に復帰後のドイツ戦線に従軍中、命令に従いブラウンシュヴァイク、ストラスブール、ザンクト・ペルテン、ウィーンなどに出かけ、ついでに足を伸ばして見学したザルツブルグの塩鉱が、『恋愛論』にも反映されているからである。その上、そこで見た塩の結晶から「結晶作用 (Cristallisation)」の言葉が生まれ、『恋愛論』における一つのキーワードとなる。

初めての異国体験は、強烈な印象を生涯に渡り「旅人」に残す。「遠征」により知った初めての外国が文化、芸術の中心地「イタリア」であったことは、文学者としてのスタンダールを誕生させる大きな要因であったのではないだろうか。

(2) スタンダールと故郷グルノーブル

スタンダールが故郷グルノーブルに嫌悪を抱いていたのは、スタンダリアン(スタンダール愛好家)にとっては周知の事実であるのだが、デル・リットはスタンダールがグルノーブルを「偏狭さの総本部(Quartier général de la petitesse)」 「汚い肥だめ(ignoble trou à fumier)」, 「ねずみの巣窟 (nid à rats)」 (Del Litto, 1965:16, 図 6-4) と表現したことを紹介する。もちろん、彼の個人的な思い出、とくに折り合いの悪かった父親が地名「グルノーブル」に重なり合う。さらにデル・リットはスタンダールの意見(描写表現)を裏付ける客観的な証拠として、20世紀初頭のガイドブック、アドルフ・ジョアンヌの『ドフィネの旅行ガイド』⁽²⁴⁾からの引用を添付する。

自然がすばらしいだけ、そのぶん街に外来者はがっかりする。視覚と聴覚には強烈すぎて耐えられない。これほどひどい光景や、悪臭には、子供のころから慣れてでもいなければ、抗議することなくがまんできるものではない。家々は街以

上にさらに不潔だ。たいていの通路や階段がまるで共同ゴミ置き場なのだ…。鎌田・岩本，2007:13, Del Litto, 1965:17)



図 6-4 1799 年以前のグルノーブル（「偏狭さの総本部，汚い肥だめ」）

Del Litto (1965)より転載



図 6-5 19 世紀 グルノーブルのグルネット広場

(Del Litto, 1965)より転載

故郷グルノーブルを早く去りパリに行くことだけを夢見た 16 歳の少年は「遠征」という思いがけない体験により、「旅」の魅力を知る。「グルノーブル」という地方都市の息苦しさから解放された「自由」という魅力であった。それは、精神的な解放に限らず、身体的な解放を示し、グルノーブルの家族のように、ある場所に固定し生きていくのではなく流動的な生活を送ることを決定づけた。一方、グルノーブルの対極にあるイタリアの存在は生涯に渡りスタンダールを魅了した。最終的にはフランス人であることよりもミラノ人であることを選んだことが、墓碑に記される。彼の墓碑銘は「アッリゴ・ベール，ミラノ人，書

いた、恋した、生きた」⁽²⁵⁾がイタリア語で記されている。(図 6-4)



図 6-6 パリ・モンマルトル墓地にあるスタンダールの墓
(Del Litto, 1965)より転載

彼は、墓碑銘を含めて、遺言通りパリのモンマルトル墓地に埋葬されている。グルノーブルに死後も戻ることはなかった。人生を旅にたとえるなら、出発地に戻るもののない旅、つまり *le tour* としての旅を完結することはなかった。文字通りの *Touriste* ではなかった。

(3) スタンダールとイタリア

年表にも表記したが、スタンダールのイタリア滞在は長い。1800 年にイタリアに初めて行った時から、文化、芸術に夢中になる。『ハイドン *Vie de Haydn*』、『モーツァルト *Vie de Mozart*』,⁽²⁶⁾『イタリア絵画について *Histoire de la peinture en Italie*』、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ *Rome, Naples et Florence*』、『ローマ散歩 *Promenades dans Rome*』を出版する。代表作の『パルムの僧院』もイタリアを題材としている

臼田 (2007) のあとがきから

『赤と黒』や『パルムの僧院』といった小説で知られるフランスの作家スタンダールは、イタリアを愛し、その《愛》を有名な『恋愛論』やその他の作品のなかで、はっきりと告白している。イタリアの女性、イタリアの音楽、イタリアの絵画、イタリアの気質などなど、かれの愛するイタリアは限りない。わけてもその風土は、「オレンジの木が、鉢植えではなく、大地に植わっている国」として、

まだイタリアのすべてを育むもとにあるものとして、かれがもっとも愛したものであった。(中略)かれは 1800 年にイタリアを知って以来、とくに 1820 年まではミラノを中心に、イタリア各地を歩いている。(臼田, 2007:250) (中略) ベールはイタリアの国境をモン・スニ峠, シンプロン峠, ゴタルド峠を通過して、あるいは海路によって、往復あわせて二十六回ほど越えている(そのうち一往復二回は遠征軍の一員として、である)が、現代と異なり馬車や船によって長い時間をかけての旅は、大変な疲労と困難をともなうものであり、また国境あるいは市門での出入国検査や税関検査も面倒なものがあつた。旅に出るためには、尋常でない覚悟が必要な時代であつた」(前掲書: 251)

イタリアへ向かうためには、相当の体力、忍耐力が必要とされた。オリエントに比較すれば地理的にはフランスの隣国にすぎないが、「旅 voyage」の困難さは、山、海の違いはあるものの、同種であつたのではないだろうか。

(4) スタンダールとオリエント

スタンダールはシャトーブリアンのようにオリエントへと実際に足を踏み入れることはなかった。しかし、だからと言ってオリエントへの関心が低かつたわけではない。19 世紀前半、フランスは「エジプト熱」に陶醉していた時代である。旅好きのスタンダールが魅了されないはずはない。スタンダールのオリエントへの関心(エジプトへの関心)は、とりわけ『赤と黒』、『リュシアン・ルーベン』の小説に見つけることができる。『赤と黒』ではジュリアンの父、ソレル爺さんの顔つきは「エジプトの農夫^{フェラー}」と表現されるようにエジプトを意識した比喩が見られる。スタンダールにとってのオリエントはエジプト色が強いが、シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』によってオリエント地域が明確になったと石川(2000)が言及したように、それ以前はオリエント領域の定義はそこを目指す旅行者の数だけあつたに違いない。現在に至っても、その定義は不確かであり相変わらず、西洋中心の見解になってしまうが「西洋ではない地域」と説明するくらいが妥当であろう。5 章で論じたように、シャトーブリアンにとってのオリエントは旅のクライマックスであつた「エルサレム」を中心とした地域であつた。オリエント対西洋という二項対立はイスラム教対キリスト教とも換言できる。しかし、スタンダールにとってのオリエントはそれとは異なる、なにか現実感のない場所でないかと筆者は考える。井出は

スタンダールにとって、オリエントとは E.W サイードが言うように、ヨーロッパ人の頭の中でつくり出されたものであり、つまり『千一夜物語』の「おとぎの国のオリエント」であったと指摘する。(井手, 2001) 井手はさらに、スタンダールにとっての「もうひとつのオリエント」としてスペインを提唱する(井手, 2008).

「1830 年以降、小説家として成熟していくスタンダールにとって、作品の中でスペインが単なる《幻想》の地以上になっていく過程は、研究者の目を逃れていくように思われる。そしてその《幻想》の地スペインは、スタンダールにとって《幻想のオリエント》の一部でもあり・・・」(井手, 2008:638)

筆者は、修士論文の中でロマン主義運動の支柱のひとつにエキゾチズムを提唱し、それを証明するためにフランス・スペインに跨るバスク地方へのまなざしを、ユゴー、ゴーチエ、フロベールの旅行記からすでに検証している。三人とも、ボルドーですでにエキゾチズムを発見していた。黒髪や色彩豊かな服装、言葉、店の看板などでスペインという異国、オリエント的な表象に魅了されている。

しかし、スタンダールはスペインを一度だけ旅行したと言われるものの詳細は不明である。スペインへの関心も井手のように小説からの分析に頼るしかないのが現状であり、「旅行記」からのように、直接的にスタンダールの意図を読み取ることはできない。余談であるが、ナポレオン三世の妻、スペイン出身のユージェニー皇后が幼少の頃、メリメとともに出会っていること、その後もスタンダールは幼いモンティホ嬢(ユージェニー皇后)から慕われ続けたことが、窪田(1991)の研究で紹介されている。スタンダールは脳溢血という突然の病で急逝するが、もし、もう少し長く生きていたら、ユージェニー皇后を通して、メリメのように、宮廷の重鎮として迎えられていたのではないかとされている。スタンダールよりも 20 歳も年下であった友人、『カルメン』の作者メリメから受けるスペインへの関心もあったであろう。

ところで、スタンダールが「旅」を知ったのはナポレオン遠征と言われるが、そこに立ち戻って考えると、イタリア、スペイン、エジプト(オリエント)への関心は、すべて「ナポレオン」というフィルターがかけられていることがわかる。イタリア遠征、ナポレオンが引き起こしたスペイン独立戦争、ナポレオンのエジプト遠征などが契機となり、それぞれの国に魅了されたのではないだ

ろうか。もちろん、スタンダールに関しては膨大な研究が存在し、他にもさまざまな要因が検討されていることであろう。しかし、スタンダールの旅とナポレオンの関係を明らかにすることは、観光研究において、近代観光におけるナポレオンの影響を分析することにつながる重要なテーマとなりうる。

また、スタンダールがなぜ、オリエントに旅立つことはなかったのかを現実的に考えてみると、やはり財政問題に尽きるのではないか。シャトーブリアンやラマルチャーヌのように、スタンダールもまた官僚のポストにあったと言え、国の重鎮ではなかった。さらに、ナポレオンが失脚した1815年から1830年までは、定職さえなかった人物である。(年表 6-1 参照)オリエントとはやはり、彼にとって《幻想》であり続けるしかなかった国であったに違いない。

第4節『ある旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste*について

この旅行記の出版のために、スタンダールは1837年と1838年に取材旅行を敢行している。病気休暇を利用した旅であった(チヴィタヴェッキアの知事であった)。「旅行記」としての特徴は、語り手がスタンダールではなく、「鉄の商人」という架空の人物であるということである。旅する土地では、語り手の行動をはじめ自由な意見が披露される。モニュメント(歴史的建造物)に関する描写の多くは、ミランやメリメのからの借用と言われることから、旅行ガイド的な要素に関心はなく、主人公の関心、スタンダールの関心は「現代フランスの実情」を語る事であったのだろう。邦題、あるいは現在の視点からは重要な論点となりにくいだが、原題 *Mémoires d'un touriste* には考察すべき点が多数みられる。タイトルが及ぼした観光研究への影響を中心に省察を行う。

(1) あらすじ

語り手(主人公) Philippe.L は厳しい父親による厳しい躾のもと、税関史になったが、自由主義者(=危険人物)と内部告発をされた。根拠のない告発文だったが、植民地勤務を強いられる。植民地では、復讐のために「自由主義」を学ぶために英語を習得した。しかし、病気療養の理由でフランスに戻ることができた。健康を回復し、親の勧めもあり結婚をする。そして、税関史を辞職し、義父の仕事である「鉄商売」を引き継ぐ。鉄のセールスマンとして仕事を

してきた義父を「商品売り込んだり買い付けたりで旅をした人」と紹介する。時代は、フランスの産業発展期、商売は大成功を収め、財産も名誉も得る。一方で、最初の妻ばかりでなく2度目の妻も病気で失くす。しかしながら、「独身に戻ってからの方がずっと幸福だったのだ」と一人になることへの孤独感はない。業界のトップに立つが、将来は植民地への定住を希望する。なぜなら植民地の人間の方がずっと達観しているからである（金のことで振り回されない）

生涯を植民地マルティニック島で終えるか、あるいは少なくとも老齢に達するまで数年間過ごすかきめていないが、本国との比較をしてみたいと思いつつ。

「たぶん永久にフランスを去るかもしれないのに、肝心のフランスをまだ知らないのだからな。」

「フランスを知りもしないで、たぶん永久にヨーロッパを去ってしまうのか。セールスのかたわらフランスをまわったけど、用事に追いまくられ駆け足の旅行ばかりだった。こんどはゆっくり周囲を見まわしながら旅できないものか。」と考え、フランス旅行を決意する。セールスマンのことを *commis de voyageur*（コミ・ド・ヴォワイヤジュール）というが、19世紀には、おそらく旅の目的が商売をすることであったためだろうか、軽蔑された職業のひとつであった。フロベールの父親もピレネー旅行に旅立つフロベールに *commis de voyageur* の旅だけは絶対するな(1840年8月29日のフロベール宛ての書簡)と述べている。スタンダールも、主人公に、「私が商人だった12年間、郵便馬車でしか旅したことがなかった。パリからマルセイユまで3日しか費やすことはなかった。確かにそれはそれで素晴らしい。しかし、人間は動物扱いであった。パテを食べているか、日の半分を寝て過ごすだけであった」と語らせる。

Pendant les douze années que je fus marchand, je n'ai voyagé que par la malle-poste. Trois jours de Paris à Marseille ! c'est beau ; mais aussi l'homme est réduit à l'état animal : on mange du paté ou l'on dort la moitié de la journée.

第一巻の旅行の行程は図の通りである。

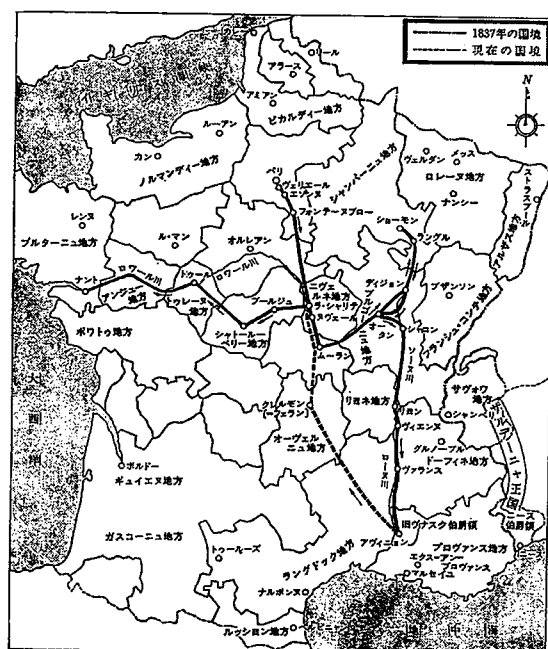


図 6-7 『ある旅行者の手記』行程図

山辺(1983)より転載

パリ→パリから南へ→リヨン→リヨンから南へ→北上、ロワール川→ナント
第二巻(南仏日記として)

ブルターニュ、ノルマンディ地方→再び南仏へ→ドーフィネ地方→サヴォワ地
方、ジュネーブ地方やジュネーブ→帰仏→マルセイユ→ジェノバ、南仏、ス
ペインめぐり

この旅行記に著者名はなく『赤と黒』の作者による」と記されているだけで
ある。

山辺は(1983)は「匿名はある程度まで守られる(414)」として、スタンダールの
の自由な意見が展開されるための策とみている。

(2) 出版にまつわる背景

ボワイエは

「1838 年、あるフランス人に (スタンダールの事), 18 世紀後半にフランス旅行
をしたアーサー・ヤング⁽²⁷⁾(Young, Arthur 1741-1820)のように, 地方のオリジナリ
ティー(独自性)を調べるためにフランスを周遊するという新しい考えが起こった」

(28) (Boyer, 2000 :199)

と述べ、続いて「南仏に関してはプロスペル・メリメ⁽²⁹⁾(Mérimée, Prosper, 1803-1870)からの情報やミランの作品（調査）を反映、むしろ借用している」(idem :199)と言及する。さらに、「ペールは、食べるため、つまり金を作るために出版したと書いている」(idem :199)と文章は続く。

スタンダール自身の日記(1810 年 3 月 31 日)にも⁽³⁰⁾

「アーサー・ヤングを読んで、フランス旅行をしてみたいと思うようになった。彼の本を携えて、しかし彼と同じくらいの喜びを感じるためには、彼と同じだけの情熱もまた必要であろう」

と、ヤングからの影響が書き綴られている。

スタンダールは出版の理由を「(フランスの旅行記は) いままで存在していなかったから」とも理由を述べるが、「フランス」を対象にしたことは、それなりの意図があった。まず、フランス人の自国への無関心さを暴くため、パリにしか興味のないフランス人を嘆くため、ルイ・フィリップ(Philippe, Louis, 1773-1850)の 7 月王政を批判するためなどが挙げられる。多くのロマン主義作家たちが、「外」への関心を高める中で、あえて「国内」に目を向けることはすでにこの旅行記の独自性を表現している。

当時、フランス人が書いたフランス旅行記はミラン⁽³¹⁾『南仏県巡り』*Voyages dans les départements du Midi de la France* d'Aubin Lous Millin のものしかない。しかも、ミラン自身は古代史学者(antiquaire)であり、この書は旅を促す紀行文ではなく、遺跡や調査目録のための旅をまとめたものであった。後にスタンダールはかれの記述を頻繁に引用していることをデル・リット(1965)が指摘している (XIX)。

考古学的な記述や建築学的な記述に興味のないスタンダール⁽³²⁾は、既存の資料を使い、むしろ旅する主体の視点にオリジナリティを持たせた「旅行記」の制作を意図したのではないだろうか。スタンダールもその主体について、

「学者のように（知識を振りかざして）フランスを回るのはではなく、いろいろなことに好奇心をもつ旅行者 *voyageur* としてフランスを巡るのだ。この作品は、なにかの発見についての旅行記ではなく、旅の印象を語るものだ」⁽³³⁾ (『ある旅行者の手記』序文より) と語る。

『ある旅行者の手記』でも、

J'aime à faire des visites en chapeau de paille et en veste de nankin

「麦わら帽子をかぶり南京風のジャケットを着て旅をしたい」

と主人公に語らせ、「旅行者 *voyageur*」として「旅」を意識している⁽³⁴⁾。タイトルについては次項(3)で論じるが、序文において、旅の主体は(タイトルで使用されている) *touriste* ではなく *voyageur* であることも明らかにされている。

また、南仏旅行に途中まで同行したメリメによる次のような逸話も残される。

『ある旅行者の手記』のための取材旅行中、地方で職業を聞かれたスタンダールは「私は人間の心の観察者(*Observateur du cœur humain*)です」と答え、相手は警察の密偵ととりちがえてぶっ倒れた(スタンダール全集 8 恋愛論 恋愛書簡(i))

スタンダールは旅の主体の属性(どのような旅行者であるかについて)に関し興味を抱くが、旅の目的に関しては、明言を避けている。デル・リットは

「すべての旅には発見という目的があり、あらゆる旅行記は、訪問先の知見を増やすことを目的としており、剽窃であることはわからないようになっている。スタンダールはこの役割を果たしているだろうか。答えは、漠然としている。なぜなら、スタンダールはこのような枠組み(旅行記とか旅とか)に拘らない人物であるからである」(Del, Litto, 1965 :LXXV)⁽³⁵⁾

と分析し、この点において「オリジナルな旅(*Un voyage original*)であった」(*idem*)と結論付ける。

特定の目的のない旅がオリジナルとすれば、特定の目的のない旅をする主体つまり *Touriste* もオリジナルである。さらに *touriste* を旅の主体とした旅行記もまたオリジナルであったということだろう。

(3) タイトルについての諸相

この旅行記が観光研究として対象とされる理由はタイトルに使用されている *Touriste* の存在である。スタンダールが *Voyageur* ではなく *Touriste* を付けた経緯に関して、作者自身はなにも語っていない。

スタンダールは、フランス語では伝えられない単語は英語のまま使う習慣が

ある上、英語好き(anlgomania)でもある。Egotisme (エゴチズム) を、フランス語の Egoisme と翻訳する事に抵抗を感じそのまま Egotisme を用いたといわれるが、『ある旅行者の手記』の主人公(=旅の主体)に対応する適当な単語がフランス語にないため英語由来の Touriste を使用したのではないだろうか。

Touriste という単語は 1816 年のシモン(Simond, Louis 1767-1831)の *Voyage d'un Français en Angleterre* の中で初めて登場した。シモンは目次で、Touriste は英国人旅行客を意味するために使ったとその意味を限定している (Boyer, 2000, Litto, 1965 他)。桑原・生島 (1972) は、スタンダールはシモンを「派手なところはないが、なかなか見識がある人物⁽³⁶⁾」と評し、彼の文章を評価していたことを言及する (【補注】の参考資料参照)。事実、すでにスタンダールは自著の序文でしばしばシモンの文章を引用した経験がある (桑原 1972, 大岡 1970 ほか)。文学研究者たちの間でシモンは、スタンダールが引用を好んだ作家であり、『恋愛論』の序文で、スタンダールが丸ごと引用した作家として注目している⁽³⁷⁾ (【補注】の参考資料参照)。しかしながら、スタンダールの旅行記のタイトル Touriste とシモンが 1816 年に使用した「Touriste」の関係について一言も言及されていない。ボワイエ等の観光研究においてはシモンが 1816 年にはじめて Touriste を使ったことは言及されているが、スタンダールとの関係は全く言及されていない。観光研究的に切り口を変えた「スタンダールとシモン研究」によって、新語 Touriste が一般化された年代を変えることもあるのではないだろうか。つまり、シモンが観光研究の対象となることにより、彼の功績への関心が問われ、1816 年という年が 1837 年よりも重要視されるであろう。今回の調査で観光研究と文学研究がリンクしていない現状が明らかになった。

話を戻すが、単語 Touriste のコノテーションは本来「変わり者のイギリス人」を意味するフランスでは否定的なものであったが、一方で「有閑階級のイギリス人」も意味した。スタンダールはこれを逆手に取り、フランス人であり、しかも鉄の商人を意味する主体を Touriste と名付けることに皮肉を込めて満足したのではないだろうか。あるいは当時、すでにちらほら使用された新しい英単語 Tourist を使っただけのことかもしれない。デル・リットは本が売れるようにと商業的に「狙った」タイトルをつけた出版社の戦略によるもの、メリメの提言、あるいはメリメの示唆によるもの等の可能性を披露する (Del Litto, 1965:XV)

以上のように、想像は尽きないが、本文中(Pléiade 版, 1992)において Touriste は 2 回しか現れていないことを考慮すると、あまり深い意味はないのかもしれない。Touriste は 49 ページと 50 ページに続けて 2 回使用されている。初回は

イタリック体で書かれるが、二度目は戻される。イタリック体で書いたことさえ忘れるくらいの意味しかなかったのではないかとデル・リットは分析する。旅行者 Touriste が「学問」の対象として存在するなど夢にも考えなかったスタンダールにとって旅行記の「タイトル」が 180 年後に議論されることは想定外であつたろう。ストーリーの現代性が論じられる彼にとっても Tourisme は「鉄」のように一大産業となるとは考えられなかったに違いない。

(4) 新聞紙上に見られる『ある旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste* の反響

作品中、あるいはタイトルに Touriste を用いた作品はすでに存在していた⁽³⁸⁾。1830 年代に集中していることから、辞書にはまだ掲載されてはいないが、この時期に単語 Touriste は一般化されつつあったことが推測できる。それではなぜ、スタンダールの旅行記のタイトルによって単語 Touriste は普及したのかという疑問には、作品の発行部数とスタンダールという作者の知名度によるものであろう。出版についての告知、さらには作品に関する批評が、当時の有名新聞紙上で掲載されていた。

1) 告知に関する記事 (Pléiade 版 1992, Stendhal, *Mémoires d'un touriste in Voyages en France* より引用)

1838 年

6 月 20 日 ル・コンスティチュシヨネル紙 Le Constitutionnel

6 月 21 日 ジュルナル・デ・デバ紙 Journal des débats

6 月 25 日 ル・クオティディエンヌ紙 La Quotidienne における告知の抜粋は以下の通りである。

Il y a du charme, de la gaité caustique, des observations ingénieuses. Nul provincial ne connaît son département, nul ne se fait une idée exacte des éloges ou des critiques que mérite sa ville natale, s'il n'a pas lu les *Mémoires d'un touriste*. Lyon, Nantes, la Grande Chartreuse, Bourges avec son admirable cathédrale et ses détestables auberges, et tant d'autres villes ; tels sont les sujets qui, sous la plume de M. Stendhal, ont revêtu une forme toute nouvelle et toujours amusante. Le livre une fois ouvert, on ne le quitte qu'à la dernière page. Les *Mémoires d'un touriste* obtiendront un double succès : succès de la réputation pour l'écrivain, succès d'argent pour l'éditeur (886)

人を引きつける魅力と、辛辣ながらも明るく、そして巧みな省察がある。この

『ある旅行者の手記』を読まなければ、自分の住むところについて語れ、自分の生まれた土地を正確に讃えることも批判する地方人などいないであろう。リヨン、ナント、グランド・シャルトリューズそしてまた他の都市も同様に、素晴らしいカテドラルやおぞましい宿屋についてのテーマなどはスタンダールの筆にかかれば、まったく新しい形式の作品になる。一度本を開いたら最後のページまで読んでしまうであろう。この作品には二重の成功がある。一つは作家自身の評判に関する成功で、もう一方は出版社に金銭的成功をもたらしたことである。

6月25日 ラ・プレス紙 La Presse

6月26日 ル・シエクル紙 Le Siècle

6月26日 ル・コンスティチュシヨネル紙 Le Constitutionnel

6月26日の「ル・コンスティチュシヨネル紙」に見られる宣伝は以下の通りである。

L'éditeur Ambroise Dupont, qui ne sait pas s'endormir sur le succès, vient de publier un nouvel ouvrage avec le titre de **Mémoires d'un touriste** (Pléiade 版 Stendal, 1992 : 886)

アンブロワーズ・デュポン出版は、前回の成功に気を抜くことなく、新本『ある旅行者の手記』を出版した。

L'auteur à qui l'on doit les Promenades dans Rome et le roman intitulé Rouge et Noir, a des qualités trop unanimement reconnues pour qu'une vive curiosité ne s'attache pas à cette publication. Ces mémoires sont des Impressions de voyage, mais dans la véritable acception du mot. Ce que les touristes ordinaires vont chercher inutilement, M. De standhal l'a demandé à la France, à nos principaux départements, et il a le bonheur de le trouver. Tout ce que la critique a de plus piquant, l'investigation de plus neuf, l'observation de plus saisissant et de plus original, se rencontre à chaque page de ce livre. Les mémoires d'un touriste intéresseront tout le monde, car chacun y découvrira des faits et des anecdotes qui le toucheront plus ou moins directement.

この出版に限らず、『ローマ散歩』や『赤と黒』の著者には、満場一致で認める素晴らしい才能がある。この回想記は旅の印象記であるが、印象記という単語の語義通りの使い方である。普通のツーリストがむなしくも探しに行くもの（何か）を、スタンダール氏はフランス国内に求め、幸いにもそれを発見するのである。最も辛辣なクリティック、斬新な調査、オリジナルな省察がどのページにも見ら

れる。この『ある旅行者の手記』はあらゆる人の興味をひくだろう。なぜなら、読者それぞれが多かれ少なかれ直接関係する逸話や事実をそこに発見するから。

- 6月26日 ル・タン紙(Le Temps)
- 6月26日 ジュルナル・デ・デバ紙 (Journal des débats)
- 6月30日 ジュルナル・ドゥ・ラ・リブレリー (Journal de la librairie)

2) 作品対する書評

- 7月8日 ル・コメルス(le commerce)
- 7月10日 ラ・プレス(La presse)
- 7月27日 ラ・ガゼット・ドゥ・フランス(La Gazette de France)
- 8月9日 ル・タン紙
- 8月19日 ラ・ルヴュ・ドゥ・パリ(La Revue de Paris) における書評は以下の通りである。アルヌー・フルミ(Arnould Fremy 1809-189? 小説家, ジャーナリスト)氏は

En voyage, on ne vit pas seulement d'archéologie, de peintures, de cathédrales et de paysages, il faut dormir aussi, manger, se loger, et se distraire. L'auteur dit tout cela, il parle des auberges où il s'arrête, des cafés où il se trouve, des rencontres qu'il a faites, de ses ennemis ou de ses amis de diligence, de table d'hôte et de bateau à vapeur.

旅において、我々はただ、遺跡、絵画、寺院、風景を見るのではない。眠ったり、食べたり、宿泊したり、楽しまなければならない。作者はそれらすべてを語る。宿泊したオーベルジュ、入ったカフェ、人との出会い、馬車の中で気の合った人、気の合わなかった人、安食堂、蒸気船など、旅に関わった人、事象について語る。(ラ・ルヴュ・ドゥ・パリ 8月号掲載)(924)

12月28日 ル・クーリエ・フランセ (Le courrier français) E.G における評論

Les voyageurs littéraires ne nous ont pas manqué depuis quelque temps. Beaucoup sont allés bien loin chercher des impressions et des descriptions, s'efforçant de découvrir, au profit du feuilleton, des contrées et océans peu connus, et fondant de grandes espérances de succès sur ce proverbe : A beau raconter qui vient de loin. Notre touriste a laissé faire ces voyageurs intrépides ; l'auteur de Rouge et Noir n'est pas allé comme tant d'autres pèlerins chercher sur les rives étrangères ce qu'il avait à sa portée ; il a voyage

tout simplement en France.(929)

文学的旅行者の数はここ数年来、めずらしくなかった。多くが、印象と、描写を探索するためにかなり遠くにまで旅をしている。フイユトン（新聞の連載記事、小説）のために、あまり知られていない国や海を発見しようと、さらには、「遠方にあるものは容易に語れるものだ」との諺通りの成功への期待をかけて遠方まで旅をする。一方われらがツーリストはそういったことは勇敢な *voyageur* に任せる。

『赤と黒』の作者は身近なものを探しに外国の岸边まで旅に出ない。フランスを旅するだけであった。

多様な評価があったが、その独自性（オリジナリティ）に関しては大衆(public)の関心を集めた『赤と黒』を書いたスタンダールというネームバリューはもちろんであるが、活発化していたメディアの主流である「新聞」⁽³⁹⁾が『ある旅行者の手記』の出版に関する告知、および批評を掲載したことにより、「話題」の旅行記になったことは疑いない。作品の話題性によってタイトルで使用された単語 *Touriste* が急速に一般名詞化したのであろう。また、作家による国内の旅は「新しい旅」を提示し、新しい旅の主体 *Touriste* は人間味を帯びた等身大の旅行者として評価されたのではないだろうか。ラ・ルヴェ・ドゥ・パリ紙に掲載した前出のアルヌー・フルミの文章でも、美術作品や遺跡を見て、評価するだけのインテリではなく、食べたり、馬車内のこまごまとした話をしたり、カフェでの会話など、より日常的なレベルでの旅を語る *Touriste* が取り上げられるが、この旅行記の魅力はまさに「特別なものを何も発見しないこと」にあると言えよう。

(5) 「鉄の商人」「スタンダール」の交通手段について

『ある旅行者の日記』の主人公が駆使した交通手段は次の通りである。

- 1) 軽四輪馬車(*Une bonne calèche*)
- 2) 蒸気船(*Bateau à vapeur*)
- 3) 鉄道(*Chemin de fer*) （スタンダール自身は利用していない）
- 4) 軽二輪馬車(*Un cabriolet*)
- 5) 小型四輪馬車 (*ma pauvre petite calèche* , 前出の *une bonne calèche* の事)
- 6) 乗合馬車(*diligence*)
- 7) 郵便馬車(*les malles-postes*)

1)の軽四輪馬車は自分の所有する馬車である。鹿島（1990）の研究により、当時、個人で馬車を所有することは経済的にかなり恵まれた社会層であることが必須条件であることから、主人公の経済状態はかなり良好なことがわかる。2)は鉄道が敷設される前のフランスにおける重要な交通手段であった。特にリヨンからは、ローヌ川を下って、南仏へ向かう旅行者、あるいは南仏から船舶でイタリアに向かう旅行者を載せた蒸気船が頻繁にでていたようである。『ある旅行者』が出版される以前の事であるが、1833年12月、休暇を終えてチヴィタヴェッキアへ戻る途中のスタンダールは、ローヌ川を下る船の上で、ヴェネチアへ向かうジョルジュ・サンドとアルフレッド・ミュッセ (Musset, Alfred, Louis, Charles de, 1810-1857)に出会っている（鎌田、岩本訳、2007:293）。3)の鉄道であるが、『ある旅行者』の主人公はサン・テチエンヌで乗っており、その安全性に疑問を持つ。しかしながら、スタンダール自身はフランス旅行中には「鉄道」には乗っていない上、サン・テチエンヌ（フランスで初めて鉄道が敷かれた町）には行ったことがない。イギリスに遅れフランスで始まった鉄道事業について話題にすることで日記にアクチュアリーティーを与えたのだろう。主人公は「鉄道の将来性」に関し否定的である。スタンダール自身は、鉄道を条件付きながら有望な手段とみているのだが、当時の産業界への不信を募らせているのである。「鉄道会社は民間の創意に委ねるべきである。だが悪徳事業家が株式を発行して相場を操作しては利益を挙げ、自己の都合で事業から手を引く事態が予想される」（壇上、1830:42）

4)は、1)を旅の途中で召使いともども返してしまったために、借りたものである。6)については「旅行者」が最も頻繁に使用した乗り物である。鉄の商人は、若い頃に、慣れ親しんだこのタイプの馬車にノスタルジーを抱いている。7)の郵便馬車は、とにかく急いで旅をする人、つまり仕事による移動を強いられた「旅行者」にとっては便利なものであった。

以上のように主人公は、19世紀前半の乗り物をすべて駆使している。途中からは召使いも帰ってしまったので、一人旅であった。携行品に関する描写はあまりないので、分析できないのだが、「フランス旅行」で読むべき本として、『ガリア戦記』⁽⁴⁰⁾、『タキトゥス』を旅行中に購入している。『ボードリー版の分厚いシェイクスピア』(*le gros Shakespeare de Baudry*)は持参していた。

語り手の「鉄の商人」という属性、観察力、(反)近代精神、物質的要素としての乗り物、携行品を概観すると、「鉄の商人」という旅の主体をツーリストと

呼ぶのには難しい。しかし商用ではなく「楽しみのため」という点においてツーリストの条件を満たしている。

一方でスタンダールという旅の主体はどうであろうか。臼田(2007)は次のような結論に導く。

「スタンダールことアンリ・ベールの生涯は、十六歳で郷里グルノーブルを出て以来、旅につぐ旅の一所不在の人生であった。青年時代を軍人として北イタリアやドイツを巡ったあと、《亡命者》としてミラノに行き、最後に外交官としてチヴィタヴェッキアに滞在したが、それらの場所に身を落ち着けたというわけではなかった。かれは仕事で外国に暮らしても、そこに留まることなく、そこからまた各地を訪れるということを絶え間なくしている。公用はさておいて、それは時には恋人や友人に会うためであったり、私的な用事のこともあったりしたが、楽しみのための旅行が多い。その点では、かれは生涯に涉って漫遊（ツーリスト）であったと言っても過言ではないだろう。（臼田, 2007 :239）

デル・リットもスタンダールの旅の頻繁さを示した上で、

「スタンダールに貯金をする余裕があり、必要なときに予備の金を当てることができるだろうと考えるのは、彼をよく知らないからだ。すでに指摘したように、かれは浪費家ではない。かれは楽しむために金を使う。たとえば、旅行に出かけたいと思うと、たまらなくなる。さっそく旅にでるのはすばらしいことだ。その点でも、かれは先入観を許さない。かれの体躯や習慣からみて、かれが家に閉じこもり、出不精だとみなされるかもしれない。とんでもない。かれは常に旅をしている。というのも絶えず多くの新しいものが観察できるから」（鎌田・岩本訳, 2007:235）

観察目的ではあるが、これこそまさにスタンダールの「楽しみ」であり、その目的のための移動者であれば、やはりスタンダールはツーリストと言えるのだろう。

第5節 旅を好んだ理由についての考察

頻繁な旅に関して、臼田は(2007)は

「それにしても、ベールを旅に駆り立てたものはいったい何だったのだろうか。それはやはり知的な好奇心といってもいいように思う。軍隊とともに訪れたイタリアを契機としてかれは旅によってさまざまなものに触れて刺激を受け、自己を活性化させていたのだ」(246)

と考察する。スタンダールは日常的に読書はもとより、執筆活動にも余念がなく、読んだ書物も、手紙や日記、そして書き残した原稿の量も膨大であった。「かれは旅の移動のなかで書きながら自己を形成していった」(246)と言及するが、旅と執筆活動との相互作用がスタンダールを形成したということであろう。

また、スタンダールに内在するノマド的性格も指摘される。

Il aimait bouger. Il ne pouvait rester en place très longtemps. Il était « incapable de séjourner très longtemps au même endroit sans connaître l'ennui ou la lassitude »(CE)

かれは動くのが好きなのだ。一つの所に長くいられないのだ。彼は退屈して一か所に長くいられることができなかった。

デル・リットはフランス語で移動を表す *déplacement* と *voyage* について、スタンダールにとって *déplacement* は文字通りただの移動であり、*voyage* ではない。旅とは心(*cœur*)と精神(*esprit*)に触れる移動である。彼は新しい感覚や知識を追い求め、さらにはすでに持っていた知識を広め、深め、豊かにすることを切望していた。スタンダールにとって、旅に出る前から、旅は必要なものであった⁽⁴¹⁾ と述べる。(Del Litto,1965)

スタンダールの書簡から、かれの「旅」の哲学を読み取ることができる。

Une philosophie du voyage : « je m'ennuie de voyager. L'ennui de ne point voir de société y est pour beaucoup »(28 mai 1806) (Del Litto,1965 : XX)

- ・ 旅の哲学「旅に退屈する。その土地でその社会が全く見ることのできないときである。」(1806年5月28日付)

: « [...] je suis très passionné pour les voyages en ce moment ; quand on sait voyager,

cela doit bien faire les hommes » (16 mars 1807)(idem)

- ・ 旅の哲学「今、私は旅に夢中である、旅をすることの意味は人間を知ることだとわかったからである」(1807年3月16日付)

: « j'aurai fait quelques progrès dans ce grand art du voyage, bien plus difficile qu'on ne pense » (28 mai 1807) (idem)

- ・ 旅の哲学「旅は考えている以上に難しいことではあるが、この旅行というすばらしい技術で私はなにかしらの進歩をしたようだ,」(1807年5月28日付)
...prouve que ce voyage n'est pas une simple partie de plaisir, mais qu'il a une finalité didactique. (idem.XXI)
- ・ 旅は単なるお楽しみの一種ではない、究極的には教育的な役割があるものだ.

また、体調を崩した友人マエストル氏に奇跡的な治療法を問われ、

« Quelle maladie avez-vous ? Il me semble qu'à cinquante ans, le voyage est excellent pour toutes » 13 juillet 1834)

(idem :XXII)

「どんな病気なんだい？50 歳になってわかったことだが、旅こそがすべての病気にとってすばらしい治療なんだよ」(1834年7月13日付)(idem :XXII)

と答えている。

第6節 考察

スタンダールが Touriste という単語を広めた第一人者と言われるが、『ある旅行者の手記』の旅行者は否定的なコノテーションを含む Touriste という旅の主体ではない。寺院だけを見学することではなく、「美しい風景」を求め、人間を観察し、ローカルの人々と会話をすることを楽しみとしている。確かに、かつては鉄のセールスマンとして、商売のためだけに旅をしていた主人公（経済活動をするものに対する考えが現在とは違う）であるが、この旅行記では、「財産」もあり、一定のところに滞在する時間もある旅行者である。1838年つまり出版された当時、すでにスタンダールは小説家として有名になっていた。『赤と黒』の作者として出版していることから、販売数を伸ばしたいと願う出版社とス

タンダールの策略が見えるが、Touriste という新語を選択したのも、その単語を一般化したいという期待よりも、より作品をセンセーショナルなものにしたという気持ちからだったのであろう。しかし、スタンダールという大作家のおかげで Touriste がフランスにおいて普通名詞となり一般化されたことは事実である。一方で、スタンダールは Touriste という旅の主体の定型化には成功しているとは言い難い。1842 年テヌがピレネー旅行記の中で、Touriste の分類を行い、19 世紀ラールスにおいては、ツーリストの項目で紹介されるが、どのタイプの Touriste も『ある旅行者の手記』の主人公には適合していない。

一方で、ミラノやパリの生活でも明らかなようにスタンダールほど都市の文化を楽しんだ作家もいない。芝居を見るためのロンドン旅行もある。現代の定義ではまさしくスタンダールは Touriste である。『ある旅行者の手記』の語り手は鉄の商人 Philippe であるが、結局、旅の主体はスタンダール自身に他ならず、タイトル Touriste に自分自身を隠したのではないだろうか。つまり、単語そのものは流通しているものの、定義がはっきりしていない Touriste を利用した言葉遊び（スタンダールの隠喩としての Touriste）である。

今回の分析でフランスの Touriste 研究においてこの作品は重要であることが確認できた。

日本語のタイトルでは『ある旅行者の手記』としても『あるツーリストの手記』にしても、フランス語 Touriste の「否定的含蓄」あるいは「旅の主体の変遷の一形態」が表現されず、一元的な意味でしかとらえられないのが残念である。

【補注】

- (1)Ecole Polytechnique フランスの理工系エリート養成のための機関で、グラン・ゼコールのひとつ。ナポレオンが学生を自分の支配下に置くために設立した学校。
- (2)Daru (1767~1829)陸軍大臣、伯爵、アカデミー・フランセーズの会員となる。スタンダールはこの人物を後ろ盾に大きな恩恵をうける（臼田,2007）。
- (3)本来はトリエステのフランス領事に任命されるはずであったが、オーストリア政府に拒否される。
- (4)デル・リット氏の解説によると、この著書の特徴として当時の文学技法とは対照的に「かれはすべてを語りながら、何も語らず、しかも常に思いつくままに述べる。」ことを挙げる。この姿勢がオーストリア政府に反感を買う。
- (5)田園風景としての自然「悦楽境」。
- (6)ここでは、畏怖、恐怖感を与える景色、風景。
- (7)自然への賞賛をするルソー。
- (8)『パルムの僧院』において、主人公ファブリスによる風景の説明はほとんどないが、アルプスの描写はすくなく存在する。
- (9)スイスとイタリアとの国境にあるアルプス山脈の峠。標高 2,469 メートル
- (10)それまでは「目的地」に到着することに旅人の関心はあった。
- (11)Vilaine 川：フランス西部、ブルターニュ地域を流れる川、大西洋へ注ぐ
- (12)肩書だけの聖職者。ピエモンテ貴族一家の子孫であり、元イタリア王家の司祭で、その内務大臣の息子。
- (13)当時は自宅のサロンで人を招くのではなく、スカラ座の栈敷で会話を続けるのが通常であった。
- (14)イギリスロマン派バイロン卿もいた。当時バイロンは栄光の絶頂。ベールとバイロンは互いに好印象を持つ。ロマン派の英雑誌エジンバラレビューを知り感動する。
- (15)1796-1814 年ミラノはフランスの衛星国：イタリア王国を名乗っていたが実際はナポレオンの兄による統治、ナポレオン失脚後(1814)は一時オーストリアに占領されるが(1859 年まで)1861 年イタリア王国に参加した。
- (16)Romanticism 恐らく、イタリアにいたイギリス人による呼び方。
- (17)仏和大辞典（文学）ロマンチズム：ロマンチスム romantisme という語が一般的になる以前に、ロマン主義運動を示すのにスタンダールが用いた用語。
- (18)古典主義の制約、歴史小説の過去への執着に対抗するものとしてのロマン主義。
- (19)文学研究ではルソーの「感受性」について多く語られる。
- (20)フォンテーヌブローでは、ヴィル・ド・リヨン・ホテルでたいへんよい食事でありつけた。このホテルは、ロンドン郊外のボックス・ヒルと同じようにスナッグ snug(静かで落ち着け、客あしらいがよろしい)だ。(山辺,1983:25)劇場まではこざいかな並木道を下っていく。(中略)この辺はよく整い、小ぢんまりして、静かに落ち着ける(snug)。このスナッグという言葉は、イギリス人以外発明できそうにない(山辺,1985:39)
- (21)Sympathique の初出は 1906 年。
- (22)『パルムの僧院』を書いた。
- (23)イタリア絵画史を書こうという計画。書店では、そのようなテーマが見つからないからというのがその理由であった。出版は 1817 年。

(24) *Le Guide du voyageur en Dauphine* d'Adolphe Joanne

(25) Arrigo BEYLE, Millanese, Scrisse, Amo, Visse

(26) 当時、フランスではモーツアルトは忘れられた存在であったが、スタンダールによってふたたび見直されたと言われる。

(27) *Travels in France During 1787, 1788, 1789*. 1793 年に仏語訳出版 *Voyages en France pendant les années 1787, 1788, 1789* が出版される。農学者でもあるヤングはフランスの地方を回り、フランスの農業とイギリスの農業の比較も行っている。

(28) 原文

En 1838, l'idée était nouvelle, pour un Français, de parcourir en tous sens la France provincial pour en étudier toutes les particularité, à la façon d'Arthur Young fin XVIIIe siècle. C'était une suggestion de Prosper Mérimée ; le choix du Midi de la France renvoie à l'ouvrage culte de Millin, *Voyage dans le Midi de la France*. 2000 :199) Beyle publie pour des « raisons alimentaire » ; « to make money », écrit-il. (idem :199)

(29) 『カルメン』、『コロンバ』で知られた作家であるが、歴史家でもある。歴史的建造物検査官に任命されフランス中を調査する。スタンダールよりも 20 歳年下であるが、友人であった。『ある旅行者の手記』の建造物に関する歴史的描写の多くはメリメの資料を基にしている。

(30) 山辺(1983)によると、「今は知る人もいないオーバン＝ルイ・ミラン(1759-1818)は、学士院会員、レジオン・ドヌール勲章(中略)、帝国図書館のメダル室長、考古学の教授、ゲッティンゲン王立科学協会会員、イタリアその他ほぼ全ヨーロッパのアカデミー会員、フランスの十指に余る地方都市のアカデミーや科学協会の会員でいらせられ、スタンダールに徹底的にかっばらわれた。『南仏諸県旅行記』全 5 巻、うち図版集一卷(1807-11)(Aubin-Louis Millin: *Voyages dans les départements du midi de la France*, 4 tomes en 5 volumes et 1 atlas. [Micofilm de la B.N])の巻頭に 11 行にわたってこの肩書を小さな活字でぎっしり印刷しておられる」(山辺, 1983 :418)。

(31)

« A. Young réveille le désir de voyager en France, son livre à la main, mais il faudrait aussi avoir une passion dans le cœur pour y trouver autant de plaisir que lui »

(32) メリメは友人が死んで 7 年後に書いた小冊子『H.B』の中で次のように回想している。「ペールは建築に対しかかなり無関心で、この分野については借り物の意見しか持たないように見えた(山辺, 1983 : 419)。

(33) 原文

ce n'est pas en savant que nous parcourons la France, mais en voyageurs curieux des aspects intéressants et avides de noble souvenir[...]. Cet ouvrage [...] n'est pas un voyage de découvertes, c'est un voyage d'impression

(34) 「麦わら帽子」や「南京風のジャケット」の服装からは、むしろ touriste 的と言えるかもしれない。

(35) 原文

Tout le voyage a pour le but la découverte. Toute relation de voyage, pour qu'elle ne relève pas de la simple compilation, est destinée à accroître la connaissance du lieu de visite. Les voyages de Stendhal remplissent-ils ces rôles ? La réponse est fortement nuancée, car Stendhal a ceci de particulier qu'il échappe à toute tentative de classement..... (Litto, 1965 :LXXV)

(36) 原文

Il n'est pas brillant, il est judicieux, disait ¹Stendhal qui l'a cité plusieurs fois.(Henri,1959 :412)

(37)

Louis Simond, né à Lyon en 1767, mourut à Genève en 1831. Il était naturalisé Suisse. Il a laissé plusieurs livres de voyages. (Henri,1959 :412)

リヨン生まれ, 1831年にジュネーブで死去. スイス人に帰化している. いくつかの旅行記を残す.

Martineau は『スイス紀行から』の一文を丸ごと序文に引用してしまったスタンダールの態度について, スタンダールは時間に追われ多忙な状況であったため, 自分の言わんとすることがうまく表現しているシモンの文章を使ったのだらうと判断する. 一方で桑原は, 「むしろ彼がシモンの著作に自説が見事に要約されているのを見て, 引用したと考えたほうがよかろう」と判断する(359).

ちなみに初版序文(1822)の最後に「シモン氏『スイス紀行』序文から抜粋, 7-8p と引用先が明記される.

(38)1834年 Victor Jacquemont, 1835年 Alexandre Martin « Le Touriste », 1836年 Alphonse Rastoul など.

(39)ジラルダンの発行した la Presse が新聞の価格を一気に下げて以来, 新聞の読者数が増加した. また新聞の種類も急激に増えたことも 1830年代の特徴である.

(40)ブルターニュ地方カルナックにおいて, 「じっくり遺跡をながめているうちに, あの狡猾な僧について, カエサルが残した少しばかりの文章で頭がいっぱいになる (山辺, 1985:20)」と述べたあと, 『ガリア戦記』の第六巻の13節を引用.

(41)原文

Autrement dit, avant de voyager, il faut savoir voyager. 「旅の仕方を知る」.

【参考資料】(シモンの文章を丸ごと写した『恋愛論』の序文とシモンへの評価)

初版序文^(三)

著者が公衆の寛容をねがってみたところでなんにもならない。出版するという事実が現にこの偽りの謙遜をうらぎっている。むしろ、読者の正しい判断、忍耐、公平にすべてをゆだねてだまっているのがよい。この本の著者がうったえんとするのはとくにこの最後の性質である。著者はこの本で真実をありのままに示し、いかなる国においても真実である感情や意見にしか敬意を表わさなかった。近頃フランスで、真にフランス的な書物とか感情とか意見などという言葉を耳にするにつけ、非常にあいまいな性格のものであるのに近來美德としてたてまつられているそうした排他的情熱を刺激したのではないかと、おそれる理由をもっている。

じつさい、歴史や道徳や、さらには科学や文芸までが、ライン川や山岳地帯や英仏海峡をこえるやいなや、ただちに真にロシア的、イタリア的、スペイン的あるいはイギリス的でなければならぬというなら、それらはいった

いどうなるのか？ こうした地理的正義すなわち真理をどう考えるというのか？ 真にスペイン的な献身とか真にイギリス的な美德とかいう表現が海外の愛国者たちの演説で本気に用いられているのを見るにつけ、わが国においてもまったく同様な表現を強制している感情をこのさい警戒しなければならぬまい。コンスタンティノープルやあらゆる未開民族では、自国にたいするこの盲目的排他的偏愛は血に飢えた狂熱としてあらわれる。文明国だとこれが気苦労性の不幸で不安な虚栄心となって、すこしもこれを傷つけると、たちまちやかましくさわぎた^(四)てる。

シモン氏『スイス紀行』^(五)序文から抜粋、七八ページ

訳注

一 『恋愛論』の初版は一八二二年にパリのモンジエ書店 La Librairie Universelle de P. Mongie l'aîné, Paris から出た。著者はスタンダールでも本名のアンリ・ベール・ベール・ベールでもなく、『イタリア絵画史』と『ハイデルン・モーツァルト・メタスターシオ』の著者、L' auteur de l' *Histoire de la Peinture en Italie*, et des *Vies de Haydn, Mozart et Métabase* と記されている。ちなみにスタンダールというペンネームが最初に使われた作品は一八一七年出版の旅日記『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』 *Rome, Naples et Florence en 1817*, par M. de Stendhal, officier de cavalerie p. 1865。やはり一八一十年の『イタリア絵画史』 *Histoire de la Peinture en Italie* は M. B. A. A. (M. Beyle, ancien auditeur 元書記官ベール氏) という名で出版され、一八一四年の短女作『ベイル・ベール・ベール』 *Metastase* の主筆は Louis-Alexandre-César-Bonnet という名で出されていた。

二 『海賊』——ウォルター・スコットの小説。スコットランドのシェンランド島が舞台。青年モードント・マートンは地主の二人娘ミンナとフレンドとともに暮らしているが、悪徳した海賊船の船長クリーヴランドがこれに加わる。モードントとフレンドは捕縛するが、ミンナは情熱的にクリーヴランドを恋として遂に身をまかす。スタンダールは『恋愛論』で何度もこの小説に言及している。

三 初版序文——注一のように『恋愛論』の初版は一八二二年であり、この序文はその時のもの。発売後十年かかって十七部しか売れず、出版社から「神聖なものでしょうな、だれも手をふれようとしません」と皮肉られた話は有名だが、スタンダールの生前にでた第二版（一八三三年）は、この売残りの表紙をかえただけのものではなかった。

四 たちまちやかましくさわぎだてる——ナポレオンの失脚以来、フランスはその失われた国民的自尊心の代償をヨーロッパにおける自国の精神的優位（すなわちフランス文学の優越性）にもとめようと、文壇も次第に國粹主義的傾向をおびるようになっていた。

五 『スイス紀行』——ルイ・シモン（1767—1831）はジョネーヴの作家で、前中の旅行記を残している。スタンダールは彼を「派手なところはないが、なかなか見識がある」と評していた。『スイス紀行』の初版は一八二二年。スタンダールが自著の序文に他人の作品の序文を転載したことは従来しばしば疑問とされてきたが、スタンダールが時間に追われて拝借したというより、むしろ彼がシモンの著作に自説が見事に要約されているのを見て、引用したと考えたほうがよからう。

傍線は筆者によるもの

第 7 章

フロベールの旅

第7章 フロベールの旅

フロベールの旅はロマン主義終焉期とも言われる19世紀中葉に始まる。第1番目の事例として、フランスロマン主義の父、シャトーブリアンの旅(第5章)を論じたが、3番目の事例としてフロベールの旅の「新しさ」について考察し、現在のTourismeへとの関連性について分析を試みる。

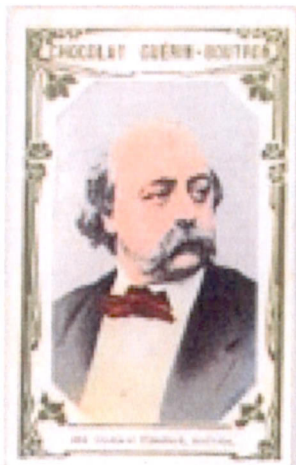


図 7-1 フロベール (ナダール撮影)

http://flaubert.univ-rouen.fr/iconographie/photos_gf.php より転載

検索日 2013 年 10 月 31 日

第1節 フロベールと旅の概要について

ギュスターブ・フロベールは19世紀のフランス文学を代表する作家のひとりである。代表作に『ボヴァリー夫人』⁽¹⁾、『感情教育』⁽²⁾、『聖アントワヌの誘惑』⁽³⁾、未完成の『紋切り型辞典』⁽⁴⁾がある。地方風俗を写實的に描いた小説によって有名になったことから、写実主義作家といわれるが、その根底にはロマン主義があり、むしろ写実主義のふりをした「ロマン主義作家」ともいわれる(カレ, 1932)。

フロベールは1821年フランス・ノルマンディー地方の中心都市ルーアンで、外科医の二男として誕生した。バカロレア⁽⁵⁾取得後は父親の勧めにより法学部に進学しパリで下宿生活をするが、癲癇を発症したことから法学の道をあきらめ、再びルーアンに戻る。父親はルーアン近郊クロワッセの別荘を息子に与え、

それ以降、フロベールはクロワッセにて文学作品を制作することになる。フロベールは「書くこと以外」に社会参加をしたことがなく、「作家」以外の何者でもない。さらにはクロワッセに蟄居しながら書き続ける作家としての印象が持たれている。しかし *écrivain-voyageur*⁽⁶⁾ と呼ばれる作家である。

1840 年には、ピレネー地方、マルセイユ経由のコルシカ旅行、1845 年には、スイス、イタリア旅行、1847 年の本稿の対象となるブルターニュ旅行、1849 年から 1851 年オリエント旅行、1858 年にカルタゴへと旅立った大旅行家であった。さらには、近郊の海浜保養地として発展しつつあった Trouville⁽⁷⁾ や発展前の Deauville⁽⁸⁾ などノルマンディーの海岸地域にも馬車で頻繁に訪れていた。また、ルーアン - パリ間を結ぶ鉄道は 1843 年に開通していることから、パリ在住の恋人（ルイーズ・コレ）に会うために上京する機会も決して少なくはなかったと考えられる。「旅」、「移動」が日常的に行われはじめた産業の発達時代、つまり「19 世紀近代フランス」に、生きた作家であった。フロベールの関心事は、一貫して「文学」であった。前述した通り、旅する作家ではあったが、*voyage* や *journal* など、旅行記として上梓される作品に不可欠な単語を冠した作品名は一つもない。17 世紀以降、フランスにおいて旅行記は、シュポー（Chupeau, 1977）、ル・ユナン（Le Huenen, 1987）が指摘するように、文学領域の存在になっているが、フロベールにとって「旅行記」とは相変わらず、「新事実を伝えるもの」にすぎなかった。

筆者は、フロベールが友人に宛てた書簡⁽⁹⁾ などから、フロベールの旅は一貫して「自分自身の楽しみのため」であったのではないかと考える。本論文においてフロベールの旅に関しては、「ブルターニュ旅行」と「エジプト旅行」の 2 つの旅行を研究対象とする。2 つの旅に共通することはマキシム・デュ・カンという、フロベールの友人でありながら、保護者でもあるような野心家の文学青年との二人旅であったことである。「ブルターニュ旅行」では今日の旅につながる新しさを見出しフロベールの旅の一つの特徴について明らかにすることを目的とする。方法として「旅の理由」、「行動」、「宿泊方法」等の分析、さらに、現地調査により得た現在ブルターニュで展開されている観光政策と比較しつつ、フロベールの「旅」にみられる新しさについて考察する。つぎに「エジプト旅行」では、「楽しみの旅」の側面と、文学者への道が拓かれる上で「旅」が作品に与えた影響を考察する。

第 2 節 『ブルターニュ紀行』について

すでに南仏、イタリアまでの旅を経験したことのある彼がなぜ旅行記の対象地をブルターニュという近隣地方にしたのであろうか。そしてどんな旅行記を目指したのであろうか。

(1) 出発の理由について

フロベールが友人マキシム・デュ・カンとブルターニュに旅立ったのは1847年の5月1日である。この旅の実施については前年つまり1846年の悲劇が起因とされる。1月15日にルーアン市立病院の院長であった外科医の父が死亡し、その一週間後には、最愛の妹カロリーヌが産褥熱で死亡するという悲劇があった。経済的にも大きな打撃を受けたのはもちろんであるが、精神的ダメージも多大に受け、父親がフロベールに残したクロワッセの家に閉じこもる日々が続いた⁽¹⁰⁾。その間にも、親友との別離や友人の死などが続き疲弊していた。

フロベールを心配した友人マキシム・デュ・カンは1846年の夏クロワッセに長期滞在し、その期間中に文学を志す者同士、奇想天外な多くの企画を練ったと言われる (Mme Herpeux 1940 :31)。デュ・カンは「3か月か4か月かけてフランスのどこか地方を一巡りしようということになり、ブルターニュで意見は一致したのです」(ibid : 31)と書いているが、渡辺によれば、「もとより、フロベールにブルターニュへの特別な関心があったとは思われず、ヴァンデおよびブルターニュ地方を舞台とした小説の構想をかねて抱いていたデュ・カンの発想であろう」(渡辺, 2007:31)と分析している。

「(友人のエルネスト・シュバリエ宛ての書簡)僕は少し空気を吸わなければ、もっと胸を広げて呼吸しなければと思う。そこで、デュ・カンと出発し、ブルターニュの浜辺をあちこち動き回ることにする。どた靴を履き、リュックを背負って、歩くんだ。」(Mme Herpeux, 1940 :24, 渡辺 2007 :311)の文章からも明らかなように、「ブルターニュ」への場所への固執はなく、「気分転換」がその最大の理由であり、「出発すること」「旅にでること」が旅の目的であった⁽¹¹⁾。

(2) ブルターニュについて

ブルターニュ地方はフランス北西部に位置する大きな半島であるが、フラン

ク王国を起源にもつ「パリ中心の」北部フランスや、南の「ローマ文化」をもった南仏文化とも、歴史的にも文化的にも全く異なった特異な地域であり、言語においては、長い間ブルトン語が使用されていた⁽¹²⁾。現在ではブルトン語の話者はかなり少なくなっているが、標識は2か国語で表記されている。ブルターニュの特色について渡辺（2007）は次のように簡潔に説明する。「新石器時代の巨石文化、紀元前500年頃から中央ヨーロッパより侵入したケルト人、中世前期にサクソン人を逃れて大ブリテン島から渡来したケルト人、1532年にフランス王国に統合されるまで独立性を保ったブルターニュ公国、フランス革命期の共和国政府に対する反乱—その荒々しく変化に富んだ自然と相まって、ブルターニュの歴史はこの地方に独自の言語、風俗・習慣、心性、建築物などをもたらしてきた」（316-317）

フロベールによるとロクマリケアール（図 7-1）からはフランス語圏ではなく、ブルトン語の地域に入る。彼が旅した頃は農村部では完全にブルトン語であった。一方で都市部がだんだん非ブルターニュ化してくる様相を伝える文章もみられ「町中⁽¹³⁾では、言葉はそのままだが、そういった特色（ブルターニュの特色）が消えてしまう」（前掲書：159）と地方での変化を伝える。

まず、フロベールは、言葉の違いからブルターニュに「異国性」を認め、次に、「近代」が蔓延している北フランスからの来訪者である彼は、陸の孤島とも言える「ブルターニュ」の「貧困」を目の当たりにし、同国内の現実とは思えないほどの「異国性」を感じる。ブルターニュで見たもの食べたものは、仔牛の肉、オムレツ、ガレット、シードル、トゥモロコシの粥（表 7-1）であり、それらはブルターニュの「貧しさ」をあらわす記号的な食べ物（名物）として表現されている。そして、ときには「うんざり」する。

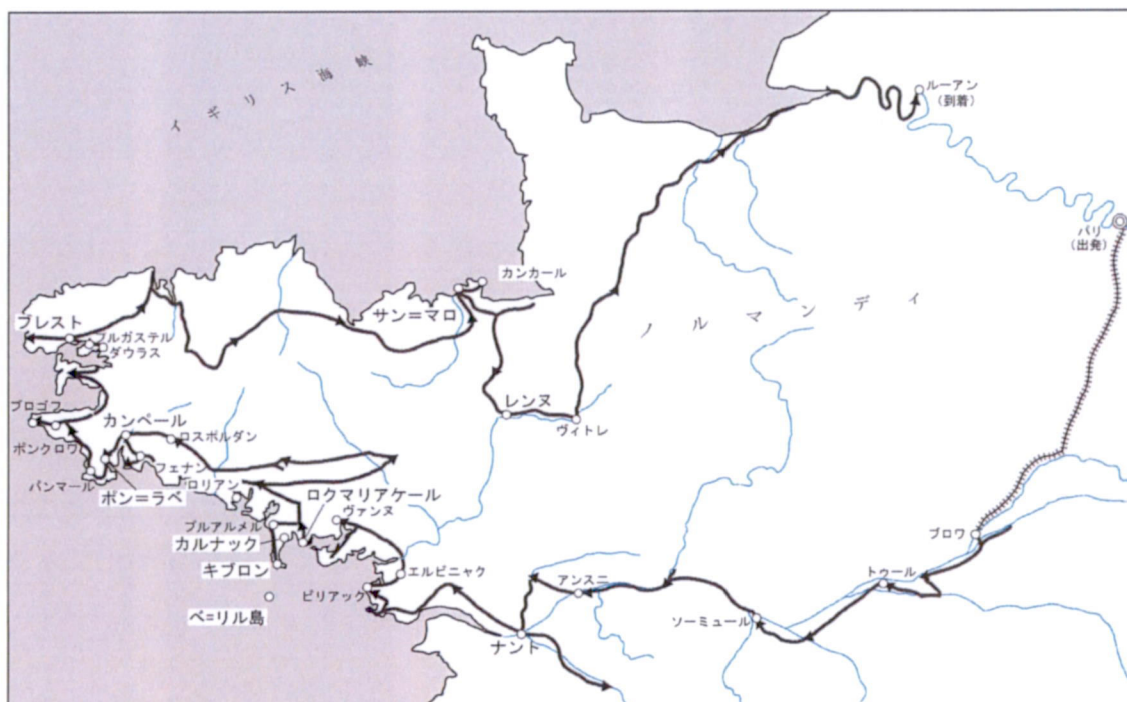


図 7-1 フロベールのブルターニュ旅行の行程

『フローベール全集 8』別巻掲載の地図を基に作成

一方で、それらの名物は現在では、ブルターニュの「豊かな郷土色」⁽¹⁴⁾を示す資源となり、とりわけ、モン・サンミッシェルのオムレツや、ブルターニュ全域に渡るが、そば粉を使ったガレットあるいは小麦粉を使用したクレープはブルターニュの換喩表現となっている。ブドウが栽培できない土地、つまりりんごしか栽培できない土地では、水よりも安かったシードル⁽¹⁵⁾もまた同様である。ブルガステル（図 7-1）では貧しい娘が摘んだイチゴを食べることになるが、現在ではブランド化され、高級イチゴと変化している。

フロベールは、ブルターニュ旅行の7年前の1840年、バスク地方、南仏、コルシカ島という国内における「異国旅行」をすでに経験している。それらの地方は生まれ故郷ルーアンからは遠方にあり、彼にとって歴史的、文化的はもとより地理的にも十分に「異国」であった。ところが、ブルターニュは出生地ルーアンが首都であるノルマンディー地方に隣接する地方である。それにもかかわらず、農民の貧困を目前に「社会の格差・違い」に圧倒される。

フロベールの時代、交通機関も交通網もかなり発達した時代であり、より「遠方」への「旅」も可能であった。しかし「遠方」、国境を越えなくとも、十分に「冒険」や「エキゾチズム」を発見できた時代でもあったことをこの旅行記は

「後世の読者」に証明する。「ブルターニュ」は「近く」、同時に「神秘的な」場所であった。

(3) 「旅行記」の方向性

「気分転換」が最大の理由であることは明らかであるが、フロベールもデュ・カンも、すでに「文学」で身を立てたいと考えていた青年であった。

19世紀は、「旅行記」が流行した時代、かつ大きく変容した時代であり、多くの作品が出版され、読まれた。その出版数から「工業文学」とも揶揄されたほどである (Le Huenen, 1987)。フロベールは、文学的推敲がなく、あるがままを書く「旅行記」に違和感を覚え「旅行記」を「文学」とは認めていなかったような分析もあるが (De Biasi, 2004)、渡辺 (2007) が述べるように、「好むと好まざるとにかかわらず、旅行記は、若きフロベールに、文学の世界に参入するための通過儀礼のひとつと認識されていた筈である」(312)

オリジナリティーを出すための戦略が、7ヵ月 (1846.12-1847.5) もの準備期間で練られた。

「フロベールが語ったように、二人とも旅の準備をした。フロベールは歴史分野を担当し、ルーアン市立図書館所蔵の年代記や、歴史書を調査した。デュ・カンは地理分野と民俗学、人類学の分野を担当し、サロン (美術展) をくまなく歩きながら、ブルターニュの風景が対象となっている作品を研究した」(Mme Herpeux, 1940 :32)

渡辺 (2007) は、旅の経過をただルポルタージュ風に綴るものでも、知識を並べ立てるものでも、エッセイのように自分の感想を書きつづるものでもなく、旅行記を小説のようなひとつの「作品」として書こうとする試みであったのだろうと言及する。

「己の、抑えがたい精神の躍動をも『忠実』に記録することを、推敲を重ねながらも敢えて選択したのである。それはフロベールにおける、旅行記＝「作品」のひとつの極限的な姿でもある」(渡辺, 2007 : 315)

しかしながら、自分自身に「忠実」であること、「場所」、「旅行中の出来事」

に忠実であること、「文学的作品」であることは、フロベールにとって苦しい作業であった（渡辺, 2007）。

旅行記であることよりもひとつの文学作品として出版したいという願いはタイトルにも表れる。本論文で引用している渡辺は『ブルターニュ紀行 野を越え、浜を越え』を邦訳題名としているが、フランス語の原題は、*Par les Champs et par les grèves* 『野を越え、浜を越え』のみである⁽¹⁶⁾。

「旅行記」はデュ・カンとの共著であり、奇数章をフロベール、偶数章をデュ・カンが担当した。しかしながら、出版されることはなかった。

第3節 ブルターニュ旅行について

本章では二人の青年はどんな「旅人」であったのだろうか。具体例を挙げて考察する。

(1) 旅の方法

「かつては、馬車に乗ろうが船を利用しようが、ある場所から別の場所に赴く場合、何かを見たり、思わぬ出来事に出合うだけの時間があつた」（渡辺 2007：7）

と、すでに（1847年）「目的地」のみを対象とする旅を批判している。ブルターニュ旅行におけるフロベールたちの旅のモットーは次の一文に表現されている。

「列車やディリジャンス（乗合馬車）に乗って、急いでブルターニュを横断するのではなく、徒歩で、背のうをしょって、長ズボンにはゲートルを巻き、杖を抱えながらの旅をするのだ」（Mme Herpeux, 1940 :32）

前述したように、彼らは7ヵ月にわたる準備期間があつた。ただウォーキング好きの旅行者の旅による「徒歩を中心とした」旅行ではなく、ブルターニュの歴史、地理、民族などについて、互いの得意分野を分担しながら膨大な資料を渉猟した上での旅であつた。また旅の携行品に関しても、入念に決定された。Mme Herpeux は「その携行品から、フロベールがツーリズムをどのように理解していたのかがわかる」（Mme Herpeux, 1940 :32）と述べる。

携行品は次の通り．文学的表現を省略して記載する．

- ・灰色のフェルト帽ひとつ
- ・博労の使う棒一本
- ・頑丈な靴1足（白革製）
- ・エナメル皮の靴1足（正装用）
- ・革製のゲートル1足
- ・ラシャ地のゲートル1足
- ・平織りの上着1着（正装用）
- ・平織りのズボン1本（正装用）
- ・平織りのチョッキ1枚
- ・ラシャ地の服
- ・小物類：典型的なナイフ1本，水筒2個，木製のパイプ一本
- ・薄絹のシャツ3枚（ヨーロッパ人が毎日の衛生を維持するために必要なもの）

以上のものを旅の間，十分に活用したこと，さらに，30冊の書物もあったことが述べられている．（同書：7）．

出発の日の服装は，

「軽快なスーツ，丈夫な靴，アヴィニヨンから取り寄せた帽子，カーンから取り寄せた杖，肩掛けのついた仔牛の革でできた青いカバン，ハンガリー製のたばこケース，彫刻のほどこされたチロリアンパイプ，準備は万端に整えられた．メモはひとつにまとめられ，旅の行程は地図に施されていた」（Mme Herpeux, 1940 :32）

モットーで示した通り，「歩き」を意識してか，とくに「足先」に関しては準備がさらに周到であることが伺える．しかし彼らは，全行程を「徒歩」で回っていたわけではない．彼らが旅立った1847年には，ルーアンからパリ経由でブローワまで，鉄道が開通済みで，2人も利用している．旅の行程については次節で扱うが，船，蒸気船，郵便馬車，乗合馬車など，新しい交通機関（汽車）から，地方でしかみられなくなった乗り物までも使いこなしている．

（2）旅の態度（属性）について

フロベール自身は、新語「ツーリスト」⁽¹⁷⁾という単語は使っていない。しかしその態度は次のように表現されている。

「一般にわれわれは、これは面白い、とひとがわざわざ教えてくれるものを避けることにしているので、Tours の近くにあるメトレ感化院、ナントにある癲狂院、アンドレの製鉄所、パンティエーヴル砦、ベ＝リルの灯台はいずれも見学しなかった。またわれわれは、通りかかる町のすてきなカフェのどれにもまだ入っていなかった。」(渡辺, 2007:60)

一般の観光者が行く場所を避けているような態度である。他の観光者(「ツーリスト」)との差異化を求めるこの態度(「アンチツーリスト」の態度)は、ユルバン(2002)によって20世紀のマス・ツーリズム以降多くみられる現象であると分析されているが、フロベールや同行者デュ・カンはすでに、アンチツーリスト的な態度をとっている。

フロベールは未完の遺作、『紋切型辞書』*Dictionnaire des idées reçues*の中で、

Voyage : Doit être fait rapidement

旅行：さっさと完了しなければならないもの¹⁸⁾

Voyageur : Toujours intrépide

旅行者：いつも危険を顧みない人

と定義しているが、*Touriste* という単語は掲載されていない。近代を諧謔的に記述する当該書において近代人「ツーリスト」の項目がないのは、皮肉る対象にもなっていなかったのであろうか。

「ガイドブックもどんな予備知識も持たず(これこそがよいやり方なのだ)、遠くでありさえばどこへでも行こう、遅くなりさえすればいつでも帰ろうと心に決め、歩き始めた」(渡辺, 2007:121)

とあえて、ガイドブックにはない旅を求める姿からも、差異化を求めるツーリストとしての属性が明らかになっている。

ベ＝リル(Belle Îsle)⁽¹⁹⁾で、迷子になりかける。

「構うものか、野原が醜くとも、ふたりして一ずっと横切って一歩き回るのはいつだって楽しいことなのだ(中略)、気の向くまま足の向くままあてどなく

進み、歌を口ずさみ、口笛を吹き、おしゃべりをし、夢想到ふけり、誰に聴かれることもなく誰にあとをつけられることもなく—まるで砂漠にでもいるように自由になって」(同書:120)

自然そして自由を満喫する「旅」が展開される。まさに目的地に着くことだけを対象とする「おたのしみ旅行」ではないことを強調しているようである。

現在でも、重要な観光資源であり続けるメンヒルの石が立ち並ぶカルナックで、フロベールは巨石群にまつわる諸説を紹介しながらも、結局は「カルナックの石は大きな石」とだけ感想を述べる。この無関心さがフロベールの特徴なのだが、カルナックの石に感動するツーリストを批判している一言とは言えないか。しかしながら、あまり興味の持てないカルナックに「カルナックは気に入った、しばらくここに滞在しよう」(同書:85)とするのは、ホテルが清潔で感じが良かったからであり、やはり「20世紀的ツーリスト」⁽²⁰⁾要素が確認できる。

(3) 旅の行程について

彼らの旅はブルターニュ地方の南から北へと進路をとった(図7-2)。

Mme Le Herpeux (1940) は北から南へとブルターニュ旅行をしたミシュレ⁽²¹⁾ (Michelet, Jule 1798-1874), ユゴー⁽²²⁾ (Hugo, Victor, 1802-85), メリメ⁽²³⁾ (Mérimée, Prosper 1803-70) の例をあげ、この行程、つまり南から北に進んだことが、フロベールの旅の独自性⁽²⁴⁾の一つであると述べる。

「フロベールはつまり、反対のコースをとったのだが、観光的視点ではすばらしいアイデアである。ノルマンディ地方からブルターニュ地方へと直接入ってしまうと、ブルターニュの特色がそれほど見られない越境地帯を通ることになり、無意識に通り過ぎでしまうものである」(Mme Herpeux, 1940: 46)

つまり、ブルターニュの地域性が明確に意識できるように、南から北へと進んだのではないかと論じているのだが、筆者も同感である。

(4) 文学散歩 シャトーブリアンをめぐる旅

1) サン・マロ (St. Malo)

まず、フロベールによる描写を紹介する。

「海の上に築かれ、城塞に囲まれたサン＝マロは、訪れる者には、波の上に置かれた石がつくる冠のように見える。石落としは冠の花形装飾である」(渡辺，2007：253)

「付近一帯の海には、木も芝も生えない，荒涼たる小さな島々がそびえ立っている」(前掲書：253)

「城壁の上を歩いて[サン・マロの]町をひと巡りするのには，この世でもっともすばらしい散歩のひとつである。ここには誰もやってこない・・・」(前掲書：255)

フロベールは寂しい風景とも言えるサン・マロに対して「好印象」を抱く。さらに，

「町の家々と城壁に挟まれたある場所には，草の生えていない溝の中に，砲弾の山がいくつもならべられている。そこからは，一軒の家の三階に、『ここにてシャトーブリアン誕生す』とかかかれているのを見ることができる」(同書：256)

と説明が続き，あたかも，散歩中，偶然に「生家」を見つけたかのように書き記している。「事実」を確かめることはできないが，フロベールは，19 世紀ロマン主義の系譜に続く作家であり，ロマン主義の父であるシャトーブリアンを尊敬し，賞賛する若者であったのだから，偶然を装った「生家」を見つけるための「散歩」であったと考える。

次にサン＝マロでは，シャトーブリアンの墓も訪れる。すでに第 5 章においてフロベールとデュ・カンが 1847 年当時まだ存命であったシャトーブリアンの墓参していたことについて記述したが，以下の引用文はフロベールによる「墓」の描写である。

「城壁の向かい，町から百歩程のところに，グラン・ベ島が，四方を海に囲まれて立っている。この小さな島に，シャトーブリアンの墓がある。岩に刻まれたその白い一角は，作家が己の屍を埋めようと定めておいた場所なのである」

(同書：265) (第 5 章の写真 5-1 参照)

「ある日の夕方、潮が引いているときに、われわれは島にでかけた一日は沈みかけ、海の水はまだ砂の上を流れていた」(同書：265)

「島には人気がない(中略)。墓は三つの部分から成る。土台の部分、墓石の部分、十字架の部分、である」(同書：265) (第 5 章の写真 5-2 参照)

「場所」の描写の次に、フロベールの夢想が始まる。

「シャトーブリアンはその下で、顔を海の方に向けて眠るだろう。岩礁の上に建てられたこの墳墓の中で、その不滅の存在は、その生涯がそうであったように、他人から離れ、雷雨にさらされるであろう。波は幾世紀にもわたり、この偉大な思い出のまわりで、ずっとざわめくことだろう」(前掲書：266)

最後に、彼らの行動が明らかにされる。

「われわれは墓のまわりを回った。手で墓に触ってみた。もうそこに主人が収まっているかのように、墓を見つめた。そして、傍らの地面に腰をおろした」(同書：266)

はじめて「夢想」が繰り広げられる文章を読んだ際、筆者はその「時制」に違和感を持った。なぜ、「眠るだろう」なのだろうか。フランス語の原著を参照してみると、やはり「単純未来形」の文章になっている。再考すると、彼らがサン＝マロを訪れたのは 1847 年であり、一方シャトーブリアンが死去したのは 1848 年である。つまり、シャトーブリアン生存中の墓参であった。この件に関し疑問に思っていたが、第 5 章の「シャトーブリアンの旅」の研究を進める中で解決することができた。第 5 章の中で既述しているが、グラン・ベ島への埋葬に関しては、1834 年に『両世界評論』で発表した『回想録』の中の「遺言の序文」で公表されていたのである。シャトーブリアン生存中にすでに、フロベールやデュ・カンのように、愛読者たちによる墓参をする現象があったことは 1830 年代のメディアの影響力を示す。また、シャトーブリアンが 1811 年に執筆を開始した回想記『墓の中からの回想』⁽²⁵⁾も遺言では死後 50 年経ってから

発表されるはずであったが、死後翌年の 1849 年に発行されている。シャトーブリアン死後も、その名声を利用したメディアの存在を垣間見ることができる。恐らくフロベールも『両世界評論』を読んで、グラン・ベ島に向かったのであろう。フロベールとデュ・カンのとった行動は「文学散歩」であることは間違いない。

2) コンブール(Combourg)

シャトーブリアンへの「思い」は強く、かれが幼年期を過ごしたコンブール城にも赴く。コンブールはサン・マロから南東 36 キロに位置し、電車で 30 分の町である。現在、人口は約 28,000 人の小さな町であり「シャトーブリアンの城」以外は、観光資源といえるものはない。ロマン主義発祥の町⁽²⁶⁾として、アピールしている。

城はシャトーブリアンの子孫により修復された。一般公開され、ガイドによる解説も聞くことができる（第 5 章の写真 5-4 参照）。

しかしながら、フロベールが訪問した時代のコンブール城は、フランス革命以後廃墟になったままの状態であった。「廃墟」とシャトーブリアン特有の「メランコリー」が合致し、「虚脱感」を体感できたのであろう。

城の荒廃状態は次のように表現されている。

「鍵穴の中で鍵が回り、足で蹴られて押し開けられた扉がべとつく敷石の上で軋んだ音を長く響かせたあと、われわれはすぐに薄暗い廊下に入っていった。そこには板や梯子、また樽のたがや手押し車が、所狭しと置いてあった」（同書 :293）

「監獄の中庭のように、日は上からしか射してこない。隅の方では、滴がはじめと石を伝って流れ落ちていた」（同書 :293）

「外から流れ込む熱い空気のせいで、体がほてった。そして、こんなふうに急に温度が変化すると、城の荒廃ぶりが、どれもいっそう悲しく、寒々したものに感じられるのだった」（同書 :294）

フロベールはシャトーブリアンを見つける。

「からっぽの部屋は物音一つしなかったが、かつては、今ぐらいの時間になると、この窓辺にあの子供が、ルネ⁽²⁷⁾が座っていたのだ」(同書 :293)

城の後方に、湖と牧草地がひろがる(写真 7-1)。

城を見学したのち、フロベールらは、その牧草地に向かう。草の上に座り『ルネ』⁽²⁸⁾を読み、主人公「ルネがいた場所」に思いを馳せる。

これらは *promenade littéraire* (文学散歩) であり、作家巡礼の旅である。2012 年現在、シャトーブリアン、そしてフロベールらがシャトーブリアンを辿った湖畔の小道は文学散歩コース (*circuit littéraire*) として整備されている(写真 7-2)。



写真 7-1 (左) コンブール城周辺の湖と湿地帯 (2012 年 8 月筆者撮影)

写真 7-2 (右) 文学散歩コース案内図 (2012 年 8 月筆者撮影)

「文学散歩」は、近年日本でも盛んに行われている観光形態である。ヴォルテールのフェルネー、スタール夫人のコペ、ジャン=ジャック・ルソーのジュネーブなど、アルプス地方では、すでに哲学者、文学者参りをする旅行者がいたが、アルプスが流行の地であったことに由来する行動の一環であった。アルプスからフランスに帰る途上に立ち寄ったのである。一方で、流行の地でもなく、フランスの辺境として存在したサン=マロ、コンブールへの旅(1847 年)は、シャトーブリアンを慕うための旅であり、まさしく作家巡礼であった。「近代(現代)観光の先駆け」と言えよう。

3) 現在の観光政策としての文学散歩

2012 年現在、地方および県レベルで「作家の家をめぐるコース」ROUTE des

MAISONS D'ECRIVAINS というプログラムが存在し、オート・ノルマンディ Haute Normandie 地方ではコルネイユ⁽²⁹⁾ (Corneille, Pierre 1606-1684), フロベール, ユゴー, モーリス・ルブラン⁽³⁰⁾ (Leblanc, Maucice 1864-1941), ミシュレらの生家, ゆかりの家を繋ぐ「文学コース」として提案し, イル・ド・フランス地方では, シャトーブリアン, コクトー⁽³¹⁾ (Cocteau, Jean 1889-1963), デュマ⁽³²⁾ (Dumas, Alexandre 1802-1870), メーテルリンク⁽³³⁾ (Maeterlinck, Maurice 1862-1949), マラルメ⁽³⁴⁾ (Mallarme, Stéphane 1842-1898), ルソー (Rousseau, Jean-Jacques 1712-1778), ツルゲーネフ (Turgenev, Iwan. 1818-1883), アラゴン⁽³⁵⁾ (Aragon, Louis 1897-1982), ゾラ⁽³⁶⁾ (Zola, Emile 1840-1902) に関連する家, 美術館を紹介する「文学コース」を提唱している。「文学者」を利用したあらたな「観光政策」が促進されている。

(5) 19 世紀の都市観光

都市観光とは美術館, 芝居, レストランでの飲食, ショッピングなどを楽しむ比較的新しい概念とされるが, 19 世紀中葉の旅における「新しさ」を検証するために, フロベールの旅における都市観光要素の考察を行った。

1) 宿泊形態について

ブルターニュ旅行中, フロベールらはどんなところに宿泊していたのだろうか (表 7-1)。

ブルターニュにおいて, ナント, キブロン, ヴァンヌ, ロリアン, ブレストなど都市部においては, 「近代的」な清潔感のあるホテルに宿泊している。フロベールらは, 「場所」への魅力よりも, むしろ「ホテルの快適さ」にひかれて, 長期滞在する傾向にあったことが本文中でも明らかにされている (ナント, カルナックなど)。

表 7-1 フロベールのブルターニュ旅行中の宿泊形態と食べ物

| 都市名 | 宿泊形態 | 食べ物（実際に食べた、あるいは話題にしたもの） |
|-------------|---------------------------------|--|
| トゥール・ソミュール | 牢獄 la Prison Centrale | 仔牛 |
| ソミュール・アンズニ | ホテル Hôtel de la Maine | |
| メイユレー | トラップ修道院 Trappe de la Meilleraye | オゼイユソース添えのゆで卵、粥、ブルーンを煮たデザート |
| ナント* | ホテル（快適） Hôtel de France | アンチョビバター添えのビフテキ、エビ、白ビール |
| ビリアック | オーヴェルジュ（「驚くべき宿」と表記） | 仔牛と卵（毎日同じでうんざり） |
| エルビニャク | | 食料品店にてビトレスクな食事（内容は不明） |
| ロクマリアケール | フランス語圏でなくなる | |
| カルナック | ホテル Chez la veune Gildas | |
| キブロン* | ホテル Hôtel Penthièvre | オマールエビとビフテキ |
| ベ＝リル | | 珪器に入った冷たいミルク(1) |
| ブルアルメル | 村長の家 | オニオンスープ |
| ヴァンヌ* | ホテル Hôtel 名前は不明 | |
| ロリアン* | ホテル Hôtel de France | |
| キニピリ | | ガレット Galette(2) |
| ロスボルダン | 貧しい村 | 人々がクレープとトウモロコシ粥ばかり食べている |
| カンペール* | ホテル Hôtel 名前は不明 | 金持ちが間接税監察官に（パリのデザート）oeufs a la neigeを提供(3) |
| フェナン | | ひどいオムレツと生のアーティチョーク |
| ボン＝ラベ | ジット Gîte 宿屋 | |
| ペルマック | 税関士のいる小屋 Hutte des douaniers | |
| ケリティ | | オマールエビ |
| ブルゴフ | 馬小屋およびホテル(Mme Herpeux 1940:39) | ミルクスープと卵 「またか・・・」 |
| ボンクロワ | | 鶏肉のひどい昼食 violent déjeuner |
| ダウラス/ブルガステル | 居酒屋の2階（不潔な設備） | オムレツと仔牛とブルガステル産イチゴ |
| プレスト* | 清潔なホテル | 「子牛はまったく食べない」 |
| フロベールの母親も同行 | | 主任司祭がブルガステル産のイチゴを大量に食べる |
| サン＝マロ* | ホテル(マイヤール夫人経営) | |
| カンカール | | 牡蠣 |
| レンヌ* | 記述はないがおそらくホテル（書簡から） | 骨付き背肉 |
| ヴィトレ* | ホテル Hôtel Sevine（白い大きな建物） | |

*ブルターニュの主要都市

(1)珪器tasse de gres: ブルターニュの焼き物 素朴な風合い

(2)ガレットgalette: そば粉でつくったクレープ

(3)ウッフ・ア・ラ・ネージュoeufs a la neige : メレンゲを雪に見立て飾られたデザート

一方で、修道院、牢獄の宿泊所、村長宅や、かなり不潔な宿屋にも宿泊しているように、様々な宿泊形態を経験する。19 世紀中葉という時代は、「近代的な旅」と「古典的な旅」が混在していたことが、宿泊の方法によっても明らかにされた。

2) ナントとプレストの事例

①ナントのパッサージュ

19 世紀中葉になると、パッサージュと呼ばれる新しい商業施設が流行する。18 世紀末パレ・ロワイヤル（パリ）の一階回廊がオルレアン公により商店やカフェ、レストランに貸し出され、流行の場所になったことに端を発すると言われる。以後、その近辺では、天井付きのアーケード街（パッサージュ）が次々に出現した。その流行は地方にまでおよび 1843 年にはナントにおいても、パッサージュが開店している。フロベールもナントに滞在中に（1847 年）、この商業施設を訪れている。

「われわれはポムレのアーケード街 (le passage Pomeraye) へ出かけては、中国産の日よけ、トルのサンダル、ナイル河の籠などを買い込んだ。海の向こうから渡って来たがらくたのすべて、神々の像や履物や日傘や角灯といったものを好きなように眺めまわし、手で触れてみたいがためである。色とりどりに輝くくだらない品々は、さまざまな別世界へと夢を誘ってくれるし、使い途のないばかばかしいものが、われわれにとっては大事なものののだ」(前掲書 45)

フロベールが購入した品々から「オリエント」へのあこがれが表現されていると Mme Le Herpeux (1940) は言及する。一方で筆者の関心は「パサージュの存在」である。1840 年代パリでは Passage Colbert, Passage Vivienne, Passage Panorama, Passage Choiseul, など多くのアーケード街が建築され、ベンヤミン (Benjamin, Walter 1982-1940) が「パリ—19 世紀の首都」の中でパリのアレゴリーのひとつとして検証している。

フロベールのこの記述は地方においても、商業活動 (消費活動) が活発になったことを明らかにする貴重な資料であると考えられる。「地方都市」という旅先において、パサージュに足を運び、ショッピングを楽しむ行動は、現在の都市観光の一形態に近いと言えよう。また、確かに Mme Le Herpeux (1940) が指摘するように、「海の向こうから……」の品々を通し、「オリエント」を想起することが、フロベールの楽しみであったことは疑いない。「近代」に対し批判的なまなざしを持ち続けるフロベールであるが、「旅」を楽しむこと、旅先で「消費行動」を楽しむことで「近代人」であることが髣髴され、フロベールのツーリストとしての属性が具現化している。

現在でも、このパサージュはその建築方法からナントの観光資源として存在し、ジャック・ドゥミ (Demy, Jacques 1931-90) 監督の映画の撮影地としても知られる。

②ナントの自然誌博物館

しかしながら、フロベールの都市観光には「特殊性」が見られる。19 世紀という時代背景 (植民地の拡大政策など) もあるが、グロテスクなもの、「奇形」を好むフロベール自身の嗜好が露出される。

展示品には次のような品々があった。エジプトのミイラ、ばら色の珊瑚、真珠のような貝殻、エチルアルコールを湛えた瓶に入れられた「腹部でくっついて一体となった 2 匹の子豚」、「未開人の首」、「ニュージーランドの男の首」な

ど。自然誌博物館の展示品の範疇は、広範囲に及んでいた（渡辺、2007）。フロベールは、特に、子豚の双生児や人間の首に興味を示した。

「後ろ脚で立ち、しっぽを上に向け、目を細めている様子は確かにとても面白い。こんなふうにして、似たような奇形を持つ二体の人間の胎児の脇に置かれた子豚たちは、われわれが生み出した大方の著作以上に多くのことを語りかけているのかもしれない」（前掲書：57）

「未開人の首とはなんとすばらしいものだろう。私はそこに陳列してあった、日に焼けて黒光りのする、銅やくすんだ銀の色合いを帯びた褐色がとても美しい、ふたつの首を思い出す（前掲書：59）」

「奇形」への趣向や「人体」への関心に関しては、「時代」の他に、「家庭環境」も強く影響しているのではないだろうか。本稿はそれを論ずる趣旨ではないが、2012年8月、筆者がルーアンのフロベールの生家を見学した経験を踏まえ、加筆する。

フロベールの生家は、父親が院長であったルーアン市立病院内の一角にあった。部屋の周囲には、病室、病人、手術用具、薬品、模型などが常に存在していた。実際、訪問してみると、「死体がおかれた部屋」や「人体模型」などが当時の姿で展示され、「怖い」「薄気味悪い」印象を受けた。そんな生活環境の中で育ったフロベールが、医学的な「奇形」に興味を持つことや、未開の土地の「人間の人体」への高い関心を示すことは当然のことのように思われた。

また、彼らの旅行から12年を経ているが、1859年にパリ人類学協会がブロッカ（Broca, Paul 1824-1880）により創設されている。19世紀中葉、未開の民族への関心度は相当に高揚していたことがフランス史からも確認できる。

③ブレストの娼婦街

「ある晩のこと、月の光が舗石に輝き、ブレストの善良な市民（ブルジョワ）が奥方や女中の腕の中で眠っているあいだ、われわれは、いわゆる汚らしい通りに散歩に出かける用意をした。そうした通りはたくさんあるのだ」（前掲書：225）

海軍、砲兵隊、さらには監獄の看守、徒刑囚、それぞれが、「専用」の「通り」

を持って、毎晩、人々の喧騒が絶えることのない一画であった。

「良心的な旅行者として、物事を間近に観察したいと望む旅行者として、われわれは中に入っていった」(前掲書：227)

フロベールは「それは最悪なものではなかったが、最良のものではなかった」(前掲書：227)と感想を述べる。一方で、「売春婦のところに出かけて、しかもそれを書くだって！われわれはどこまで来てしまったか。何とけしからん文学だ」(前掲書：227)と、「すべてを語る」ことが必要とされた「旅行記」を書くことの難しさを実感している。

とはいえ、パリでもエジプト旅行においても、娼婦街を訪れるフロベールにとって、やはり、その場は都市観光の一つであろう。

他に、ブレストで監獄の病院、カンペールでは屠殺場の見学⁽³⁷⁾を行っている。

(6) 考察

本稿においてフロベールの旅の「新しさ」とは19世紀前半、百貨店の前身のマガザン・ド・ヌヴォテ(magasin de nouveautés：新物店)で表現される「ヌヴォテ」(nouveautés)と同様に明確ではないが「新しいもの」である。この「新しいもの」に関して、ベンヤミンも『パリ—19世紀の首都』で言及する。彼は、遊歩者を語るが、ボードレールの『悪の華』の最後の詩「旅」に触れ、「遊歩者の最後の旅は死、その目的地は新しさ」(浅井編訳、1995:348)さらに、「17世紀においてアレゴリーが弁証法的イメージの基準となるとすれば、19世紀においては新しさがその基準となる」(前掲書:349)と19世紀のキーワードとする。第7章における新しさとは旅行形態であろう。友人との二人旅であり、若い二人が自由気ままに旅を続けたことである。国内、しかもブルターニュという一地域を3ヵ月もかけて旅をする例も稀であった。旅行記で記述されているように、駆け足で、ただ乗り物に乗って目的地だけを見るような旅を避けるためにも必要な日程だったのであろう。彼らは、シャペルとバショーム等の旅の例をあげ、かつての旅の方法を懐かしむ。しかし一方で、彼らの旅は、近代観光の嚆矢を髣髴させるものでもあった。都市では、ホテルの快適さを楽しみ、白ビールの美味しさや、食事や、ショッピングを楽しむ。古の旅と近代の旅が交差する新しい旅であった。

また、彼らのような旅人が稀有であったことも事実である。ポン＝ラベで憲兵にパスポートの提示を要求されるのだが、無職で、何の資格も称号もない二人の若者は、「奇妙に」思われる。

「それでも憲兵たちは、われわれが個人的な気晴らしのために徒歩旅行をしている男たちであるとはどうしても思えなかった。そんなことは信じがたい、ばかげたことに思われたのだ」(前掲書：193)

旅行中に、出会ったのは商売目的の外交販売員達で「旅(移動)」は、「経済活動」であった。産業の発展期、その種の「旅行者(移動者)」はかなりの数になると考えられるが、フロベール達のように「楽しみのための旅」、「気晴らしのための旅」の旅行者は相変わらず少数派であったと考えられる。「旅」が一般化、あるいは大衆化されるためにはまだまだ時間が必要な時代でもあった。

第4節 『エジプト旅行記』について

1849年10月から1852年まで約一年半に及びオリエント地方(パレスチナ、シリア、スミルナ、コンスタンチノーブル、ギリシャ、イタリア)を旅した。『エジプト旅行記』はそのオリエント旅行の一部である。

(1) 出版の経緯

フロベールの『オリエント旅行記』は、生前に出版されることはなかった。むしろ「旅行記」に関心のないフロベールは旅行中の日記やメモを整理して出版する意思などなかった(ブルターニュ旅行記も同様)。しかしながら、死後、財産を相続した姪カロリーヌによって、(自分の借金問題への策であったのだろう)1910年のコナール版フロベール全集が刊行された際にオリエント旅行に関する日記の全文が初めて公開された。あまりに露骨な、あるいは青年フロベールの率直な行動、言動に「伯父の名誉を守る」という大義名分のもと、オリジナル原稿にかなりの加工が施されたものであった。その後カロリーヌの手を離れたオリジナル原稿は、蒐集家たちに引き継がれたが、20世紀後半になり、ピエール・マルク・ド・ビアジが蒐集家の同意を得て、削除のない元原稿による『エジプト旅行記』を出版することになった(1991年)。小説を書くことだけ

を一生の仕事として、ひたすら技法や文体にこだわったフロベールであるが、出版する意思のない旅行記では、気ままで、自由に旅をする青年フロベールという旅の主体が明らかにされる。

(2) 出発前

この旅行の発案者であり、同行者、むしろフロベールを連れて行った人物といえるが、ブルターニュ旅行ですでに「友人旅行」を経験したデュ・カンであり、この旅も前回と同様に、彼の発案であった。すでに、デュ・カンは 1843 年にオリエント地方への旅を経験していたが、社会的成功をもくろみ 2 度目のオリエント旅行を計画したと言われる。精神的に不安定であり、癲癇という持病を抱えたフロベールを心配する母親はこの大旅行に関し大反対をするが、同行者がデュ・カンというという信頼できる人物であったこと、さらにはフロベールの兄が「クロワッセで、自分の部屋に閉じこもったきりの、背は高いが神経質のこの青年は、ブルターニュに出かけただけであれほど元気になったのだから、長い旅と大気にふれる生活は、いろんな意味で健康にいいはずだ」（蓮実, 1967 : 69）と前回の旅がフロベールにもたらした「旅の効果」を挙げ母親を説得することができた。しかし、母親からの「重圧感」は出発直前までもフロベールを悩ませたことが『エジプト旅行記』で吐露されている。旅の行程において、クロワッセからパリ、パリからマルセイユではなく、ノジャンを経由している理由も、パリまでは母親が同行していたからである。ノジャンはパリ郊外の町であるが、母親を親類の家に送り届けるためであった。もちろん、叔父や近親者へのこれからの長旅へのあいさつの意味もあった。

出発前のパリ、フロベールはデュ・カンのアパートマンに滞在するが、パリの友人たち⁽³⁸⁾と有名レストラン、レ・フレール・プロヴァンソー（Les Frère Trois Provinciaux⁽³⁹⁾）で会食をし、馴染みの娼婦館に行き、別れの前の大騒ぎをしたことなどが語られ、出発前の興奮した様子が描かれる。さらに、帰国後の再会を約束する。

(3) 交通手段について

クロワッセ(1849.10.22)からパリを経由しノジャンへと母親を親類宅に届ける。再びパリに戻り、1849 年 10 月 29 日にデュ・カンと共にマルセイユへと旅

立つ。11月1日マルセイユに到着。次に、マルタ島を經由し11月15日にアレクサンドリアに到着。11月26日にロゼッタに到着し、同日カイロへ向かう。12月4日までカイロに滞在する。12月7日から12日まではピラミッド群を見学する。12月13日に再びカイロに入り、1850年の2月5日まで滞在する。2月6日から4月28日までナイル河遡上の旅：ブーラックからルクソール、エスナからアスワンへ、第一カタラクトからワディ・ハルファ、ワディ・ハルファからアスワンへ、アスワンからルクソールの河船の旅）4月29日から5月13日までテーベに滞在し、5月16日クセルの砂漠に入り27日に紅海へと出る。同日、ケナを出発し6月25日にブーラックに到着する。6月25日から7月18日までカイロ、アレクサンドリアに滞在する。以上がエジプト旅行の行程である。エジプト国内での旅程は図7-3に示す。

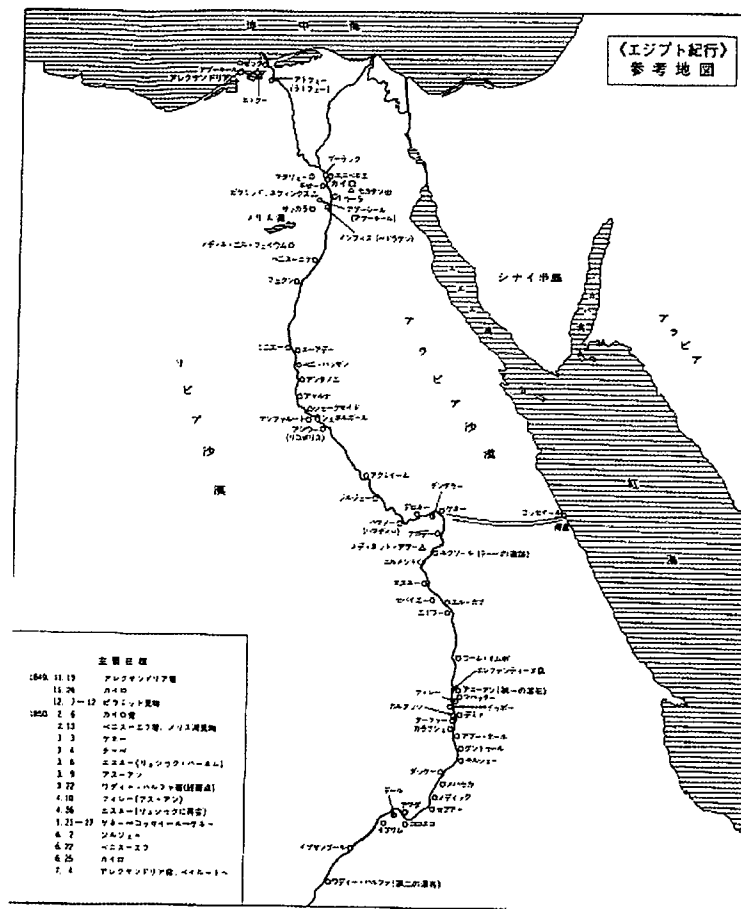


図7-3 フロベールのエジプト国内の旅程

『フローベール全集 8』別巻掲載の地図を転載

パリからマルセイユまでの交通手段であるが、「鉄道発展期のフランス」が反映される。

パリから駅馬車で出発するのだが、フォンテーヌブロー(パリから約 50 キロ)の付近で「飛び散った機関車の火花が僕らの客室の中に舞い込み、あっという間もなく僕のハーフコートを焦がして煙を上げ上げ始めた」と、「馬車」に乗っているのか「鉄道」に乗っているのか、後世の読者を混乱させる記述がある。これはパリーマルセイユ間の駅馬車が一部区間だけ、馬車が車台に載せられて鉄道に運ばれるシステムであったことを示している⁽⁴⁰⁾。馬車の二階席では、御者 2 名も乗車しているが、ひとは「仕事にケリをつけたばかりでリヨンに遊びに行くところ」であった。パリからリヨンまで、すでに「遊びに行く」所へと短縮していた。御者は「鉄道」のスピードを実感したひとりであろう。

ソーヌ川を下る船に乗ってフロベールたちはリヨンに向かうのだが、おそらくシャロン・シュール・ソーヌ (Châlon sur Saône) から蒸気船に乗ったのであろう。シャロン・シュール・ソーヌは蒸気船の時代、ブルゴーニュ地方の交通の要所となった。しかし鉄道の敷設後は鉄道にその地位を奪われてしまった。リヨンではすでにオリエント旅行の経験のある友人に会うことができた。リヨンからは蒸気船でローヌ川を下りアヴィニョンまで(あるいはマルセイユまで)向かう予定であったが、天候不順により、船のスピードが上がらず途中のヴァランスで下船する。ちょうど来た乗合馬車に乗りアヴィニョンまで向かい、アヴィニョンからは汽車でマルセイユに向かった。郵便馬車や乗合馬車のネットワークが完成していた 19 世紀中葉において、「馬車」が堅実な交通手段であったのだろう。図 7-2, 7-3 は当時の鉄道ネットワークを示すものであるが、アヴィニョンからマルセイユまで、鉄道を使用したことが証明される。

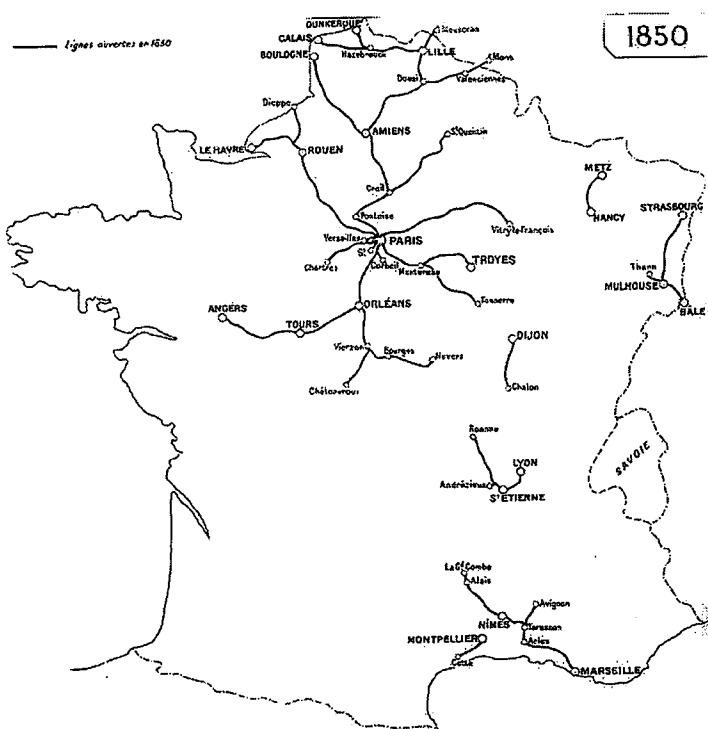


図 7-4 1850 年のフランスの鉄道のネットワーク

<http://rubio.eric.pagesperso-orange.fr/carte%201850.jpg>

より転載 検索日 2013 年 9 月 10 日

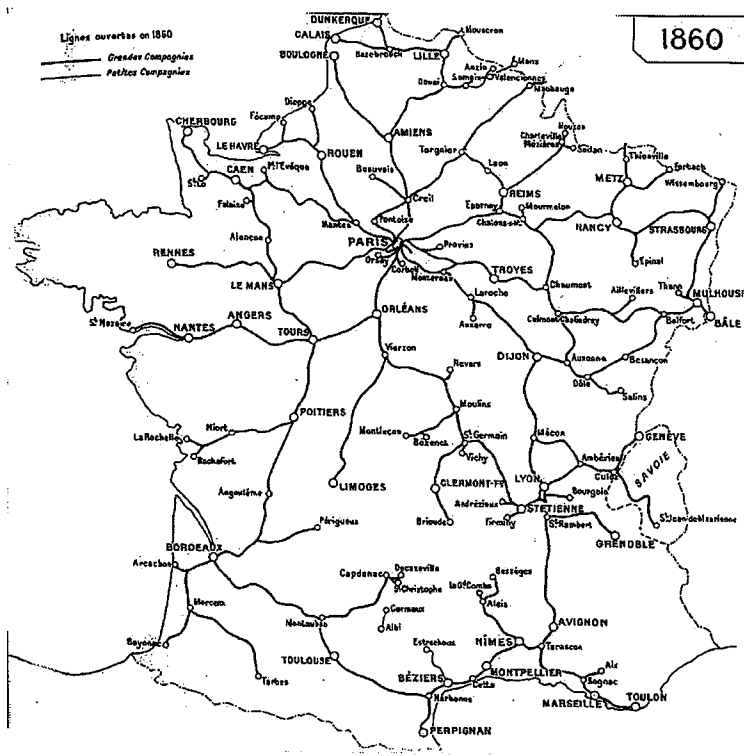


図 7-5 1860 年のフランスの鉄道のネットワーク

<http://rubio.eric.pagesperso-orange.fr/carte%201860.jpg>

検索日 2013 年 9 月 10 日

マルセイユでは「オペラ」を鑑賞し、リュクスンブールホテルに宿泊。マルセイユから「ナイル丸」に乗船しマルタ島に到着、翌日アレクサンドリアに向かうが、嵐のためほとんど遭難状態になり命からがらマルタ島に帰着する。地中海ホテルに投宿しマルタ島を散策。その後アレクサンドリアへと再び向かい、4 日後到着。ルーアンからアレクサンドリアまで、汽車、馬車、蒸気船、帆船を乗り継ぎ約 3 週間の行程であった(1849 年 10 月 22 日から 11 月 15 日まで)。アレクサンドリアからエジプト旅行が始まる。カイロ滞在後（カイロでの滞在はオリエンタルホテルとナイルホテル）、ナイル河の遡上が始まる。

1850 年 2 月 6 日、カイロを出発。川船⁽⁴¹⁾に乗って、ナイル河を遡航。2 月 14 日、14 日、ベニスーエフ。3 月 4 日テーベ。3 月 6 日、エスネー。ハーレムにいたことのある有名な舞妓、リュシウク・ハーネムのところで一夜を過ごす。3 月 9 日アスワン。3 月 11 日、第一の瀑布を通過。3 月 22 日、ワディー・ハルファ。第二の瀑布。この地でフロベールは、マダム・ボヴァリーの名前を思いついたといわれる。ナイル河を下り、イプサンプール。4 月 10 日、フィレー。エスネーを通る際、ふたたび、リュシウク・ハーネムを訪れる。5 月に入りテーベをへて 10 日にはケネー着。18 日から 27 日には、ケネーから、砂漠を進み、紅海沿岸のコッセイルにいたる旅行をする。紅海の水に感動する。6 月 2 日ジルジュー。14 日アンチノエ、22 日ベニスーエフ、25 日カイロ。7 月 3 日、アレクサンドリアでアレクサンドラ号に乗船しベイルートまで向かう。

(4) 旅の形態

エジプトでは、フロベールとデュ・カンの 2 人旅から下僕のフランス人セサッティーと通訳のジョゼフ⁽⁴²⁾との 4 人旅となる。デュ・カンの機転で、このオリエント旅行に関して、フロベールは、公式には（名目上）通商・産業・農業関係の調査視察官、デュ・カンは考古学視察官という肩書がついた。「公用パスポート」を携帯することは旅が安全に行われるための措置であった。「公用パスポート」を携帯することは、シャトーブリアンにも見られたが、19 世紀の（富裕層）による旅の特徴のひとつにもあげられる。フロベールは旅の始め、ロゼッタ、カイロでは、その肩書を意識した行動、例えば、精米工場見学や植物の

種の購入などが見られるが、次第に「形だけ」のものとなる。

「ぼくの任務のことをかいておられましたね。ほとんどなにもすることがありません。これからもほとんどなにもあるまいと考えています。こんなふうでいて、しかも報酬を要求するには、よほど厚かましさがなくてはかなわぬことでしょう。ぼくは何事につけても、ますます欲がすくなくなつてゆきます。」(蓮実編, 1967: 154)

と、カイロから母親に向けた手紙の中で告白している。

(5) エジプト旅行のための準備と友人デュ・カンについて

デュ・カンとフロベールは性格のまったく異なる友人同士であった。パリ出身のデュ・カンもまた外科医の息子であり、裕福な家庭で育った青年であった。彼が求めたのは「文学」作品というより、文学的名声、つまり社会的ステータスであった。19世紀の新興ブルジョワとは単に産業による成功者だけではない。ジャーナリズムの世紀といわれるが、その一端を担ったのが「小説」であった。新聞に掲載されるフィクションがその販売数に大きな影響を与えたと言われ、バルザック、アレクサンドル・デュマなどの成功に見られるように文学活動と経済活動に密接な関係が生まれた。「文学」とりわけ「小説」で成功することは経済的な成功をもたらすだけでなく社会的ステータスとなり、つまり現代的な社会システムが構築された時代であった。デュ・カンは、オリエント旅行を通して、小説のような「文学作品」を作り上げるということより、むしろなにか「新しいこと」で自分の存在を世間に知らしめたかったのであろう。それが「写真」であった。小倉(2006)はデュ・カンがオリエント旅行後に出版した『ナイル河』*Le Nil*⁽⁴³⁾に対し、「少なくともカロタイプによるオリエントの紀行写真集としては、歴史上初めてのものである。彼以前にダゲレオタイプ⁽⁴⁴⁾を抱えてオリエントに旅立ったものはいたが(たとえばネルヴァル)、オリジナルの写真は一枚も残されていない」(175)と言及し、『文学的回想』の中のデュ・カン自身のことば「私はオリエントの旅で目にした記念建造物の写真を、ヨーロッパにもち帰った最初の人間」(176)を正当化する。

デュ・カンのオリエント旅行に対する意気込みは、公用パスポートや写真機一式を準備したことにもあらわれるが、野営のためのテント、鞍、トランク、

道具箱、薬品類、武器など、旅行携帯品を準備万端にそろえたのもデュ・カンであった。さらに、ギユスターヴ・ル・グレー(Le Grey, Gustave, 1820-84)のもとで写真術もこの旅のために学んでいた(小倉, 2006)。オリエント旅行中の旅の態度を、チボーデ(Thibaudet, Albert, 1874-1936)は

「真の旅行者であり、確実に、無味乾燥なくらい、仕事と目の前の快楽に全身で没頭するデュ・カンは、細かいことにも気を配り、片っ端から写真を撮りまくる、碑文の型をとり、情報を収集、ノートを山積み、無精で冷やかす半分の友人を引っ張って歩くのだった」(戸田, 2001:73)

と表現する。帰国後は中途半端なものだが、報告書を提出し、これによって四等レジオン・ドヌール勲章を得る。その後、写真つき紀行文『ナイル河』により社会的ステータスは完全なものとなる。「写真」は革命的発明であり、その影響はあらゆる学問にも及ぶが、「旅」にも大きな変化を及ぼした。小倉(2006)は『ナイル河』に関して、「撮影すべき場所と遺跡を示唆する規範的な著作となる(小倉 2006:176)」と言及した。つまりエジプトが「集合的まなざし」の対象となったのはデュ・カンの「写真」の影響であった。『ナイル河』は 1852 年に出版されるが、以後エジプトを旅するフランス人は *Voyageur* というよりむしろ *Touriste* (観光客) へと変化したと考えるのが妥当であろう。石川(2000)は『ジョアンヌ旅行案内』が発行された 1841 年以降、「気楽なオリエント旅行」が始まったとするが、当時の交通手段を考慮しても、時期尚早であろう。

一方、フロベールは現実的な野望、社会的ステータスには無関心であった。関心は「小説」への刺激、主題の観念のみである。友人ブイエ宛の手紙でフロベールはデュ・カンの態度を皮肉る。

「(オリエント旅行において) ぼくらはノートをとる、旅をする、惨めなるかな！ 惨めなるかな！ ぼくらは学者になる、考古学者に、歴史家に、医者に、靴直しに、趣味人になる。だが、そんなものがなんだというのだ？ 心は？ 熱気は？ 活力は？ …… よし、帰ったらまた始めるぞ、願わくばこれから先もずっとそうしたい、一方に暖炉、一方に庭の眺望を見ながら、丸いテーブルに向かう、あの以前の静かな生活をするぞ。祖国も、批評家たちも、世間の誰も眼中になく、熊のような生活を送るのだ」(蓮実編, 1967:76)

あるいは、母宛の書簡（1849年10月29日カイロ）で、

「けれども、自分の未来のことを考えるとき、滅多にそんなことも起こりませんよ。廃墟を前にして、偉大な思想を抱くはずが、反対にぼくはなんにも考えないからですよ、要するに、帰国したら何をしよう、何を書こう、どこに暮らしたらよからうか、どんな進路をたどって行こうか、等々と、自問するとき、ぼくは疑いと、不決断とでみちわたってしまうのです」（前掲書：150）

と書いている。

廃墟から影響を受けることにむりやり拒否している印象をあたえる。ナイル河を旅して戻ったカイロからは（1850年2月3日カイロからの書簡）

「東邦、とくにエジプトという国は、世俗的なあらゆるせせこましい虚栄など、とるになりないものとする国なのですよ。たくさんの廃墟をかけずりまわってきたおかげで、ケチなあばら家などたててやろうなんてこれっばかりも思いません、こうした古き世の夢の塵跡をみていると、ぼくらは、名誉などすっかり無関心になるんですよ。」（前掲書：154）

と母に手紙を書く。

結局二人はこの「オリエント旅行」のあと一時期ではあるものの仲たがいはする。デュ・カンが帰国後、紀行文で社会的成功を得たときも、「またしても紀行文、なんとつまらないジャンルでしょう！」（前掲書：85）と紀行文とデュ・カンに対する嫌悪感を吐露するほどであった。

（6）エジプト観光

アレクサンドリア、ロゼッタ、カイロ、ピラミッド群を見学したのち、ナイル河を4か月半（1850年2月6日から6月25日、エスナ、アスワン、ヌビア、上エジプト：アスワンからルクソール、テーベ、クセールの砂漠、ケナ）かけて旅をする。観光活動についてだが、ナイル河遡上の前には、アレクサンドリアでは劇場で芝居（イタリア語）を観る。視察官という政府の肩書を所有する二人は、都市（ロゼッタ、カイロ）では、パシャや領事をまず訪ねる。モスク巡り、コプト教会など寺院見学のほかに、病院見学もたびたびおこなわれる。

「昔ながらのオリエント独特の病院（ロゼッタ）」、「カスル・アル・アイニ病院（カイロ）」、「エズベキアの市民病院」を訪れるが、進行した梅毒患者、精神病患者たちの行動や患部の様子が詳細に語られ、映像を見るまでもなく異様な光景が読者に伝えられる。ブルターニュ旅行でも、病院見学が観光施設のように登場していたが、カイロでも同様であった。また、バザールや黒人奴隷市場も、旅行者の興味を引く。イスラムの奇習（青空の下でも行われる卑猥な行為）を語るが、そこには、かれらを見下すようなまなざしはない。それを見て楽しむくらいである。淡々と語られる。黒人奴隷を見るまなざしにも「哀れみ」などない。見たままに報告される。ネルヴァルの東方旅行にも見られるが、結婚式や結婚の行列への言及もみられる。大ピラミッドに登攀し、内部も見学する。フロベールはそこで「大量の落書き」を見つけうんざりする。

「ともかく、たくさんの馬鹿なやつらが自分の名前をいたるところに書き散らしているのには、なんとも腹が立つ。大ピラミッドの上のほうには、『サン・マルタン街七十九番地・壁紙製造業・ビュファール』と、黒々と大書きしてあった。大ファンらしいイギリス人が落書きしたジェニー・リンド⁽⁴⁵⁾の名前にもぶつかった。そのほかにも、ルイ・フィリップ⁽⁴⁶⁾を表す梨の絵なんかもあった。名前はことごとく現代の人間の名前である」（前掲書：85）

ジェベル・アブ・シールでも、落書きには事欠かない様子が記述される。

「アブ・シールの頂上の岩を裏側にまわってみると（岩はキノコのかたちをしている）、ここを訪ねた記念に記した夥しい数の名前がびっしりと彫り刻まれている。すべて現代に近い日付入りで、フランス人名はほとんどなく、まず大概はイギリス人である。1816年のベルツオーニの記名もあった」（斎藤訳,1998:183）

1806年、近くまで行きながらピラミッドに登攀することのできなかったシャトーブリアンは、友人に「私の代わりにサインを残しておいてくれ！」と頼むが、この感覚の違いは「性格」によるものか「旅の変容」によるものか19世紀中葉では判断が難しい。落書きの多さは旅行者の増加をあらわすバロメーターには違いない。

ナイル河下りとその遡上では、砂嵐という砂漠特有の問題の他に、ジャッカル、タランチュア、ハイエナ、ワニなどの獰猛な動物による脅威、駱駝の死骸、

死骸をねらうカラス、死骸に蔓延るねずみ、体の一部が蛆の卵や蠅で覆われた犬の描写が続く。猟銃を携帯しながらの旅であり、危険予防策だけでなく、時間つぶしに鳥や犬に銃を向けることもある。また、ティボーデ等も指摘しているが、たびたび「蚤」の多さが指摘されるのもフロベールの旅の特徴である。エジプト旅行ではフロベールの嗅覚「におい」への敏感さも作品における地方色 *couleur locale* 表現のひとつとなっている。「空豆の畑は満開でいい香りがする」(前掲書：92)、「バザールにはコーヒーと白檀のにおいが漂っている」(前掲書：140)「白檀油のしたたる彼女(クチュク・ハネム)の肌の匂い」(前掲書：153)など「におい」からオリエンティックな要素が抽出される。一方で、動物の死骸からただよう悪臭や、蝙蝠のにおい、クセールの水のひどさは、「石鹼と腐った卵のにおい、便所のにおいまで混じっていそうな、と表現しても過言ではないクセールの水」(前掲書：283)と記述されるほどであり、水環境のひどさが露呈され、もうひとつのオリエントのにおいとして表象される。

このエジプト旅行記で強烈な印象を与えるのは、舞妓、売春宿、そして彼女たちと関わりを持たずにはいられない2人のフランス人青年である。都市カイロやアレクサンドリアではもちろんのこと、ナイル河沿岸の貧しい村においても(娯楽)施設は存在し、舞妓兼売春婦とエロティックな時を楽しむ。フロベールにとって、エジプトでの最大の思い出がエスナの娼婦(舞妓)クシウク・ハーネムと過ごした一夜だと言われるほどであるが、露骨な表現は前述の姪カロリーヌにより長い間削除されたままであった(斎藤, 1998)。フランスロマン主義絵画のテーマの一つに「オダリスク」があり、1814年のアングル作「グランド・オダリスク」(4章, 図4-2参照)はその嚆矢とされるが、娼婦を題材とした1834年のドラクロワ作「アルジェの女たち」(4章, 図4-1参照)など、オリエントと女性のイメージは「千夜一夜物語」の語りによるイメージから、絵画を通し、より具体的なものになっていた。フロベールは娼婦たちの様子や、彼女たちのいる場所について、友人への書簡の中でも饒舌に語る。

「ねえ、きみ、想像してくれよ。乾いた灰色の泥で作った、四尺ばかりの高さの小屋の並ぶ、まがりくねった五つ六つの路次をね。戸口には、女が立ったり、あるいは莫藪の上に座ったりしていた。黒人の女たちは真っ青な服を着ていたり、黄色や白や赤色の服を着ていたりしていた。ゆったりとした着物が熱い風にひらひらしていた。香料の香りがそれら全体をつつんでいた。女たちのあらわな胸には、長い金貨の首環がかかり・・・」(蓮実編, 1967:159 ブイエあての手紙)

おそらく、「絵画」でみた現実がそこにはあったのであろう。

エジプト旅行中に、土産物として、フロベールが購入したものについて補足すると、貝殻の首飾り、ヌビアの豎琴、スフィンクスの神殿を離れるとき買った槍、飾りがついたままの女の髪の毛の房を2つ、アンチモンの瓶、革製の首飾り、銀の指輪であった。アンチモンの瓶などは売りつけられたものである。

第5節 考察

『エジプト旅行記』では、旅と一緒に続ける友人としてのデュ・カンしか記述されないが、実際は、デュ・カンの周到な準備やリーダーシップのもとで行われた一年半に渡るオリエント旅行であった。癡癡もちのフロベールはある意味「保護者」と旅行したようなもので、旅への「緊張感」や「使命感」などは希薄である。旅にいても、彼はクロワッセにいたときと同じように、どこか違った場所にいる自分を空想する。環境は変化しても、自身の習慣が変わることはなかった。「リシャールのビール⁽⁴⁷⁾が飲みたい」とノルマンディーのビールを、商品名まで出し、欲する姿は、現代のツーリストを思わせる。旅の最中に感じる「倦怠」もそのひとつであった。

「それにしても、一体全体、僕はどうしても常に倦怠感にとりつかれてばかりいるのだろう。旅に出ても、僕には倦怠感が絶えずつきまとう。家にかえってもやはり同じ気分が離れない」(前掲書:214)

しかしながら、友人ブイエに宛てた書簡において、

「ところで、そうとも、ぼくはまさしく東邦をみたのだ。(中略)インドへ行きたくてたまらない。アメリカの大草原の中に迷いたい。スーダンへ行って、黒人狩りや象狩りがみたい。ありとあらゆる放蕩の中で、旅行は僕の知るかぎり、最大の放蕩だ。これこそ、人間が他のすべての放蕩にくたびれきって考えだした代物だ。ぼくはこの旅行というやつは、酒とか、賭けとかいうものより、心の落ち着きや、それと財布の中味には、ずっと有害なものだと思う。時にはうんざりすることもある。それは確かだ。けれども、また滅法楽しいと言うわけさ。スフィンクスを見たことは、ぼくの生涯で、最高に目の回る悦びの一つだった」1851年

4月9日ローマにて（書簡）（前掲書：206）

と旅を大絶賛する。旅行中の倦怠は、旅行の最後の地ローマにおいては、忘れられ、あるいは全ての事象が、素晴らしい経験、思い出として収斂されたのであろう。

フロベール（達）は、カイロの「トリエスティヌ」という娼家から始まり、ナイル河に沿って点在する集落でも、バサールに行くように娼家に行く。フロベール達の行動にも驚かされるが、どんなに貧しい地域にもその施設があるにも驚かされる。旅の途中、イギリス人やドイツ人に出会っているが、外国人を相手にした商売なのか（ブロンドの髪をした子供を見かけ、イギリス人の置き土産か・・・と表現している）、兵士（オスマン・トルコの）を相手にした商売なのか、人類最古の商売として以前からあったものなのだろうか。「女性」がオリエントを表象する事例であろう。エスナの娼婦（舞妓）クシウク・ハーネムと過ごした一夜の描写はポルノ小説の一編のようであるが、それ以上に15歳の女の子も買うフロベールはセックスツアーに参加する現代の旅行者さながらであった。しかしながら、まさしくこのローカルとの直接的な体験こそ、サイードが『オリエンタリズム』の中でフロベールを評価しているものである。絶対的な評価ではなく、第5章で論じた「シャトーブリアン」のエジプト旅の体験との比較における評価である。前述したとおり、シャトーブリアンはローカルとの接触をほとんど持たない。体験したのは「高官」を媒体としての間接的な体験であり、すでに記号化されたイメージ消費の旅であった。さらに、「旅行記」の中で、常にフランス（ヨーロッパ）との対極にある存在としてのオリエントを強調するだけの姿勢であると非難する。一方でフロベールは、「文学作品」の中でオリエントを涵養していると、高く評価するのである。フェミニズムへと論点を移行するつもりはないが、サイードの評価には「男性視点」によるものではないかと疑問を呈し、今後の課題としたい。

ところで、ピラミッドでは、フロベールを驚かそうと、デュ・カンがいたずらを仕掛ける。ピラミッド登攀という「荘厳なる経験」と「友達同士のいたずら」の対比が、若者の旅の一面を効果づける。

オリエント旅行を契機に、デュ・カンは社会的名声を得るが、結果的にはフロベールも同様である。フロベールは旅行から帰国後、『ボヴァリー夫人』の執筆にかかる。裁判沙汰になるほどボヴァリー夫人の不道德な行為の描写は世間をにぎわせたが、まさしく、そこに「オリエント」的習慣が反映されていたた

めである。またオリエント旅行前に仕上げ、さらには友人たちから酷評しか得ることのできなかつた『聖アントワヌの誘惑』へ再び向き合うことができたのもこの旅行があったためであろう。

【補注】

- (1) *Madame Bovary*(1857)
- (2) *L'Education sentimentale* (1869)
- (3) *La Tentation de Saint Antoine* (1874)
- (4) *Dictonnaire des idées reçues* (1881) 『ブヴァールとペキシエ(*Bovard et Pécuchet*)』の中で主人公が作成する辞書であり、諧謔的に語句が説明される。
- (5) フランスの大学入学資格 (国家資格)
- (6) 「旅を好んだ作家」を意味するが *écrivain-voyageur* という単語自体は比較的最近の言葉である(*Goulemet*, 2004)。
- (7) 父親が別荘を購入した。Trouville の海岸で初恋を経験する。市内には現在フロベールの銅像がある。
- (8) 母親が受け継いだ別荘があった。
- (9) フロベールが 1851 年 4 月 9 日の友人エルネストに宛てた書簡：「ありとあらゆる放蕩の中で、旅行はぼくの知る限り、最大の放蕩だ(*蓮実編訳*, 1967 :206)」
- (10) この当時の心境についてはデュ・カン宛の書簡で明らかにされている。
- (11) カレ(1932)によれば、「旅」にでることは、「病氣療養」の目的もあった。
- (12) 言語的に、フランスは北のオイル語 (*langue d'Oil*) と南のオック語(*langue d'Oc*)の 2 大言語圏があり、その他に地方語(*langues régionales*)である、ブルトン語、バスク語、カタラン語が存在する。それらの地方語は、近隣諸国の言葉の派生語ではなく、独立した言語である。
- (13) カンペールのこと。
- (14) 郷土食に関してはテロワール (*Terroir*) と呼ばれ地方の豊かさを示すキーワードである。
- (15) シードル酒：リンゴからできた発泡酒、ブルターニュ地方とノルマンディ地方の特産品。
- (16) *Carnet de voyage* (旅行中のノート) では旅行記のタイトルが *Voyage en Bretagne* と記載されている。
- (17) 1837 年スタンダールの作品により普及した英語由来の単語。
- (18) *Voyage* とは実際にはフロベールにとって「長旅」であるが、皮肉を込めて定義している。
- (19) Belle Isle : キベロン(*Quiberon*)から 14km に位置するブルターニュで一番大きな島。
- (20) 筆者は研究ノート：20 世紀「ツーリスト」の変遷について (立教観光学研究紀要 14, 25-30) 内で考察を行った。
- (21) 19 世紀歴史家、代表作『フランス史』。
- (22) 19 世紀小説家、代表作『レ・ミゼラブル』。
- (23) 19 世紀小説家、歴史家、代表作『カルメン』。
- (24) スタンダールも、フロベールと同様に南からブルターニュを旅したが、都市部だけを回った一週間程度の馬車の旅であった(*カレ*, 1932)。
- (25) *Mémoires d'outre-tombe* (1849)
- (26) *Berceau de Romantisme* : 直訳「ロマン主義のゆりかご」と名付けられている。
- (27) 作家、シャトーブリアンのこと。
- (28) シャトーブリアンの自伝的作品『ルネ』(1802 年)
- (29) 17 世紀の劇作家、代表作『ル・シッド』。
- (30) 20 世紀に活躍した作家、代表作『アルセーヌ・ルパン』。
- (31) 20 世紀の芸術家、代表作『オルフェ』。
- (32) 19 世紀の作家、代表作『三銃士』。
- (33) 19-20 世紀ベルギー人作家、代表作『青い鳥』。
- (34) 19 世紀詩人、象徴派。
- (35) 20 世紀作家、シュルレアリズムの開拓者
- (36) 19 世紀自然主義作、代表作『居酒屋』
- (37) 19 世紀のパリの観光資源としての「屠殺場」の意味をマキヤーネルが「ザ・ツーリスト」の中で分析している。

- (38) T. Gautier (ゴーチエ) もその一人
- (39) 19 世紀は「レストラン」がブルジョワジー生活のステータスでもあり、レ・トロワ・プロヴァンソーは流行のレストランのひとつ。ベンヤミンも「M 遊歩者」のなかで、このレストランのメニューを取り上げている。メニューの引用先は、ユリウス・ローゼンベルグ『陽光と燭光のもののパリ』ライプツィヒ、1867 年、43-44p. メニューの遊歩 (今村・三島訳、1995:83)
- (40) 鉄道会社 PLM (Paris, Lyon, Marseille の略) は 1840 年に創設され、1843 年から 1852 年にアヴィニョン・マルセイユ間、1849 年から 1856 年にリヨン・アビニョン間が完成する、サン・テティエンヌ、ブザンソン、ディジョンの支線も含む
<http://levy.veyrier.daniele.free.fr/spip.php?article7>
- (41) 青色に塗られている。船長はイブラヒム。9 人の乗務員。船室としては、まず第一の部屋。ここには互いに向かい合った二つの小さな長椅子がある。つづいて二つの寝台の入った大きな部屋。それから衣服などを入れておく物置のようなところ。最後にサセッティーがねむり、ぼくらの倉庫となっている第三の部屋がある。母親あての手紙、カイロ 1850 年 2 月 3 日付)
- (42) この旅行に随行した下男ジョゼフ・ブリケッティ。料理、ガイド、護衛等、あらゆる雑用をこなすのみならず、「通訳」の役まで果たしたが、実際には珍妙なフランス語しか話せず、この旅行記のなかでも彼が話す意味不明に近いフランス語のセリフが何度か取り上げられる。
- (43) 正確には『ナイル河、エジプトとヌビアに関する手紙』1853 年 10 月 1 日から「パリ評論」で掲載開始。
- (44) ダゲレオタイプ：世界初の写真技法であった。まだネガを使って複製するという技術がなかったころで、銀メッキを表面にかけた銅版に直接画像を焼き付ける方法。
- (45) Lind, Johanna=Maria, 1820-1887 スウェーデンのオペラ歌手。ジェニー・リンドとして知られる。19 世紀においてもっとも注目を浴びた歌手の一人
- (46) Louis-Philippe (1773-1850) 1830 年の 7 月革命でブルジョワジーの擁護によりフランス王になった。経済を奨励し、産業革命をもたらした。似顔絵として洋ナシが描かれた。
- (47) ノルマンディーのビール。現在も存在する。

第 8 章 結論

第8章 結論

第1節 本論文の概要

(1) アメリカのツーリスト研究とフランスのツーリスト研究

第2章では、ツーリストにまつわる否定的側面が形成された過程について、アメリカの観光研究、フランスの観光研究から検証を行った。

アメリカでは「旅行者から観光者へ」の変化は1950年代始まり、この現象についてブーアスティンの著書『幻影の時代』*The Image*の中で、主旨であるメディア論を展開するための事例の一つとしてとりあげた旅の主体の変化であった。おそらく彼の意味ではなかったが「かつての旅行者と観光者」のアーキタイプ、つまりかつての旅行者は旅に本物を求め、危険を冒しながら目的を達成するが、観光者は「擬似イベント」で満足し、「真正性」を求めない旅人であるという言説が、*The Image*を離れひとり歩きした。さらにこの言説を巡って、社会学からのアプローチによる観光研究が始まった。マキャーネル(1976)は『ザ・ツーリスト』*The Tourist*の中でブーアスティンを批判し、ツーリストを擁護した。1999年に出版された*The Tourist* ツーリストの第三版では、商業化の進みすぎた観光産業に苦言を呈し、ツーリストには絆(human solidarity)を形成する力があることを言及した。さらに、ブーアスティン批判として、社会学の領域からコーエンと人類学の領域からスミス・Vが、それぞれがツーリストの類型化を完成させ、ツーリストはブーアスティンが言及したような単純な存在ではないことを明らかにした。*The Image*の出版から約40年を経た2001年、高岡が「擬似イベント」の再考を行い、ボードリヤールの先を行った発想であるとその着想の先見性を高く評価している。初版から半世紀が経つ現在でも、観光学研究においてブーアスティンへの言及は後を絶たない。

一方フランスでは、19世紀、すでにツーリスト研究が行われていた。しかしそれは文学領域からの研究であった。1840年代には「生理学」の中で「変わった存在」として取り上げられたこと、ツーリストは小説や戯曲の主人公となり、批判、あるいはからかいのターゲットとなったこと、さらにその経緯を明らかにすることがフランスにおけるツーリスト研究であった。また、英語 *Tourist* がどのように仏語 *Touriste* として受け入れられたか、19世紀ラルースが「最初のツーリストは J.J ルソー」と定義したことをうけて、ツーリストとルソーの

関係を明らかにすることなどもツーリスト研究であった。しかし、近年、ユルバンが、現在のツーリストを対象に社会学アプローチから研究を行い新しい切り口の類型化を試みようと、プレツーリスト、メタツーリスト等の新単語を提案している。

アメリカにおいてその時代の「ツーリスト」を対象とした研究が進められたのに対し、つまり社会学からのアプローチであるのに対し、フランスでは文学研究として「ツーリスト」研究が行われていたことが明らかになった。

(2) フランス文学者による 17 世紀から 19 世紀の旅行記の変容に関する研究

シュポーは旅行記には実用的側面と娯楽的側面が存在すること、つまり旅行記の両義性を示した。17 世紀以前は実用的側面が重視されていたが、実的な発見も、読者は娯乐的に楽しむようになった。旅行記が「お楽しみの文学領域」へと移行したことが示される。17 世紀、読者とは上流階級の人々であり、当時の文学潮流プレシオジテにも影響を及ぼした。気取った文学よりも旅行記のような簡潔な文章が好まれるようになり、「肘掛け椅子の旅」の流行が生まれた。読者は危険を伴うことなく、本物の旅を体験することができ、それを可能にしたのは簡潔な文体であった。小説の本質は「叙述（語り）」であるが、旅行記には、描写と叙述（語り）という 2 つの本質がある点をあげ、2 者の相違を明らかにしている。しかし叙述（語り）という共通点もあることが、タイトルに見られるように旅行記が小説の周辺にいる存在であることを意味する。

旅行記の役割に関して、17 世紀以後は、絶対王政下の国策と関連が言及され、植民地政策に用いられたことや、キリスト教の普及や寄進を促すために使われた歴史的考察が行われる。

シュポーは 17 世紀を旅行記の転換期とする。以後、学者と作家との共同作業が進められ、「素材の良さ」と「卓越した文体、あるいは形式（書簡形式など）」の複合的な作業により、旅行記は「文学作品」へと変化していった。

ル・ユナンは、旅行記の 2 つの領域、科学的言説と文学的言説を提示した。旅の主体が商人、船乗り、兵士、医者等である時代には、簡潔な文体で真実を伝える手段としての旅行記は「科学的言説」であり、ルネッサンス以降、旅行記に楽しみを求められて以降は、内容、形式に「文学的言説」が見られるようになった。特に、17 世紀以降は叙述における変化が見られた。新しい情報が旅行記のテーマではなく、旅行者の感情（心の描写）が中心となる。その例とし

て、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』を提示する。また、「肘掛け椅子の旅」の流行以来、文学と旅行記のフィナリテの差がほとんどなくなったことを指摘する。科学的言説と文学的言説を持ち合わせる旅行記の両義性について、描写と叙述の比重の違いによるものであること、さらに、小説と旅行記の相違点もその違いにほかならないとする。また、時代によっては、国家権力と教会権力に利用された歴史的事実も披露し、「旅行記」は時代の価値観やイデオロギーに影響される存在であったことに言及する。しかし、19世紀ロマン主義の時代になると、旅行記に必要とされるのが、「旅から得られた結果」ではなく、旅そのものになったと述べる。シャトーブリアンのオリエント旅行への理由「イメージを探しに」を提示する。さらに、シャトーブリアンは、「旅行記」のなかで、場所の具体的な描写を行わず、自身のイメージ、あるいは歴史的事実がつくりあげた「表象」だけで語る。旅行記が文学領域にいる証拠とする。

サンスー(2002)は旅（論者は旅行記も含まれるのではないかと考える）を伝統的な旅 (*le voyage traditionnel*) とユモリスティックな旅 (*le voyage humoristique* : 諧謔的な旅, 皮肉る旅, 感情が重視される旅) に分類する。伝統的な旅とは、「知るため、発見するため、学ぶため」の旅であり、旅行記はユナンの提言する科学的言説であった。中世の巡礼の旅や19世紀のシャトーブリアンやラマルチーヌの旅もその範疇である。一方ユモリスティックな旅は、気ままに偶発的であり、迷いながらジグザグと進行するような旅であり、まなざしは皮肉に満ちている。シャペルとバショームンの『アンコース旅行記』(旅: 1656, 出版年: 1663) をユモリスティックな旅の嚆矢とする。形式は書簡形式であり、散文や詩が混在する。内容は、様々なテーマを、あざけり、からかいで語るが、町の様子や風景に関する描写はほとんど存在しない作品である。次に、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』(1768) をあげる。18世紀末から19世紀にかけて「旅行記」は、それ以前の旅行記と区別されるが、サンスーは「センチメンタル・ジャーニー」をこの新しい旅行記の時代の幕開け的作品とする。スターン自身の旅ではあるが、旅行記の主人公はヨリックである。イギリスからフランスを経由してイタリアに向かうはずのヨリックはフランスで出会った女性に恋愛感情を持ったため、予定にはない行き当たりばったりの旅を展開する。さらに旅行記も「中断」する。もちろん風景に関する描写はない。しかしながら、乞食となった僧侶、せむし男、没落貴族へのまなざしが描写される。このまなざしはロマン主義作家たちがこの作品を評価する理由のひとつであると、サンスーは言及する。また、「大旅行」を好んだ伝統的な旅を皮肉った作品とし

て、メーストルの『私の部屋周遊記』(1794)等をあげる。さらに、ユモリスティックな旅は、旅の主体そのもの、新しい動物とも表現される Touriste を対象とする。

さらに、1840 年代に流行した生理学(Physiologie)においても Touriste が皮肉の対象とされていたことに言及し、加えてスタンダールとトッフェールの旅を事例として Touriste の属性を検証する。

(3) フランスロマン主義とロマン主義作家の旅

第4章では、フランスロマン主義について考察を行った。

アーリが『観光のまなざし』で提言して以来、ロマン主義的まなざしが、観光学において頻繁に応用されている。ロマン主義とは、18 世紀から 19 世紀中葉にかけて、ヨーロッパを席卷した文化潮流であるが、それぞれの国で固有の特徴がある。しかしながら、観光学においてはイギリスのロマン主義だけを扱い、「ロマン主義的まなざし」と結論づけてしまう傾向にある。本章では、フランスロマン主義について、*Grand Dictionnaire Universel du XIXème*『19 世紀ラルース大辞典』が掲載したロマン主義の定義にみられる、イギリス、ドイツのロマン主義と比較しながら、フランスの特徴を考察した。

特徴は表 8-1 の通りである。

表 8-1 (表 4-3 の再掲) イギリス、ドイツ、フランスのロマン主義の特徴

| 国 | イギリス | ドイツ | フランス |
|-----|----------------|------------|--------------------|
| 特徴 | 文学, 芸術 | 哲学, 芸術 | 文学, 芸術, 政治 |
| 代表者 | バイロン W.スコット | シラー ゲーテ | スタール夫人 シャトーブリアン |

【フランスロマン主義】

フランスロマン主義「文学」において、詩や小説に関して言えば、「私」の存在と「私」の対極にある「他者」、そして「他所」への関心が特徴とされる。戯曲に関しては、1830 年のユゴーの作品「エルナニ」の上演を機にロマン主義宣言された。古典主義、簡単に言えば、形式を重視する主義が完全に否定された。絵画におけるロマン主義もデッサン（形式）よりも、色を重視するという特徴が見られた。文学において、色は「地方色」を描写することであった。フラン

スロマン主義の特徴として、文学も絵画も「他所」とは「オリエント」であったことを確認した。作品のテーマが「オリエント」であったことは19世紀以前にもみられるが、ロマン主義の時代、作家自身が、実際に「オリエント」を旅することが重要であった。「オリエント」という場所が、ナポレオンによって示され、具体性を持った地域に変化していたことも影響している。表にも見られるが、ロマン主義作家が政治にかかわるのもフランスの特徴である。「旅」と「亡命」は他所に行くという点においては、同種であった。作家の旅の年表を作成し、旅の頻度や旅の目的地について考察を行った。馬車のネットワークの充実期を経て鉄道や蒸気船の発展により、オリエント地域はもとより、ロシアまで、旅の距離は広がっていた。

近年フランスでは、旅する作家をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールと呼ぶが、定義をはじめとして対象作家も曖昧である。Ecrivains-voyageur というウェブサイトがあり、その中の年表(chronologie)を調べてみると、1954年をエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの誕生年としていた。明記されていないが、恐らくサイトでは、ニコラ・ブーヴィエをエクリヴァン・ヴォワイヤジュールの嚆矢としているのだろう。彼の旅行記『世界の使い方』*L'usage du monde* は「20世紀旅のバイブル」とされている。一方で、サイトは19世紀の作家の作品も掲載している。さらに、複雑なことに、19世紀旅行記の研究者ベルティは著書 *Littérature et Voyage au XIXe siècle*(2001)の中で、エクリヴァン・ツーリストという言葉を使用している。対象作家は、シャトーブリアン、ネルヴァル、スタンダール、フロベール等でありエクリヴァン・ヴォワイヤジュールが対象とする作家と重複する。Voyageur とツーリスト(Touriste)が曖昧に使われるように、「旅する作家」を表す単語も使用者の判断にまかされるのであろう。

(4) シャトーブリアンの旅

フランスの19世紀文学は「ロマン主義運動」を嚆矢とするが、そのロマン主義をイギリスから持ち込んだのがシャトーブリアンであることから「フランスロマン主義の父」と表現される。5章においては、まず、シャトーブリアンの人生について概観を行い、政治家、文学者としての活躍と冒険者としてのアメリカ旅行、巡礼者としてのオリエント旅行、さらに亡命を含めて「旅(移動)」の多い人生を送っていたことを述べた。

つぎに、ロマン主義と旅について、サン・マロとコンブールの場所性と「旅」

との関係に注目した。ブルターニュ地方の港湾城塞都市サン・マロで生まれたことはシャトーブリアンに「冒険」や「旅」へと傾倒させたこと、また、財を成した父親が先祖の名誉復活のために購入したコンブール城での孤独な生活がシャトーブリアンに与えた影響を考察した。さらにイギリスでの亡命生活とJ.J.ルソーへの対抗心にみられる態度から、シャトーブリアン自身に見られるロマン主義の萌芽について確認を行った。

本章において、研究対象の旅行記は『パリからエルサレムへの旅程』*L'Itinéraire de Paris à Jérusalem*であるが、「ギリシャ」、「エルサレム」、「エジプト」の3章を分析し、シャトーブリアンはどのような旅をしたのか、どのような旅の主体であったのかについて省察を行った。

シャトーブリアンは1806年にエルサレムに向け、つまりオリエントに向け旅立った。旅の方法は前近代的であり、陸路では馬車、海路では帆船を利用した旅であった。ヴェニスからは、ギリシャ（オスマントルコ占領下）、トルコ、シリア、パレスチナ、エルサレム、エジプト、チュニスへと地中海の東側（レヴァント地域）と進み、帰路はスペインを通り、フランスに戻るという円環であった。フランスから下僕のジュリアンが同行し、旅行先では通訳を雇い、ジャンニセールと呼ばれるオスマントルコの兵士もパシャにより提供された。1806年当時は辞任していたが、すでに政治家としても、文学者としても名声を得ていたシャトーブリアンは、大政治家である外相タレーランから、オリエントでの旅の安全を保障ための証書を発行してもらっていたため、フランス領事が常駐するところ（フランク街）では、領事の世話になり、フランク街のないところでは、トルコの高官、アガやパシャの世話になった。特権階級の旅であり、民衆との直接的な接触はほとんど見られない。この旅の目的に関しては、エルサレムへの巡礼が最大の目的といわれるが、シャトーブリアン自身は、旅行記の中で、イメージを探すためと述べている。ジュネーブ大学で「オリエントのロマン主義作家たち(les Romantiques en Orient)」の授業を行った Butor は、講義中に『パリからエルサレムへの旅程』は『殉教者』*Martyres* の読者のためのガイド的な役割をしていると言及する。さらに、シャトーブリアンの学問的完成も目的のひとつであると説明する (Butor ほか)。

【ギリシャ】

シャトーブリアンのギリシャへの関心は、オスマントルコ治下のギリシャではなく、古代ギリシャであり、ホメロスの世界であった。当時一介の村に成り果てていたアテネに感動し、やっと見つけたスパルタでは、我こそが現在(1806

年の) スパルタを記述する第一人者であると、歴史家としての「Voyageur」の役割を確認する。ギリシャを荒廃させた原因をイスラム教と断定し、厳しい見解を披露し続けるが、人々に対しては「素朴」であるとして優しいまなざしを向ける。旅人の当然の行動として旅の思い出として、パルテノン神殿の大理石を持ちかえる。

【エルサレム】

シャトーブリアンの先祖は十字軍に参加しているが、当時は十字軍に対する評価は「戦略行為」程度にしか理解されていなかった。そのため、先祖の名誉回復のため、あるいはキリスト教徒として、最後の十字軍となるべくエルサレムへと向かった。エルサレムは『パリからエルサレムまでの旅程』においてクライマックスであった。ギリシャで感動した風景も、エルサレムに比べると色あせるほどであったと感想を述べる。しかし、エルサレムも宗教施設（墳墓教会や修道院）以外は廃墟であった。とくに、巡礼者が少ないことは、カトリックの司祭への援助が不足することにつながり、シャトーブリアンの懸念材料となった。エルサレムの章ではガイドブック的な実用情報が満載であり、滞在費用の詳細が記述されている。自分自身の巡礼を契機に、あるいは、自分が書いた（これまでにない情報を載せた）旅行記によってカトリック教徒の巡礼者が増えるようにという戦略があるのではないだろうか。エルサレムの章では、「科学的言説」が展開されていた。

【エジプト】

エジプトでは悪天候がつづき、領事による援助や保護を受けている特別な旅行者であっても、ピラミッド登攀を経験することができなかった。さらにアレクサンドリアからつぎの予定地チュニスに向かう時も天候に左右された。自然には抗うことのできない「旅」が記述される。ピラミッドへの賞賛を惜しまないシャトーブリアンは、エルサレムで旅のクライマックスを経験した後にもかかわらず、「エジプトが一番美しい国にみえた」という感想を残す。

シャトーブリアンの旅は、「イメージを探しに」という目的からは、Touriste的な旅の主体を確認することができるが、旅の方法、経験からは伝統的な旅行者 Voyageur である。

(5) スタンダールの旅

スタンダールは、『赤と黒』、『パルムの僧院』、『恋愛論』の著者として知られ

た 19 世紀を代表するフランス人作家である。とりわけ、小説家としての認知度が高いが、『ローマ散歩』、本章の分析対象である『ある旅行者の手記』など旅行記や紀行文の著者として活躍し、「旅」との関係が深い作家であった。

まず、スタンダールの生涯の概要の中で、故郷グルノーブルを嫌悪していたこと、グルノーブルを離れた後は、陸軍省に入省しナポレオンのイタリア遠征への従軍したこと、遠征を契機に「イタリア」および「旅」の楽しみを知ったことを論じた。

スタンダールには「小説家」として活躍するほかに、親類ダリュ氏のおかげでチヴィッタ＝ヴィッキアの「知事」という肩書を持ち役人としての生活があった。知事としての職務を適当に果たしながら、イタリアの各都市への旅は頻繁に行われ、ミラノでは社交場であったオペラ座の常連であり、芸術に関する豊富な知識を得た。またオペラ座ではイギリスの知識人、文化人との交流を持ち、「ロマン主義」(スタンダールは *Romantisme* ではなく *Romanticisme* と呼ぶ)という潮流を知った。スタンダールのイタリア好きは、墓碑に書かれた「ミラノの人、アンリ・ベール (スタンダールの本名)」に表れている。

6 章では観光研究作品として、『ある旅行者の手記』を分析対象とした。邦訳タイトルからは理解しにくいだが、原題 *Mémoire d'un touriste* は出版当時(1837)はセンセーショナルなものであった。初めて *Touriste* という名詞が書籍のタイトルとして使用されたのである。スタンダールのこの作品により、*Touriste* が一般名詞化したと言われる。実際は、ルイ・シモンが 1816 年にすでに旅行記のタイトルで使用していたが、『赤と黒』の著者として発表した旅行記のタイトルの反響は大きかった。このタイトルに関する考察として、スタンダールは以前からシモンの文章を高く評価していること、『恋愛論』の序文を丸ごとシモンの文章から引用している実績(大岡, 1970)からも、筆者はシモンからの拝借の可能性を提言した。『恋愛論』の序文を書いたシモンと、1816 年のシモンを同一人物として言及し、「ツーリスト」に関して論じた観光研究はこれまで見当たらない。観光学と文学領域における研究がリンクしていないことが明らかになった。また、スタンダールの英語好きが高じて英語由来の単語「ツーリスト」を用いたのではないかという説もある(Del Litto, 1965 他)。フランス語 *Touriste* 研究において重要な作品である。

さらに、この旅行記が、当時の流行、つまり旅行記とは「他所」を記述することにその意味はあるのだが、フランスという国内を対象としたことも斬新であった。スタンダールの戦略、あるいは出版社の戦略とも言われている。

『ある旅行者の手記』の特徴はその形式にもある。1837年にスタンダールは取材のためのフランス旅行をしているが、旅の主体である主人公はスタンダールではなく、鉄の商人 L.フィリップである。フィリップを通し、「作家」、「商人」、「知事」の視点で、産業奨励下のフランスが描写される。当時、フランス語ツーリストとは「イギリス人の有閑階級の旅行者」を意味したが、主人公フィリップは、フランス人であり商人であった。タイトルへのスタンダールの意図を探ることは簡単ではないが、Touriste という新語を選択したのも、より作品をセンセーショナルなものにしたいという気持ちからだったのであろう。

スタンダールという旅の主体については、臼田(2007)は、「公用はさておいて、それは時には恋人や友人に会うためであったり、私的な用事のこともあったりしたが、楽しみのための旅行が多い。その点では、かれは生涯に涉って漫遊(ツーリスト)であったと言っても過言ではないだろう」(239)と結論づける。

スタンダール研究の第一人者であった Del Litto(1965)もスタンダールの旅の頻繁さを示したうえで、

「スタンダールに貯金をする余裕があり、必要なときに予備の金を当てることができるだろうと考えるのは、彼をよく知らないからだ。すでに指摘したように、かれは浪費家ではない。かれは楽しむために金を使う。たとえば、旅行に出かけたいと思うと、たまらなくなる。さっそく旅にでるのはすばらしいことだ。その点でも、かれは先入観を許さない。かれの体軀や習慣からみて、かれが家に閉じこもり、出不精だとみなされるかもしれない。とんでもない。かれは常に旅をしている。というのも絶えず多くの新しいものが観察できるから」(235)

と「楽しみのための旅」を求める旅の主体を言及する。また、ミラノやパリの生活でも明らかなようにスタンダールほど都市の文化を楽しんだ作家もいない。芝居を見るためのロンドン旅行もある。現代の定義ではまさしくスタンダールは *touriste* であると言えよう。

(6) フロベールの旅

羽生(2011)においてフロベールの『ピレネーおよびコルシカ旅行記』を対象にして、ロマン主義運動にみられるエキゾチズムへの関心とくに「場所性」に

関して考察、および検証を行ったが、本論文においては1847年のブルターニュ旅行と1849年10月から1851年5月までのオリエント旅行を対象にフロベールと旅について考察を行った。2つの旅に共通することはデュ・カンという、フロベールの友人でありつつ、保護者でもあるような野心家の文学青年との二人旅であったことである。ブルターニュ旅行については、生存中に出版されることはなかったが、旅行後に二人で制作した旅行記、奇数章をフロベール、偶数章をデュ・カンが執筆した *Par les Champs, par les Grèves* から分析を行った。

ただし、本研究で使用したのは、フロベールの担当した奇数章である。旅行記『ブルターニュ紀行―野を超え、磯を超え』として渡辺(2007)が邦訳として出版している。フロベールの時代は、フランスの産業革命が始まり、「近代化」が急速に進められた時代である。とくに鉄道など交通インフラにおいては、それ以前の時代には見られなかった発展があった。「ブルターニュ旅行」では今日の旅につながる「旅の新しさ」を見出しフロベールの旅の一つの特徴として明らかにすることを目的とした。方法として「旅の理由」、「行動」、「宿泊方法」、「交通手段」等の分析を行った。

フロベールの住むノルマンディー地方の隣ではあるが、辺境の地とされたブルターニュを旅先にしたこと、国内旅行にもかかわらず3か月という時間をかけたこともかれらの旅の独自性のひとつであった。大きな理由として、出発の前年に父親と妹を相次いで亡くしたフロベールのための傷心を癒すための旅、健康を取り戻すための旅といわれ、自由な若者二人旅との印象を持たせる。「列車や乗合馬車に乗って、急いでブルターニュを横断するのではなく、徒歩で、背のうをしよって、長ズボンにはゲートルを巻き、杖を抱えながらの旅をするのだ(Mme Herpeux, 1940:32)」に、フロベールの旅の姿勢が表れる。ナントやブレスト等の都市部での行動を見ると、現在の「都市観光」を思わせる。ホテルに宿泊し、ナントでは、1843年にオープンしたアーケード街(パサージュ・ポムレー)で買い物を楽しみ、ブレストでは牢獄や病院見学のほかに娼婦街にも足を伸ばす。シャトーブリアンに傾倒する二人はサン・マロやコンブールで、「文学散歩」も行う。食べ物の描写も多く、「オムレツ」、「ガレット」、「シールドル」などが「ブルターニュの貧しさ」の換喩として記述される。しかし現在、それらは「地方の豊かさ(テロワール)」を示す食べ物として、観光政策のひとつとして扱われる。実際は周到に準備された旅ではあったが、旅行記では「気ままな楽しみの旅」を行う二人が描かれる。しかし二人にパスポート提示を求めた憲兵が、無職でなんの称号もない若者による「個人的な気晴らしのための

徒歩旅行」を全く理解せず、フロベールは「(気晴らしのための旅は)信じがたい、馬鹿げたことに思われたのだ」と記述するほどであった。ツーリズムを髣髴させる旅、あるいはその到来を感じさせる旅ではあったが、ツーリズム到来にはまだまだ時間が必要であった。

「エジプト旅行」では「楽しみの旅」の側面と、文学者への道が拓かれる上で「旅」が作品に与えた影響を考察した。

オリエント旅行記 *Voyage en Orient* 中の「エジプト旅行」が、*Voyage en Egypte* として 1991 年に De Biasi の監修により出版された。『オリエント旅行記』そのものが、フロベールには出版の意思のないものであったが、姪のカロリーヌによって 1910 年にコナール版フロベール全集に収められた。しかしながら、コナール版の「エジプトの章」は、カロリーヌが伯父の名誉を守るという大義名分のもと、かなりの加工が施されていた。1991 年に出版された『エジプト旅行記』がフロベールのオリジナルであり、エジプトでの行動が赤裸々に記述されている。とくにエスナの娼婦(舞妓)クシウク・ハーネムと過ごした一夜の描写はフロベールの「エジプトでの最大の思い出」とも評価される。エジプトのまちは、バザールや黒人市場やイスラムの奇習(青空の下でも行われる卑猥な行為)とエキゾチックな女性の描写で語られるが、「バザールにはコーヒーと白檀のにおいが漂っている」、「空豆の畑は満開でいい香りがする」など嗅覚表現によりオリエント的要素も抽出される。ピラミッドの大きさには感動するが、そこにある落書きには憤慨する。しかしその落書きの多さからも、とりわけイギリス人にとっては、エジプトがすでに「旅」の目的地になっていたことが明らかになる。ピラミッドでは、デュ・カンがフロベールを驚かそうとへとへとになりながらも先回りをしていたずらを仕込むなど、「荘厳なる歴史建造物」と屈託のない若者の旅が混在する。カイロからナイルを遡上しふたたびカイロへ戻る 4 か月半の船旅であった。

文学的な影響であるが、フロベールはオリエント旅行直後、代表作となる『ボヴァリー夫人』の執筆にかかる。主人公の不道德な行動は裁判沙汰になるほどであったが、まさしく、そこに「オリエント」的習慣が反映されていたのであろう。一方のデュ・カンはオリエント旅行に持参した「写真機」で撮影した写真を掲載した、世界初の写真付き旅行記『ナイル河』で名声と名誉を得る。フロベールは、旅行記を文学作品と認めていないという意見の違いもあり、以後、二人の友情はしばらく途絶える。

しかしながら、二人とも「オリエント旅行」の体験を土台に、「無職」のブル

ジョワ青年から、文学者へとその地位を確立していった。

第2節 「トラベラー対ツーリスト」についての研究

研究の背景で、英語「ツーリスト」においてもフランス語「Touriste」においても、否定的な含蓄が存在することを指摘した。しかし、その形成過程や「対象とされた「ツーリスト touriste」の時代はまったく異なることが明らかになった。以下(1)はフランスとアメリカの研究方法の違いについて、(2)は、フランスの研究方法についてまとめたものである。

(1) フランスとアメリカの観光研究の違いについて

20世紀、ブーアスティンによる現代ツーリストへの苦言を嚆矢として、トラベラー対ツーリスト、Voyageur 対 Touriste という二項対立的な関係が構築された。ただし、アメリカとフランスでは、ディスカールのコンテクストに違いがあった。「観光研究」へのアプローチ、つまり研究方法論が異なっていた。アメリカでは20世紀マスツーリズム、つまり「現在」の観光研究が「社会学」に始まり、「旅行者」と「観光者」の関係について人類学的、民俗学的なアプローチへと発展していった。一方、フランスでは、歴史学や文学的アプローチにより観光研究が進められた。現在の観光現象を対象とするよりも、むしろ、文学作品（旅行記、戯曲、詩、小説）やガイドブックを資料として、「旅」あるいは「旅の主体」の変遷史を作り上げるための研究が行われてきたことが明らかになった。代表的な観光研究者として、ボワイエ⁽¹⁾がいる。

(2) フランスにおけるツーリスト研究

「ツーリスト」という単語はまだ表れていないが、それまでの旅の主体 Voyageur とは違う主体が「旅行記」の中で登場し始める。サンスーの表現で言えば、「伝統的な旅行者」でない旅の主体であり、スターンをその嚆矢とする。目的もなく、気ままな旅の形式そのものも伝統的ではなかったが、「旅行記」において叙述に重点が置かれたことも、旅の主体の変化を表す要素とされた。サンスーによると、18世紀末から19世紀を通して出版された「旅行記」の嚆矢はスターンの『センチメンタル・ジャーニー』である。さらに、ここで興味深

いのは、「18 世紀末から 19 世紀全体」がひとつの「ある期間」としてとらえていることである。この期間の「旅」や「旅行記」はそれ以前ともそれ以後とも異なることを示している。

19 世紀、英語 Tourist はフランスにおいて、新語 Touriste として普及した。一般化されたのはスタンダールの作品『ある旅行者の手記』*Mémoires d'un touriste* のタイトルによる貢献とされる。ツーリストという属性については、当時、流行した生理学から、第 3 章で紹介したように、皮肉たっぷりに定義されているが、『19 世紀ラールス』では、テーヌが『ピレネ旅行記』のなかで提示したツーリストの類型を掲載する（表 2-3 参照）。以上のように、フランスでは文学作品の中で Touriste が分析され、「新しい旅の主体」あるいは「新しい社会階層のひとつ」として検証されてきた。そこで明らかになるのは、Voyageur との比較ではなく、否定的なまなざしで定義されるオルタナディブな旅人、人種(race)の存在であった。

しかし、英語圏において「観光」が社会的に論じられて以来、フランスにおいても文学研究領域以外で観光研究が行われるようになった。フランスのツーリズムの歴史を明らかにしたボワイエの存在は多きが、J=D ユルバンは、筆者の知りうる限り、フランスの観光研究において初めて、人類学や社会学からの視点による観光現象を用いた研究者である。彼が明らかにするのは、フランスでは「真正性」を求めずに「疑似イベント」で満足する Touristes(ツーリスト)の姿勢が非難されるよりも、Voyageurs と言われる人々（レガレンなど、現地調査を行う探検家、人類学者たち）が、自分たちの「神聖な場所」が Touristes によって、俗化され(vulgariser)、視点を変えれば民主化(democratiser)されていく過程を非難してきたという事実であった。マスツーリズム以降の Voyageur と Touriste の関係においては、1980 年代以降の「旅行会社」によるスローガンが、その対立関係を固定化あるいは強化したと分析する。ユルバン自身は、Voyageur と Touriste に二項対立的な関係は認めておらず、程度(degré)の差であると言及する。

第3節 ロマン主義と作家の旅

(1) 作家の旅と楽しみの旅

第 4 章で考察したように、作家たちは「イメージを探しに」、「文学作品をつ

くるため」、「恋人に会うため」、「亡命するため」、「健康回復のため」等、さまざまな理由から旅に出た。付表 4-1 及び付表 4-4 で示されるとおり、1830 年代と 40 年代に、旅は爆発的に増えている。旅行記も大量に出版され、「工業文学」とも呼ばれた。これらの状況を鑑みれば、フランスの近代観光史の一要素として「作家の旅」、あるいは、さらに細かく「ロマン主義作家の旅」と限定し位置づけることができよう。欧米の近代観光はトーマス・クック (Cook, Thomas 1806-92) が禁煙運動の一環として鉄道を利用して労働者の団体旅行を実施した 1841 年 (商業ツアーは 1843 年) を始まりとするが、狭義にはイギリスの事例である。フランスにおいては近代観光の到来を告げるような明白な事例はない⁽²⁾。労働者への休暇、つまり社会経済学的視点からは 1936 年に施行された「ヴァカンス法」により旅の大衆化が加速されたことは明白に証明されるが、本研究は旅の大衆化のプロセスについて論じるものではない。したがって、19 世紀における旅の増加を示すバロメーターは本研究で示した、旅行記の変遷 (付表 4-1) と作家の旅 (付表 4-4) の年表であろう。もちろん、対象は作家であり、ブルジョワ階級の人々である。しかしながら、近代観光の主役はたとえ、トーマス・クックが労働者の旅をオーガナイズしたとは言え、かれの本来の顧客となるべき人々 (近代観光の主役) は富裕層であり、彼らの旅が頻繁になり、多様化すること、具体的には、旅の目的地の多様化、および、旅の方法、とくに交通手段が多様化することを示すが、本研究によってこれら 19 世紀の特徴は、フランスでは作家の旅に反映されていたことを明らかにした。

「旅」の流行、あるいは富裕層における一般化 (普及) は「お楽しみの旅行」のために実践的な情報を掲載する旅行ガイドブックの出版も促した。1835 年「ベデガー」、1836 年「マレー」、1841 年「ジョアンヌ」が出版され、1853 年には鉄道旅行に特化したアシェットガイドが発行された。文学と旅、およびメディアと旅の関係が緊密になった。

(2) 現代に生きるロマン主義作家の旅

19 世紀、ロマン主義作家により大量に出版された旅行記もシャトーブリアン、スタンダール、フロベール、ネルヴァル、デュマなど「小説」で成功をおさめた作家が旅行記を、「文学作品」にする、しないという意図にかかわらず、作品は現在まで読み継がれている。彼らの代表作は小説であり、旅行記は文学者としての成功を約束するものではなかった。しかし、かれらが経験した「旅」の

文学作品への影響は、これまでの文学領域における先行研究からも明らかであり、ロマン主義作家と旅との関係は深いと言えよう。一方で現在の観光から、文学者と旅、ここで使用する旅とは Tourism の旅であるが、その関係の一例をあげる。映画やアニメを利用したコンテンツ・ツーリズムの存在があり、文学散歩や作家ゆかりの場所を巡るツアーもその範疇であり、むしろその嚆矢とも言えよう。すでに、フロベール⁽³⁾とデュ・カンもシャトーブリアンの旅を巡る小旅行を実施しているが、イギリスロマン主義者たちによって、すでに新エロイーズの舞台となったスイス地方参りが 18 世紀に行われていた。本研究の事例対象作家の三人についても、現在では、シャトーブリアン⁽⁴⁾の生家、コンブール城、ヴァレ・オー・ルーの家、パリのアパート、スタンダールのグルノーブルの生家、亡くなった時宿泊したパリのホテル、墓地、フロベールのルーアンの生家、クロワッセの家、ドーヴィル(Deauville)の別荘地後(写真 8-1)、ヴァカンスを過ごしたトゥルーヴィル(Trouville)の銅像などがあり(写真 8-2, 8-3)、作家と作品を巡る観光コースとして存在している。

第4節 19 世紀、作家の旅の社会的背景

これから述べる内容は、3 人の主体が経験した社会変化、とりわけ交通手段の進化である。産業革命を経て、動力が主となった 19 世紀は、旅の方法においてもそれ以前の時代と一線を画した。

1806 年のシャトーブリアン⁽⁵⁾の旅の交通機関は、馬車と帆船であった。1800 年にスタンダールが初めてナポレオン遠征軍としてイタリアに向かったときのアルプス越えは命がけであった。しかしながら、1833 年休暇先のパリから任務地チヴィッタヴェッキア(イタリア)に戻る際には、ローヌ川を蒸気船で下り(この蒸気船にはリヨンからアヴィニョンまでジョルジュ・サンドとアルフレッド・ミュッセのカップルも乗船していた Del.Litto,1965)、海上からイタリアを目指している。ミュッセによって、陽気に時を過ごすスタンダールがスケッチされている(図 8-1)。蒸気船は、自然環境に影響されやすいうえ、事故も多く、現在の視点で考えると、あまり信頼度の高い乗り物ではなかったが、革新的な交通手段であったにちがいない。鉄道開設の前段階として「イタリア」を「楽しみの旅の目的地」に変えたであろう功績は大きい。ルーアンとパリ間もセーヌ川を蒸気船が就航し、フロベールも利用者のひとりであった。また、反対方向ではあるが、ルーアンからイギリスに向かうためには朝 4 時の蒸気船に

乗船すれば、午後 4 時にはル・アーヴル(Le Havre)でサウサンプトン(Southampton)行きの大型船(le grand tuve)に乗ることができると、フロベールの妹が書簡に書いている(Pléiade 版 187p 1843 年 8 月 10 日付)。フロベールとデュ・カンは 1849 年に出発したオリエント旅行で、スタンダールと同じようにリヨンからアヴィニオンまで蒸気船を利用するつもりでいたが、天候に恵まれず、途中のヴァランス(Valence)で下船し、郵便馬車に乗り換えている。スタンダールとフロベールの旅には 20 年近くの差があるが、蒸気船の改良はあまり進んでいなかったのだろう(スタンダールが乗った蒸気船もアヴィニオンには予定通り到着することができなかったことが、サンドの日記に書かれている)。



図 8-1 踊るスタンダール

Del Litto 1965 より転載

次に鉄道についてであるが、フランスでは、1842 年の「鉄道憲章」によって鉄道会社の利権がかなり保障されてからは、急激に鉄道網が整備された(檀上, 1980, 石川, 2000)。しかしながら、本格的な動きは第二帝政期(1852-70), ナポレオン三世により推進された、ペレール兄弟とロートシルド商会による鉄道事業により始まる。

スタンダールは『ある旅行者の手記』の主人公に鉄道を利用させているが、自身は鉄道の将来性⁽⁴⁾に疑問を持つほどであり、乗った経験はない。ここに旅行記の虚構性が示される。主人公が乗車するのは、中部フランス⁽⁵⁾であるが、これは事実に即した語りである。初期の鉄道は貨物輸送がその役割であり、工業地帯に敷設された。しかし、40 年代になると、前述の通り、人員輸送を目的

とした鉄道網の開発が始まる。第7章でも示したが、1849年、フロベールとデュ・カンは、アヴィニョンからマルセイユまで開通したばかりの鉄道を利用している。

フランスの鉄道の発展の特徴として主要都市とパリ間を結ぶというよりも、ノルマンディーの海浜保養地とパリ間に鉄道が敷かれたことがある⁽⁶⁾ (Vergeade 1990)。フロベールはノルマンディーのルーアン出身であり、鉄道の恩恵を受けた一人である。人々の熱狂する様子が、当時パリにいたフロベールの日記(1843年)に書かれる。

「(鉄道に乗って)私はルーアンに行きます！私はルーアンから来ました！ルーアンにはいつ行かれるのでしょうか？」の会話を頻繁に耳にするが、これほどまで、ルーアンがパリで話題になったことはないと感想を述べる(1843年5月11日の書簡)⁽⁷⁾。さらに同日の書簡のなかで、ルーアン・パリ間の時短について以下のように記している。

Il est étonnant que, maintenant qu'il y a le chemin de fer et que c'est si commode pour aller à Paris, car on peut y aller dîner [et] revenir le soir pour se coucher : Ah ! vraiment , c'est une chose incroyable !

「鉄道があるなんて驚きだ。パリに行くのにこれほど便利だとは。晚餐に行き、その夜、寝るために戻って来れるなんて！アー信じられない！」

フロベールは1840年には蒸気船でパリに向かう。しかし鉄道が開通した1843年以降は、2等車に乗ったこと、3等車⁽⁸⁾に乗ったことが日記で書かれる。しかし、鉄道開設後にもかかわらず、パリに上京する家族には(すでに、パリは「買い物のための場所」になっていた)、馬車で来るように勧め、鉄道を利用すれば4時間余りの旅であったのにもかかわらず、家族は2泊3日をかけてパリに赴く。フロベールに限らず鉄道に対するまなざしには賞賛とともに恐怖心もあった。馬車に比べて数は少ないが、一度起こると犠牲者の数は馬車の事故に比べると数倍に上ったこと(1842年5月8日パリ・ヴェルサイユ間で起こった事故では55人が死亡、109人が重傷)や、初めて経験するトンネルへの恐怖心があった(Vergeade, 1990, Schivelbusch, W, 1977(=加藤訳 1982)ほか)。それは暗闇への恐怖心であり、その中では窒息するとまで恐れられた。

デュ・カンは

On fit des discours, personne ne s'enrhuma sous les tunnels, la locomotive n'eclata pas et l'on put croire qu'un voyage en chemin de fer n'était pas forcément mortel.

「おしゃべりしていたが、誰もトンネル内では風邪をひくことがなかった。機関車も爆発しなかった。列車のトンネルの旅はとりわけ致命的なものではなさそうだ（1837年8月26日）」

とユーモアを混ぜながらノートにつけている。

パリ・ルーアン間には1843年の鉄道の開設によって開通した、全長が2,613メートルにも及ぶRolleboiseトンネルがあり、乗客にとっては4分間の恐怖であった⁽⁹⁾。フロベールもこのトンネルに対する疑念によって、家族には馬車で来ることを推奨したと考えられるが、フロベールの妹カロリーヌは、兄の心配に対して、*je suis pour le chemin de fer*「私は鉄道に賛成派よ」(Flaubert *correspondances* Pleiade 187p 1843年8月10日付の書簡)と、4時間でパリに行ける利点を強調する⁽¹⁰⁾。

フロベールは以後、鉄道利用者となるが、1864年の友人宛の書簡のなかで鉄道に乗った時ほど退屈な時はないと嘆く。初めての鉄道経験から20年が経ち「恐怖心」が消え、鉄道に乗りなれたフロベールと、交通手段として一般化した鉄道の存在が明らかになる。

以上のように19世紀はシャトーブリアンの帆船の旅からフロベールの鉄道利用の旅へと交通手段の面からも変化に富んだ時代であった。19世紀最後には自動車の発明もあるが、本研究の対象者たちは利用していないため、次の研究の領域としたい。現代の感覚から考えると、100年間という長いスパンの中の変化としては「驚嘆」に値しないかもしれない。しかし19世紀以前は何世紀にもわたり「馬車」と「帆船」のみが「旅」の交通手段であったことを踏まえれば⁽¹¹⁾、19世紀という時代、つまり「ヴォワイヤージュ」という旅の時代が歴史的にも特別な時代であったことは明白であろう。

第5節 作家の旅について

(1)「旅の主体」としての考察

第4節では「主体」をとりまく社会の変化についてまとめたが、第5節ではそれぞれの「主体」について、第5章、第6章、第7章での分析を踏まえ、簡

単に論じる。

シャトーブリアンの旅は、交通手段においては帆船と馬と馬車の旅、服装においては武装し、隊（旅団）を形成しながら進む旅であった。ハード面では Voyageur の旅と断言できよう。しかし、ギリシャでは目の前の現実の景色は見ず、ホメロスのオデュッセイアの世界や古代ギリシャの繁栄を追従することに専念する。記号を通して景色をとらえる姿勢は現在のツーリスト的行動である。

（シュリーマンがトロイアの遺跡を発見するのは 1870 年であるが、シャトーブリアンも「実在」した世界として見ていたのかもしれない）。『パリからエルサレムへの行程』の中で、Voyageur とは、あるいは Voyageur の楽しみとはなど、旅の主体や旅の意義について語る。18 世紀の哲学者たちの非難に対し、実際に「他所」に行くことの価値を自分の経験から伝えようとする姿勢が見られる。

一方で Voyageur ではない旅人、オルタナティブな Voyageur の存在をすでに意識しているがゆえに、「自分」は正統な Voyageur であると宣言しているとも読み取れる。最終的には「(なにか特別な) Voyageur である私」という存在が強調され、その姿勢はスタンダールから、「鼻持ちならないエゴティズム」とであると非難される。

『ある旅行者の手記』を執筆するために、スタンダールは自身で取材旅行を行っている。Touriste と自称する主人公フィリップ・L の背後にいるのはスタンダールである。そのまなざしには、チビタ＝ヴェッキアの知事としてのまなざし、主人公である商人のまなざし、アンリ・ベール、スタンダール本人のまなざしである。フラヌール（都市を彷徨う遊歩者）の態度をとりながら、本質は工業化へと急速に進むフランスへの辛辣な意見をもった Voyageur である。しかしながら旅行記の旅の主体は主人公フィリップ・L であり、「スタンダールの旅」を定義するのはやはり難しい。ましてや旅の主体としてのスタンダールを論じきれないであろう。文学研究では、16 歳から始まったスタンダールのノマド的生活、頻繁な旅に関して、臼田(2007)が「公用はさておいて、それは時には恋人や友人に会うためであったり、私的な用事のことでもあったりしたが、楽しみのための旅行が多い。その点では、かれは生涯に涉って漫遊（ツーリスト）であったと言っても過言ではないだろう（臼井、2007:239）」と言及する。

フロベールは上記二人より、半世紀近く後に生まれており、その間の社会体制の変化、とくに産業発展が導いた近代フランスを知るフランス人である。また二人のように社会的地位を持たずに「作家」としてのみ生きた。「旅」においても、家族旅行、友人との旅行など、「楽しみのため」が目的であり、自由に旅

をしたツーリストとしての印象を残す。彼はノルマンディー地方ルーアン生まれであったが、「場所性」もまた「ツーリスト」と呼ばせることに影響している。

ルーアンとパリは早い時期に(1843年)に鉄道で結ばれていること⁽¹²⁾、さらに、ノルマンディー海岸地方は、フランスで一番早く海浜保養地として発展した地域であったことは重要な要素である。フロベール家には Trouville と Deauville に別荘があり、後者はフロベールが遺産として受け継ぐか、姪の借金問題のためほどなく売却する。その後、ロートシルド(Rothschild, Henri, 1872-1947)が別荘を新築し、1924年にはアメリカの富豪 Strassburger の所有になるが、現在でも「フロベールの別荘地跡」として観光資源となっている⁽¹³⁾(写真 8-1)。デュ・カンとのブルターニュ旅行の帰りも、ブレストからは母親が同行し Trouville に立ち寄っている。

海水療養や第二帝政の投機熱の流行による Trouville や Deauville の発展の様子を知る人物でもある。現在、Trouville にはフロベールの銅像が建つ(写真)。恋人ルイズ・コレ⁽¹⁴⁾(Colet, Louise 1810-76)はパリに住んでいたため、書簡での連絡が主だったとはいえ、パリ・ルーアン間の「遠距離恋愛」が可能な時代になっていた。1840年代にはバルザックがハンスカ夫人に会うためにウクライナやキエフまで旅をしていることを踏まえればパリとルーアンの距離はもはや「旅」ではない。

以上にあげた三人、それぞれの「旅の主体」はブーアスティンが『幻影の時代』で言及した 19 世紀以前の旅、つまり Travel の主体であり、「能動的な旅行者」である。しかし、むしろ「楽しみのため」、あるいは「楽しむため」の能動的な姿勢だったと言えよう。ロマン主義初期のシャトーブリアンは楽しみを他所(遠方のどこか)に求め、それを発見、報告する任務に価値を感じていた。

スタンダールは、イタリアという他所にあこがれ、晩年はフランスという身近にある「他所」を見出し自国民の観察をするという「楽しみ」を得た。フロベールは、余暇活動としてのリゾート滞在の「楽しみ」と自分の作品のためだけにオリエントという遠方の他所を「個人的な楽しみ」として経験した。

歴史学者ブレンドン(Brendon, Piers)は、

「観光 Tourism とは、よく知っているものの発見だということである。(これに対し、旅行 travel とはよく知られていないものの発見であり、探検とは知られていない者の発見である。ということは、良く知られた事柄は、何であれ一人でも物でも、難破船でも滝でも、山でも都市でも一観光魅力になり得ることである)(ブ

レンドン, 石井訳 1995:117)

と言及するが、シャトーブリアンが traveler 的であるなら、スタンダールには国内旅行において「よく知っているもの（と考えられていた）」の発見があり、フロベールに至っては、オリエンタリストやすでにガイドにあった事柄、つまりよく知られた事項を楽しんだ点において、後者2人はツーリスト的な旅の主体であった。以上が三人の旅の主体としての属性であった。



写真 8-1 Deauville のフロベールの別荘地跡 2012 年 8 月 3 日筆者撮影



写真 8-2 フロベールの銅像 2012 年 8 月 3 日筆者撮影



写真 8-3 Trouville の海岸 2012 年 8 月 3 日筆者撮影

(2) 社会・作品への影響

本論文の研究の目的のひとつに作家の旅の社会・作品への影響を明らかにすることを掲げた。オリエント旅行を対象としたシャトーブリアンとフロベールについてはサイドのオリエンタリズムを援用した。またスタンダールについては、「国内旅行」に焦点を当て、社会・作品への影響を考察した。

シャトーブリアンは『キリスト教精髓』、『ルネ』、『アタラ』を通し、フランスにロマン主義をもたらした。本稿の対象ではないが、『ルネ』『アタラ』はアメリカ先住民と近代人（フランス人）を主人公にした小説であり、1792 年のアメリカ旅行から着想したものである。『パリからエルサレムへの旅程』がもたらした影響とは、19 世紀にフランスで流行したオリエント旅行の行程を確立したことであろう。オリエントという漠然とした地域が、地理学者や歴史家が策定したものではなく、「旅行記」が示した地域によって定着した。ただし旅行記がシャトーブリアンという、文学者としても政治家としても著名な人物の手によるものであったことは重要な要素である。

サイドの『オリエンタリズム』*Orientalism* では、シャトーブリアン、ネルヴァル、フロベールのオリエント旅行が対象とされ議論された。かれらの旅の特徴を「ヴォルネーやナポレオンと違って、19 世紀のフランスの巡礼者たちは、

科学的な現実よりも、エキゾチックで、かつとりわけ魅力的な現実を探し求めた」(坂田・杉田訳監修, 1993 :389)と言及し「彼らはオリエントのなかで、自分たちの私的な神話や強迫観念や欲求に共鳴する場所を見出したのだった」(前掲書 :389)さらには「自分たちの使命を正当化するためにオリエントを利用した」(前掲書 :390)と結論づける。

とりわけシャトーブリアンに対しては厳しい態度であり、巡礼者としての正当性、学問的完成、キリスト教の優位を断言するためにオリエントが利用されているとする。「シャトーブリアンのようにまことご立派な資質をもった人物から見れば、オリエントとは、かれの努力によって再生させられるのを待つ使い古しのキャンパスのようなものであった」(前掲書 :392)とまで言及する。

サイードによれば、オリエント、つまり西洋に対し二項対立的な世界観を再構築したのはシャトーブリアンであったということであろう。1806年の旅(旅行記の出版は1811)が20世紀(1978)においても論じられることは、この旅行記の普遍性を示すことであり、今日も続く「西洋中心主義」を肯定するもの、あるいは批判するものとして、相変わらず、「生の素材」であり続けているということである。5章でも紹介したが、2012年にベルシェが大作『シャトーブリアン』を出版して、フランス国内で話題となった。サイードが言うようにシャトーブリアンが再構築したオリエントは、今日では19世紀のオリエントの表象として、21世紀の現実の中東地方とは乖離した「他所」として存在し続けるのであろう。

スタンダールの「フランス旅行」は、フランス人が自国を発見することに貢献したと考える。それぞれの地方が独自の文化を持つことが、フランスの地方の豊かさ、テロワールの豊かさをあらわすものであり、地方文化はフランスの魅力のひとつである。しかし、見方を変えれば、それぞれの地方が独立して、一つの国民であることを意識せずに過ごしてきたという歴史の存在が浮き彫りにされる。1789年のフランス革命後、一つのフランスを目指して、言語の統一化が図られたことから、フランスという国家意識の欠乏があったことが認められる⁽¹⁵⁾。

また、シャトーブリアン同様に、スタンダールという著名な作家による旅行記であったこと、「旅行記」の販売促進のため、メディアを利用した出版社の戦略があったことなど、外的要因も考慮すべきである。メディアは、とくに新聞、小説が時代の流行をつくる時代になっていた。ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』のなかで、近代の国民国家の成立は、18世紀にヨーロッパで

開花した小説と新聞が大きく寄与していると言及しているが、フランスにおいては、ジラルダン⁽¹⁶⁾ (Emile de Girardin, 1802-1881)によって 1836 年に「プレス紙」が既存の日刊紙の半額で発行して以来、とりわけ新聞小説を巡って熾烈な販売競争⁽¹⁷⁾が繰り広げられた。すでに 6 章で紹介しているが、ラ・ルヴュ・ド・パリ紙(La Revue de Paris)において

「旅において、われわれはただ、遺跡、絵画、寺院、風景を見るのではない。眠ったり、食べたり、宿泊したり、楽しまなければならない。作者はそれらすべてを語る。宿泊したオーベルジュ、入ったカフェ、人との出会い、馬車の中で出会った気の合った人、気の合わなかった人、安食堂、蒸気船など、旅に関わった人、事象についてすべて語る」

さらにル・クーリエ・フランセ紙(Le Courrier français)では

「文学的旅行者⁽¹⁸⁾の数はますます増えている。新聞小説(フィユトン)を書くためにかなり遠方まで旅にでる、一方われらが Touriste は、そのような旅(遠方への旅)は voyageur に任せる。『赤と黒』の作者は外国へと旅立つことなく国内を旅するのだ」(筆者による翻訳の要約)

と書かれている。

以上のような出版の告知により、なにか新しい旅が予告された。旅とはフランス国外へ行くことばかりではない。また旅先においても、特別なことをする必要がないこと、つまり「ツーリスト的な旅」を人々は知ったのであろう。さらに、1838 年以降、「ツーリスト的な旅」は一気に広がり、1840 年代の生理学で格好の対象となったと言えよう。

フロベールの旅は 19 世紀半ばにはじまる。宿泊施設、交通機関の発展からも、「楽しみの旅」がより身近になった時代である。ナイル川流域を遡上することなく、ただアレクサンドリアやカイロなどの都市部を訪れるだけであれば、ヨーロッパ人向けのホテルや店を利用して、「イメージを探すこと」、換言すれば記号的まなざしをもってオリエントを体験することが可能な時代になっていた。

ピラミッドや女性に対するまなざしには「集合的なまなざし」も否定できない。しかし、それは現在のツーリストのように、写真などの映像によるものではない。おそらく旅行記の挿絵が大きな影響を与えたと考えるが、ガイドブック(マレーは 1847 年にエジプト版を出版)などの影響も否定できない。ボワイエ(2000)はフロベールがなにか、ガイドブックを携帯していたことを記述する

が、どのガイドかは不確実であると言っている。しかしおそらく「マレーガイド」だろうとの見解を示している。一方でホスト側のエジプトにおいても、ゲストからの影響は存在し、フロベールもすでに、西洋的流行を取り入れたエジプト女性について述べる。視察官としてのパスポートを用意し、都市では、領事之家に赴くなどシャトーブリアンの時代と同様の行動もみられるが、旅の主体としての行動は明らかに、現代に近いツーリストである。

再びサイードの『オリエンタリズム』を引き出すが、サイードのフロベールへの態度は寛容である。その理由として

「実際、我々がレイン、フロベールまたはルナンといった人物のどこに興味をもつかといえば、西洋人は^{オクシデンタル}東洋人よりも優秀であるといった（彼らにとっての）自明の心理などではなく、その真理によって打ち開かれた広大な空間の中で、彼らが繊細をきわめた仕事をするうえで徹底的な推敲と調整とを行ったという形式に対してなのである」（前掲書：389）

さらに、

「彼らの（ネルヴァルとフロベールのこと）オリエントは、把握され、占有され、還元され、記号化されるものというよりは、可能性にみちた広大な場所としてそこに住まわれ、美と想像のために利用されるものだったからである」（前掲書：414）

とその根拠を示している。

つまり、シャトーブリアンのように「旅行記」というジャンルの中で直接的に傲慢な態度で語り、勝手にオリエントを再構築するのではなく、『ボヴァリー夫人』や『聖・アントワヌの誘惑』や『サランボー』といった小説を作り上げた業績を称えているのである。さらに、娼婦（舞妓）クチュク・ハネムとの一夜の描写に関しても、オリエントに関する^{ディスクール}言説をはっきりと象徴させる出来事として好意的であった⁽¹⁹⁾。

第6節 ツーリズムの萌芽について

「ヴォワイヤージュ」と名付けた時代は20世紀の旅の時代 Tourism への予兆を含む。本節ではガイドブックの出版の状況から、シャトーブリアンやフロベールが経験したオリエントの旅の Tourism 化について検討した。また3人の作

家がそれぞれに書き留めたイギリス人旅行客からイギリスにおけるツーリズムについてまとめた。

(1) ガイドブックの視点から

石川（2000）は「ツーリスト」が一般名詞化し、そこから「ツーリズム」という言葉が登場し、さらにフランスで最初の観光ガイドブックである『ジョアンヌ旅行案内書』が刊行された 1841 年、オリエント旅行を事例に「旅」の転換期とし、

「このときに、フランスのオリエント旅行は大きな方向転換をとげたといえる。それまでは、特権的な人たちの巡礼旅行にすぎなかった旅が、その後はオリエントに興味をもつ人たちへの気楽な観光旅行へと変わっていったのである（石川, 2000 : 151)」

と言及する。

つまり、フロベールのエジプト旅行(1849-51)は観光旅行であると言えることだろう。マルセイユまでは確かに石川のいう通りかもしれない。しかしながら、マルセイユからマルタ島までは相変わらず、船は天候により左右されている上、乗船メンバーも、領事、外交官、医者など、特権階級の人々である。旅行ガイドの視点からも、「ガイドブック」が一般化されるのは 1851 年のルイ・アシェット (Hachette, Louis, 1800-64) による鉄道利用者に向けたガイドブック (Bibliothèque des Chemins de fer) シリーズの駅のキオスク販売によるものと考えられる (鉄道利用の大衆旅行者を対象とする販売)。さらにルイを引き継ぎ、アシェット社のガイドのディレクターとなったジョアンヌ (Joanne, Adolphe, 1813-81) が 1860 年に『オリエントガイド (*L'Itinéraire de l'Orient*)』を「ジョアンヌガイド (*Guide Joanne*)」として出版することを踏まえると 40 年代、オリエント旅行を観光旅行とみなすのは時期尚早であろう。

一方で 1840 年代にオリエントの町に急激な変化があったことは事実であった。ブッション (Buchon)⁽²⁰⁾ は 1841 年でさえ、ギリシャに 4 つのホテルを確認したのみであったと証言している (Berchet, 1985)。しかし、1846 年になるとオリエントを再訪したオメール・ド・ヒル (Xavier, Hommaire de Hell)⁽²¹⁾ が驚きをもって次のように語る。

「かつては英国人、ロシア人、オーストリア人が 2 軒しかないホテルを辛うじて分かち合っていたのに、今では、美しいホテル、モードの店、香水店、ヨーロッパ人のための店が揃っている」(Berchet, 1985:7)

1840 年代、オリエントは「観光開発」的な動きがあったのであろう。

(2) イギリス人ツーリストとイギリス

本研究、とくに 5 章、6 章、7 章の分析に基づくと、イギリス人旅行者の存在について三作家が記述している。

シャトーブリアンは 1806 年に、スタンダールは 1810 年代からイタリアを旅し、フランスを 37 年に、フロベールは 50 年代にエジプト(「オリエント旅行」)を旅しているが、3 人ともに、イギリス人の旅行客の多さを指摘している。イギリスでは 1843 年にトーマス・クック(Cook, Thomas, 1808-92)により「観光産業」が登場し、51 年のロンドン万国博覧会の時には、つまりフロベールがオリエント旅行中の期間であるが、万博には 600 万人の入場者があり、そのうちの 4% がクック社の斡旋であったと言われるまで急成長している。つまり、石川(2000)の前述の言及はイギリスを事例にすれば、「観光旅行」の形態は成立していたと言えよう。イギリスの近代観光については、ブレンドンの *Thomas Cook: 150 years of popular tourism* 『トマス・クック物語：近代ツーリズムの創始者』に詳しい。

一方で、羽生(2011)⁽²²⁾が示したように、イギリスにおいて 18 世紀の海水浴療法の流行に始まった海浜保養地は交通インフラとともに発展し、国内の「観光の萌芽」に寄与した(ブライトンなど)。またジェントルマン養成としてのグランドツアーも 18 世紀にはすでに存在していた。グランドツアーは、青年たちに「古典を学ぶ＝教養をつける」目的で大陸への旅を促したが、(ナポレオンの大陸封鎖令⁽²³⁾が施行された期間は特に)自国の自然の美を発見するという還元効果をもたらした(中島, 2007)。フランスにおいてイギリス人旅行者を指す *Touriste* という言葉は 1816 年にすでにシモンが使用しているが、大陸封鎖令が解除された 1815 年以降は多くのイギリス人が、再び大陸に戻って旅を続けたことも影響するのであろう。トマス・クックの団体旅行以前、富裕層においては *Tourism* 的な旅が活発であったと言えよう。

第7節「ヴォワイヤージュ」の定義

本研究では、第5章、第6章、第7章を事例研究として、旅行記による「旅の主体」の変遷を考察した。その結果、ブーアスティンは20世紀の旅と19世紀以前の旅を二項対立的に示したが、「旅」も「旅の主体」も「連続的な変化」であったことが明らかになった。19世紀以前の旅においては、交通手段の側面から、旅人の感情の側面からも長期間に渡りほとんど変化は存在しない(Sangsue, 2001, Berty, 2001)。旅人の属性も、兵士、商人、宣教師、学者、役人など、換言すれば旅のプロたちであった。一方で19世紀になると、プロ以外、たとえば作家という素人が旅に参加するようになった。旅の方法においても、旅の主体に関しても「連続的な変化」の渦中にある旅こそが19世紀の旅の特徴であると言える。

第3章で論じたように科学的な論証をもとめた旅、新しい発見を担った旅、困難を克服しながらの旅が19世紀以前の旅の本質であり、語源の通り Travel であった。さらに、20世紀を迎えると Travel は Tourism へと変化し21世紀の現在もその延長にある。序論で提示したように、19世紀の旅は Travel と Tourism の中間にあり、そのどちらでもない旅である。この19世紀の旅をヴォワイヤージュと名付けた。その特徴は過渡的な旅であり、近代化はするが大衆化はしていない旅であり、旅の主体は Traveler と Touriste の両義性をもつ旅行者であり、それはロマン主義作家の旅に代表されている。

第8節 おわりに：「観光文学」の可能性

文学者たちが旅行記を書いた意義は大きい。Travel 時代の旅人(traveler)は報告書を残すが、「書く」行為を専門としてはいなかった。彼らの旅は書かれたものよりもっと頻繁であったかもしれない。一方でロマン主義時代の作家たちは、旅の数だけ記録(note, album)を残した。かれらの旅は同時代の読者に影響を与えたばかりではなく、その多くは旅行記として後世に残り、21世紀の現在でも、私たちに影響を与えている。ホメロスの作品を体現することを目的のひとつとしたシャトーブリアンや、小説へのインスピレーションを旅から得たフロベールが示す様に、旅と文学の関係は明らかである。シュポー、ル・ユナンが論じたように、旅行記のジャンル分けは複雑であるが、日本では旅を対象とした文学は「紀行文学」と呼ばれ、日本の図書館分類法では「紀行」は歴史(2

類、地誌、紀行)と文学(9類、日記、書簡、紀行)の双方に分類される。「紀行文学」はフランスでは *littérature du voyage* と呼ばれるが、現代の紀行文に限らずロマン主義時代の作家の作品を含め、ガイドブックの隣に並べられることも多い。同時に、彼らの文学作品に含め配置される。「紀行文学」あるいはフランス語の *littérature du voyage* の名称からわかるように文学領域の研究が期待され、進められている。しかし、観光資源の一部として利用される文学の現状を踏まえると「観光文学」というジャンルが構築され、観光と文学に関する研究が可能となろう。本研究では外国文学研究の成果を踏まえ観光研究の新しいアプローチを示した。これからの研究課題として観光文学研究の精緻化を進めたい。

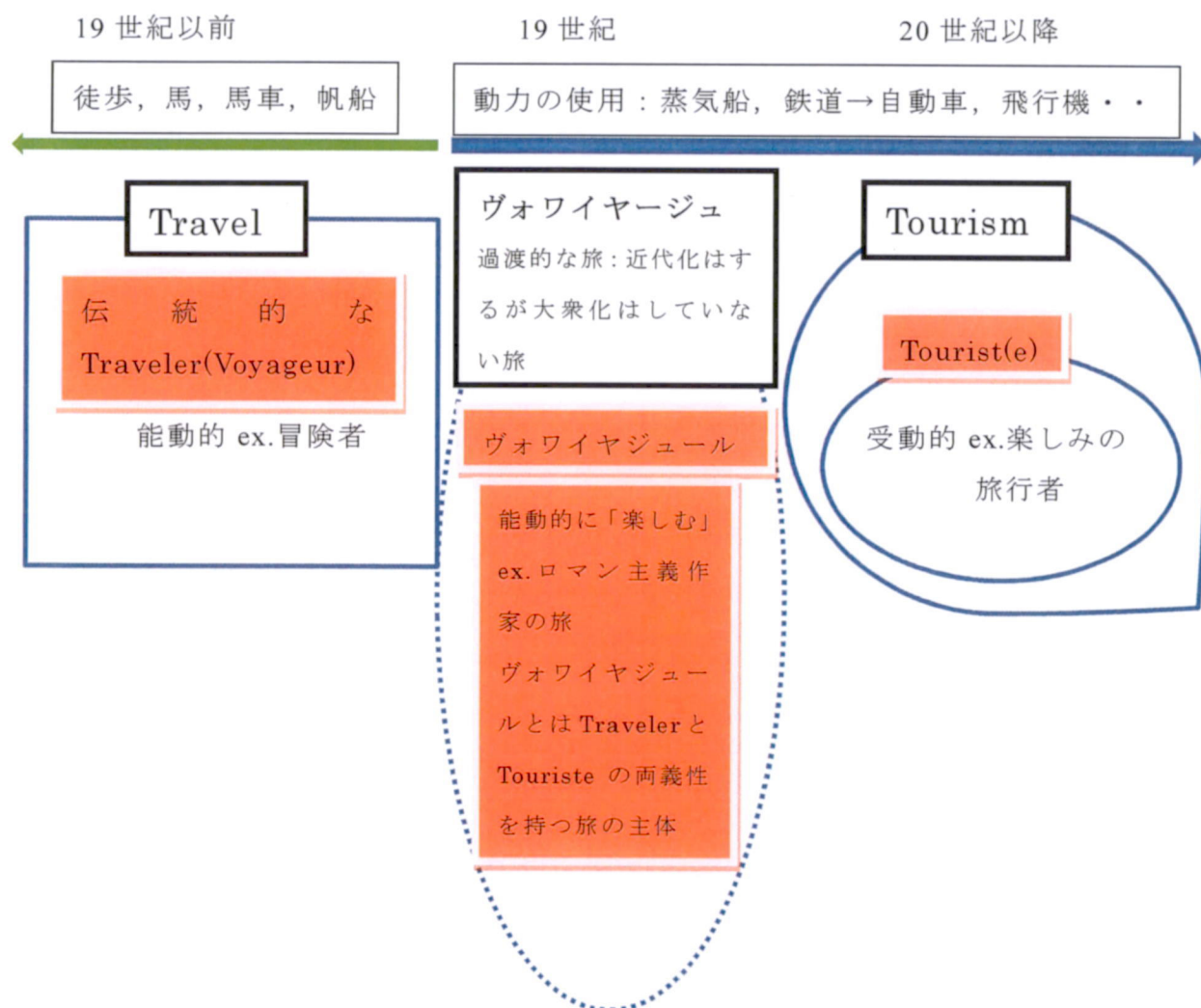


図 8-1 旅と旅の主体の変遷(2)

【補注】

- (1)リヨン大学(Université Lumière de Lyon)の tourisme 学部の創設に貢献した人物としても知られる。ボワイエの著書 *Le tourisme*(1972) Paris, Seuil 出版, はフランスの観光研究の嚆矢と言えよう。
- (2)Vergeade(1990)は, パリ・サンジェルマン間に物資運搬目的ではない, voyageurs のための鉄道が開設した 1837 年 8 月 26 日を「鉄道を利用した楽しみのための旅行が誕生した日」(*Le voyage d'agrément en chemin de fer fit son apparition*)とするが, 一般的には, 鉄道開設の日, あるいは年と認識される。
- (3)フロベールは 1845 年スイスで, バイロンが旅先スイスのシヨン城で残した落書き(サイン)も見学している
- (4)*Mémoire d'un touriste* の中で, 鉄道の将来性を予見しているが, 現状では投機対象となるだけであり, 本当の意味での発展は見込めないとしている。
- (5)St.Etienne (サン・テチエンヌ) と Givors (ジボール) 間を石炭輸送のために使用していた
- (6)1830 年代に始まったが, 当初はフランス中部で資源物資の運搬のためであった。鉄道に対し, 否定的な見解が一般的であった。
- (7)Flaubert *Correspondances I*, Conard 版 138p, 一方 Pleiade 版 159p では 5 月 12 日付になっている)
- (8)原語は wagon decouvert : 3 等クラスの客室を示す les wagons de 3ème classe
- (9)エミール・ゾラの『獣人』*la Bête humaine* は鉄道時代のフランスを舞台にした作品であるが, その中においても Rolleboise トンネルが登場する。
- (10) Tu es un grand imbécile de ne point laisser aller en chemin de fer : au lieu de quatre heures nous serons à 3 jours, et 2 nuits en voyage ; et ces 3 jours serons autant de moins à passer à Paris.(Pléiade 版 *Correspondance I* :188)
- (11)Brendon も, 『トマス・クック物語』の中で, 「古代の昔からこの時(イギリスのヴィクトリア朝 1819-1901)まで, 旅のスピードを決定するのは馬と風であった(34p)」と述べている。
- (12)フランスの鉄道の発展は, 1852 年の第二帝政期以降急速に進む。ペレール兄弟 (les frères Péreire), ロートティルド一家による鉄道建設を契機に発展が始まった。
- (13)1980 年に Strassburger 家が Deauville 市に寄贈した
- (14)詩人として活躍。文学サロンを主宰。フロベール, ヴィニー, ミュッセの愛人であった。
- (15)革命後グレゴワール神父の調査によると 2500 万人の内フランス語を話すのは 300 万人程度であった。
- (16)1836 年にパリの日刊紙 *La Press* を発行した。定期購読者にこれまでの新聞価格の半分で提供し, 当時のメディア界の革新者であった。また, 新聞販売促進のために価格だけではなく新聞小説フィユトンを発明した。
- (17)新聞小説のことをフィユトン(feuilleton)と呼ぶが, フィユトンの人気は販売数に大きな影響を与えたといわれる。バルザックやデュマは人気作家であった。
- (18)原文は *Voyageurs littéraires* であり, *Ecrivains-voyageurs* (エクリヴァン・ヴォワイヤジュール) という単語はまだ使用されていない。
- (19)この点に関して, 筆者はサイドの見解に違和感を覚える。男女の視点の差によるものかもしれないが, この描写を称えることにより, 現在でも女性

蔑視の傾向がつよいアラブ地域の習性を肯定するだけではなく、現在のセックスツアーを肯定することにつながることを懸念する。フロベールの『オリエント旅行記』とりわけ『エジプト旅行記』は観光におけるジェンダー問題を歴史的に考察する、あるいは近代観光の一形態を明らかにするための資料としての価値を担った作品である。

(20) Berchet(1985)が Buchon の証言として引用しているが、Buchon についての記述はなく、どんな人物であったかについては不明

(21) エンジンニア、地理学者。アジア(トルコ、ペルシャ)とロシアを旅したことで知られる。イスパハンで没する。

(22) 羽生敦子(2011)ロマン主義運動と王政復古期のピアリッツの発展、および第二帝政下のピアリッツの変容について。立教大学大学院観光学研究科、2010年度修士論文。

(23) ナポレオン1世によるヨーロッパ大陸からイギリスを孤立させるための措置。しかし唯一産業革命が進んでいたイギリスを孤立させることでヨーロッパ諸国にとっても悪影響を及ぼした。

【参考文献】

- 阿部良雄訳(1998) : ボードレール全詩集 1—悪の華. 東京, 筑摩書房, 430p.
(ジャック・クレペ, ジョルジュ・ブラン、クロード・ピシヨワ校訂の批評版 : ジョゼ・コルティ書店、1968 年の訳)
- Anderson, Benedict (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York: Verso, Revised Edition (=白石隆, 白石さや訳(2007) 定本
想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行. 東京, 書籍工房早山, 384p.)
- 荒木善太 (1988) : 『ネルヴァル全集』月報 3 (7 月) 筑摩書房
———(2011) : 「風景」の時代—ロマン主義の文学と風景のコードについて. 仏語仏文学
研究(42), 17-27p. 東京大学仏語仏文学研究会
- Argot, Pascal (2010) *Le carnet de voyage : approches historiques et sémiologique*, *Carnet de géographes*, octobre(1), 1-3
- Balcou, Jean, et al (2001) *Enfance et voyages de Chateaubriand Armorique, Amérique Actes du Colloque de Brest*, Paris: Edition Champion(France 以外の出版: Genève : Edition Slatkine).
- Balzac (1981) *Pathologie de la vie sociale*, in *La Comédie humaine*, tome XII, Gallimard (=山田登
代子訳(1992) バルザック風俗研究. 東京, 藤原書店, 227p.)
- Benjamin Walter (1982) *Das Passagen-Werk*, Herausgegeben von Rolf Tiedemann, Suhrkamp
Verlag, Frankfurt am Main(=今村仁司・三島憲一訳ほか(1995) パサージュ論第一巻. 東京,
岩波書店, 480p.
———(=浅井健二郎編訳)(1995) ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味, 東京, 筑摩書
房, 687p.
———(=浅井健二郎編訳)(2007) ベンヤミン・コレクション 4 批評の瞬間, 東京, 筑摩書
房, 670p.
———(=野村修編訳)(1994) 「ボードレールにおける第二帝政期のパリ 1938, 135-275p」,
ボードレール他五編—ベンヤミンの仕事 2—, 東京, 岩波書店, 357p.
- Berchet, Jean-Claude (1985) *Le voyage en Orient : Anthologie des voyageurs français dans le
Levant au XIXe siècle*, Paris ; Robert Lafont
- Berty, Valérie (2001) *Littérature et voyage : un essai de typologie narrative des récits de voyage
français au XIXème siècle*, Paris ; L'Harmattan
- Biasi de, Pierre-Marc (2004) *Flaubert, une conversion du regard*, Magazine littéraire (432), 42p.
- Boorstin, Danie-Josephe (1962) *the Image : A guide to Pseudo-Events in America* (=後藤和彦, 星
野郁美訳(1964) 幻影 (イメージ) の時代—マスコミが製造する事実. 東京, 東京創元社,
340p.)
- Boyer, Marc (1999) *Le Tourisme de l'an 2000*, Lyon: Edition Presses Universitaires de Lyon
(=成沢広幸訳 (2006) 観光のラビリンス. 法政大学出版局, 410p.
———(2000) *Histoire de l'invention du tourisme, XVIème-XIXème siècle*,

- Pais : Edition de l'Aube.
- (2005) *Histoire Générale du Tourisme Du XVIe au XXIe siècle*, Paris, L'Harmattan.
- Brendon, Piers (1991) *Thomas Cook : 150 years of popular tourism*, London : Secker & Warburg
(=石井昭夫訳(1995) トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者. 東京, 中央公論, 602p.
- Bruneau, Jean ed.(1974-1975) *Flaubert : Correspondance I (Janvier 1830 à Juin 1851)*, Paris, Gallimard.
- Carré, Jean-Marie (1932) *Flaubert et Maxime Du Camps, Voyageurs et Ecrivains français en Egypte, Caire* (=平井照敏訳 (1968) フローベールとマクシム・デュ・カン(1849-1850), フローベール全集 別巻(1968) 東京, 筑摩書房, 525p.
- Cassou, Jean (1967) *Du voyage au tourisme*, *Communications* (10), 25-34p.
- Chateaubriand, René-François (1968) *L'Itinéraire de Paris à Jérusalem* in *Collection GF Flammarion*
———(1969) *L'Itinéraire de Paris à Jérusalem* in *Les œuvres romanesques et voyages II*, présenté par Maurice Regard, Gallimard.
- 近森高明 (2007) : ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶醉経験. 京都, 世界思想社, 273p.
- Chinard, Gilbert (1970) *L'exotisme americain*, Genève :Slatkine Reprints.
- Chupeau, Jacques (1977) *Les récits de voyages aux lisières du roman*, *Revue d'histoire littéraire de la France*, 536-553p. P.U.F
- Cohen, Erik (1972) *Towards a Sociology of International Tourism*, *Social Research* 39(1), 164-189p.(=安村克己訳(2001) 社会学で読み解く観光—新時代をつくる社会現象. 学文社, 44-45p.)
———(1984) *The Sociology of Tourism: Approaches, Issues, and Findings*, *Annual Review of Sociology*(10), 373-92p.
- Compagnon, Antoine (2005) *Les Antimodernes : De Joséph de Maistre à Roland Barthe*; Paris : Gallimard(=松澤和弘監訳(2012) : アンチモダン—反近代の精神史. 名古屋, 名古屋大学出版会, 368p.
- Culler, Jonathan (1981) *Semiotic of Tourism*, *The American Journal of Semiotics*, vol(1),127-141p.
- 檀上文雄 (1980) : フランス鉄道時代の作家たち. 広島, 溪水者, 208p.
- De Crescenzo, Luciano (1997) *Nessuno, L'Odyseea raccontata ai lettori d'oggi* (=草皆伸子訳(1998) 『オデュッセイア』を楽しく読む. 東京, 白水社, 285p.
- Dédéyan, Charles (1973) *Chateaubriand et Rousseau*, Paris: Société d'édition d'enseignement supérieur.
- Degout, Bernard, éd.(2012) *L'Ermitage de Chateaubriand, Guide historique*, Haute de Seine, Maison de Chateaubriand.
- Delerm, Philippe, éd. (2007) *Sur les pas des écrivains : Balade en Seine Maritime*. Paris : Edition Alexandrines.

- DE Maistre, Xavier (1927) Voyage autour de ma chambre, in Les classiques pour tous Paris : Librairie Hatier.
- Del Litto, Victor (1965) La vie de Stendhal, Paris : Editions du Sud.(=鎌田博夫, 岩本和子訳 (2007) : スタンダールの生涯. 東京, 法政大学出版局, 339p.)
- Del Litto, Victor ed.(1992) Stendhal Voyages en France : Mémoires d'un Touriste. Voyages en France. Voyage dans le Midi de la France in Bibliothèque de la Pléiade, Paris : Gallimard.
- Dord-Crouslé, Stéphanie (2010) Le <<Livre des voyageurs>> au XIXe siècle : usage et manifestations littéraires avec application au cas ou de Gustave Flaubert, 立教大学フランス文学研究科フランス文学紀要(40),19-38p.
- Flaubert, Gustave (1847) Par les champs et par les grèves, voyages et carnet de voyages Club de l'Honnête Homme 1973.
- (1971) Correspondance, Nouvelle Edition Augmentée, Première Série(1830-1846), Paris : Louis Conard, Libraire-Editeur (コナール版).
- (1973)Correspondance I (janvier 1830-juin 1851), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (1980) Correspondance II (juillet 1851-décembre 1858), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (1991) Correspondance III (janvier 1859-décembre 1868), présentée et annotée par Jean Bruneau, Paris : Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade).
- (2007) *Par les Champs et par les Grèves* 1847 in VOYAGES. présenté par Dominique Barbéris, Paris: arléa.
- (2007) *Voyage en Egypte* 1850 in VOYAGES. présenté par Dominique Barbéris, Paris: arléa (=斎藤昌三訳(1998)フロベールのエジプト. 東京 法政大学出版局, 333p.
- (1987) Par les champs et par les grèves(=渡辺仁訳(2007) : プルターニュ紀行 野を越え, 浜を越え. 東京, 評論社, 323p.
- (2008) Dictionnaire des idées reçues. Libro texte intégral, Paris :Flammarion
- (2008) Voyage en Orient (1849-1851), Présenté par Claudine Gothot-Mersch Paris :Gallimard.
- Girard, Yves, éd.(2007) Chapelle et Bachaumont Voyage d'Encausse, Paris : Honoré Champion Editeur.
- Goulemot, Jean-Marie (2004) Sur les trace des écrivains voyageurs, Magazine littéraire (432), 22-25p.
- 橋本俊哉編 (2013) : 第3章「成長する観光者」への動態的アプローチ. 観光学全集第4巻, 東京, 原書房.
- 羽生敦子 (2011) : ロマン主義運動と王政復古期のピアリッツの発展, および第二帝政下のピアリッツの変容について. 立教大学大学院観光学研究科博士前期課程, 2010 年度修

士論文

- (2011): フランス語「ツーリスト」の変遷について. 第 26 回日本観光研究学会全国大会学術文集(26), 265-268p.
- (2012): 20 世紀ツーリストの概念の変容について. 立教観光学紀要(14), 25-30p.
- (2013): プルターニュ旅行に見られるフロベールの旅の新しさについての考察. 立教観光学研究紀要(15), 23-34p.
- 蓮実重彦編訳 (1967): フロベール全集 8. 東京, 筑摩書房, 461p.(底本はコナール版)
- 蓮実重彦 (1988): 凡庸な芸術家の肖像—マクシム・デュ・カン論. 東京, 青土社, 816p.
- 畑浩一郎 (2003): 都市と旅行者—19 世紀前半のオリエン特旅行記をめぐって. 仏語仏文学研究(28), 51-76p.
- (2009): 自分を語る旅行者—シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』. 仏語仏文学研究(39), 25-44p, 東京大学仏語仏文学研究会.
- (2011): ヨーロッパとアジアの狭間にて—テオフィール・ゴーティエ『コンスタンチノーブル』(1853)仏語仏文学研究(42), 79-92p.
- 原聖 (2003): <民族起源>の精神史—プルターニュとフランス近代. 東京, 岩波書店.
- 井手勉 (2001): スタンダールとオリエン特. 愛知産業大学短期大学紀要(14), 131-150p.
- (2003): スタンダールとオリエント—スタンダールの小説作品における《オリエント幻想》. 日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集(27), 21-34p.
- (2007): スタンダールとスペイン I—スペイン, もう一つの《オリエント》. 中京大学教養論集 48(4), 637-666p.
- 石井洋二郎 (2009): 異郷の誘惑—旅するフランス作家たち. 東京, 東京大学出版会, 325p.
- 石川美子 (2000): 旅のエクリチュール. 東京 白水社, 251p.
- 今泉文子 (1979): ルソーからドイツロマン派へ—その<内的受容>を巡って. 現代思想 vol.7.16 194-200p.青土社.
- 木村卓 (2011): 旅と大英帝国の文化. 京都, ミネルヴァ書房, 268p.
- 樺山紘一 (1995): 異境の発見. 東京 東京大学出版会, 240p.
- (2007): 旅の博物誌. 東京 千倉書房, 270p.
- 鹿島茂 (1990): 馬車が買いたい! 19 世紀パリ・イマジネール. 東京, 白水社, 248p.
- (2012): 職業別 パリ風俗《新装復刊》. 東京, 白水社, 257p.
- 河村英和 (2011): イタリア旅行—「美しい国」の旅人たち. 東京, 平凡社, 223p.
- (2013): 観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美の国」へ. 東京, 中央公論新書, 252p.
- 木下卓 (2011): 旅と大英帝国の文化—越境する文学. 京都, ミネルヴァ書房, 199p.
- 北山晴一 (1991): おしゃれの社会史. 東京, 朝日新聞社, 349p.
- 窪田般彌 (1991): 皇后ユージェニー—第二帝政の栄光と没落. 東京, 白水社, 207p.
- 桑原武夫・生島遼一編 (1972): スタンダール全集 8 恋愛論・恋愛書簡. 京都, 人文書院,

457p.

栗栖公正 (2007) : スタンダール 近代ロマネスクの生成 南山大学学術叢書. 名古屋, 名古屋大学出版会, 59p.

Lau, Raymond, W.K. (2011) Tourist sighs are semiotic signs. A critical Commentary, *Annals of Tourism Research* 38, 708-709p.

Le Huenen, Roland (1987) Le récit de voyage : l'Entrée en littérature, *Etudes littéraires* 20(1), 45-61p.

Le Yaouanc Moise (1968) Chateaubriand et le paysage breton, *Annales de Bretagne* 75(3), 437-449p.

Le Herpeux (1940) Flaubert et son voyage en Bretagne, *Annales de Bretagne* 47(1), 1-152p.

Lund, Hans=Peter (1986) François-René De Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, Paris: Presses Universitaires de France.

松平千秋訳(1994) : ホメロス著オデュッセイア (上) (下) 巻. (原著 : Oxford 古典叢書中の T.W.アレンによる校訂本) 東京, 岩波書店.

松島正一編 (1995) : イギリス・ロマン主義事典. 東京, 北星堂書店, 680p.

中島俊郎 (2007) : イギリス的風景—教養の旅から感性の旅へ. 東京. NTT 出版, 246p.

中川久定 (1978) : 自伝の文学—ルソーとスタンダール. 東京, 岩波書店, 191p.

野崎敏 (2010) : 異邦の香り—ネルヴァル『東方紀行』論. 東京, 講談社, 437p.

MacCannell, Dean(1976) *The Tourist, New theory of the leisure class*, Newyork: Schocken Books.

———(1999) *The Tourist, New theory of the leisure class*, Berkley and California:

University of California Press.

Martineau, Henri ed. (1959) *Stendhal De l'Amour*, Paris : Editions Garnier Frères.

岡田温司 (2010) : グランドツアー—18 世紀イタリアへの旅. 東京, 岩波書店, 224p.

小倉和子 (2000) : シャトーブリアン『モンブランへの旅』について. 立教大学観光学部紀要(2), 50-53p.

小倉孝誠 (2004) : 『パリの秘密』の社会史—ウージェーヌ・シュールと新聞小説の時代. 東京, 新曜社, 314p.

———(2006) : 近代フランスの誘惑—物語 表象 オリエン特. 東京, 慶應義塾大学出版社株式会社, 248p.

大橋洋一編 (2006) : 現代批評理論のすべて. 東京, 新書館, 286p.

Philippe, Antoine (2003) Chateaubriand en Egypte : le voyageur désenchanté, *Romantisme* (120), 27-35p.

Roulin, Jean-Marie (1994) Chateaubriand L'exil et la gloire, Paris, Honoré Champion Editeur.

Said ,E.W (1985) *Orientalism*, Aitken :Stone & Wylie Ltd.(=板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳 (1993) オリエンタリズム 上下, 東京, 平凡社)

斎藤広信 (2012) : 旅するモンテニユー—16 世紀ヨーロッパ紀行. 東京, 法政大学出版局, 252p.

- 斎藤昌三訳 (1998) : フロベールのエジプト. 東京 法政大学出版局, 333p.
- Sangsue, Daniel (2001) *Le récit de voyage humoristique (XVIII-XIX SIECLES)*, *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1139-11629. P.U.F
- Schivelbusch, Wolfgang (1977) *GESCHICHTE DER EISENBAHNREISE, Zur Industrialisierung von Raum und Zeit im 19. Jahrhundert*, Hanser Verlag (=加藤二郎訳(1982) 鉄道旅行の歴史—19 世紀における空間と時間の工業化. 東京, 法政大学出版局, 268p.
- 関隆志 (2002) : 文化財破壊批判—エルギン卿トーマス・ブルースのパルテノン神殿破壊を例として. 大阪市立大学大学院文学研究科紀要(53)2, 95-123p. 人文研究.
- 白幡洋三郎 (1996) : 旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」. 東京, 中央公論社, 256p.
- Smith, Valene.L (1977) *Hosts and guests : The Anthropology of Tourism*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press (=三田村浩史 監訳(1991) : 観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応. 東京, 勁草書房, 394p.
- Sontag, Susan (2002) *Where the Stress Falls : Essays*, London, Jonathan Cape (=富山太佳夫訳 (2009) : 書くこと, ロラン・バルトについて—エッセイ集 I /文学・映画・絵画. 東京, みすず書房, 248p.
- Sounia, Jean-Charles (1968) *La Paléatine de Chateaubriand*, *Annales de Bretagne* 75(3), 450-455p.
- Stendhal (1959) *De l'Amour (1822)*, texte établi avec introduction et notes par Henri Martineau, Paris, Garnier Frère (=大岡昇平(1970) 恋愛論, 東京, 新潮社, 618p.)
- (1992) *Mémoires d'un touriste, Voyage en France, Voyage dans le Midi de la France in Voyages en France présenté par V. Del Litto*, Paris, Gallimard. (Bibliothèque de la Pléiade)
- 鈴木美津子 (2002) : ルソーを読む英国作家たち—『新エロイズ』をめぐる思想の戦い. 東京, 図書刊行会, 315p.
- 角津美愛 (2005) : スタンダールと山. スタンダール研究会会報(15), 7-9p.
- 田口亜紀 (2011) : ネルヴァル『東方旅行』スイスまでの旅—案内書, 写真機, 時刻表をもたない旅. 仏語仏文学研究(42), 67-78p. 東京大学仏語仏文学研究会.
- Taine, Hypolite (1860) *Voyage aux Pyrénées* (=杉富士雄訳(1973) 古典文庫ピレネ旅行記. 東京, 現代思想社, 397p)
- 高岡文章 (2001) : 観光研究における D.ブーアスティンの定型化—「本物の」観光をめぐって. 社会学研究科紀要(53), 69-78p 慶応義塾大学社会学部.
- 高木信宏 (2008) : スタンダール 小説の創造. 東京, 慶応義塾大学出版会
- 高橋秀爾 (1990) : フランス絵画史—ルネッサンスから世紀末まで. 講談社, 東京, 398p.
- 武末裕子 (2001) : グロテスクまたは崇高—フロベールと自然. 西南学院大学フランス語フランス文学論集(42), 1-26p. 西南学院大学.
- 滝沢寿 (1997) : 野を越え, 磯を越えて. 人文科学論集文化コミュニケーション学科編 (31), 139-154p. 信州大学.
- Thibaudet, Albert (1935) *Gustave, Flaubert*, Paris, Gallimard.

- 戸田吉信 (2001) : ギュスターブ・フロベール. 東京, 法政大学出版, 463p.
- 富沢輝子 (1993) : ギュスターブ・フロベール—作品と旅. 九州産業大学教養部紀要(29) 4, 73-89p. 九州産業大学.
- 塚本昌則 (2011): フランス文学講義—言葉とイメージをめぐる 12 章. 東京, 中公新書, 240p.
- 遠山一行・由良君美・高橋秀爾 (1979) : シンポジウム・ルソーの時代—ロマン主義とはなにか. 現代思想 vol.7.16 234-293, 青土社.
- Urbain, Jean-Didier (1991=2002) *L'idiot du voyage: Histoires de touristes*, Paris; Petite bibliothèque Payot.
- (2007) *Sur la Plage: Mœurs et coutumes balnéaires (XIXe-Xxe siècles)* Paris; Petite bibliothèque Payot.
- Urry, John (1990) *The Tourist Gaze: The leisure and Travel in Comtemporary Societies*, London: Sage (=加太宏邦訳 (1995) 観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行. 東京, 法政大学出版局, 289p.
- 牛場暁夫 (2006) : プルーストとフロベール: 料理と旅の描写について. 芸文研究 (91), 117-142p. 慶応義塾大学芸文学舎.
- 臼田紘 (1991) : スタンダール イタリア旅行記 I—ローマ, ナポリ, フィレンツェ(1826). 東京, 新評論, 257p.(Stendhal :Rome, Naple, Florence 1826 in Bibliothèque de la Pléiade(1973) の翻訳)
- (1996): スタンダール ローマ散歩 I . 東京, 新評論, 434p.(Stendhal : Promenade dans Rome の翻訳)
- (2007) : スタンダール氏との旅. 東京, 新評論, 262p.
- Vergeade, Suzanne (1990) *Un aspect du voyage en chemin de fer: le voyage d'agrément sur le réseau de l'Ouest des années 1830 aux années 1880, Histoire, économie et société (1) Les transports.* 113-134p.
- Viviani, Marie-Hélène (2010) *Le voyage de Chateaubriand en Amérique (conférence の報告書).*
- Vicaire François (2010) *Flaubert, roi de Carthage*, Paris, Magellan&Cie.
- 渡辺仁訳 (2007) : プルターニュ紀行—野を越え, 浜を越え. 東京, 評論社, 323p.
- 渡辺一夫他訳 (1954) 世界大思想 全集哲学・文芸思想編 23 サント・ブーヴ 月曜閑談. 東京, 河田書房.
- 渡辺一夫 (1970) フランス文学雑考—フランス文学管見. 渡辺一夫作集(6)200-219p. 筑摩書房, 450p.
- 渡辺一民 (1976) フランス文壇史. 東京, 朝日新聞社, 216p.
- Weber Anne-Gaëlle (2006)*Le genre romanesque du récit du voyage scientifique au XIXème siècle, Sociétés & Représentations(21)59-77p.* Paris: Publications de la Sorbonne.
- 安村克己他編 (2012) : よくわかる観光社会学. 京都, ミネルヴァ書店, 212p.
- 安村克己 (2012) : ザ・ツーリスト: 高度近代社会の構造分析. 東京, 学文社, 259p.

山田登代子(1998): リゾート世紀末. 東京, 筑摩書房, 350p.

山辺雅彦 (1983): ある旅行者の手記 1. 東京, 新評論, 435p.(Stendhal :Memoire d'un Touriste(1838,1854 刊)の翻訳)

——(1985): ある旅行者の手記 II. 東京, 新評論, 454p.(Stendhal :Journal d'un voyage dans le midi de la France(1927 刊)の翻訳)

山下晋司編 (1996): 観光人類学. 東京, 新曜社, 211p. (吉見俊哉: 第二章: 観光の誕生— 擬似イベントを超えて)

【辞書】

Larousse, Pierre (1876) Grand Dictionnaire Universel du XIXème siècle

Grand Larousse de la langue française(1978) tome 7 Librairie Larousse Paris

The Oxford English Dictionary1970(1933) Volume VII XI Oxford at the ClarendonPress

小学館ロベール仏和大辞典(1988)

Littre Dictionnaire de la Langue Française par Emile Littré (Ed. 1863-1877)

【インターネットから入手した資料】

フランス国立図書館からのダウンロード(Gallica.bnf.fr/ Bibliotheque nationale de France)

Alhoy, Maurice (1841) Physiologie du voyageur, vignettes de Daumier et Janet-Lange.

Beauvoir, Roger, de (1876-1878) *Le Touriste* in Les Français peints par eux-mêmes.

Lisieux 市メディアテック・アンドレ・マルローからのダウンロード

Lacroix, Auguste de (1841) Le Flâneur in Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du XIXè siècle.

Viviani, Marie-Hélène による講演 Le voyage de Chateaubriand en Amérique の報告書

http://www.bude-orleans.org/lespages/1program/2010-11/compte_rendu/100923.html

2013 年 5 月 12 日検索

ジュネーブ大学のオーディオドキュメント

Butor, Michel (1975-76) Les romantiques en Orient

ビュトールによるジュネーブ大学の講義「オリエントのロマン主義作家たち」(1975-76)

<https://mediaserver.unige.ch/play/55782/butor%20michel,%20Les%20romantiques%20en%20Orient>

2013 年 8 月—9 月検索

「図, 表」

図 4-1 ドラクローワ作 「アルジェの女たち」

<http://www.abcgallery.com/D/delacroix/delacroix22.html>. 2013 年 9 月 20 日検索

図 4-2 アンゲルの作 「オダリスク」

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Jean_Auguste_Dominique_Ingres_005.jpg#file 2013 年 9 月 20 日検索

図 7-1 「フロベール (ナダール撮影)」

http://flaubert.univ-rouen.fr/iconographie/photos_gf.php 2013 年 10 月 31 日検索

図 7-4 「1850 年のフランスの鉄道ネットワーク」

<http://rubio.eric.pagesperso-orange.fr/carte%201850.jpg> 2013 年 9 月 10 日検索

図 7-5 「1860 年のフランスの鉄道ネットワーク」

<http://rubio.eric.pagesperso-orange.fr/carte%201860.jpg> 2013 年 9 月 10 日検索

「その他」

<http://levy.veyrier.daniele.free.fr/spip.php?article7>

<http://revue-espace.com>

<http://www.ecrivains-voyageurs.net/>

<http://www.lescledumoyenorient.com/Alexandrie-au-XIXeme-siecle.html>

<http://maison-de-chateaubriand.hauts-de-seine.net/web/chateaubriand/le-parc-de-la-maison-de-chateaubriand>

<http://www.etudes-litteraires.com/flaubert.php>

<http://www.deauville.org/fr/>

<http://www.trouville.fr/>

【On Line Data Base】

Adame Matthew(2009) Travel Writing, Spectacle and World History

Adame Matthew(2013) Grand Tour

謝辞

本博士論文は、筆者が立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士後期課程において舩谷研究室においておこなった研究である。

本論文執筆に関して終始ご指導ご鞭撻を頂きました舩谷鋭教授に心より感謝いたします。毎週、きめ細やかな指導をしていただき、筆者の知識不足を補って下さいました。また筆者が自身の研究の意味・価値に不安を抱いていた折も、親身になり励ましていただきました。20数年前に文学部で学ぶべきものを観光研究科において、「観光」という事象を通し学び直すことができました。新たな領域の可能性を示唆してくださり、これから私の後半の人生の目標を得ることができました。

また、博士前期課程より副査として指導下さいました安島博之教授に、感謝いたします。「羽生さんなら大丈夫」という言葉にたくさん勇気を頂きました。また、ひとりよがりになりがちな筆者に、いつも新たな視点をご教示していただき、その都度勉強させていただきました。観光地経営専門家プログラムでのフィールドワークでの経験は、「観光研究科」に所属していることを実感することができました。楽しい経験をさせていただき、ありがとうございました。

ご多忙にも関わらず本論文をご精読頂き有用なコメントを頂きました豊田由貴夫教授に感謝いたします。論文とは「自身の研究の成果」であると同時に「人に読んでもらうもの」であることを、これからはもっと意識して執筆していきます。

筆者のフランス語邦訳へのアドバイスを、論文に効果的な表現の仕方、およびフランス文学の知見をいただいた小倉和子教授にお礼を申し上げます。ご多忙にもかかわらず池袋の研究室で長時間に渡り、細かいご指導をしていただきました。ありがとうございました。

村上和夫教授には、お会いする度、あるいは廊下でお会いする度に、「大丈夫だから」と声をかけていただきました。また「発表」の際には、新しい視点を下さりありがとうございました。

前期課程では松村公明教授に、お世話になりました。地理学研究室にも関わらず、地理学が使えない私を見放さず、親身にご指導していただきました。ありがとうございました。

本年度着任された助教石橋正孝先生には、論文の方向性をはじめ、19世紀フランスに関して、たくさんご教授いただきました。感謝いたします。

助手の殿塚さん、コーディネートの高柳さんには、いつも優しく声をかけていただき、心とむ場所を提供していただきました。ありがとうございました。

図、表の作成をいつも手伝っていただいた、松村ゼミの丸山宗志さん、杜ゼミの澁谷和樹さんにお礼申し上げます。

また、元同級生、現在は首都大学大学院の博士課程に在学している、抜井ゆかりさんにもお礼を申し上げます。何事にも真面目に取り組む彼女の存在は私に多大な刺激を与えてくれました。

仏語講師としてマイペースに20年近く働いていた私ですが、今から5年前の2008年、父が他界したことが契機となり、何か新しいことにチャレンジしようと思い立ち、翌年の2009年、立教大学大学院観光研究科の前期課程に社会人学生として入学しました。入学後は、仕事、大学院学生の両立は肉体的にも、精神的にも厳しい時もありましたが、目標に掲げた博士論文を完成することができたのは、母、姉、母のお世話をしてくださった渡辺様のおかげです。たくさんの方々の応援をいただきました。心より感謝申し上げます。

最後に、この論文を、天国にいるであろうふたり、父、そして、かつて立教大学社会学部で教員をしていた伯父に捧げたいと思います。

2013年12月 羽生敦子

付録資料

表4-1 旅行記の変遷

| 出版年 | 著者 | タイトル |
|------|-----------------------------------|---|
| 1697 | Dampier (英:探検家、海賊・) | A New Voyage Round the World『新世界一周旅行』 |
| 1705 | Dampier (英) | A Supplement of the Voyage Round the World |
| 1721 | ? | Passage du Pôle Arctique au Pôle Antarctique『北極から南極へのパサージュ』 |
| | Montesquieu | Lettres persanes『ペルシャ人の手紙』 |
| 1726 | J.Swift | Travels into Several Remote Nations of the World, in four Parts. By Samuel Gulliver 『ガリヴァー旅行記』 |
| 1761 | C.Goldoni | Trilogie de la villégiature『ヴァカンス客のトリロジー』 |
| 1768 | L.Sterne (英) | Sentimental Journey『センチメンタル・ジャーニー』 |
| 1772 | D.Diderot | Supplément au voyage de Bouganville, publié en 1796 écrit en 1772 『ブーガンヴィル旅行記の補遺』 |
| 1773 | J.Cook (英:探検家) | First voyage around the world (1768-1771) 第1回世界一周旅行 |
| 1782 | J.-J.Rousseau | Reveries du promeneur solitaire『孤独な夢想者の散歩』 |
| | F. von Schiller (ドイツ) | Die Räuber『群盗』 |
| 1787 | Comte de Volney (オリエンタリスト、哲学者) | Voyage en Egypte et en Syrie『エジプト・シリア旅行記』 |
| 1791 | F. de Chateaubriand | Voyage en Amérique (出版年1827年)『アメリカ旅行記』 |
| 1795 | X. de Maistre | Voyage autour de ma chambre『私の部屋を巡る旅』 |
| 1798 | Mungo.Park (スコットランド:探検家) | Travels in the Interior Districts of Africa アフリカ内陸部への旅 (出版は1816) |
| 1811 | F. de Chateaubriand | L'Itinéraire de Paris à Jérusalem『パリからエルサレムへの旅程』 |
| 1816 | L.Simond | Voyage d'un Français en Angleterre pendant les années 1810-1811 『あるフランス人によるイギリスの旅』 |
| 1817 | Stendhal | Rome, Naples et Florence『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』 |
| 1820 | L.C. de Freycinet | Voyage autour du monde『世界一周旅行』 |
| 1820 | M.Starke | Guide du voyageur sur le Continent (ed. J. Murry) 「ヨーロッパ大陸旅行者のためのガイドブック」 |
| 1822 | Stendhal | De l'amour『恋愛論』 |
| 1823 | F.Cooper (米) | The last of the Mohicans『モヒカン族の最後』 |
| 1829 | Rohling | Guide du visiteur de Coblenz『ゴブレンツ旅行者』 |
| | Stendhal | Promenades dans Rome『ローマ散歩』 |
| 1830 | R.Caillie | Journal d'un voyage à Tombouctou『トンブトゥ旅行記』 |
| | E. Quinet | La Grèce moderne『近代ギリシャ』 |
| | Richard | Guide classique du voyageur en France 「フランス旅行のためのクラシックガイド(リチャールガイド)」 |
| 1832 | K.Baedeker (独) | Manuel du voyageur (1er ed. En allemand)「ドイツ語版ベデガーガイド第一版」 |
| | W.Irving | Contes de l'Alhambra『アルハンブラ小話』 |
| 1833 | A.Dumas | L'Impressions de voyage『旅行印象記』 |
| 1836 | J.Murry (英) | Edition du premier guide Murry「ガイドブック・マレー初版」 |
| | P.Merimée | Notes d'un voyageur dans l'ouest de la France『西部フランス旅行ノート』 |
| | E.W.Lane (英) | An account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians 『近代エジプト人の習慣とマナー』 |
| 1838 | Stendhal | Mémoires d'un touriste『ある旅行者の手記』 |
| 1839 | Marquis de Custine | Lettres de Russie『ロシアからの手紙』 |
| 1840 | F.Cooper (米) | Le Trappeur『トラッパー』(北米の猟師) |
| 1841 | A.D. Joanne | Itinéraire de la Suisse (1er edition des guides Joanne)「ジョアンヌガイド初版:スイス」 |
| | F.Guichardet | Les Touristes en Italie『イタリアのツーリストたち』 |
| | A.Dumas | Excursions sur les bords du Rhin『ライン川周辺の小旅行』 |
| | A.Dumas | Souvenirs de voyage : une année de Florence『旅の思い出:フィレンツェのある一年』 |
| | A.Dumas | Nouvelles impressions de voyage (Midi de la France)『新印象記(南フランス)』 |
| 1842 | Georges Sand | Un hiver à Majorque『マジョルカ島での一冬』 |
| 1843 | A.D. Joanne | L'Illustration (fondée avec Charton et Paulin)「イリュストラシオン」紙発行 |

| | | |
|-----------|----------------------|--|
| 1843 | Th.Gautier | Voyage en Espagne『スペイン旅行記』 |
| | A.de Humboldt(独:探検家) | Voyage en Asie centrale『中央アジア旅行記』 |
| | V.Hugo | Voyage au Pyrénées『ピレネー旅行記』 |
| | F.Trustin | Le Tour de la France『フランス一周旅行』 |
| 1844 | R.Topffer(スイス) | Voyages en zigzag『ジグザク旅行記』 |
| 1845 | Kaar,Alphonse | Voyage autour de mon jardin『私の庭周遊記』 |
| | T.Gautier | Voyage hors barrière des Caprices et zigzag de Gautier |
| 1846 | K.Baedeker(独) | Manuel du voyageur (1er ed. En français)「フランス語ベデガーガイド第一版」 |
| | Ch. Reynaud | D'Athene à Baalbek『アテネからバールベックまで』 |
| 1847 | A.Dumas | L'Impressions de voyage (De Paris à Cadix)『旅の印象記(パリからカディスまで)』 |
| 1857 | E.Fromantin | Un été dans le Sahara『サハラのある夏』 |
| 1859 | A.Dumas | Impressions...-Les bords du Rhin『印象記・ライン川』 |
| vers 1860 | ロシア正教会神父? | Récits d'un pelerin russe『ロシア人巡礼者の話』 |
| 1860 | E.Labiche/E.Martin | Le Voyage de M.Perrichon『ペリション氏の旅』 |
| 1861 | K.Baedeker | Manuel du voyageur (ed.anglaise)『英語版ベデガーガイド』 |
| | A.de Joanne | Itinéraire général de la France「フランス旅程ガイド」 |
| 1864 | J.Verne | Voyage au centre de la Terre『地底旅行』 |
| 1868 | M.Du Camp | Orient et Italie『オリエントとイタリア』 |
| 1870 | G.Aimard | La Forêt vierge『未開の森』 |
| 1872 | A. Daudet | Les Aventures prodigieuses de Tartarin de Tarascon 『タルタランとタラスコンの驚異の旅』 |
| 1873 | J.Verne | Le Tour du monde en 80 jours『80日間世界一周旅行』 |
| | Vicomte de Vogue | Syrie, Paléستine, Monts Athos, Voyage au pays passé 『シリア、パレスチナ、アトス山、過去の国の旅』 |
| 1876 | E. Renan | Prière sur l'Acropole『アクロポリスでの祈り』 |
| 1877 | G.Bruno | Le Tour de la France par deux enfants『二人の子供によるフランス周遊の旅』 |
| 1878 | E. Chapus | Voyageurs, prenez garde a vous『旅人よ、気をつけなさい』 |
| | R.L. Steavenson(英) | An Inland Voyage |
| 1879 | R.L. Steavenson | Travels with donkey in the Cevénnes『セベンヌ旅行、ロバと一緒に』 |
| 1884 | Henry.James(米) | Voyage en France『フランス旅行』 |
| 1885 | A.Daudet | Tartarin dans les Alpes『アルプスのタルタラン』 |
| 1890 | P.Loti | Au Maroc『モロッコにて』 |
| 1894 | P.Loti | Le Dessert.Jérusalem et la Galilée『砂漠. エルサレムとガリラヤ』 |
| 1896 | R.L. Steavenson | In the South Seas『南の海で』 |
| 1897 | F.Regamey | D'Aix en Aix. Promenade pittoresque, sentimentale et documentaire 『エックスからエックスへ』 |
| 1900 | K.Baedker(独) | Manuel du voyageur (bords du Rhin)『ベデガーガイド(ライン川周辺)』 |
| | Frères Michelin | Guide Michelin |
| 1902 | V. Segalen | Journal des Iles『島便り』 |
| 1908 | V. Segalen | Essai sur l'exotisme. Une esthétique du divers『エキゾチズムについての試論』 |
| | I.Eberhardt(スイス) | Notes de route: Maroc, Algérie, Tunisie 『モロッコ、アルジェリア、チュニジアの旅行ノート』 |
| 1909 | G.Faure | Paysages passionnés『情熱的な風景』 |
| | H.Boland | Excursions en France『フランス小旅行』 |
| 1910 | Joanne | Guides Bleus (remplacent les Joanne)「ブルーガイド」 |
| 1911 | M.Barrès | En Italie『イタリアで』 |
| 1912 | Marquis de Vogue | Jérusalem hier et aujourd'hui『エルサレムの昨日と今日』 |
| 1913 | G.Roy | En Vacances (à la Côte d'Argent. Sur le Plateau central)『休暇』 |

表4-4 作家の旅

| 年代 | 1790s | 1800s | 1810s | 1820s | 1830s | 1840s | 1850s | 1860s |
|---------------------------------|--|---|--|---|---|--|---|-------|
| (1)Chateaubriand (1768-1848) | ・アメリカ旅行(1791) ・ロンドンへ亡命 (1793-1800) | ・イタリア赴任(1803) ・オリエント旅行 (1806) ・Vallee aux Loups (Paris)(1807) | | ・ベルリン赴任(1821) ・ロンドン赴任(1822) ・ローマ赴任(1828) ・ピレネーの温泉地 へ(1829) | ・スイス旅行(1832) ・ロンドン旅行(1833) | | | |
| (2)Lamartine (1790-1869) | | | ・イタリア滞在(1811) ・エクス・レ・バン (1816) | ・ナポリに赴任 (1820-31) ・イギリス、パリ(1821) ・フィレンツェ(1822) | ・オリエント旅行 (1832) ・セルビア(1833) | | | |
| (3)Stendhal (1783-1842) | | ・ナポレオン遠征 (イタリア)(1800) | ・ナポレオン遠征 (ロシア)(1811) ・ローマ、ナポリ、パ リ、ロンドン(1817) ・グルノーブル、ミラノ (1818) ・フィレンツェ、ミラノ、 グルノーブル(1819) | ・ボローニャ(1820) ・コモ湖、パリ、ロンド ン(1821) ・フィレンツェ(1823) ・パリ(1824-1826) ・ロンドン(1826) ・イタリア滞在(1827) ・南仏旅行(1829) | ・チヴィッタ＝ヴェッキ ア赴任(1830) ・パリ(1831) ・3年間の休暇(パリ) (1836) ・第一回取材旅行 (フランス)(1837) ・第二回取材旅行 (フランス)(1838) | | | |
| (4) Balzac (1799-1850) | | | | ・スイス(ヌシャテル、 ジュネーブ)(1833) ・フェルネー、コッパ (1834) ・ウイーン(1835) ・トリノ(1836) ・ヴェニス、フィレン ツェ、ボローニャ (1837)、 ・ペリー地方、マルセ イユ(1838) | ・サント・ペテルスブル グ(1843 jul-sep) ・ドレスデン、ノルマン ディ地方、オランダ、 バーデン・バーデン、 マルセイユ経由ナポ リ(1845) ・ローマ、チヴィッタ＝ ヴェッキア、ジェノバ、 バーゼル、ハイデル ベルグ、ウィースバー デン(1846) ・フランクフルト、ウク ライナ、キエフ(1847) ・パリ(1848) ・ウクライナ(1849) | ・パリ(1850)3か月後 死去 | | |
| (5)Hugo (1802-1885) | | | | | | | ・ニュージャージー島 (1850) ・亡命生活(1851) | |
| (6)Gautier (1811-1872) | | | | | ・スペイン旅行(1840) ・アルジェリア旅行 (1845) ・ベルギー、オランダ 旅行(1846) | ・イタリア旅行(1850) ・ギリシャ、トルコ (1852) ・ドイツ旅行(1854) ・ロシア旅行(1858) | ・エジプト旅行(1869) | |
| (7)A.Dumas (1802-1870) | | | ・パリ(1822) | ・スイス(シャトーブリ アンに会う)(1832) ・イタリア旅行(1835) ・ベルギー、ドイツ (1838) | ・イタリア滞在(1840) ・スペイン、北アフリカ 旅行(1846) | ・ブリュッセル亡命 (借金からの逃亡?) (1851) ・オランダ、ドイツ旅 行(1852) ・ジャージー島への ユゴー訪問、イギリ ス、ドイツ旅行(1857) ・ロシア旅行(サント・ ペテルスブルグから コーカサスまで) (1858) ・イタリア旅行(1859) | ・シシリー島(地中海 をヨットで)ガリバル ディに武器を渡す (1860) ・ナポリ滞在(1861- 1864) ・オーストリア、ハンガ リー旅行(1865) ・ドイツ旅行(1867) ・ブルターニュ(1869) | |
| (8)Nerval (1808-1855) | | | | ・ドイツ旅行(1838) ・オーストリア旅行 (1839) | ・ベルギー(1840) ・オリエント旅行 (1842) ・ベルギー、オラン ダ、ロンドン(1844) | | | |
| (9)Flaubert (1821-1880) | | | | ・Trouville/Mer (1836から) | ・ピレネー旅行(1840) ・家族旅行(南仏) (1845) ・ブルターニュ旅行 (1847) ・オリエント旅行 (1849) | ・ロンドン万国博覧会 見学(1851) ・チュニジア旅行 (1858) | | |
| (10)M. du Camp (1822-1894) | | | | | ・イタリア、アルジェリ ア旅行(1841) ・トルコ、イタリア旅行 (1844) ・ブルターニュ旅行 (1847) ・オリエント旅行 (1849) | | | |
| (11)Beaudelaire | | | | | | ・モーリシャス島へ (1841) | | |
| フランスにおける 交通網の整備状 況 | | | | ・地中海にて蒸気船 就航(1833) ・Paris-St.Germain en Laye 鉄道開業(1839) | ・Paris-Orleans鉄道 開業(1842) ・Paris-Rouen鉄道開 業(1843) ・Orleans-Tours鉄道 開業(1847) | ・Pars-Lyon-Marseille 鉄道開通(1855) | | |